院から贈つた先生の畫像、蕋蓮の祝辭、其他内外國の頌德文が掛け連ねてあることである、翁は當年七十六歳の老體、迫に昔の撃劍仕込み骨格も逞しいが、何と言つても爭はれないのは年である、腰には梓の弓を張り、頭には秋霜を戴き、齒も二三本より殘つて居ない、噫此偉人が今後幾年を保たれるであらうかと竊に思つて一入敬慕の念に堪へなかつた。

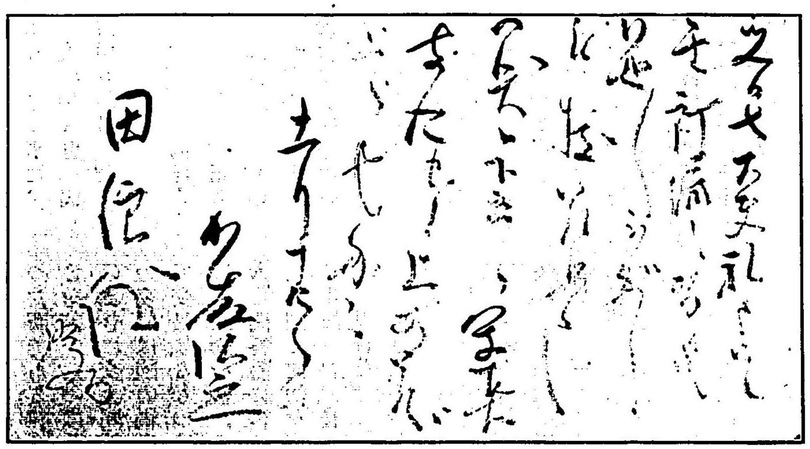
●翁の經歷談

縣下の人を竦めて書くのか夫は面白い、余の經歷は學術一偏で波瀾がないから面白くもないが、折角の來訪であるから一通りを話さう、先年博文館や神戸新聞抔にも出て居つたが少し間違つてをる樣であつた、余は知らるゝ如く出石の藩で谷山町に現今玉屋と云ふ宿屋がある、あの屋敷が卽ち天保七年六月二十三日に吾輩が生れた處で、其後出石へ行くと毎に彼の内に泊る、余の家は代々仙石の家臣で、國替への時に隨いて來たので古いことは解らぬが、八代以前が加藤久之、二代が重之で、以來代々甲州流の兵學師範役であつた、父は四郎兵衛正照と號し、余は幼少のとき藩の學校弘道館に漢學を學び又武藝を修めたが、此弘道館と云ふ藩校は余が生れる六七十年も前に、家老の仙石内藏允と云ふ人物があつて其人の盡力によつて創設せられたものである、此學校の先生に多田彌太郎と云ふ人が有つた、其人は勤王を唱へて生野義擧に加はり其事によつて後に殺され、今は從四位を贈られて居るが中々非凡な人で經學文章の爲めに所々を遊歷して長崎に至り同地の高島四郎太夫と云ふ人に就いて西洋の砲術を學び、國

へ歸つて之を開かんとしたが金もなく、又頑迷者の爲めに邪魔をされ思ふに任せずして居つたが、什麽工夫したものか遂に木で大砲を拵へた、卽ち木砲である、其當時吾輩はまだ子供であつたけれども、多田氏の愛を受け其大砲試射の手傳をした、此時分から余は西洋の事は大分異つたものじやと云ふことに氣がついた、そこで何でも西洋の事情に委しく通じて見たいと云ふ氣が起つた處が、十七歳の時に父が用人となつて江戸の勤番を申付られ、余も何とかして一所に行きたい江戸には西洋のことを知つた先生があるであらう、其れを學びたいと云ふ心情切なるものであつたが、幸に父も其考へで余を伴れて江戸へ上つた、是れが江戸に來た初めである。夫れから色々と聞き合して佐久間象山先生の門に入り、先生に就いて蘭書の講釋を聞いたり、時々調練砲術の稽古もした、子供心ではあるが先生の非凡な人であると云ふことも解り、種種感心したことも多かつたが、一年程して止むを得ず一旦歸國することになり其間に先生は幕府より罪を得て幽閉せられた、歸國中にペルリーが軍艦を率ゐて浦賀に來り、外國と戰爭もせねばならぬと云ふ形勢になつて來たから、何時迄も國に居ることは堪へられぬので又許しを受けて江戸へ出た、此れが十九歳の時である、夫れから何でも西洋學をせねばならぬと思つたが、其頃の西洋學は卽ち蘭學で未だ英學などはなかつた、其蘭學も書物と云ふものは今の如に有りはせず、其本を以て居るものは先づ大名である、大名が買つて家來が之れを借りて讀む狀態であるから悉く寫本する、字引迄も寫すと云ふ有樣で容易なことではなかつた、偖う云ふ風にして一

年程骨を折つて居ると、國元の父が大病で又歸國した、歸國して自分が戸主になつたけれども今田舍に退き込んでは此迄習つたことが無駄になる、江戸に出たい心は千々に逸るけれども出ることは却々困難である、而も國では余が西洋學をやると云ふので評判がよくない、其頭開けた藩は西洋學を奬めたけれども多くは西洋のことは嫌ひであつた、唯戰爭となつて攻めて來らるゝ場合には日本の古流では對抗が出來ぬと云ふことは誰も解つて居つたが、西洋の本を讀むと切支丹にでも這入つて仕舞ふ樣に思つて之を嫌ふ、それで又江戸に來ると云ふことは却々六つかしかつたが、幸ひ家老の堀新九郎と云ふ人が自ら砲術を研究し西洋のことも多少解つて居つたので全く其人の御蔭で復た江戸に出たのである。

さて江戸に出て是れから西洋の軍學や砲術をやるには充分に西洋書を讀まねばならぬと云ふ考へより、書物を讀むこと計りに掛つた、其時分の蘭學の先生と云へば多くは醫者である、大村益次郎なども初めは醫者で、大鳥圭介氏も元は醫者であつたが、余が芝の大木の塾に居つた頃大鳥が塾長で世話になつた人である、夫れから文法書の外に醫者の本も除儀なく讀んだりして五年計り勉強して居る中に其時分幕府が建てた。



▲初めて蕃書調所に入る

蕃書調所と云ふ學校、卽ち今の大學の元祖であるが初めて此學校の敎員になつた、是れが二十五歳の時である、此處には當時未だ世間にない書物が澤山あつたので敎員をやつて居る傍ら種々の書物を讀むことが出來て非常に便利がよかつた、其頃までは初志を繼いで西洋の軍學や砲術をやる爲めに西洋の書物を讀んで居つたが、蕃書調所に於て外にない哲學、社會學、道德學、政治、法律學と云ふ如な書物を初めて見るに及び却々面白い、全體自分の家は先祖から甲州流の兵學家で、自分も夫れをやる積りであつたが、併し自分の好む所は他の方面にある之は性格に適はぬ、殊に世間に兵學をやる人は多く、外の學問をやる人は餘りにない、そこで世間にない學科は自分も面白く世の爲めにもなるからと思ふて志を變じた、此の如く決心して一生懸命にやりかけた、然るに本はあるけれども其解らぬ處

を聞く先生がない、今日の樣に指導して呉れる人があれば一年で出來ることに三四年も要する、其上に困難が多い、最初は蘭學ばかりやつて居つたが後には英佛の學も開けて來た、併し余は獨逸が一番盛であると聞いたので、夫れから專ら獨逸學をやつたが、此時獨逸書を讀むものは市川兼恭君と余の二人丈けであつた。

此くして漸く西洋の思想が解るやうになり、そこで西洋人の宗んで居る耶蘇敎に就いて一通り書物も讀んで見た、最も開けて居る西洋人の尊崇する宗敎であるから餘程優れたものであらうと思つてゐたのが研究して見れば到底感心の出來ないものであつたから、轉じて哲學、道德、政治、法律等の研究を進めた之には餘程感心した、其感心したと云ふのは先づ第一に人間は平等なもので、生れながら天賦の權利を有して居ると云ふやうな今日から云へば古い思想であるけれども、其時には珍しく斯の如き思想が西洋人にあることを感服した、之は支那や日本には未だ無かつた思想で大に珍しく思ふと共にそれが又眞理であると考へたから一つ新なる思想が自分に出來て、夫れから種々の著述が生れた譯である。

▲種々の著述

第一の著述が鄰草と名付け、二十六歲の時に書いた、其意味は卽ち西洋には立憲政體と云ふて議會を設け、一國の法律財政を議定し以て君主及大臣の權を專らにするを得ざらしむる政體がある、是れ人間が天から授かつた天賦の權利を重んずる所以にして日本も亦之れに倣ひ立憲政體に改めたいと云ふのであつた、然るに當時の事情は明かに日本と書く譯には行かぬ、故に支那を道具にして書いたから名づけて鄰草と云つた譯である、實に幼稚なものであるが日本で立憲政體のことを書いたのは此れが抑も初めである、其後二三年二十八歲のときに交易問答と云ふ二冊の小冊子を書いた、其頃外國との交易は國の禍になると言ふ攘夷論の盛な時であつた、そして交易なるものは攘夷家の云ふ如きものではなく、交易でなければ國を盛にすることは出來ぬと云ふことを通俗に商人二人の問答體に書いたものである、所が攘夷家の批難甚しかつたが別に政治を論議したものでないから餘り心配もなからうと出版した、後に此本は英人イムプリと云ふ人が英文に翻譯して呉れた。

次は維新の少し前に「西洋各國盛衰强弱一覽表」と云ふ書を著した、是れは西洋各國の幅員、人口、兵備、產物、輸出入など表に揭げて書いた、其後三十三歲のときに「立憲政體略」と云ふものを著した、此れは鄰草を精しくしたやうなもので、夫れから明治維新の一二年後に「眞政大意」と云ふ二冊ものを書いた、同じく天賦の權利を土臺にして前の鄰草や立憲政體略は重に政治の體裁を論じたのであるが此書は政治の仕方を說いたものである。

夫れから二三年後に國體新論と云ふものを著し日本國體の素に就いて論じた、此迄漢學者や國學者抔が云ふ國體は、臣民たるものは　陛下の大御心に服從すると云ふのが義務で、何事も大御心に隨つて仕へるのが日本臣民の節義であると云ふけれども、さうばかり云ふては惡い、勿論日本の　天皇陛下は外國の國王とは異つてゐらせらるゝなれども、併し　天皇陛下は日本臣民の心を以て御心とし賜はねばならぬと云ふことを書いたものである、此れも同じく平等天賦の權利論が土臺になつて居る。

それから同じ頃に獨逸の國法學者ブルンチリユーと云ふ人の著した國法汎論と云ふものを翻譯した、此れは主義は同じであるが大部なもので政治上のことを詳しく論じた西洋にて有名なる政治書である、政治上の書を日本で出したのは此れが一番始めである、日本に西洋の政治上の思想が這入つて來たのは此書の御蔭であらうと自ら信じて居る。

▲學問上思想の大進化

所が今より二十年程以前余が大學在職中、學問上思想の一大進化を來した、今迄述べた著述は何れもまだ思想の變化しない中のものであるが、其後段々種々の書物を讀んで行く中に人間に天から授かつた權利、卽ち所謂天賦の權利があると云ふ事は何の證據もなき謬說で、幷う云ふ權利と云ふものは有るものでないと云ふことを悟る樣になつて來た、夫れから又西洋に近頃起つた彼のダヴヰンの進化主義と云ふものを研究して見ると益々人間に天賦の權利と云ふやうなものはあるものでない、人間の權利と云ふものは漸々に人間社會の開けるに從つて發生して來たものであると言ふ道理も明になつて來た、恁う悟つた以上は舊著の土臺と云ふものは全く毀はれて仕舞ふた、夫れから早く余が新主義の書物を出さねば心持が濟まない處から、確か明治十五年四十七歲のときに人權新說と云ふ小冊子を大急ぎに粗漏なものであるが、以前の主義と正反對のものを書いて以前の三書は絕版して仕舞ふた、是が新主義著述の初めである、其後二三年して强者の權利の競爭と云ふ書を出した、此は殆ど七八年もかゝつて獨逸文と日本文の兩方で出版した、次に「道德法律進化ノ理」と云ふ書を著した、其次に加藤弘之講論集、天則百話を出版した、此は演舌や太陽誌上に出したものを編輯したもので、次に「自然界の矛盾と進化」と云ふ同じく新主義で書いたもの、此等は前書よりは少しは整ふた積りである、近來又基督敎の反對に就て我國體と基督敎、同じく迷想的宇宙觀、同じく基督敎徒窮す、と云ふ反對說を揭げて出版した。

先づ今迄の著述は慊焉ものであるが、力の及ぶ限りは此後も右等の書物に書いた所と同じ主義で、段々研究して行く考へである、此新著のことは茲で詳しく述ぶることは六つかしいから其書に就て知つて貰ひたい。

▲翁の訓話

終りに臨んで兵庫縣下青年の爲めに一言して置きたいのは、人は各々性質を異にし、才不才あり英鈍の別がある、故に成るも成らざるは止むを得ざる處なるも、天賦に乏しくとも能ふだけはやらねばならぬ、佛敎では輪生と云ふことを唱へるけれども之は確に當てにはならぬ、然らば人と生る、唯の一度であるから、折角萬物の靈たる生を享けて木石と共に朽ちるのは實に惜しむべきである、昔封建時代には人に階級があつて、其身分によつては學問の義務はなかつたけれども、今日は門地は莫い競爭の世であるから、何でも志を大にして死する迄勉强しなければならぬ、偉いの學問や財產を爲にいけたり、亦漸く喰へさへすれば直に小成に安んずるやうでは、到底世に何事も爲すことは出來ぬ、云々

編者は嘗て翁の著述を見て隨分冷酷な議論があるから、或は峻烈なる學者ではないかと想つて居たが、否々溫順玉の如く最も親切な人で其に溫厚の長者である、何か題字を煩はしたいと請へば、余は餘り書いたことはない、先年實業之日本の增田氏に少し親族の關係から强ひて請はれて書いたが、其時同誌上で爾後何人に請はれても一切揮毫しないと書かして置いたが、折角であるから何か屆けることにしやうと、數日の後態々贈與せられたのは編者が深く光榮とする處である。

▲翁の官歷

翁は二十五歲の時蕃書調所の敎師となり、二十九歲開成所の敎官となり、維新の際年三十歲にして幕府の目付に任せられ次で大目付に進み勘定頭を兼ねられた、明治二年新政府に任用せられ、初は政體律令取調御用係となり、後學校判事或は會計官判事、又大學大丞に任せられ、侍讀を兼ねて五六年の間日々　兩陛下に咫尺して進講をなすの大光榮を擔ひ、其後明治八年元老院の創設せらるゝや其議官に任せられしも議合はずして遂に之を辭し、同十年開成學校の總理を囑託せられ、間もなく醫學所と合併して東京大學となるや、卽ち舊開成學校に屬せる法、理、文三學部の總理となり、後又全總理に任せられ、永く其職にありしが、十九年に至り時の森文部大臣と意見を異にし、轉じて元老院議官となり、二十三年再び大學總長に任せられ在任三年、偶ま病氣を以て二十六年三月其職を辭せらるゝに至つた、又二十三年國會開設と共に貴族院議員に勅選せられ、三十八年樞密顧問官に任せられ引續き今日に迨んで居る、此より前き明治十二年帝國學士會院の設けらるゝや其會員に擧げられ、同三十年高等敎育會議長を仰付られき、同二十九年翁の還曆に當つては博士學士は勿論朝野を通じ千三百十五名の多數者より祝賀の宴を開かれたる如き、以て翁の世に重きを爲すを知るべく、卽ち翁の應接室にある牕銀製の肖像（海野勝珉氏作）及び壁間に揭げられつゝある頌德表とは其際贈られたる紀念品である。

蓋し翁の如きは我國政治思想の指導者として、獨逸文學の皷吹者として、文運復興の啓發者として、退ては身を學說の研究に委ねて些の倦怠なく、老いて益々學界の爲に努力せらるゝ如きは他に其匹儔あるを見ず、吾人が我國文明の先覺者として國家の大恩人として大に感謝する所以である。

▲新平民の廢止

殊に又翁が功績として忘るべからざるものは、維新の際に新平民の廢止を建議し、之に因つて彼の階級を絕ち平等の地位に進むことを得た一事である、蓋し斯る階級は未開時代の遺制にして文明の社會に取るべき制度ではない、乃ち翁が人間平等說より立論して之が廢止に盡瘁せられたる如き、全國幾十萬の同胞が之に依て其權利を伸べ、而して國家が多年の弊風を能く斷廢し得たるが如き、我文明史上に特筆すべき事蹟である。

▲男爵の家庭

翁の令夫人鈴子氏は同じく出石の出にして本年六十六歲、

三男五女あり、長女隆子は朝鮮總督府總務長官山縣伊三郎氏に嫁し、次女幸子は工學博士近藤虎五郎氏に、三女德子は工學士古川武太郎氏に、四女梅子は博士榊保三郎氏に、五女久子は俵博士に嫁し何れも賢夫人の譽がある。

▲令嗣醫學博士加藤照麿君

文久三年東京に生れ、幼少獨逸人に就て獨逸學を修め、九段阪下龍門義塾外國語學校等を經て明治十一年大學醫學部に入り、同十七年在學中獨逸に留學して醫學小兒科を專攻し、歸朝するや二十一年十二月畏くも皇太子殿下侍醫を仰付られ同三十四年より更に皇孫殿下の侍醫として日々三殿下を拜診するの光榮に浴して居られる、後醫學博士の學位を受け、本邦に於ける小兒科專門の泰斗として刀圭界に令聞がある、二男はドクトル加藤晴比古君にして、三男は山口縣事務官法學士馬渡俊邸君である、一門の賢達也た羨むに堪へたりではないか。

男爵北垣國道君

貴族院議員
錦雞間祗候

明治の功臣は何れも皆武士より起らざるものはない、是蓋し幕末の風雲に乘じて武士以外に天下國家の爲め奔走したる者が無いからである、而して武士は當時功を樹つるに最も便利なる地位を占めてゐた結果にも因る事は勿論である、然るに此の常例を破り一平民より蹶起して國事に盡瘁し、遂に明治の功臣と謠はるゝに至りし、北垣國道男の如きは實に明治人物史上の異彩である。

兵庫縣人物史　男爵北垣國道君

男の家は元日下部と稱し、現に粟賀神社に奉祀せる　開化天皇の皇子彥坐命の子狹穗彥王の後胤、後分れて十二姓となり、卽ち日下、大田垣氏等と共に但馬草創の名門にして、代代養父郡能座村に住し、父名は三郎左衞門北山と號す、男は天保七年八月を以て其家に生る、幼にして聰慧、學を好み、纔に六歲市て般若心經を其父に學び、七歲の時宿南の耆宿池田草菴先生の門に入り漢學を修め、（草菴先生のことは別項に

締なり）大に得る處あり、恰も米國の提督ペルリーが浦賀に來るや、尊王攘夷の說四方に起り天下は將に亂れんとして志士の奮起せるもの甚だ多く、然るに草莽先生は、位に非ざれば政を議せずとなし深く諸生の時事に動搖せるを戒められしが、年少氣鋭覇氣滿々たる男は自ら憂國の情勃然として禁せず、身を挺して國事に與らんと志し、遂に京都に赴かれたのが、抑々國事に關係するに至りし始めである。

▲高蹈勇退せる男の近狀

男は今や高蹈勇退して京都上京區土手町に蟠居せらる、邸は鴨川に臨み、三十六峰は一眸に收め、東山は手に取るが如く其風光景趣の中に、徐ろに餘生を送つて居られるが、儀容嚴然として古武士の風を存し、一面には禪味を帶び最も氣品の崇高なる人である。

▲男と生野の義擧譚

生野の義擧は當時尊王の志氣を鼓舞し、國論の歸趨に與つて功少からざりしは言ふまでもない、而して男は實に其中心にてありき、仍て著者は一日男を訪ふて其顚末を齊にした。

男は徐ろに語つて曰、當時の大體を語ると、余は文久二年初めて京都に上り島取の松田正人、野村靖、其他の志士に交はり、表面は攘夷の爲めに北海の防備と稱し、裏面は之により幕府を倒さんとの考へを以て、但馬に農兵を組織せんことを謀り、先づ之を組織するには朝廷竝に幕府の許可を受けなければならぬ、そこで幕府の方は山岡鐵太郎に會ふて、サテ方今攘夷を唱へても一朝外國から攻めて來た日には北海は何の備へもない、同地方小藩の兵は到底賴むに足らぬ、故に農兵を組織して幕府の後援となり以て攘夷を斷行せしめんとす、然れども若し幕府が朝命を奉ぜざる際には或は幕府に反抗することあるやも知れぬが、今や國家危急の場合傍觀するに忍びないから、農兵組織を許可せらるゝやう盡力を乞ふと言つた處が、道は山岡は偉かつた曰く其說は至極最で且つ同感である、場合に依つて幕府に反抗せられても夫は仕方がない、余等幕臣の者は其時幕府と共に處決するまでゝある國家の大事には替へられないから充分に盡力すると云ふた、そこで翌年一月に有志と謀つて板倉閣老に建議して置いて但國に歸りしが、偶々同年五月に本多素行が虛無僧に裝ひ山陰諸藩を內偵して但馬の湯島に來り、偶然三玉三平に會した、三玉は薩藩の士で前年伏見寺田屋事件に加はり、爾後京都の薩摩邸に幽閉せられて居つたが、脫して湯島に潛伏せる際にて、余は此兩人に會し、農兵組織の事を以てした、三玉は大に悅び遂に余が家に寓して百方之が募兵の事を謀り、余は又京都に上り久坂玄瑞、眞木和泉に會して一方學習院に議を上りしが、恰も五月十日長州は攘夷期限の勅を奉じて外國艦を馬關に砲擊した、茲に於て京都の同志は三玉が但馬に潛伏するよりは馬關に走りて攘夷の先鋒たらしむるに如かずと言ふ、余も亦私に以へらく若し之に同行して其先鋒に加はり、幸に萬死を免れて歸らば但馬の士氣振作に效驗少からざることゝ思ひ乃ち同志者の同意を得て、品川彌次郎より高杉晉作宛の添書を貰つて直に但馬に歸り、六月十八日三玉と共に鄕里を發して七月馬關に着し、高杉及び林半七に會つて其意を告ぐれば、高杉も之を悅び、直に前田砲臺に廻つた、然るに長藩は五月十日以來外艦を砲擊すること四回六月砲擊以後は馬關海峽を通過しないやうになつた、所が、突然七月二十日に姉小路卿が死なれて尊攘派の上に一大打擊が起つたので高杉の指圖で、長藩の河上彌一、其他四人が急に上京することゝなり、余も亦三玉と共に此一行に加はり八月一日京に着した、そこで眞木和泉久坂玄瑞寺島忠三郎等に逢つて前の但馬募兵上言の許可を促し、三氏の盡力にて遂に國事參政に容れられ、生野の代官河上猪太郎に向て直に命令せらるゝことに內決し、三玉は後に此國事參政の命を奉じて出張することゝし余は同月十一日に歸國の途に就た、時に藤本鐵石、吉村寅太郎等は密に大和義擧の內決をなして居つた、八月十三日但馬に歸ると幕府は代官河上に農兵募集の命を下したから、國中が稍々奮起して來た、乃ち余は此機を逸しないやう早く國事參政の發令を促さんと復又京都に上つた、處が途に京都の事變があつたと云ふ風說はあるが審でない、然るに余が坂の邊で三玉

が國事參政の命令書を以て但馬に向ふに遇ふた、京都の事情を聞くと長州が禁令によつて堺町御門の警衛を解かれたので、有志の公卿と共に大佛に退いたと云ふ、そこで余は長藩の進退が判らぬから京都に上り長藩の動靜に依つて前途の方針を定めんと思つたが、三玉が余は君に據つて事を爲さんとして居るに君が強いて上京するならば余は切腹すると淚を振ふて云ふから、已を得ず三玉を伴うて但馬に歸り本多素行の家に宿して募兵の方略を議して居ると、偶々代官河上が急使を以て本多と中島太郎兵衛を召喚した、之は同月十七日に中山侍從が、藤本鐵石等の徒を率ゐて大和の五條に討入り代官鈴木源內を殺戮した報を聞き前途の方針を議せんとしたのである、蓋し大和一擧は電光石火の如く近國幕吏の心膽を寒からしめ其狼狽甚しかつたが、獨り河上は從容として民間の志士と相議して其進退を公明にせんとしたのは蓋し幕吏中の人物であつた。

そこで本多中島は代官に志を安んじて農兵募集に力を致されんことを約して歸る、余は京都の事情を審にする爲めに九月朔日に京都に往つた處が、長州邸は前日の盛況は一變して寂寞として居る、留守居役の村田次郎三郎が七卿は長州に下り鷹司卿は關白を解かれ、朝廷は奸臣の擁する處となつた、而して大和は戰鬪中であるが後援なきに於ては頗る危いと云ふから直に余は一書を裁して長州の有志に送つた、其要は但馬は一年を期して農兵を募り兵器を整へ、明年秋を以て隣國の有志と氣脈を通じ兵を擧ぐれば五畿中國を動かすを得べく、而して此時を機として貴國の大兵を發せらるゝに於ては事は必ず成るを得ん、乞ふ大和の義兵は楠公赤坂退去の策に準ふて一時退去するを以て得策とすべしと云ふのであつたが、同志は之を容れず、遂に長兵の大阪兵庫に在る者及軍器を但馬に輸送して急に一擧を圖り、大和の應援に務むべしと云ふに決定した。

▲愈々生野義擧に決す

故に但馬の實地確定の爲めに京都の有志を代表して田中軍太郎、西村哲二（後太田次郎）を派することゝなり、余は之を伴うて歸途柏原藩の有志を訪ひ、事情を告げて來る九月十九日を期して高田村中島太郎兵衛宅に密會を約して歸り建屋町北村平藏の宅に進藤俊三郎（現今原六郎翁）を招き、余は八鹿の西村琢堂等を訪うて愈々十九日に高田村に會合した、會する者は本多素行、中島太郎兵

衛、太田六右衛門、進藤俊三郎、西村哲二、鈴江傳右衛門、吉井定七、平野次郎、三玉三平、田中軍太郎、因幡藩士橫田友次郎、山口守人、岩崎甚三郎等にして、衆議遂に事を擧げ大和に應援に決定し、而して長州に下れる七卿の一人を仰ぎ總裁となす事、大阪兵庫に居る長州の人數武器は因幡藩の名義を以て運搬する事、平野と余は長州に急行し總裁を迎ふる事、三玉は大阪に同志者を募る事、田中、進藤、西村、鈴江は京都に上り人數の嚮導武器の調達運搬に務むる事、吉井定七は大和に應援を告ぐる事、中島太田橫田其他の同志は但馬に在つて周旋する事、而して十月十一日を以て一擧の期限となす事、大和京都に異變ある時は直に長州と但馬に急報する事、等に評議一決して其翌日平野は長州に吉井は大和に發途し、余は鄕里に歸り竊に母に告別して二十二日發途鹿島に於て平野に會し、二十八日三田尻に着して、眞木和泉、轟武平、山田十郎、佐々木勇也等に會し、七卿に謁して事情を開陳した、而して同夜平野は長州公に謁せんが爲め山口に往く、翌朝余は七卿に事情を再陳せしが、三條公は曰く、昨日來議論頗る區々に岐れて居るが結局七卿に於ては大和の義擧を傍觀すべからず、假へ百方異論を生する共七卿の一人は兵等の請を容れて但馬出張に決心せるを以て此一義に於ては疑心を抱くべからずと懇に諭されたので、同席せる筑前の同志戶原卯橘と共に之を聽いて感激に堪へず退席して、戶原も但馬行に決心した、然るに翌十月朔日澤三位は、余と戶原に密に脫走して但馬に向ふべきことを告げられた、因て余は多田彌太郎と共に富海に行き早船三艘を三田尻の開閩口に廻漕せしめて居る處へ、平野が歸りて曰く山口に於ては議論が多岐で決しないから久坂と謀つて密に三田尻を脫する事を協議せりと、爰に於て七卿と暗に意見が符合したので、愈々二日の夜澤公が招賢閣を脫せられた、其時隨行の士は長藩の川上彌一、長野熊之進、和田小傳次、下瀨熊之進、井關英太郎、久留豐、伊藤百合五郎、小田村信之進、白石廉作、筑前の平野次郎、戶原卯橘、藤田四郎、堀六郎、長谷川丹三郎、水戶の大川藤藏、河股佐七郎、關口泰次郎、前木小二郎、阿波の深尾源次、伊豫の田岡俊太郎、但馬では多田彌太郎、高橋孝太郎と余の一行であつた、夫れより船は三田尻を發し三日朝防州室津に碇泊したが風波の爲めに發することが能きないので、余と戶原は急行を命ぜられ、押送り船に乘り激浪を冒して四日の朝無理に出帆したが暴風の爲めに其夜難を大島郡に避け、五日新港に着し、又本船に會して更に長藩士西村辰之助、大村

清太郎も之に加はり、戸原は再び隨行に入り、余は獨り先發して七日の朝飾磨港に上陸して其夜神西郡の仁豐野に着くさ、偶然進藤俊三郎に會し其用件を聽くに、大和は既に敗れ大阪の長藩士は(但馬に摑込を約したるもの)盡く國に引揚げ大に齟齬したるを以て、京都に在る松田道之野村和作等は、但馬の擧を見合せ、澤公は因州に潜行を勸め、其他は大阪の長州邸に潜み機を見て再擧を圖るべく、平野さ北垣に此事を通ぜよさの爲めに急行したのであるさ言ふ、そこで本多素行は屋形の三木屋に居るさ言ふので同家に趣きて深更迄凝議し、進藤は其事情を但馬の同志に告げて再び上京するこさゝし、余は一行が着船を待つて京都の意見に同意せんさ飾磨港に至り、上陸せる一行に會し澤公及平野に對して松田野村の意見を陳べ、人數武器の齟齬したるに於ては但馬の擧は不可能なる而巳ならず、已に大和の敗るゝに於ては愈に事を擧ぐるの不必要を說き其中止を論じたが、血氣に驅する一行は之に耳を傾けない許りでなく、澤公平野は兎に角事を擧げて縱へ敗るゝ共爲めに我々の犧牲に由つて勤王の志を振起すれば足れり、敢て成敗は之を問ふ處でないさ頑さして應ぜず、爰に於て余は本多をして再び說かしめんさ獨り先づ急行して戻るさ新町に於て本多に遇ひ時に一行は已に仁豐野迄川船で着して居るので、更に之を說論して一旦は容れられたが忽ち又異議を生じ遂に屋形迄繰込んだ、そこで余は先發して但馬に歸り同志者に事情を告げて應急の用意を圖り、十日夜澤公は生野に入り代官所を借り受けて之に入れ、直に檄を飛ばして農民を召集し、又近藩に特使を派し、告ぐるに三條公以下諸卿及長門宰相父子の寃を辨疏せん爲め上京の途次家臣をして京都の事情を問はしむる間暫く此に留りて其報を待つのみ、さ之に因つて農民の集合頗る多く、然れ共一方近藩の兵は南北より襲來せんさして形勢頗る急になつた。

▲事成らずして敗る

形勢は刻々急を告げて來た、余は但馬に入つて農兵の出動を促し、山口へ來るさ川上彌一(南八郎)は三四十人の者さ妙見山にて出石豐岡の藩兵を防禦せんさ陣取つて居る、余は若し兩藩の兵が押寄せたら到底防禦は不可能である、如かず今夜兩藩の兵が八鹿に泊るを機さし、夜襲して火を放たんさ云ふたが河上は之を肯かぬ、夫れから生野に出て見るさ澤公は昨夜二三の者に勸められて南海に走つた、平野は姫路藩兵を防ぐ爲めに南方に陣取つて居るさ云ふ、肝腎の本陣には誰も居ない、大に驚いて急に平野三玉本多中島さ凝議したが、其時平野の曰く、百事齟齬遺憾極りないが最早事爰に及んでは詮なし、要は二途ある而巳一は切腹、一は逃れて再擧を圖る而巳さ、衆議離散して逃るに決し、直に山口の同志は退散して丹波路を經て大阪に赴くべきを報じ、平野も代官所を撤して去る、本陣は其夜盡く四方に散じたが、山口なる南八郎の一手は翌曉に至して尙退去せず、偶々一揆の襲來砲擊にあふて皆自害し、中島太郎兵衛、三玉三平は道路を誤り播州の木の谷村に出て農民の爲めに銃殺せられ、長曾我部太七郎、中條右京は姫路藩兵に討れ、太田六右衛門は出石藩に捕へられ、平野次郎、横田、本多、黑田、木村等も亦各所に捕へられ、其他は皆虎口を脫して各地に遁れたのである。

生野義擧の一條は略以上の如くで、茲にトウ〳〵瓦解して仕舞つた、世間では大に戰ひでもしたやうに云ふが、戰も何も仕たのではない、實は今日より顧みれば頗る輕擧極まることである、僅か三十人や五十人で單に一片の元氣を恃して居る丈けで、到底成功する筈はない、余は終始尙早論者であつたが若し、其後一年間位を準備の爲めに費して、其上事を擧げたなれば、或は近畿中國位はやりつけたかさも思はれるが、併し當時の同志は敢て全局の勝利を得やうさ思つたのではない、單に犧牲さなつて勤王の志氣を振作するの動機さなれば夫れで足れりさ云ふのであつたが幸に其後各地に勤王の士が蜂起して遂に王政復古の一大偉業を遂行したに就ては、勿論大和、生野の擧は其動機さなつたに違ひはないさ思ふて居る、故に南八郎等は決して斃れて恨みさは思つて居ない而已ならず、寧ろ甘んじて斃れたものである。

▲男が其後の苦心

男は當時本營を去つて十四日家に歸り、最早進退谷つて夜に入り密かに父の墓前に切腹せんさせられた處が、老母が堅く諫めて云はれるには、男子の大事を成さんさする宜しく百折千挫も猶屈すべからず、此期に至り死を急ぐは狼狽も甚しさ自ら酒を酌んで激勵せられた、そこで更に大に感動して日暮父の墓前を拜し母に別れて、大屋谷より播州に出で山陽道を京都に趨かんさし、明延山を越ゑて宍粟に出られたが前路已に塞つて通せない復た明延山上に引返された處が、數日前より一睡もせないものであるから頻りに疲勞を覺ゑ、樹下に一睡せられた、詩あり

心事英雄一敗時　　去家別母沒歸期
山蹊月暗蟲聲寂　　又向秋風踏萬危。

翌十五日道を轉じて出石に出で丹波路より京都に上らんさ伊佐村の渡により淺間山に上るさ行路敵あり、秋寒骨に徹し加ふるに身體は飢ゑ疲勞した、乃ち密林に入つて石上に臥し一首を詠す

今はたゞ限なく月の照るさへも忍ぶ我身の仇さなりぬる。

淺間山を出て前路の壅塞を察し轉じて蓼川の左岸を上り、網場村の下を渡りて八鹿に至り、嘗て男が家の老僕たりし某を訪へば夫妻は懇ろに潜ましめた、翌日彌々因州へ脫するに決し其夜八鹿を發して四ヶ山を越ゑられたが、山は之れ但馬第一の高山、折柄天上の月は浮雲に徨よひ、溪流の聲は潺湲さして耳底に響く、感慨無量、卽ち左の一詩を賦せられたり

萬峰黃落秋蕭索　　溪水空流月不明
誰識今宵斷腸恨　　雲山深處孤猿聲。

山を越ゑて山麓の一村に宿り、十八日漸く鳥取に着して太田次郎(西村哲二の變名)に會し氏さ共に意を決して京都に上り名を八木良藏さ僞り因州邸に潜伏せられた、時に但馬の一擧は忽ちに瓦解し大和は一敗地に塗れ、幕府は諸藩に令して警戒頗る嚴なりしも、而も諸藩の志士は益々蹶起し互に四方に結合して大に事を爲さんさし、長州は使節を派して朝廷さ幕府に寃罪を歎訴するさ同時に大藩諸侯に奉勅始末の書を送り、又野村靖を始め同藩の有志は密に京阪の間に潜伏して諸藩の同志に奔走怠らず、東は江戸を中心させる志士あり、水戸は藤田小四郎を主さして關東を皷吹するさ云ふ勢さなつた爰に於てか大和、但馬の擧は遺憾にも中途に敗れ幾多の名士を失つたけれども畢竟當時各地の志士を感憤蹶起せしむる一大動機さはなつたのである。

男は夫より京都に在つて同志さ交り互に時事を交涉して居られるさ、北副橘隈(本山七郎變名)が蝦夷函館に遊び、奉行小出大和守に交り同地の實況を探知し之に據て事を圖らんさ同藩の坂本龍馬に說き坂本の管する神戸海軍練習所(勝安房の統轄坂本望月は其門生)の黑龍丸を以て人數武器を密送せんさ謀り坂本亦密に之に應じた、そこで男は江戸に下り水戸の有志を勸奬せんさし、十二月末原六郎(進藤俊三郎の假名)太田次郎さ共に江戸に下り因州邸に假寓し因邸、桁邸、目白宍戸邸を往來して志士の連絡を圖り、一日藤田小四郎を安藤坂の池田屋に訪ひ蝦夷地の旗擧に付水戸の人數を送られんこさを求めるさ、藤田曰我藩は議して三策を建て、一は横濱燒討ち、二は上京して朝廷幕府に攘夷の先鋒を願ふ事、三は筑波山に義旗を擧ぐる事、而して何れか其一を取らんさして居るから他事に關する譯には行かぬさ云ふ、且託するに横濱の偵察を以てした、男之を諾し直に横濱に至れば各國公使館は堅牢なる構造にして英佛の兵を以て之を守り、諸藩警衛の兵

は水陸共に充實して居る、若し之を攻撃せんか公使館に至る前に於て諸藩警護の兵と戰つて斃るゝのみ、其難きを察して之を藤田氏に告ぐ、氏は其勞を謝し且曰く然らば横濱火攻は不可能にして、第二策の上京は其人數二千人の多きを送るは到底費用の支ふる處でない、若かず水戸に歸り同志と共に烈公の神靈を奉じて義旗を擧げんにはと直に水戸に歸り、而して元治元年三月遂に野州太平山に義旗を擧げた譯である、男は此時宍戸侯の囑を受け其藩士小畑友七郎因幡の千葉重太郎と共に太平山に趨き暴擧を止まり建白書を呈すべきを以てせられた處が藤田田丸の兩氏等も之を容れて攘夷先鋒を請ふの建白に付因備兩侯に紹介を乞ふたから、男は之を宍戸侯に報告すると共に、備前に赴き藩侯に謁して田丸藤田等の苦衷を告げ且京阪の事情を開陳せられしが侯は之を容れて直に朝廷幕府に建白をせられた、時に京都に於ては同志が頻りに長州の冤罪を唱へ、一方本山等は攘夷の密議を凝らして居ると云ふ場合、幕府は之が制壓に全力を盡し、人心恟々として其破裂は當に旦夕に迫つて居つた、男は又江戸に歸り宍戸侯に備前侯のことを復命し侯は之を田丸藤田等に報せしめられた、然るに一方京都に於ては古高俊太郎が新選組の浪士に捕へられ（曾て志士の京都に會するものは皆古高の家及び大高又次郎の具足工場、大佛前水口藩の下宿所に潜伏して居つたのである）而已ならず同志の姓名錄其他の秘書類を奪はれた爲に六月五日同志の徒が三條池田屋に密會して居る處へ會藩が幕府の命を受けて襲ひ同志二十餘名は奮闘して斃れ、脱るゝものは僅に二名、同日坂本龍馬は本山に別れ決死訣別の封書を

託されて江戸に下り、又同時に因幡同志の急報を齎した、男は之を聞き直に京都に上ると京都は益々紛擾を極めて居る、長藩家老福原越後は七卿の寃罪を愬ふると稱して多くの兵を率ゐて伏見に屯し、引續き藩兵も入京して大に爲さんとして居る、茲に於て男は福原氏と謀り江戸同志叫合の爲め七月七日又々江戸に下り假名を中村貞藏と改められた、時に太平山の兵は筑波山に轉じて幕兵を下妻に敗れり、然るに京都に於ては、長藩の福原、益田、國師信濃は各兵を引て頻りに劃策して居ると幕府が追誅の令を下し、遂に七月十八日、薩、會、彦根藩の兵と戰ひ、敗北して木島、寺島、久坂玄瑞は戰死し眞木和泉は自害するに至つた、之を聞きたる男は慨歎禁せず然も從容として同志と謀り、原六郎、太田次郎を初め一行九人を率ゐて七月二十五日東京を發し、何れも因州藩と稱し箱根の關門を通過せんとして語音の異るより之を許されず、大に強辯して漸く通行を得、京都に達して因州邸に入り後圖を謀り遂に伯州黒坂の河田佐久馬の幽處を訪ひ、而して長州に赴くことに決しぬ、斯くて一行の長藩人は國に歸り、男は原太田三崎氏等と伯州に抵りて河田の幽處に居つたが藩政の爲に容れられず、轉じて備前藩の伊木長門の領地に據つた、夫より一行は長州に向ひ防州の室津に上陸して他は此處に止り男は獨り三田尻に抵り松島剛藏林市太郎氏等に會ふと兩人から上國の事情を藩侯に具陳せんことを請はれ、備前侯の密使と稱して萩に至れるも兩侯は病と稱して見わず、時に藩論非なるを覺り萩を去つて三田尻に至る時に松島氏は反對黨の爲に幽せられき、男は乃ち室津に往き、太田次郎、淺井虎之助

氏等を伴ひて更に備前に歸り長州の事情を伊木に報じ、再び黒坂に往きて河田に會し、夫より米子に至り同志に長藩の事情を告げ、又復京都に上り長州備前伯者の情況を報じて同志と共に前途の商議を爲して居ると慶應二年二月武田伊賀守、田丸稻之右衛門、藤田小四郎等の志士は敦賀に於て斬首に處せられ、長州にては高杉晉作藩兵と戰ひ君側を掃ふて藩論を一定し大に兵備を整へたるにより、男は再び長州に赴きしが翌年幕府が再び長征の擧あり、而も長防の兵は之を逆擊して石州を略し更に藝城に迫りしも勝安房が長州に下り和を講じて終つた、男は翌慶應四年十一月長藩の先鋒隊に屬して上京し、因藩に歸嚮を決せしめ、更に柏原藩の舊友を沓掛村に訪ひ、山田參謀に紹介し同藩の津田左門氏は光明寺に山田氏を訪ひ、山田も亦林半七と共に津田氏を訪ふに至りき、是が近藩の勤王を表明した第一着であつた、同月二十二日山田の指揮により長州の增野清三と共に、丹但諸藩の動靜視察の爲め福知山に抵り同藩の家老飯田助之進に勤王を表すべき旨を諭し、夫より出石を經て豐岡に至り湯島に朝倉心齋を訪ひ、正月二日柏原に出れば同藩要路の津田要、田邊郁實は急を聞いて藩兵を京都に急行せしめたと云ふ、四日京都に歸りしが、直に山陰道鎭撫總督の隨行を命ぜられ、五日京都を發して園部に至り總督西園寺中納言に謁し山陰諸國を隨巡して四月京都に歸り、六月徵兵十二番隊が總督宮に從つて越後に向ふべく之が顧問として從軍し越後口の戰終りて京都に歸り因幡藩籍に入つて彈正少巡察使に任ぜられき、是れ男が明治政府の官職に就た初めである。

▲男が維新以後の略歷

明治二年六月初めて彈正巡察に任ぜられ、八月北海道巡察を命ぜられ、同三年五月德島藩内紛擾に付出張を命ぜられて之を靜定し、時に彈正臺は北海道竝に樺太巡察には殆ど其人に苦んで居つたので、男は進んで其命を受け、十月函館に渡り岩村開拓判官と議し、渡島膽振日高石狩後志を巡回して、十二月函館に歸り、翌年正月北海道開拓に付、一治水の急務二道路の開拓橋梁の架設、三築港、四勸農、五牧畜、六移民七漁業、八敎育、其他國防に就て最も適切なる意見書を函館より本臺に郵送し置き、更に十勝根室北見を巡回して樺太に渡らんとするや多期は行路杜絕開拓使は其危險を慮り男に中止を促せしも、強て函館を發し膽振日高を經て十勝に進み根室に至り、其間雪中露宿山道を越ねて北見に出で、小舟危險を冒して宗谷に達し數日にして樺太白主に渡り「チペシャ」「トウペッ」に至りて露國經營の概況を視察し、四月下旬東京に歸り、三條公初め各參議列座の上實況を報告し「ギリシャ」敎公許の議を說き、當路爲に大に動きしと云ふ、此の年七月烏取縣少參事に任ぜられ、同年開拓使權少判官に任じ、同五年少判官に累進し、其後浦河支廳、樺太支廳に在勤し、八年七月元老院少書記官となり、十二月辭職、之より蘭人と謀つて北海道に一大拓殖會社を起さんとせしが、偶々西南の變あり大久保卿の慫慂により熊本大書記官を拜命して亂後の縣治に力を致し、十一年七月内務少書記官に轉じ縣治局長を命せられ、當時板垣伯が高知縣下に於て大に自由說を呼號して同

縣の縣治に至大なる困難を感じ、伊藤内務卿は男を派して其實況を視察せしめ、其復申によりて四國施設の方針を定め、爰に於て十二年六月高知縣權令に任せられしが、同縣は開墾以來事務澁滯して、縣會は未だ開くを得ず、地租改正は天下に後れて尚紛擾を極め、又津呂浮津鯨獵の擾動及び新町地券の紛擾あり、未だ地上權は定まらず其他大小稽留に付するもの枚舉に遑なく、加ふるに男が赴任するや虎列刺病は猖獗を極め、殊に阿波國に於ける地租改正は最も紛擾の甚しきものありし而已ならず當時高知は政黨の爭ひ頗る猛烈にして、難治言語に絶するものありしも、男は赴任早々各種施設に大英斷を行ひ、未だ二年ならずして其一切の創設改革を全うし、十二年十二月德島縣新設の建議を爲し其新設せらるゝに及び兼德島縣令となり、遂に一切の難問題を解決して其根據を築きたるの手腕に至りては當路の賞揚して措かざる處、然るに偶々京都府治紛擾の事あり、政府は急に男をして之が任に當らしめんとした、然るに男は險岳重疊たる高知縣の如きは僻せざれ共京都の如き安樂世界は其任に適せずと爲し之を肯せざりしが、十四年一月強ひて京都府知事に任せられき。

▲京都疏水事業

男は性撥亂反省的の人である、從つて坦々たる行路を辿つては居られない人である、抑々京都に赴任するに當り、同地が帝都東遷の後、年を逐ふて衰頽に傾き、人心は日々に萎靡する有樣、同市の過去を見て將來を慮れば實に寒心に堪へない、爰に於てか同地の發展策として琵琶湖水を加茂川に疏通し水力を利用して工業を起し、運輸の便を開き、滯滅の用を佐け、火災の防衛、上水下水の用に供し、以て其面目を一新せんものと、而も赴任早々直に疏水工事と云ふ空前の一大問題を發表した、然るに世人は徐りに其突飛なるに驚き、政府に於ても半信半疑、又技術家も之を危んで同意を表せず、市民は負擔の大なるを恐れて之に贊同せざりしが、而も男は自ら信ずること厚く、不屈不撓、百難を排して之を主張し、遂に四面楚歌の中に立つて苦心經營、明治十四年五月測量に着手し、同十八年六月二日起工式を行ひ、同二十三年四月九日天皇皇后兩陛下の御臨幸を仰いで盛なる竣工式を擧げ、特に左の勅語を賜はる

『疏水の工事竣るを告ぐ吏民協戮の功洵に嘉すべし、從來我美術工藝の盛なる此土を最とす、自今此水利に藉て以て人工を資け倍々精良を加へ他日の殷富を期せよ』

同工事の豫算總金額は百弐拾五萬六千七百參拾五圓なりしが、竣工總金額は百拾九萬九千餘圓にして、五萬七千五百餘圓の豫算過剩を見るの好成績を示せり、抑々該工事たるや本邦空前の事業にして世の一問題となり、內外人の環視せる處而して最初豫算を編成するに當り、蘭人デレー氏は壹千餘萬圓と稱し、或は參百又は五百萬と唱へ、男の計畫は必ずや中途に於て失敗に歸するものとなし、冷笑嘲罵就中京都市民の反對甚しかりき、顧みれば當時我國が經濟上又は工業上の思想は最も幼稚なる時代にして男の達見を忖度するものなく、單に豪宕奇を衒ふの擧となしたるも亦當然の事にして、而も其間偉大なる確信を以て、朝野の反對を斥け決行したる男の

膽力と、而も最少の工費を以て百年の大計を完成したる手腕の非凡なるは云ふまでもなく、殊に優渥なる勅語を賜り、我邦水力電氣の濫觴として、爲に京都市の面目を一新し、同地の工業をして今日の旺盛を見るに至り俄然舊態を一新したる而已ならず、本邦の水力電氣事業を誘致したるの功勞亦偉大なりと謂つべく、爰に於て朝野に嘲罵反對せる京都市民は、今や同市が賀都以來の大恩人として其鴻業を紀念せんが爲め一大銅像を建設し、其後明治三十九年六月重ねて左の彰功書竝に紀念品を贈つた。

閣下明治十四年京都府知事に任せられし以來府治上多大の功績を擧げられたる而已ならず、本市百年の大計たる琵琶湖疏水の事を規畫經營せらる、當時我國科學の進歩今日の如くならず百般不備の時に際し拮据盡力萬難を排して遂に斯の大業を完成し本市殖產興業上の發達に資せられたる其功績實に顯著なりとす依て本市は曩に閣下の形像を銅鑄して其紀念を留め且今般制定の本市有功章表規に依り有功章竝に紀念品を贈呈し以て其功績を表彰す

洵に近代の快事なりと云ふべく男が不朽の事業として其一大功績に至つては倍々後世に光を放つものである。

▲北海道の治績

明治二十四年七月十六日男を以て內務次官に任じたりしが直に辭表を提出し、同十九日北海道廳長官に任せられた、蓋し北海道は嘗て開拓使時代に於て大に其施設を誤り朝野の比難甚しかりしが、男が赴任せらるゝや同道の開拓は鐵道を敷設して交通の便を拓くにありとなし、北海道鐵道聯絡線を測量して一千三十哩となし之を政府に具申し、二十八年內二百五十哩布設の豫算を提出し削減せられて砂川旭川間三十五哩を以て三十九年度の豫算に編入せしが北海道殖民鐵道を發起するものありて反對せしも遂に大多數を以て可決し、翌年北海道鐵道法案成りて五百哩の繼續豫算可決せられ、其他山林の整理、土地貸下規則を改正して殖民を奬勵し、亦漁業法を改め、町村法、道會案を制定して自治體を組織し、函館、小樽の築港を計畫する等同道の殖民行政に努められたること甚だ多く同道一般の基礎確立するに及び、二十九年四月拓殖務次官に任せられしが、三十五年偶々病を得て其職を辭し、而して三十二年錦鷄間祇侯被仰付、同月貴族院議員に勅選せられ、又明治二十九年六月五日特旨を以て華族に列し依勳功男爵を授けられ、累進して從二位勳一等に叙せらる。

上來說述せる所により男が一代の功績は之を知ることが出來るであらう、思ふに時代は人物を產むか、人物時代を造るかは容易に判すべからざる所であるが、男が少にして國事に志し、天下の志士と交りて尊王黨の先驅となり、其劃策盡瘁したる功績は確かに天下の形勢を動かし、又時代を一變せしめるに與つて力ありしことは毫も疑を容れざる所である、而して其人と爲り豪落不羈一意唯だ國家公衆を思ふの外一身一家を顧みず、功を衒はず名を求めず、悠々として名利の外に超然たる男の如きは、當今稀に見る所の人物である、而して其見識高く思慮愼密、果斷決行の勇に富むこと朝野を通じて男の如き人物は容易にして之を見出すことが出來ぬ、若し男

が野心家にして先輩や元老などに阿付する人であつたならば玆に内閣の一椅子を占めたであらうが、そこは人格高く且つ人物はより以上に大いから自我を没却して名利に奔るやうなことをせない、是れ其人物の益々大にして又高傑なる所以である。

財界の元老　原六郎君

（明治四十三年十二月稿）

本邦經濟界の先覺者として又現に實業界の元老として、澁澤榮一氏等と並び稱せらるゝ原六郎翁は、曾に縣下出身者中の巨人たる耳ではなく、實に我國に於ける立志編中の一大巨人である。

熟ら惟ふに維新以來我實業界に頭角を現はし社會に雄飛せる人は鮮くないが、未だ翁の如く武士的の精神を以て身を錬ひ、夫れに泰西の文明思想を抱いて學識修養もあり、品性高く萬人の尊敬に値する富豪たり實業家たるものは甚だ鮮ない此點に於て翁は明治實業界に一大光彩を放つ許りでなく、其前身は又維新の志士として少壯身を挺して國事に致したる香しき過去をも有し、一朝機に乘じて海外に遊學し、世界進歩の狀勢を察して歸來盛んに實業を奬勵鼓吹すると共に、自ら實業界に投じて社會の先驅となり、世を指導して我國文明の發達に少なからざる功績を與へたる翁の如きは、洵に明治實業家中の異彩である、而して又元老先輩として世に尊稱せらるるのも決して偶然ではない。

世人は往々松方井上兩侯等を以て明治財界の元老となし殆ど他を顧みざる傾がある、固より兩侯の如きは元老には相違なきも、併し渠等は唯だ藩閥の勢力によつて其地位を占め、或は頭首となつて政治的に之を統轄したるに止り、其之に對する實際に至つては他に其人がある、翁の如きは卽ち其一人である、若し表面の名義に拘泥せず實蹟の上より論じたらんには、氏が明治の經濟上に致せる功勞は實に莫大なるものである、故に人爵を以て直に其功績や又其人の眞價が判斷の出

來ないと共に、少にして身を起し自立獨歩、而も權勢を求めず功名を貪らず、邦家實業の發達に對して實際上に獻替せる氏の如きは、其人物の非凡なるは云ふ迄もなく、而して其功勞勳績は永く我經濟史上より沒却することは出來ぬ。

▲翁の邸宅に訪問す

編者は一日翁の謦咳に接せんとして其邸宅に訪問した、邸は東京市街の紅塵を避けたる北品川の御殿山で翠光滴る松の樹立の中に建てられ、東南に品川灣を望んで風光景趣に富める佳境である、構の尨大にして壯嚴なることは驚く許りで、何うしても百萬石以上の大名の屋敷である、古色蒼然とでも形容すべき大門がある傍に門番の家があつて案内を乞ふて内に這入ると五六間幅もある道が通つて一面に小砂利が黑豆を散したやうに布かれてある、兩側は小山をなして一帶に小松が綺麗に植ゑられ、其間を遙か進むと松林の馬車廻しがあつて中に高さ三丈程の本花崗の石燈籠が突立つて、周邊は廣濶左手は數町の塀を繞らして内庭を境し、右手の方には遠く諸願巡査の控所や馬車小屋がある、正面は則ち雲を摩するやうな大構の玄關で支那風の背貝の戸を以て閉され上を見ると桃山御殿にあつたと云ふ菊桐の紋を鏤める金鍍りの大燈籠がブラ下り田舍漢は荒膽を拔かれさうな感じがする、玄關には支那風の衝立、二箇の大きな唐獅子の置物が置いてある、執事室へ通ると二名の執事先生が机を並べて居る、其内御嬢樣が學校行だと云ふて内玄關の方では自働車が頻々と軋る音、五六人の書生と乳母や下婢がバタ〳〵忙はしき風が見える、如何にも豪盛なものである、其内に玄關脇の西洋風の應接室へ導かれた室内裝飾を見ると極彩色の唐畫の山水や有名なる芦雪筆花鳥の一軸が掛けて、瓦斯暖爐の傍にある裝飾棚には高麗青磁の陶器類を幾十となく並列して其他額面から置物何れも天下の珍品許りで飾られてある、暫くすると女中が珈琲と煙草を持つて來て主人は來客あれば暫くお待ちを乞ふと云ふ執事の青木さんが紅葉の見事な枝を手折つて來て花瓶に活けて呉れた。

▲翁と語る

纔て主人の翁が出て來られた至極壯健であられるが偶々病後の場合で稍々衰へて居られる、至つて素朴な態度で言葉の奥に但馬の地方語が交つてポツ〳〵と談さるゝ處は誠に親しい敬慕すべき人である。

▲翁の訓戒談

余が何か青年の爲に有益なる御咄をと乞へるに應じて語らるゝやう。

青年は何れも學校卒業の後其方向を誤らないやうにしなければならぬ、世の父兄は隨分困難の中から其將來を樂んで、中には祖先の遺産を擔保にしたりして迄も學資を支給する、而して其卒業期を待つて居る、然るに之れを是れ思はず在學中に墮落するものもあれば又幸に卒業して後一身を誤るものが往々あるやうであるが、其父兄の心事を想察すると實に同情に堪へない次第である、殊に近來は此卒業生の就職難に苦しんで居るものが甚だ多く、昨年の如きは卒業當時法科大學の卒業生四百名の中就職したもの僅に三四十名に過ぎなかつたと云ふことである、而して一方工科大學又は高等工業等の卒業生は何れも就職したさうであるから此等は學科の選定如何によるべく世の學に志す子弟は能く時

勢と將來とを考究して何なりと世に用ひられる學科を選ぶのが必要である、尙一つの就職難の原因は何れも學校を出ると直に立派な人間になり得たやうに思つて最初から給料の多きを望み地位の高きを需むるものであるから從つて用途の尠きは當然である、何れも地位と給料を選ばなかつたなれば相當に職業はあるに違ひない、故に何うしても最初は地位と給料を選ばずに從事するの外はない、而して如何なる位置でも又給料でも誠實に勉強して忍耐すると共に自然經驗を積めば必ず其酬ひはある、稀世の英雄豐太閤でも藤吉郎の時代には草履摑みから始めたではないか、現に余が第百並に正金銀行に頭取たりし頃最初給仕として入り、傍ら毎日退行後夜學に通ひ英語算術等の普通學を學び漸次事務に熟練して僅かの間に支店長に進み大學や高等商業の卒業生を使つて居る者が數名ある、此等は全く經驗と誠實と而して忍耐の結果である、成程大成するに高等の學問は最も必要であるが同時に經驗、誠實、夫れから如何なる場合、如何なる事に當つても其困難に堪へる所の所謂根氣が強くなければ到底成功するものではない、人間の一生中には却々困難なこともあるもので、余の如きも維新前國事の爲めに家を辭し諸國に奔走して後長州に潜伏中、藩兵防禦隊に加はつた頃には一日の扶持が米一升と月手當が國札四十目卽ち現今の四十錢であつた勿論當時は物價も廉かつたけれども此れを以て衣服は元より軍服も自辨で三度の食事は火打笊の辨當のみでやりぬいた夫れから三田尻の學校に居るとき（米國南北戰爭の當時）何でも英語を學ばねばならぬと英學を初めたが其校長が蘭學の先生で英語は解らぬ書籍と云つても五六十人の生徒の中に文典が五六册辭典も四五册よりなかつた、故に翌日講義の處は前日持主に時間を限つて借用して夜中日本の毛筆で半紙に文典も字引も寫したものである、當時洋學と云ふのは長崎橫濱以外には至つて幼稚なものであつたから貧生の爲めには別して困難を感じたものであるが、現今の學生は書籍もあれば教師もある、學資は父兄から支給される從つて學業の進歩も速かである、併し幾ら學問しても時勢に適合しないやうな人物になつては駄目である、要する處最初は位置と給料を問はず相應の職業に從事して、一旦其職業に就いた以上は、如何なる困難にも堪忍し誠實と勤勉とを以て終始一貫しなければならぬ、是れ成功の要諦で今日の青年諸子に反省を望む所である。

▲翁の略歴

世界何れの歴史に徵しても、我帝國の如く僅か四五十年の間に於て斯る一大變革を來したる國は勿論ない、而して斯る一大變遷の時世に遭遇したのは何よりの一大幸福であるとは常に翁が悦んで語らるゝ處である、從つて此間に於ける各種變遷の衝に當りたる翁が一生の經歴は、卽ち活きた變遷の歴史であつて其困難辛苦も又素より尋常一樣ではない、今其概略を摘記すれば。

▲翁の實家

翁は朝來郡佐中村の名族進藤丈右衞門氏の六男、進藤の先は藤原氏にして義氏と稱し、義經に從ひ赤間の戰に軍功あり後裔小源太教景居を佐中に定めたりしことは、同家の系圖並に墓碑に由つて詳である、累代此處に住すること七百有餘年の久しきに迨び、連綿として所領も廣く隱然領主を凌ぐの勢があつた、當主は長次君で其家は鎌倉時代の建築に係り今尙堅牢、全部新造りにして古代建築物の標本である、丈右衞門氏は幕府直轄の大里正を勤め、性清廉義俠忠君愛國の志敦く夙に王室の式微を歎き深く勤王の士を愛せられ、維新前志士の但馬に遊ぶ者は多くは同家に據つたのである。

▲翁の少々、生野義擧に加はる

翁は幼名を俊三郎と云ひ、文久三年頃幕府の嫌疑を避けんが爲め、假に藤原氏の原をとつて姓を原、名を六郎と改め單に一時の僞名に過ぎざりしが、脫走後各藩同志の知己は、原六郎を知つて進藤俊三郎を知るものもなく不便を感じて遂に維新後其假名を本姓名に改められた譯である、幼少の頃宿南の青谿書院池田草菴の門に入り、漢學を修むる事二三年、折しも嘉永癸丑の頃米提督ペルリーが浦賀へ來つて修交條約の締結を求めた、爲に吉田松陰、佐久間象山を初め水戸の志士杯から建白をする、種々の議論が沸騰して世は勤王佐幕鎖港攘夷の二派に岐れ、天下は將に麻の如くに亂れんとするの形勢を呈して來た、爰に於て大に感激すると共に心を動かされ、一番身を挺して國事に盡さんとの志を起されたので卽ち翁が十七歳の時であつた、（玆に一言すべきことあり十七歳と云へば當今は高等小學の二三年位である、國事杯とは柄にもないと云ふ人もあらうが、併し當時の人は翁に限らず縣下でも北垣松尾武井男の如き何れも同年配で已に此覺悟のあつたのは詰り非凡な處である）恰も同門の北垣氏が主唱となり其他の志士と協り但馬に農兵を組織せられた、そこで氏は之を訓練すると共に各勤王の士と志を通じて居らるゝと大和の義擧が起り（此邊のことは北垣男の話中に詳なれば略す）折柄平野國臣、三玉三平其他の志士が但馬に下り高田村中島太郎兵衞氏の宅に凝議し、大和の義擧應援の爲め文久二年十月十日を期して生野の旗擧げに決し、平野北垣氏は長州落七卿の一人を總裁に迎へんが爲に三田尻に急行される、氏は同士の一人と京都に上り密に菊の紋入紫縮緬の幕とか或は高張り又は鎧り襠袢手鎗と云ふやうな其他戰具の調達に努めて居らるゝと、同年九月の末に大和五條より敗走して京都に來りし同志池藏太が五條の敗北を報じた、そこで松田道之其他の同志と協議して畢竟生野の擧は大和應援の爲なれば此上は翌年四月雪解けの頃迄延期して充分に準備を整へることにせんと決定し、長州より着する公卿は因幡に潜伏を請ふことゝし、其旨を三田尻より着する一行に通知せん爲め、氏は直に播州に下り神東の屋形に待受け、先着の北垣氏に會つて其次第を告げらると、北垣氏は初より尙早論者の一人なれば直に同意して一行の到着せる飾磨に至り延期を論じたりしも之を容れず、遂に生野に乘込み代官所に據り布告を發して農兵を召集した。

（然るに澤三位卿は追誅兵の來るを恐れて夜中に脫走し、爲めに前日召集せる農兵は僞浪人に欺かれたりと誤解して大に怒り、南八郎の守衞所山口の妙見山を襲擊して南八郎初め其他の十三人は自刃するの止むなきに至り、一擧は途に瓦解に終つたのは顧みて遺憾の次第であつた（翁は後に山口村に同志の墳墓を建て亦永代の祭祀料として地所を寄附して居られるが展墓の節一首あり

くにのためたふれしともをまつるかな
むかしをしのぶふるさとにきて）

愈々生野の旗擧げを決行することゝなりしを以て、氏は豫て京都に調達しありし戰具を運び來らんと一擧の前日、會津落士と稱し早駕を命じて京都に至り、鳥取藩の松田道之氏に生野の事情を告げて同藩の荷物に裝ひ但馬の梁瀨迄運んで來ると、生野は已に蹉跌して澤鄕は行衞不明、自刃するものや捕はれたものやで十四日に瓦解して仕舞つた、已に平野も横田も捕へられたと聞き、事の意外に驚き失望限りなく如何はせんと途方に暮れしが、愚圖々々しては危急が身に迫る、身を以て遁れんと思つたがさて困つたのは運んで來た戰具である總數五六十駄もあり、最早十日の菊であるけれ共何れも同

志の共有物私に放擲すると云ふ譯には行かぬ、夫から色々と困難して又鳥取に運び同志の或家老に事情を打明け漸く預けて置いて、歸途前日に於ける生野の模樣を探知せんものと、三ヶ月より御子畑を越ね夜中佐中の宅に歸り、竊に父兄に會し同村の寺に潜むこと二日、探索甚だ嚴重なるに依り父兄に告別し京都に往きて北垣氏に會し、京都に潜伏の後十二月二十八日京都を發して江戸に趨き擊劍家の同志千葉重太郎の許に潜伏した。

（其頃初めて坂本龍馬に交はられた坂本は一の劍客に過ぎなかつたが最も鑑識の高い人で又時勢を看るの明があり、既に其當時より怎ふしても強兵は國の實力に俟つべく、實力を增進するの策は商工業の發達を促進しなければならぬと論じた人である、翁は當時深く此言を感じて後に實業界に入られたのも全く此が動機である、嘗て坂本氏の四十年祭を京都に擧ぐるに當り翁の贈られたる一首あり）

　としへてもわすれさりけりくにのため
　　君かゝたりしそのことの葉は

さて千葉の塾に潜伏して居ると京都蛤御門の事件に付長州の同志から通知があつて、之が應援の爲め京都に上れば已に灰燼の後長藩は引揚げたりと聞き、夫より伯州黑坂に趁り河田佐久馬の幽處竝に大山に潜むこと二箇月、後岡山に轉じ同藩伊木太夫の保護を受け、折柄幕府が長征に際し伊木の命を受けて廣島に抵り幕兵の模樣を探知して歸り暫く岡山附近の小島に潜伏した、實に此間に於ける困難は到底想像も及ばぬ次第であつた、翌春北垣氏と共に長州に下りて同藩の守備隊に入り小倉最後の戰に加はり平和の後は、三田尻の海軍學校に入り前に話された如く英學を修め初めて歐米の事情を窺知るの端緒を得た。

▲山國隊の驍勇天下に鳴る

尋で明治元年河田佐久馬は東山道の參謀となりて東征の途に上る、氏は鳥取藩に附屬せる山國隊を率ゐて之に加はり（山國隊は元丹波の三國に起りし義勇兵なりしが少數の爲め山陰の旗頭鳥取藩に屬し名を山國隊と改めた）同年四月壬生に出陣して大鳥圭介の率ゆる舊幕の脫走兵と野州安塚に戰ふ、此時氏は斥候隊を率ゐたりしが未だ本隊の來らざる前不意に襲擊せられたりしも苦戰して遂に之を敗り、同五月上野に死守せる彰義隊を誅たんと西鄕隆盛の率ゐる薩兵、竝に鳥取兵は同十五日未明龍の口に勢揃ひを爲し、長州、大垣等の兵は敵の右側を襲ひ、氏は先鋒となつて上野御成門を破り闖入突擊賊兵を掃蕩し爲に山國隊の驍勇天下に鳴れりと（戊辰戰記繪卷物保勳會の上野戰爭圖に原六郎の名點々記載せられ當時氏が勇戰の狀況詳なり）其後林庄之助が小田原に割據せるや之を征せんと出陣せしが戰爭には至らず、歸京の後大村兵部の命により、嘗て佛人シャワノン氏より訓練を受けたる幕兵二大隊を預り鳥取藩の邸に移し之を淘汰して精鋭の兵二中隊を率ゐ、更に奥羽戰爭の應援に赴き相馬口に討幕最終の戰を爲して偉功を奏し、凱旋後陸軍大尉の職を帶びて專ら親兵の訓練に力められき。

▲軍職を辭して歐米留學

嘗て坂本龍馬の一言を信じたる翁は、已に維新の大業も成就して世は平和の時代となる、最早武を以て世に處し國に盡すの塲合にあらずとなし、明治四年職を辭し同志の緣故ある鳥取藩士に列し、兵制の改革に着手し大に藩政の爲に力を致さんとせしが偶々伊藤博文卿が米國より歸朝し、人材を西洋に派遣して文物を視察せしめ文明の智識を輸入せんとの意見を唱へたるに依り、政府は全國十五大藩に命じて各二名宛を派遣し一箇年を期して海外を視察せしむることとなり、氏は鳥取藩より拔擢せられしも一箇年位の視察研究は何等の效なきを主張して之を辭されしが、政府は一年以後の經費は藩費を以て支給するならば之を許すとなし、遂に明治四年五月海外留學の途に上り、直に「ボストン」大學に入つて經濟學を修めて居られると、同年廢藩置縣大改革の結果は氏が留學の財源を失ひ、不幸中途廢學歸朝を餘義なくせられんとせしが、烱眼なる氏は當時米國は南北戰爭の後を承けて紙幣低落の極に達して居ることに着目して遠からず回復の期あるを知り、囊底を叩いて之を買收し一銀行に預け置いた處が、果して幾何もなく紙幣の價格が回復して意外なる巨利を博し優に數年の學費を得るに至つた、其後「ボストン」「ニウヘヴン」大學に留ること三年、更に英國に渡り「キングスコレージ」に學ぶこと三年經濟學の蘊蓄を究め歐洲大陸を視察して明治十年に歸朝せられた、時に西南の役に際し官軍は氏を起して戰爭の渦中に投ぜんとしたが最早サーベルの人となる氣はない、又岩倉公は政府の役人に任せんと慫慂すること切なりしも、一旦野に下りて實業を指導せんと決神せる氏は之を固辭して受けざりき。

翁が明治十年三月洋行中倫敦にて撮影今や生を存するもの、翁と菊池男ある而已

⑩〇翁の一首あり

偲ふこと多くもあるかな大かたは
たゞうつしゑのかげのみにして

向テ右ヨリ

上段
故富田某君
原六郎君
故某君

二段
故長岡子爵
菊池男爵
故三宮男爵
故伊賀陽太郎君

三段
故馬場辰猪君
瓜生某君

▲本邦貯蓄銀行の嚆矢と第百銀行の創設

多年歐米に留學して學術制度を研究して歸朝せる氏は、當時全國の士族は金祿公債を抱いて何等爲すこともなく、偶々事業を起せば忽ち失敗するの有樣、爰に於て氏は鳥取藩士族の有せる公債を資本となし、創めて第百銀行を設立し本店を東京に支店を鳥取に置き、自ら頭取となり拮据經營の結果は久しからずして社會の信用を博し、今や同行は行運益々盛大に赴き本邦唯一の模範銀行と稱せらるゝに至りしもの全く氏が監視督勵の結果である。

又當時我國民の狀態は勤儉貯蓄の思想を涵養して零細の金を蒐め、以て廣く生產事業の資本に提供することは、國運發展の策として頗る急務の事業であつた、而も貯蓄すべき銀行なきを慨して設立せられたるものが今の東京貯藏銀行にして卽ち本邦貯蓄銀行の嚆矢である。

▲橫濱正金銀行の改革と大發展

明治十三年外國貿易機關銀行として橫濱正金銀行設立せられしも、當時我國人中未だ外國取引の途を知るものなく、隨て銀行經營の目的を誤り、未だ三年を出でざるに頭取を更迭すること三回に及び失敗紊亂を重ね、資本金約三分の二以上を失ひ、國家經濟上竝に對外信用上大に憂慮すべき悲運に陷り一大改革を行はざるべからざる場合となつた、此に於て時の松方大藏大臣は强ひて氏を頭取に迎め改革刷新を圖らんことを以てした、氏も亦之を快諾して第百及び貯藏銀行は池田謙三氏に託し、自ら正金銀行の頭取となり之が整理を試みし」に、皆て外國爲換又は海外貿易の法を知らず亂暴に經營し來れる後なるを以て、實際に於て參百萬圓の資本金は缺損の結果僅に九拾五萬圓を殘せるのみ、殊に從來は單に日本人に限り爲替を取組み來りしが、斯くては對外金融機關の本義を沒却し且つ貿易發達の途にあらずとなし、外國人との爲替取組を開始して大に業務の擴張を圖られしが、當時日本人而已の經營を以て外國人との間に爲替の取組を行ふは不可能なりとし之を危ぶむ者ありしにも拘はらず、一人の外國人をも使用せず、而も外國商人の信用狀態を仔細に調査して取引せられたるの結果は、些の損失をも見ず夫より大に業務の繁忙を來じて、初めて貿易機關銀行の任務を全うし得たるが如きは、氏の手腕に於て初めて之れを遂行せられたるものにして到底他人の企及し得べき處にはあらざりき、尙又同行は從來正貨（銀）資本の制度なりしが當時紙幣相場の暴落は銀壹圓に對して紙幣壹圓七八拾錢位なりしを以て、兩時株主總會を開き、從來の銀貨資本を紙幣に改め、銀貨を賣却して紙幣に替へ、其の紙幣を以て重ねて百圓の額面七拾圓位に暴落せる公債を買收せられしが、幾何もなく紙幣竝に公債共價格昂騰して多大なる利益を得、僅か一年ならずして次期の決算期には從來の缺損額貳百拾萬圓を償却して加之若干の積立金を爲すに至り更に明治十九年支店設置其他の用件を以て歐米に航し、歸朝後增資を企てしが新株百圓の額面は貳百圓の應募となり、之に依つて又參百萬圓の利益を得て積立金となしぬ。去れば氏が初め就任せられたる時は、株券の價格僅に四拾圓に暴落せしものが、明治二十三年病を獲て辭職せらるゝに際しては、前の缺損を償却したること貳百拾萬圓、更に七百萬圓の積立金を有し、株券の價格は一株四百圓を以て賣買せらるゝ盛況であつた、抑々正金銀行は我國唯一の外國貿易の機關銀行である、而して其基礎を確立して今日あるを得せしめたるものは全く氏の力に依るものにして、我國の貿易が今日の如くに發達した所以のものも亦實に氏の功績と謂はねばならぬ。

▲其他の事業

明治二十三年病を以て正金銀行頭取を辭し取締役として、商工業視察の爲に三度歐米に漫遊し印度を經て歸朝せられた其前人の依賴を受けて炭鑛を擔保に金を貸された處が、或事情に由りて之を引受けて經營を試み、其後日露戰役の起るや軍用金の不足を顧慮し正貨の充實を唱へて、金塊又は古金或は金時計金の指輪杯の僅なものを潰し相場で日本銀行が買收したことがある、爰は之を見て日本國ともあらうものが寡婦婆のする樣なことをする餘りの馬鹿々々しさに、一番男らしく金山を採掘してやらうと、折柄見込のある金山があつて、國家的に之が採掘に着手し其後今日迄引續き經營して居られるが、相當に金は出るが利益にならぬ、其處で不止得廢業することに決して居られる、爰の話によると昔の生野や佐渡は別として日本にては金山は經營すべき事業でない若しも大資本を投じて之を創めんとする人あらば余は之が斷念を注告せんとするものである、と言つて居られる。

兵庫縣人物史　原六郎君

其他の事業

明治二十三年病を以て正金銀行頭取を辭し取締役として、商工業視察の爲に三度歐米に漫遊し印度を經て歸朝せられた其前人の依賴を受けて炭鑛を擔保に金を貸された處が、或事情に由りて之を引受けて經營を試み、其後日露戰役の起るや軍用金の不足を顧慮し正貨の充實を唱へて、金塊又は古金或は金時計金の指輪杯の僅なものを潰し相場で日本銀行が買收したことがある、爰は之を見て日本國ともあらうものが寡婦婆のする樣なことをする餘りの馬鹿々々しさに、一番男らしく金山を採掘してやらうと、折柄見込のある金山があつて、國家的に之が採掘に着手し其後今日迄引續き經營して居られるが、相當に金は出るが利益にならぬ、其處で不止得廢業することに決して居られる、爰の話によると昔の生野や佐渡は別として日本にては金山は經營すべき事業でない若しも大資本を投じて之を創めんとする人あらば余は之が斷念を注告せんとするものである、と言つて居られる。

兵庫縣人物史　原六郎君

天下の珍園

同家の庭園は有名なもので、著者は暫く庭園へ出で、其の風光眺趣に接したが何しろ三萬餘坪の大庭園であるから一寸一巡するにも容易でない、廣々とした一面は山羊の皮を敷き詰めたやうな芝生があつて、眞中に小山の如き巨な石がある、傍には花壇があつて四時草花斷たず、前面一帶は松の樹立の鬱蒼として翠光滴り、奇松あり、老楓あり、折から楓葉の紅なる處々に混りて、嵐山の秋の景色に於けるが如く、中に一溪あり溪の中央には河がある、池がある、一方の稍々高き丘の上に天を擎して聳立せる赤き五重の塔がある、是れは多寶塔と名付けられ、播州の古刹刀田山鶏林寺内にありしものを邸前の大門と共に爰に移され、羽風造りと稱し欽明帝時代の建築にして東洋の建築學上に於ける珍逸として斯道の研究資料となつて居る、塔に登れば遠く芙蓉の峰を望んで南に品川灣を俯瞰し、北は紅塵の東都を一眸に收め、塔を下れば溶緩たる川がある、川に沿へる徑道の傍には圓形の方一丈位燒字を刻せる大なる曼陀羅石が大小十數箇所々に置かれてある、之は昔伊勢山田の經が峰に建立せられたる經塚と云へる石である、故に經が峰と名付けられてあつたものを爰に移されたるもので、其他彼處此處に散在する、龍の躍るが如く虎の踞するが如き大石小石は何れも保津川筏船より運ばれたるもの、之の運搬に四十噸積の貨車百輛以上を要したさうである、行くこと數丁にして、昔澤菴和尙が愛好せりと云ふ茶室がある、爰を出で、左へ辿ると路傍に劍札が立つて居る、大和多武の峯兩執行代捨馬禁制の制札、木は朽ち蘚色凸起して昔を偲ばしめ、此の畔を巡周するときは眞に閑寂として多武の峯に登るの想ひがある、夫れより數丁北の方に出ると左方の稍高き處に一大寺院が建立せられ、門外「寂酒山門不許入」の塚がある、門を入れば古雅たる大伽藍、此れなん聞き及ぶ慶長年間江州の三井寺に建立せられたる日光院の書院にして「ユルカヲ」附と稱する建築本邦美術の精を盡し

たるもの、即ち今は此處に移され慶長館と稱し翁が美術陳列所となつて居る、館の裝飾は、襖、床、張壁等、何れも法眼元信、古永德の曲水蘭亭、野馬の圖、或は歸去來、山水等を以てし、館内藏する處のものは遠に富贍なもので何れも翁が本邦美術の海外に流出するを憂ひ金に飽かして收蒐したる天下の逸品國家の重寶のみである、漸く邸内を一巡して歸ると庭園を一眸に戢むる御殿作りの一室に導かれた、此室も「ユルカロ」付と稱し東都唯一の建築にして、大廣間には一昨年東宮御所裝慶館に出品して天下の美術家をして唾涎措かざらしめたる、明の除霖の雙幅を床に掲げ、周圍の裝飾襖、屏風に至つては東西の名畫名器を併列し洛東大本山の殿堂に至つても見ることの出來ないやうなもの計りである

同邸は德川時代國主大名の送迎所にして故に御殿山と稱し、亦維新前は長州の藩士が燒き誅せる英國公使館の跡にて頗る歷史付きの處、現に窓外の一樹燒け傷の古木は即ち當時を語る紀念である。

翁の一首あり

ますらをのあかき心の燒き玉の
あとこそ殘れ庭の老木に

以上記したる所は固より翁が經歷中の一小部分に過ぎぬ。

あゝ世は幕政に謳歌して未だ迷夢の覺めざるに當つて、但馬の邊境より身を抽んじ、奮然勤王の大志を起して少壯兵馬の間に出入し、生死の境に立ちて神身を練磨し、又世運の大勢を察して商工立國の實行者となるや、政府が辭を敦うして誘はんとするも之を顧みず、一意殖產興業の開拓に終始して渝ることなく、實業界の明星となりて奮鬪努力したる翁の如きは、實に明治實業界の偉彩である、其邦家社會の爲に精勵盡瘁し殊に本邦經濟思想の尙幼稚なる時代に當つて、自ら實業界の指針となり、其發達奬勵を皷吹し、又廣く各種の事業を起し、常に先導となりて幾多の會社銀行を設立して其中心となるが如き、如何に我國實業發達の爲に貢獻せられたるを知るべく、以て其功績は永く明治の實業史上に赫々として光輝を放つであらう、要するに氏が今日の地位と鉅萬の財寶とは皆何れも自己が奮鬪努力の賜である、而して國家的の思想に至つては燃ゆるが如く熾烈で、嘗て五萬金を海防費に獻じて正五位に叙せられ、其他の慈善敎育等の爲には好んで貲を捐て、殊に氏が祖先崇拜と愛鄉の念に富み歸鄉するや鄉閭を賑はし、同志の墳墓に永世祭祀の料を供ふる等人の以て美談となす處である。

其收藏する美術の如きは悉く國家的の考へから、國寶となるべき優等美術の海外流出を慨きて之を保護したるもの、其行動や常に國家的である。

性溫良篤實平民的にして毫も驕る侮る等のとなく、嫻雅高尙なる思想は古美術と敷島の道を愛し、近來塵境を避けて斯る好山莊に閑棲し品海の朝光夕景に親しみつゝ、悠々と世を送つて居らるゝが如きは、蓋し益々終を善くするものである。

▲翁の錦心繡腸

述懷

そのむかしたをれし友をしのぶかな
忍ぶが岡の山時鳥
みだれたる紅葉の影に忍ぶかな
血汐にそみし友の昔を

●慶長のむかしつ頃潛伏しゝ香川の驛を過ぎて

さわわたる香川の月の身にしみて
過ぎし昔を偲ぶ夜半かな

●戰後經濟不整理のとき

花見てもたのしからぬはうき雲の
心にかゝるときにぞありける

●日韓合邦を祝ひて

おほきみのめぐみのつゆにうるほひて
とりのはやしもいろやそふらむ

▲翁の家庭

令夫人富子氏は大和の模範造林家を以て名ある土倉庄三郎氏の長女にして淑德高き賢夫人四女あり長女瀧子は今回大阪府三島郡高槻在の豪農田中慶造氏の令弟邦造君と結婚せられ瀧子夫人は嘗て學習院を卒業して容姿端正翁に仕へて奉養至らざるなく邦造氏は京都帝大法科の出身にして優等を以て卒業し銀時計を恩賜せられたるの人伉儷相睦じく翁も亦悅んで居らるゝ處である。

男爵濱尾新君

東京帝國大學總長
貴族院議員

（明治四十三年十二月稿）

氏は嘉永二年四月豐岡藩に生れ幼名貞次郎後新と改む、幼にして學を好み、又武術を講じ、少々同藩の岩崎豐氏に隨ひて東京に出で英佛の學を修め維新前早く已に學界に頭角を顯はしたる人である、明治初年より心を敎育に寄せ國家の根柢たる人物の養成を以て畢生の事業となし、本鄉丸山に共慣義塾を開き、以て慶應義塾に對抗して居つたが、明治五年時の文部卿は大學草創の當時學生氣風の改善を圖らんとして大學南校生徒舍監に任じたりしが森嚴なる氏の感化に由つて學生の氣風之より頓に昂り、帝國大學の基礎は實に此時に成つたと云ふことである、六年官を辭して米國に留學し、翌年歸朝再び開成學校監事に任じ、校長心得に進み、八年校長補となり、十年東京帝國大學の開設と共に法理文學總理補に、十二年には更に文部省書記官に任せられ官立學務局長となり、後專門學務局長に轉じ參事院議官補を兼ね、文部大書記官に進み、十八年大學副總理に任じ官命を以て歐米敎育制度の視察竝に美術取調委員長として歐米各國を巡察し、二十三年國會

の開設と共に貴族院議員に勅選せられ、二十六年大學總長となり、三十一年には文部大臣となりて內閣に列し、三十二年高等教育會議長に勅任せられ帝國大學名譽教授に推薦せられたる等、我國教育會の先覺として明治初年以來邦家教育の爲に貢獻せられたる功績は殆ど枚擧に遑がない、實に氏は本邦教育會の大恩人として天下の認識する處である、彼の三十八年講和問題に就て七博士組の言動より延て大學教授が連盟して文部省に反抗となり、教授連の氣焰甚だ熾んにして如何ともすべからざるに至るや、桂總理は氏の力を藉りて之を鎭撫し勅命を以て遂に氏を大學總長に任じ特に親任の待遇を賜ふに至つた、而して氏が一度總長の任に就くや大學の動搖は忽ち平靜に歸した而已ならず、亦大學をして獨立的の基礎を成さしめ、爾來引續いて大學總長の任にあるが其の德望聲擧の益々高きを以て見れば單に統御の才に卓絕せる許りでなく總長として眞に名實相伴ふ大教育家たることが判るであらう。

氏は又誠に孝順の心深く世人が氏の公的半面のみを見て單に學者又は教育家と爲し、他の半面を閑却するのは未だ氏の全豹を窺つた言ではない、蓋し氏は幼少より父母に事ふること孟宗にも劣らぬと云ふ程で、當時學生として他鄉に在るや常に衣を更ゆる毎に慈母手中の絲と言ひ必ず之を捧持して其恩を拜謝するを例とせりと、以て其孝心の一斑を知るべく、亦後進の指導に到りては單に教育家としての職責而已ならず明治初年鄉里豐岡の青年を東京に伴ひ出で、之を指導教養し現に著名なる猪子止戈之助、和田垣謙三、河本重次郎氏等の如きは全く男の指導の賜であると言つて居られる、蓋し斯の如きは決して鄉里の人而已ではなく、以て氏の人と爲りを推知することが出來る。

氏は頗る謹嚴の人であると共に又冒すべからざる權威を具へた人であるが併し一面には溢るゝが如き溫情と同情心とを有せられ、隨て人に敬慕さるゝこと厚く、其器は倘迄も棟梁的の人物と謂はねばならぬ。

附記、嘗て小松原文相が鄉里の岡山に歸り同地の各學校に臨んで親しく訓戒するや實に偉大なる感化を與へたと云ふことである、濱尾男の如きは天下の師父で一地方的の人物ではなく、且つ又激職にして閑日月のある人ではないが聞く處によれば明治四年以來故鄉を訪はれたことがないとの事である、去れば吾人の男に求むる處は何か機會を利用して時折鄉里に來り其感化を與へられんことである、蓋し是れ吾人の一私言のみではなく鄉民一般の希望であらう。

貴族院議員　男爵　久保田讓君

豐岡は兵庫縣下に於ける、人物の藪澤にして殊に教育會に重きを爲すや年既に久し、卽ち濱尾、久保田兩男の前文相に於ける、和田垣、河本、猪子、岡本の諸博士が大學教授として令名を馳するが如き、之を外にしては沖野博士の土木の大家として斯界に重きをなし、第四高等學校長吉村寅太郎、高女教授下村巳代吉氏等を出したるが如き、舊封僅に一萬五千石の城下としては以て天下に誇るに足るべし、而して其能く茲に至れる所以のものは、全く先覺諸氏が提撕の篤きに依らずんばあらず、蓋し男の令兄精一氏の如きは其功最も多きに居る。

▲男の令兄故久保田精一氏の略傳

氏名は精一字は執中、損窓と號す、天保十三年正月豐岡本町に生る、家代々京極公に仕へ、父を小平治と云ひ氏は其長男なり、五歲のとき父歿し、其弟周輔氏(男爵氏の父)又同藩下村氏より入りて之を繼ぐ、天性聰敏六歲にして藩學稽古堂に入り、已に嶄然として頭角を露し、十八歲選ばれて出石藩の儒官島村弘堂の門に入りて經史を研鑽し亦武藝を學ぶ、文久元年家に歸り直に江戶勤番を命ぜられ、出でゝ安井息軒竝に大橋訥菴の門に學ぶ、其間江戶邸引受方を命ぜられ、又藩侯の宋家たる錦太郎竝に千代吉兩君の侍讀を兼ね、文久三年學風を慕ふて水戶に赴き、更に弊城、相馬を經て仙臺に入り各地の遺聞奇勝を探りて水戶に歸り、同年秋豐を芳野金陵、監谷宕陰二氏の門に執る、當時尊王佐幕開國攘夷の論喧しく志士論客の奮起せるもの甚だ多かりしも、氏は其群に入らず偏に學に志し、元治元年千代吉君に隨ひ歸藩せしが復命を承けて宿南なる池田草菴氏の塾に入學し幾もなく豐岡に歸り、同年七月長州征伐に際し藩命を以て生野檢令橫田新之丞に從ひ視察の爲めに廣島に抵り、歸藩後稽古堂學長兼御徒頭を命ぜられ又步兵操練の教授を兼ぬ、維新の際山陰鎭撫使四國寺公に扈從して園幡伯耆、美作播磨を經て京都に赴き、歸藩直に稽古堂大屬に任ぜられしが翌年廢藩置縣と共に稽古堂も亦廢せらるゝに至れり、此間氏が稽古堂學長の任にあること前後六年、多くは校內に寄宿して生徒と起食を共にし、勤苦勵精專ら子弟を教育せられたる其功績は洵に偉大なるものとす。

翌年文部省十二等仕出を命ぜられ學制改正案を擔任して貢獻せること多く、累進して中錄に至りしが明治十一年官を罷む、後又心を教育に致し麴町區番町芝增上寺內淨雲院を借りて私塾を開き成蹊舍と名け、教を請ふもの常に百人以上に及びしと云ふ。

明治十年再び豐岡に資林義塾設立せられ、後之が招聘に應じて豐岡に歸る卽ち明治十四年四月なり、而して氏が塾長となるや直に諸般の規程を改良し課程

を定め、從來の面目一新して大に隆盛を極めたりしが、故あつて明治十八年廢塾となるや、更に私塾を設けて育英に勗む、此より前き豐岡中學校の幹事として、或は豐岡縣の存廢又は豐岡裁判所の存續等地方問題に力を盡し、地誌を選び沿革を調査する等、其他地方の發展に盡瘁せること甚だ多し。（明治二十三年五月病に罹り翌年二月八日終に卒す享年五十實林山瑞泰寺に葬る。平進四科考正氣歌集釋、豐岡藩文武校興廢始末、小學非蛙管見、論語管見、名物考等の著あり其他の詩文又多し。

▲男の經歷

男は精一氏の次弟にして、明治二年初めて日光縣權大屬に任せられ、五年文部の少吏となり、累進して會計局長普通學務局長となり、二十五年文部次官に進み、翌年職を辭して貴族院議員に勅任せられ、第一次桂内閣の成るに及んで文部大臣たり。

氏は嘗て文部在職中歐米諸國を巡遊して具さに教育上の視察研究を遂げ、以て教育通として重きを爲せり、故に一度貴族院に入るや教育家として嶄然頭角を露し、時の文部施設に反對して光彩隆隆たるものありしが、其自ら文部大臣となるや屬僚並に大學派の掣肘を受け其抱負を實行する能はず、加ふるに桂内閣の日露講和條約に反對したる、法科大學教授戸水博士の處分に關しては機宜を誤り、大學派の攻撃を受け終に職を辭するの止むなきに至りしが如きは、實に氏の爲に惜まずんばあらず。

氏に尚令弟あり、貫一氏は即ち之なり、嘗て衆議員議員に擧げられ、後監獄局長たりしが今や職を辭して閑散の地位に悠々たり。

新竹製腦株式會社長
錦雞間祇候

九州醫科大學教授　醫學博士　櫻井勉君

櫻井郁次郎君

維新以來西洋文物の輸入と共に、智識と實際を尊び、秩序を重んじたるの結果は、益々人物の器局が小量となり、徒らに客臭い僻み根性の多い自利一偏のずるい人間計りとなつて眞に大和魂を抱ける純武士的氣骨の稜々たる人物は漸次地を拂ふに至つた、素より吾人と雖も敢て秩序を輕んずるものではないが、併し斯る風潮では偉人豪傑と稱すべき人は到底出現しないであらう、縣下の人物を通觀しても、純武士的の俤を存して居る人は、僅か大鳥、北垣、原、田邊、櫻井氏位であるが、何れも既に衰殘の傾きがあるのは誠に惜むべき次第である。

翁の如きは純武士的精神に孔孟の教を受け、最も意氣の盛んな東洋流の人である、故に比較的人物は巨いが、處世の巧な小才子の輻の利く當世には到底用ひられない言はゞ不遇の豪傑である、故に明治の先輩として終に一頭地を抽く能はざりしは遺憾であるが、而も世の爲め人の爲には隨分なつた人である、近く但馬の人物でも却々得意な境遇に居る人もあれば、亦財産もあり名譽があつても單に己利榮達に汲々たるもの多きに拘らず、氏は藩政の改革を初め鄉里の爲にも種々に劃策する處あり、殊に東都に遊ぶ但馬の青年が殆ど翁の門を潜らぬものはなかつたと云ふことである、以て一班を窺ふに足るべく、而も槽櫪の間に朽んとして居るのは、眞に同情に堪へざる次第である。

▲翁の經歷

代々仙石家の儒官にして、先考一太郎氏は藩の勘定奉行を勤め御家騒動の時には讒に遭ふて追放せられしも幾何もなく復權して參政に擧げられ、減封の回復を圖らんとして只管斡旋する處ありしも、終に意を達するに至らざりき。

翁は少にして別に一家をなし藩校弘道館の教頭となり、維新の際貢士として江戸に出で、間もなく歸國して藩の大參事に任せられて藩政の改革に鞅掌し、當時遊惰を排するの極女兒十八歳にして婚せざるものにはめん扶持を給せずとか又は庭園廢止と云ふ頗る經濟的の極端なる布令を發したことがある、廢藩後重野安繹氏の薦めによつて明治政府に出仕し、初めて愛媛縣權參事となり、轉で租稅權介となり、又内務省の

設置と共に同省に入つて地理局長に任せられ、地租改正の爲には自ら山陰、山陽、神戸、馬關を擔當し、周ねく足跡の印せざる所なく、或は地質調査所の設置を建言して之を設くる等、維新草創の際に當り職に在ること前後十二年大に治績の見るべきあり、後山林局長に轉じ、林政の刷新を圖らんが爲に大に畫策する處ありしが、偶々品川彌次郎氏と軋轢して之を辭し、再び地理局長に任せられ、氣象臺、測候所、竝に測量原器、一頭三角の設置等に力を竭し、後又德島縣知事となり、同縣に於ける煙草の栽培、椎茸の培養等專ら副產物の奬勵に努め、良二千石の稱ありしも品川子爵の内務大臣たるに迫んで又々職を辭し野に下りて衆議院議員に當選し、板隈内閣のなるに及び選ばれて山梨縣知事に任せられ、後臺灣新竹縣知事に轉じ、同縣の廢廳と共に神社局長に任せられしも、品川系統の内海忠勝氏が内務大臣たるに際し遂に職を辭し同時に錦雞間祇候仰付られ、其後新竹製腦株式會社の社長として同地に於て專ら製腦の發展に努めて居らるゝ、偶々歸來大久保町の寓居に在るを聞き、翁の謦咳に接すべく訪問せしが座に森本駿君あり、盛んに宴を張る、余が出石郡の發展策を質せば翁は先づ以て宍粟の發展策如何と言ひ、今や齒右稀を超ゆること二三、意氣尚旺んにして酒と議論にかけては決して人後に落ちぬ、資性淡快にして洒脱何處となく巨い處があつて、接して言ふべからざる溫味があり、親切なる先輩として欣慕すべき人である。

▲令息醫學博士櫻井郁次郎君

兵庫縣人物史　中江種藏君

氏は翁の長男にして夙に醫科大學に入り、基礎醫學を研究し、曩に醫學博士の學位を授けられ、今や本邦に於ける解剖學の大家として、九州醫科大學教授として令名の嘖々たるものがある、蓋し當今の刀圭界滔々として營利を目的とするの時に當り、獨り氏が深遠なる學術の研究に任じて居らるのは斯界の爲に多とすべきである。

次男貞六郎君南洋に航して大和民族の新發展に努めつゝありと云ふ。

鑛業家　中江種藏君

近時僅に富を獲れば直に以て實業家又は成功者を謳はるゝ者が甚だ多い、然れ共一朝機運に投じて巨富を占め、或は商を店頭に營んで錙銖の利を爭ふものゝ如きは、縱令家裕かに財富むと雖も敢て之を稱揚するには足らぬ、何となれば彼等は單に有より有に歸する迄にして、未だ無より有を生ずるものにはあらざればなり、然るに荊棘荒蕪の山野より天下の至寶を採取して、以て國を富まし家を興したる中江種藏翁の如きは、眞に生産的國家的事業家として吾人は大に之を推稱せんとするものである。

氏は豐岡藩士河本幾右衛門氏の三男、幼少の頃同藩士中江晨吉氏の養子となり、維新の頃御料局生野銀山に入り傍ら同所の技師洋人某に就て鑛山學を研究し、後横濱分拆所技師となり、夫より古川市兵衛氏が足尾銅山の經營に付聘せられて同所に赴き、專ら之が經營施設を擔當したりしが、素より大志を抱ける氏は決して人の頤使に安ずるものではない、已に斯業に關する文明の學術を研究し、且つ多年經驗の結果は遂に獨立に決し、初めて作州國盛銅山の經營に着手せしが、氏の鑑識に違はず之に依つて莫大なる利益を得、夫より引續き肥後國久摩郡五木銅山を經營して此又豫想外なる好結果を得た、氏が現今の富は全く之によつて造成せられたるものゝ如く、現に紀州の飯盛銅山、伊豫の千原銅山を經營しつゝあり

蓋し鑛山業なるものは國家的最上の事業たるにも拘らず古來我國の弊風は該事業家を目するに一の山師となし、僥倖的の事業として動もすれば抑壓せんとするの風があつた、想ふに科學の進歩今日の如くならず爲に識なく明なく經驗なき儕が、單に一攫千金を夢想して之を營み忽ち蹉跌失敗に終るもの多かりしに因るべく、氏が今日の成功を以て單に幸運の人として看過せんとするものあれ共、そは未だ氏の眞相を知悉せざるものと云ふべく、氏の如きは實際に斯業の學識修養もあり、又經驗あり、加ふるに非凡なる手腕を有し、氏にして初めて今日あるを致したるもの、故に一介の幸運兒を以て目すべからざるは勿論、又輕々に之を模倣することも出來ぬ。

氏は又單に鑛山業而已ならず、夙に殖林に意を注ぎ土佐國大川郡に於て多年之が造成に努めつゝありしが、既に植込を了せる杉檜は五百萬本以上に迨ぶと云ふ、殊に吾人が氏に多とする所以のものは、氏が鄕里の發展に努力せらるゝの一事である、曩に寶林銀行が姑息なる經營は到底同地の金融機關として之を補ふに足らざるを慨し、之を買收して個人經營となし、今や同地に於ける最も信用ある銀行として地方金融の便を與へ、往年久斗村製絲工場擴産社が瀕死の境遇に陷るや之を買收し引續き經營の結果は、今や規模擴大、品質亦優等以て但馬蠶業の發達に貢獻せるが如きは、地方の爲め氏に負ふ處實に大なるものがある。

氏の經歷は概略以上の如く、縱令氏が動機と頭腦に於ては國家的觀念あらざりしにもせよ、其一生を通じて事業は何れも國家的にして世を裨益したるもの甚だ多く、國家的功勞者として之を尊敬すると共に縣下出身の事業家として最も成功の躍如たるものである。

燐寸製造の率先者　井上貞次郎君

燐寸は本邦に於ける重要物産として神戸港を通じて輸出せらるゝもの其價格壹千萬圓以上に達し、之によつて貧民の生活を助長せる社會的の貢獻亦甚だ多く、而も之が率先製造を開始せる井上貞次郎翁の功勞や、實に我産業史上特筆大書すべきものなりとす。

翁は養父郡石原村に生れ、少々大志を抱き徒らに山澤の間に獱獺と共に生を送るを最も腑甲斐なきことに思ひ、飄然として國を出で、東京に赴きしは維新前後の事に屬す、當時恰も横濱市が開港場となり其殷賑忽ち面目を一新するものあり時に某外國人が横濱に於て燐寸製造を開始せるものあるを見て、英敏なる氏は謂らく之れ卽ち日用品にして、輸出品たり豈外人の手に委すべけんやと、爰に於て種々の工面を爲して之の工場を視察し、稍々得る處あつて遂に東京下谷に於て自ら微々たる工場を設け、機械藥品其他に至つては、實に有らゆる工夫研究を凝らして殆ど獨創的に製造に着手せしは實に遠く明治七年の事なりき、其後苦辛經營せること數年稍々曙

光を認むるに至りしが、而も東京の地が工業の發展すべからざることを看取し、終に明治十三年斷然大阪に移ることゝなれり、爾來半宵夢暇なるの遑なく眞摯熱心なる經營の結果は遂に現今の成功を見るに至りしと共に、一面氏が阪神間の燐寸製造業を皷吹したるの功勞や甚だ多く、嘗て阪神同業組合長に擧げられ、今や大阪に於ける斯界の泰斗として其勢力は實に甚大なるものあり。

編者は本邦燐寸業の沿革とも稱すべき翁の經歷を審にせんものと一日翁の事務所たる南區の公益社に訪問せしが、質實なる翁は默して語らず、爰に之を詳說することを得ざるを以て遺憾となす。

第一銀行理事　熊谷辰太郎君

兵庫縣には銀行界に成功者が比較的多い、否銀行界には他に誇るべき好人物を出して居る、曰く松尾臣善、曰く原六郎曰く池田謙三、而して氏も亦其一人である、就中氏は其先祖である。

氏は出石藩士幼少にして神戸に來り、尋で東京に至りて學業に志し、慶應義塾の設立と同時に之に入り、明治五年を以て同塾を卒業す、折柄三井家と小野組の合資を以て銀行設立の議起り、氏も亦設立後の事務員として之に聘せられた、然るに當時は銀行事務に必須缺くべからざる簿記の素養がなく去ればとて之を授くる學校あるにあらず、漸く大藏省の傭外人シャンド氏に就て洋式帳簿を敎はつたが、未だ洋紙もなければ亦定木鉛筆とてもなく、辛うじて土佐製の西內紙に毛筆と物指を以て之を便じた抔の滑稽もあつたと言つて居らるゝ而して同六年七月貳百五拾萬圓の資本金を以て第一銀行を設立せらるゝに及び直に帳簿方として同行に就任せられ、明治八年大阪支店の創設と共に同地に轉じ其創設に力を致し間もなく同支店支配人に擧げられ、二十四年東京支店支配人となりしも、二十八年病の故を以て再び大阪に移り、其後同行が株式組織に變更せられたるに際し取締役に選まれ、現に京神各支店の監督を託され鎭西の探題として今日に迫んで居る、殊に明治十二年大阪銀行俱樂部を起し、同十二年手形交換所の設立に就ては其勞最も多く、其間大阪紡績、攝津製油、日本生命、大阪倉庫、大阪商船、大阪セメント等の各創立經營に與り、各重役に擧げられたりしも、主として銀行事業に重きを置き、他の事業は言はゞ諸種の關係上御付合に過ぎずして、切りに多きを貪り、不親切に流るゝが如きは氏の本意ではない、故に夫の一時の虛名を衒ひ徒に各種の事業に名籍を掲ぐる當世の實業家と同一に談ずることは出來ぬ。

抑々氏が紅顏にして銀行事務に從ひ、終始一貫一事一業三十有八年の間、乃ち一生の心血を第一銀行に灑ぎ、今や同行が本邦銀行界の泰斗とし發展の偉大なるものある所以のもの氏の功勞與つて又大なりと謂ふべきである。

第百銀行頭取　池田謙三君

氏は本邦經濟界の雄鎭で又模範的銀行家として令名嘖々たる人である、一日氏を第百銀行に訪ふた處が日本服で質素なる風采大卓子に向つて頻りに事務を執つて居られたが事務の繁激なことは二人の給仕が傳票の持運びに忙殺されて居るので判る、何れの傳票も金額は參拾萬五拾萬と云ふ多額のものであるが氏が之を取扱ふに敏活なことゝ言つたら實に驚く計り門外漢は一寸目が眩む程であるが、追は銀行界の巨人一寸見ても直に疑問の點を指摘するに驚かざるを得ない。

ナニ僕の如な小僧より先輩のことを充分に書き玉へ兵庫縣は隨分廣いから人物も澤山に居るであらう、僕の經歷は至つて單調なもので人間は保守主義で進取の氣象などはないよ、一體僕は變ることが嫌ひで先づ若い時からの住所でも初めて東京へ來て芝の塾に居つたが廢塾と共に此處を出て、次に西久保町の下宿に居つた處が其主人が夜逝を行つたので仕方なしに變つた、又次は佐久間町に居つたが今度は客付きの儘他人に讓つたが夫れでも僕は動かなかつた、夫れから横濱に行つて後當行に戻りてより、元の原氏の宅であつた現住所を無理に勸められて買ひ、夫れに住込んだ切り一の修繕も仕ないで今に及べる次第である。

と如何に氏が一事に固執する人であるかの一斑が解るであらう。

氏は出石町の人、幼少豐岡縣に出仕して居つたが、當時同地出身の先輩が田舍に居つても見込がないから、一番奮發して東京に來り驥足を伸ばして見ては怎ふかと段々慫慂して呉れる人があつたので、父母に乞ふて漂然東京に出て來た恰度明治九年の九月で氏が二十歳の時である、東京へ來ても學校へ這入ると云ふ裕福な譯でもないから、其人の處に食客をやつて居つたが、幼少から勝氣な質で人の世話になると云ふことは大の嫌ひである、何か自活の途を求めねばならぬと思ふて居る處へ、幸に地租改正の爲に東京府が澤山に人を採用すると云ふことで、之が試驗を受けて見た處が早速に及第したそこで漸く糊口の途に有り付いたが、決して此小役人が目的ではないから大に勉强を仕なければならぬと考へ、當時芝で牧恒三郎と云ふ人が漢學の塾を開いて居つたから、此處へ入學兼下宿を爲し傍ら勉强をして居つたが、當時は官尊民卑の風盛んな時代で世の青年に經濟の途抔を志すものは稀であつた、併し竊に考ふるに我國が開國進取と云ふけれども唯空理空論では到底實行は出來ない、怎ふしても其根蔕たる國の實力を培養しなければならぬ、去れば經濟の方面に從事してはと思ひしが、自ら商業を營むには肝腎の資本もない、又經驗もない其方の智識もない、故に何の方法なりとも其途に就て研究を行らなければならぬと考へ、幸ひ當時内務省の觀商局と云ふものがあつて是は研究するに最適所であると思つて、直樣往つて次長に面會し採用を迫つた處が、突然そんなことを云ふても仕方がないと一度は刎ね付けられたが色々と願つて遂に採用され、そこで大に研究を積んで居ると、横濱が頓に發展し來つて同地で種々の事業が起り、原六郎氏外有力者の合資で生絲賣買の組合が出來た、其處で原氏から之が經營者として入社せんことを勸められたが、尚研鑽したいからと固辭したけれども强ひての勸めでもあり、又實地に從事するのも却て宜しからうと思ひ遂に入社した譯であつた、然るに當時不馴れな外人對手の商買で、殊に銀貨制度の爲に却々困難を感じたが、色々と劃策を廻らして別に失敗もなく經營して居ると、明治十六年に原氏が正金銀行の頭取に就任されたそこで同氏は嘗て自ら創立したる第百銀行、及び我邦貯蓄銀行の濫觴たりし貯藏銀行の兩頭取を辭し、之が後任を氏に勸められた、併し容易に職を轉ずることを好まぬ人であるから之又固辭しられたけれども、原氏の勸めであるから終に已むを得ずして第百銀行に轉じ、爾來幾ど三十箇年終始一貫同行の經營に盡瘁して居られる次第である。

蓋し第百銀行は本邦銀行界のオーソリチーで其信用の博大なることゝ、營業の廣濶盛大なることに於て世間既に定評がある、而して同銀行が今日の發達を見るに至つたのは實に氏の劃策經營の賜であることは言ふ迄もなく、隨つて氏が實業界に於ける勢力信用は頗る偉大なるものである、人と爲り溫厚質直人格崇高又淡快にして飾らず、然かも意思は頗る堅確で、自信力の厚き人である、手腕あり識見高く、一度口を開けば滔々として内外古今を談論する所、其思想の該博なるに驚かざるを得ない、要するに氏が今日の地位と勢望とを有するに至つたのは卽ち其人物の常凡ならざるを知るべく、而して我經濟界に對する氏の功勞に至つては、永く沒却することが出來ぬと共に、又模範的バンカーとして有形無形に世を裨益したる事を多とせねばならぬ。

前大阪控訴院檢事長　大島貞敏君

兵庫縣に於ける法曹界の先輩大島貞敏氏は養父郡大養父村の出、家代々里正大里正を勤め同地方の名門として夙に里人の崇敬を受く、氏は明治維新の際奮然として東京に赴き、政府に召されて巡察となり、刑法治罪法の實施と同時に官を辭して代言人となり、明治十三四年頃始審裁判所判事に任ぜられ、後大阪、東京地方裁判所に歷任して、長崎控訴院檢事長に進められ、後亦大阪控訴院檢事長に轉じ其職に在るや前後三十餘年、我法律制度草創の際、改廢時に甚しかりし過度時代に在つて、能く其任に堪へ神聖なる法權を把持して、人類社會の秩序を擁護したるの功勞洵に大なるものあり、今や高蹈勇退して居を大阪天王寺に卜し、悠々として餘生を送りつつあるが如きは、蓋し終をよくせるものと謂つべし。

氏が多年の經歷談は必ずや方今腐敗墮落の法曹界を戒飭するに足るべき好話柄もあらんかと、一日其邸に訪問せしが折柄旅行中に係り遂に之を窺ふこと能はざりしは以て遺憾となす。

氏に一女三男あり、長女緣子は卽ち氷上郡出身名古屋高等學校學長法學士大島義脩氏の夫人にして、長男は令嗣工學士弘義君、次男は醫學士恒義君、三男は工學士重義君、兄弟四人相揃うて何れも有爲の材たるは、以て如何に氏が子女の教育に意を致されたるの敦きを察するに足るべく、一門の幸福亦羨むに堪へたり。

▲令嗣弘義君

氏は明治三十四年東京大學の出身にして、在學中電氣工學を專攻し、卒業直に遞信省技手に任ぜられしが、偶々大阪電燈會社の聘に應じ同社の技師となり、四十一年大阪電球會社の設立と共に之が技師長に轉じ、電燈會社の囑託技師として而も斯界の造詣最も深く、名古屋電燈の岡本櫻氏と共に少壯大家として大に將來を囑望せられつゝあり。

氏は道に素封の生れに背かず、氣品高尚にして一見貴公子の如く、溫厚にして謙遜、當今の生意氣なる學士氣質は、毫も氏によつて見ることを得ざるは大に吾人の意を得たるもの。

興信銀行頭取
田中經一郎君

紅木屋と云へば東京に於ける紳士旅館として其名を知られ從つて之が經營者たる翁は單に旅館の主人公否旅館の成功者として認められて居るが、之は未だ氏の全貌を窺ひ知らぬからである、氏の人格、氏の事業は曾に一旅館の主人公として看過すべきでない、而已ならず縣下出身實業家中の先輩である。

氏は但馬村岡領の素封家にして、其系圖によれば同地方草分けの名家である、代々藩の財政を掌り父を與次兵衛と云ひ氏は其長男、十八歳の時見習格となり、子年の擾動に從ひ維新後藩政の整理に任じ、二十二三歳の頃村岡物産會社を創立し、副區長又は戸長を命せられ鄉閭の尊信甚だ敦く、豐岡縣の廢藩と共に決然大阪に出でゝ物産柳行李の販路擴張に努め折柄五代友厚の知遇を受け、同氏の製藍事業に從ひ京都に於て染色業を開始したりしが、當時大倉藤田組が政府の用達を獨占して不當の利得を專斷するものあるを憤慨し、田中善右衛門氏と組合事業を以て陸軍用達を營みたり、而も意合はずして解散し、自ら東京に至り獨立して陸軍用達商を開始し、明治十九年紅木旅館を開業せり、日清戰役に際しては軍夫の徵發を受負ひ、兵庫運河會社の創立に力を致し、日露戰役中諸種の用達として其筋の信用最も厚く、三十八年栃木縣木戸澤銅山の經營に着手し、四十年興信銀行を創設して自ら社長となり、東京電燈會社の取締役に擧げられ、其他東京ホテルの經營に盡力する等東都の實業界に重きを爲して居られる、以上は單に氏が經歷の一斑にして其間惡戰苦鬪の事實甚だ多かりしも堅忍能く之に耐へ、遂に今日の光明を見るに至つたのである。

氏は自ら辛苦艱酸の經驗あるを以て、人に接しては親切にして同情あり、溫順にして高雅、今や大森に友華庵と稱する別莊を設らへ、歌を詠じ茶を沽し花卉盆栽を愛翫して老後の閑日月を送つて居られると云ふ、洵に敬慕すべき人である。

內務省大阪土木出張所長（勅任技師）大阪神戸築港顧問工學博士冲野忠雄君

內務省大阪土木出張所所長（勅任技師）大阪神戸築港顧問工學博士冲野忠雄君は技監に任せられ本年四月本省に榮轉せら

神谷肅一君

世に教育家を以て任じて居る人は其數甚だ鮮くない、然れども多くは親の金を以て學校に學び、或は文部省より海外に留學し、何々學士、何々博士として威張つて居る人計りである、恁る人々は各專門の學識には大に長ずる處ありとするも未だ苦楚辛酸の經驗なき世態人情を解せざる言はゞ活きた字引である、故に中には不品行を愧ぢざるものあれば、親に不孝な人もある、又祖先の展墓も碌に顧みないと云ふ風の先生もある、恁る人々によつて教育を受けたる學生が當今學究的に偏して汲常識であると批難せらるゝのも亦當然の事である畢竟學生が惡いのではなく之を教ゆる教育家の罪である、換言すれば恁る學者先生は學問を教ゆるの人にして眞の人間の教育家ではない、斯る弊風あるの時に當り神谷肅一翁の如きは吾人が最も尊敬すべき人間の教育家である。

氏は豐岡藩士にして冲野博士の令兄、嘗て鄉里に教鞭を執りつゝありしが、地方青年の東都に遊ぶもの往々誘惑に陷るものあるを慨し、之を矯正せんと志して自ら東都に移り多年地方青年の提撕に任じつゝあるの人、但馬出身の後進子弟が恐らく氏の門に倚らない者はないとの事である、又東京に於て但馬會を組織し同地出身の士が時に交情を溫むるの機關となし、自ら幹事として之に盡瘁せられつゝあるが如きは以て其勢を多とすべきと共に地方の先輩として最も尊敬すべき人である。

れたが嘗て大阪在任中氏を神戸貿合の邸に訪問した、二三年前に築かれた邸宅で敢て粗末と云ふのではないが、勅任官に

して富裕なる博士の邸宅としては質素なものである、何れの室を見ても床がない、さればとて西洋風のハイカラでもない襖には石版摺が張り塡めてある處などは、餘り日本式に趣味を持たない無雜作な人であることが解る、南に敏馬沖を俯瞰し、遠く紀淡海峽を一眸に收め、摩耶六甲の翠巒を負ふて得も云はれぬ景色、轉た詩趣を興さしめるものがある、氏が常に緻密にして複雜なる設計企畫に頭腦を惱ましたる疲勞を慰藉せらるゝには、寔に適恰の場所であらう。

談は偶々大阪築港問題に移る、著者は世間往々大阪築港は失敗なりと云ふ、果して然らば其原因奈邊に基くかを問ふ。

氏は曰く「別に工事上の失敗はない積りであるが畢竟大阪市人が此築港に過大の望みを囑し過ぎた結果であるまいか、築港さへやれば直に大艦巨舶が輻輳すると想ふて望みを囑し過ぎたからである、處が縱へ築港は出來ても大阪商人が歐米取引の商權を獲得仕ないことには船は着かぬ、開國以來歐米取引の商權は開港場としての神戸に掌握せられて、海外の取引と云へば總て神戸に於ける商館の手中に在つたので、神戸に便利な港がある以上は僅々十哩や二十哩の大阪へ此商權を侵略することは容易の業でない、夫れで現在大金を要した割合に利用の結果が少いから失敗だと云ふのであらう、併し竣工以來清韓貿易が重に同港に依つて著しく發展して來たのは全く築港の賜である、將來陸上の設備も完全に出來て大阪商人が奮發して來たら築港の功績が顯はれるであらう、然らば現在の設備では無暗に大金を投じて無用の長物を拵へた樣であるが、築港抔と云ふものは理想的の仕事であつて現在の效果而已に準じて、又現狀に依つて而已作るべきものではない、何れも百年二百年後の計畫であるから今直に失敗だ抔と云ふのは餘りに早計にして、如此は寧ろ大阪の人は自ら利用する能力に乏しき事を棚に擧げて、單に眼前の利害に拘泥して斯くは云ふのであらう云々

氏は豐岡藩士にして十六歲藩の貢進生として大學に入り、當時は官尊民卑の念尙旺んにして工業の如きに志すものを卑んだ時代である、然るに傭教師が講義中に立國の大本は工業にあると云はれたので、何の事はない工業を專門に修めたと言つて居られる、明治八年佛國に留學して工藝專門學校に入り、十三年に歸朝倉前の高工講師となり、後內務省に入つたので、其後信濃川、木曾川工事に從ひ、就中淀川改修工事は博士の心血を濺ぎたるものにして、特筆すべき大事業である百二十萬の大阪市民が永劫洪水の難を免かれ高枕で居られる樣になつたのは全く博士に負ふ所がある。

我國の工業界に於て深淵なる學理に精通し實際的手腕家として古市公威氏と共に土木工業のオーソリチーである、今や內務省は年々の洪水に鑑みる所あり土木局を擴張して大に治水法を講ずるに當り、氏の力に俟たざるべからざるものありとなし、技監に任ぜられた、蓋し今後の治水事業は博士の經綸に待つ處や鮮しとせず、人と爲り溫厚にして素朴、一見長者の風あり、先輩として尊敬すべき人である。

氏の夫人は同藩士醫學博士猪子止戈之助氏の令妹にして夙に貞淑の譽れ高く、嘗て愛國婦人會の大阪支部の幹事として斡旋至らざるなく世にも稀なる賢夫人である。

駒場農科大學教授

法學博士　和田垣謙三君

學者とか博士とか云ふものは學問はあつても事理に迂く、偏狹ならざれば學究的にして唯だ權勢に媚び官邊に屈する、所謂曲學阿世の儕が甚だ多い、現代に於て、獨り學界に異彩あるものは和田垣謙三君である。

編者一日博士の謦咳に接して其高見を叩くべく、小石川小日向臺町の邸に訪ふ、導かれて書齋に通れば大兵肥滿にして快偉なる博士は、安樂椅子に身を橫たへ、シガーを燻らしつつ曰く「ヤー昨日は失敬しました、ナニ吾輩の月旦をすると云ふのか、ドーかお手軟かに」抔と淡快にして洒落なる一見舊知の如く襟懷を披いた態度は、既に敬服の念を禁じ得ない

▲氏の經歷談

吾輩の經歷か、左樣吾輩は豐岡藩士、和田垣讓の二男で、萬延元年六月生れである、幼少藩儒久保田精一の稽古堂(寶林義塾)に入り、漢籍を修めて居つたが、久保田先生は開化黨で頻りに洋學を遣れと慫慂せられて、菊地武文と云ふ醫師に就て洋學を始めた、すると吾輩の叔父に岩崎と云ふ人があつた、此人は故勝安房伯の乾兒で文久年間伯に隨行して洋行した、歸朝後西洋の談話を聞かされて大に感心して居つた處が、恰も明治五年に濱尾氏が豐岡に歸省して、東京に出て來いと勸められるので、吾輩と猪子、河本と三名は、濱尾氏に隨從して東京に來たのである、それから本鄕の進文舍に入つて專ら獨逸學を研究した彼の森鷗外博士とは當時の同窓である、翌明治六年に獨逸語の入學試驗を受けて、外國語學校に入り、直に同校を卒業した、其時分には學年制に依らず成績が好ければ學級を飛越すのだから、隨て卒業も早かつたのである。

其後大學南校に入り獨逸學を研め、兼ねて英學をも修めた、文學部では終始級長で、明治十三年七月卒業して文學士の稱號を受けたが、我邦に於ける文學士稱號は吾輩がイの一番である、同年十一月留學を拜命して英國劍橋大學、獨逸の伯林大學に學び、明治十七年歸朝して法科大學教授を命ぜられ、農科を兼勤したのである、明治二十一年井上文部大臣の時に東京商業學校長を囑託せられ、翌二十四年法學博士の學位を受けた、吾輩は文科出身であるが其當時經濟學は文學部に屬して居つたが、後法科の政治部に移されたからである。夫れより渡邊洪基の大學總長時代に、大學書記官を兼ね、大學評議員、內閣の文官試驗局書記官をも兼任して居つた、此時分には數箇所の兼務があつて却々多忙で遣り切れぬ、常に馬に乘つて廻つて居たのである、現今では農科大學と早稻田大學、女子商業學校位で其他は顧問と云ふ樣なことだが、矢張忙しい外國から

も來て吳れと云ふし、農商務省からも出よと云はれるが何れも斷つて極く眞面目に遣つて居るが、マダ年が若いので、何時何處に飛出すかも知れぬ。

吾輩の著述が、別に多くはないが辭書類が重である、英和と和英辭書は五十何版迄賣れた、其他世界商業史要、青年諸君、スツレーリーブス、一名落葉籠位である」、云々

氏は資性淡泊、才氣縱橫、氣骨稜々たり、人に接して墻壁を措かず、大學生が往々學究的の弊に陷り易く、世態に遠ざかり所謂活社會の用を爲さゞる仙人的の學者に偏するを慨し常に「裏店の實狀を解せざるものは共に經濟を論ずるに足らず」と戒め、學生をして實際的方面の研究に怠りなからしめ其講堂に立つや、スミスの經濟論を講ずるかと思へば、直に淺草の話となり、主として活社會の狀態を引例考證し、一年間氏の講義を聽くもの「ノウト」に記すは僅々三十頁に滿たないと云ふことである。

氏が亦異彩ある教授として廣く世間に謠はるゝもの、隨て奇行美談も亦多し、早稻田の講筵に興味湧き來るや一段音聲を張揚げて叫ぶらく「穴八幡も照覽あれ」と滿堂失笑す、而も先生甚だ眞面目である、亦嘗て青山御所觀菊の拜觀劵を講堂高く打振りて「菊を觀に行かんよりは未來の國民を教育せんがために來れり」と得意に叫び立てたる無邪氣さは、今尙帝

京都帝國大學教授　醫學博士　猪子止戈之助君

京都大學の教授として、本邦外科醫界の泰斗として關西に於ける刀圭界を重からしめて居る、猪子博士を訪問した、氏曰く

▲博士の親切

縣下の人物を蒐めて互に紹介すると云ふことはよい企てゞあるが、併し夫れ

大及び早大の學生が敬愛して措かざる處である。

氏は又至極金錢に淡く其負債は有名ではあるが、僅々貳萬圓內外に過ぎぬ、而も氏の收入は之を償ふに餘裕ありと雖も自ら得る處は之を人に與へて吝まない、故に往々債鬼の爲に差押の災禍に遭ふも平然たり、執達吏を迎へて謠曲を颯々と呻つて居る、風馬牛敢て我不關焉、以て其人物の偉にして異彩ある親分的博士の稱ある所以である。

由來豐岡は遠藤義齊、久保精一氏の訓陶により、實際を尊び商業家は勿論官吏學者も亦金錢に吝なるに拘らず、氏の如きは同地出身の一異材である、而して氏は斯る放膽豪宕なる一面に於て、其學事には洵に細心にして修養深く、天稟の才は幼少鄕閭に在りて神童の稱あり、學業は常に優等の成績を占めたりしは、今尙同僚の推稱して措かざる所である。

氏が學識厚く造詣深きは世夙に定評あり、殊に其英文韻文に巧なるに至つては吾國のオーソリチーと稱せられ、辭書の編纂に依りて學界に貢獻せられたる功績は實に偉大なるものがある、卷頭揭ぐる家康家訓の飜譯の如きは實に內外に喧傳せらるゝ處である。

を書くには充分に注意しないと、所論棺を蓋ふて論定まるで、人は死んで後でなければ斷定は出來ない、例令ば彼の高野孟矩と云ふ人の如きは、嘗て臺灣の高等法院長を勤めて居つた時代には、法曹界の硬骨漢として典型的の人物の如に謠はれたが、現在の境遇は實に慘めなものではないか、若し彼の全盛時代に彼を書いて、今日になつて見れば妙なものである、此れと反對に後藤新平君は衛生局に居つた時代に、長與博士の知遇を受けて居つたが、一朝相馬事件で入牢した、其時長與博士が非常に彼の爲めに心配して、後藤はよく行けば非凡な人物になるが、惡く行けば大變な惡黨になる男であるから、何れ此の後は自暴自棄で始末の付かぬ人物になるであらう困つたものであると、言つて居られる又世間も一寸見縊つて居つたが、幸ひに再び兒玉大將の知遇を受け、遂に今日では變勇ではあるが、太した勢ひではないか、如斯今日の成功者は明日の失敗者となり、轗軻不遇の人が非常の人物になることもある、之れは神でない以上は免れないことで、又推測の付くものでないから、君も其邊は能く注意して唯現在の有りの儘を紹介するのは互に參考になつてよいが、なるべく成功者抔と云ふことは、よほど確な人でなければ書かなやうにするがよからう。

と最も親切に訓戒を加へられた、這は編者が厚く感謝する所である。

博士は豐岡藩士、其祖先は織田信長に仕へた豪傑で、後ち德川氏の世となるに迨び、京極家の臣となり、代々同藩の家老職を勤め、先考淸氏は維新の當時、藩論を統一し、竝に藩政改革と後進の提撕に最も力を竭し、舊祿僅に一萬五千石の京極家が、現今縣下大名華族中の富者を以て、目せられて居るのは、全く當時改革の宜しきを得た所以にして、氏の功勞與つて力あるや勿論である。

博士は其長子萬延元年の生にして、幼少の頃藩校寶林義塾に學び、明治の初年濱尾男爵に慫慂せられて、和田垣、河本博士と共に東京に出で、明治六年外國語學校に入つて獨逸學を修め、後ち大學東校に入り（醫科大學）同十五年卒業して直に京都醫學校の敎諭に任せられ、二十二年第三高等中學敎授を兼ね、二十五年歐洲に留學を命せられ、三十二年醫學博士の學位を受け、三十三年京都大學の設立と共に同敎授に任せられ外科部長として斯界の爲に貢獻せられたること多く、令名嘖々今日に迨んで居る。

士は迫に名門に生れた人程あつて、淸軀鶴の如く溫和なる中に、何となく自然に具はる威嚴があつて、不言の中に人をして崇敬の念に堪へざらしむるものがある。

氏の令妹は卽ち冲野博士の夫人にして、良夫人の譽れ高く令弟吉人氏は醫科大學の出身刀圭界の麒麟と稱せられ、纔に二十五歲にして醫學博士の學位を受け、次で歐洲に留學を命せられ、斯界の明星として將來を囑望せられたりしが、不幸病魔に冒され、靑雲の志を抱いて客死せられたるは獨り氏の不幸を哀しむ而已ならず、人類社會の一大損害として哀措に堪へざる處である。

醫學博士 河本重次郎君

東京帝國大學教授
眼科部長

本邦に於ける眼科醫界の先輩泰斗として多年大學教授の任にありて、聲名を擅にせる、醫學博士河本重次郎氏は、豐岡藩士河本齋助翁の長男にして、鑛山業の成功者中江種藏氏の愛甥である、明治四年和田垣謙三、猪子止戈之助博士と共に東京に至り、外國語學校に入りて獨逸學を修め、大學豫備科を經て大學東校に入り(後の醫科大學)明治十六年に業を卒へて醫學士の學位を受け、同十八年文部省より擢でられて海外に留學し、獨佛の大學に入つて眼科の蘊奥を極め、同二十二年歸朝直に大學教授に任ぜられ、二十四年醫學博士の學位を受け、後眼科部長として引續き今日に迄んで居る、氏が學術に忠にして且精力の絶倫なる、同教授に任ぜられて以來二十餘年一日の如く倦なく斃勤されたことはないやうである、而して爾來孜々として倦怠なく斯界の研究に腐心されつゝありしが自ら種々の疑問も湧出し、且多年研究の結果は泰西の學術界に於て親しく其蘊蓄を交換せんと欲し、明治四十年自費を以て歐米に漫遊し、更に研鑽して齎し歸る處のもの甚だ多く、其熱心と忠實なる斯界の爲に大に感謝すべきものがある氏は又眞に豐岡の學風を繼承したるもの叨りに虚榮を衒はず只管實際を尊び、從つて其富は已に巨萬に達し、長者博士の綽名がある、世人は往々氏が内職の賜として之を排するものあれども、吾人の想像によれば到底内職位を以て今日の富を獲べきものにはあらず、要するに氏は父齋助翁叔父種藏氏と共に先天的貨殖の才を有し、他の方面に因つて之を獲たるもの敢て之を排すべきではない、故に氏をして若し實業界の人たらしめば、蓋し偉大なる發展を致したであらう。

性淡快洒脱、人に接しては亳も城府を設けず、亦能く談じ克く語り、奇警縱横對者をして謂ふべからざる温た味を感せしむ。

齒科醫 西村輔三君

豐岡は兵庫縣下に於ける人物の淵藪にして、殊に教育界と刀圭界に在つては者宿森然として光彩を青史に垂れんとす、就中濱尾久保田の兩文相に於ける、河本、和田垣、猪子、岡本の諸博士が大學教授として、高等學校長吉村寅太郎、高女教授下村三四吉氏の如き、外にしては土木工學の大家として博士沖野忠雄氏あり、若し夫れ本邦に於ける齒科醫の元祖西村輔三氏を出したるに至つては以て同地の誇りとするに足るべし。

氏は城崎郡今森村の名門西村氏に生れ、幼にして大志あり藩の重役故岩崎豐氏の食客となる(岩崎氏は文久年間歐米使節勝安房氏の一行に加り、泰西の文物を視察して歸朝後夙に洋學を唱へたるの人同藩に於ける進歩流の一人なりき)其後同氏に隨ひ江戸に出で、間もなく洋學に志して横濱に抵り、米人ジイエン、ベンリユド氏に就て之を學び、後又同國人エチレー、ベブレヂーの學校に入りしが、エチレー氏は氏の才を愛し歸國に際して氏を伴ひ、爰に於て米國に航し、エチレー氏の薦によつて齒科醫學の研究に從事し、同國の大家、ゼョンテヒールに就て之を學び、明治十年歸朝更に横濱に於てエッチマレソン氏に倚つて研鑽し、其後東京竹川町に於て初めて之を開業したりしが、同十三年頃大阪府知事西村捨三氏竝に大阪日報の小室忍氏等の聘に應じて大阪に來り、同新聞社の樓上に於て初めて之が治療を施せしに其斬新なる技術を見て、强ひて大阪に開業せられんことを同地の有力者によつて懇懃せられ、其請を容れて同年大阪に轉じ、爾來益々世の歡迎する處となり、遂に本邦に於ける斯界の泰斗として令名嘖々たるに至れり。

蓋し本邦古來の弊風は齒科醫を目するに、齒抜きと稱し一種の香具師視したりしは、一は完全なる技術を有する者なく當業者が品性の劣等なりしに因ることは云へ、誠に謂れなき次第にてありき、氏は竊に之を憤慨し、自ら品性の維持に努むると共に當業者を戒飭し、只管斯界の向上進歩を絶叫し、又政府當局者が之を視ること甚だ冷淡にして未だ官設專門學校あるにあらず、大學に一の講座あるにあらず、全然繼子扱ひの觀あり、爰に於てか大に之を憤慨となし、斯界進歩の遲緩

なる一は當局者の責任にして、文明の缺陷たることを指摘し曩に當業者を率ゐて之を衆議院に建議し、或は文部大臣を初め當局を訪問して、之が設置を促したるの結果は、初めて文部省も之を覺るに至りしが如きは、偏に氏が熱誠指導の功勞に歸すべく洵に斯界進歩の恩人と謂つべきなり。

氏は又單に一齒科醫たるに止らず、往年大阪市が虎列刺病の蔓延甚しく、恰も傳染病患者の巢窟たるの觀あり、爲に市の發展を阻害する而已ならず、文明國の一大恥辱にして又至重なる人命を傷ふの損害實に見るに忍びざるものありき、此時に當り氏は奮然として上水道竝に下水道の設備を唱へ、自ら進んで市會議員となり、之を市會に提議したりしが、時の府知事渡邊昇氏は當時大阪築港を企畫する處あり、爲に同知事を初め西區南區民等より之が反對を唱へ、遂に大阪市空前の一問題を惹起するに至れり、而も熱心なる氏は水道派の急先鋒となつて物の輕重緩急を論じ、水道布設の忽にすべからざるを市會に絶叫すると共に、市内各所に演舌すること數十回に及びしが、終に市民の覺醒する處となり、之が布設を見るに至りしと云ふ、以て氏が如何に公に忠なるものあるを察するに足るべし。

京都醫科大學法醫科擔任教授

醫學博士　岡本梁松君

東京女子師範學校教授

下村三四吉君

氏は又齒科醫界の一大恩人たる而已ならず醫術開業試驗の開始と共に之が委員に擧げられ、竝に衛生會幹事として斯界に盡瘁せられたるの功勞甚だ多く、明治二十八年以特旨正七位に叙せられ、累陞して現に正六位たり、蓋し在野の一開業醫としては氏を以て叙位の嚆矢となす。

抑々氏が今日ある維新草創の時に當りて、家に豊なる學資あるにあらず、各所に漂浪して苦辛慘憺、而も當時邦人に擯斥視せられつゝありし職業を以て自ら改革向上の天使となり終始一貫斯界の爲に貢獻すると共に人類の幸福を寄與せられたるの功勞實に偉大なるものあり、人と爲り温厚篤實眞に古武士の風を存し、其恩人故岩崎氏の末路に力を致すと共に、遺族を補翼し、現に竹窓を奉祀して怠らざるに至つては、其温情言外に溢れ、思はず感涙に堪へざらしむるが如きは、以て氏が人格の一斑を窺ふに足るべし。

息好雄君は米國ナスビル大學を終へてドクトルの學位を受け、現に副院長たり、次男輔好君三男三郎君共に歐米在學中に係る。

世に殺傷事件が起るに於ては、直に裁判所は自他殺の別又は犯人の精神狀態に就て之が鑑定を各專門家に囑託する、之れ即ち法醫思想の必要なる所以にして、之が鑑定の結果は唯一の斷罪資料となるものなるが故に、人權の擁護上其責任や重且最も大なるものである、然らば各醫師の職に在るものは各科を通じて必ずしも、之が任務を全うするに足るべき蘊蓄は缺くべからざるものである、而已ならず法律は當然之を規定して其囑託を受けたるものは故なく拒むことを許さない義務を命じて居るにも拘らず、我國醫學教育の缺陷は法醫教育を等閑に附し、從來僅に不備を補つて居つたものは、川路警視總監が警視醫學校の設立あるに過ぎざりしが、漸く明治二十二三年頃東大の一部に初めて法醫の講座を設くることゝなり、又四十年頃より京都大學にも之が專門講座を設けて完全なる法醫教育を施すに至りしは醫學教育の一進歩として人意を強うするに足るべく、而して此法醫教育を以て任ずるものは宜しく一般の醫學に通じ、加ふるに法律思想のあるにあらざれば能く之が任務を完うすることは出來ぬ、偖る至大至重至難の任務を負うて京都大學の教壇を擔任しつゝある人は則ち縣下出身の醫學博士岡本梁松氏である。

氏は豊岡藩士下村家に生れ、出でゝ名佐村の岡本氏を嗣ぐ明治二十二年東大の出身にして、二十四年東京大學の教授となり、三十二年法醫學研究の爲め歐洲に留學を命せられ、歸朝後京都大學の教授に任せられ、三十七年醫學博士の學位を受け、明治四十年同大學に法醫講座の設置と共に、之が擔任教授を命せられ、大阪、京都裁判所の斷訟に關する醫學の嘱託を兼ねて居らるゝ、人と爲は温順寛和、素朴なることは田舍の一僧翁の如く、常に古洋服に草履穿きと云ふ風采、嘗て或友人を訪問して御無心濃と間違へられ門前拂ひを喰つたこともあるが、其蘊蓄に至つては本邦に於ける法醫學の泰斗として夙に斯界の崇敬を受けて居らるゝ。

▲令弟下村三四吉君

氏は岡本博士の令弟にして、嘗て東京大學文學專科を卒業し、國史の造詣深く、其後高等師範學校、山梨縣中學教諭に任せられ現に東京女子師範學校の教授として聲聞あり、編者氏は未だに會接したることなきを以て爰に委曲を紹介することを能はざるを遺憾とす。

法學博士　毛戸勝元君

京都帝國大學教授

一六八

但馬で小代の名物は「油屋の牛」と毛戸博士であることは、里人の常に誇りとする處である、然り毛戸博士は現に京大法科大學教授として商法を擔當し同法科に於ける非上、織田博士の國法、岡村博士の民法、千賀博士の國際公法と共に、高根博士去つて以來の商法教壇は、今や博士毛戸氏が獨り學名を擅にして居るの觀がある。

編者一日氏を櫻町の寓居に訪ふ、年齒少壯氣銳にして、快活曰く但馬も鐵道が貫通して大分便利になつたが併し此便利を地方の發達に資すれば結構であるが、却て都會の方へ足を向けること計りに利用しては自然華美奢侈の風潮に侵され、但馬の富は從つて減じて行くから之は大に戒飭しなければならぬ、元來但馬で見るべきものは蠶業丈である、或人は養蠶亡國と言つたが、極端な言葉の樣ではあるが又一面の眞理はある、養蠶は毎戸少しづゝ副業とすれば宜しいが、專業に遣れば繭を收獲したときには之を賣つて一時に金が收るから怎うしても贅澤に費消する、それが習慣になるから奢侈に流れると言ふのである、故に養蠶の專業と云ふことよりは可成副業に奬勵する方がよからうと思はれる、何分現今の經濟界は浮華輕佻にして、到る處電鐵、電話、電燈と云ふ如き事業が多く計畫せられる樣であるが、成程之は惡い事では無い、併しながら早く云へば澤山借金を負ふた者が、衣服や邸宅を立派にする樣なもので、之は間接の事業であるから、それよりも怎うしたなれば喰ふて行けると云ふ生產的の事業を起して實力を培養し、國債の償還を早くすることが急務であらうと思はれる云々。

氏は明治三十一年赤門の出身、直に東大法科の助敎授となり、同三十三年京大法科に轉じ、三十五年文部省より留學生として獨、英、國の大學に入り、同三十八年四月歸朝して京大敎授に任せられ、翌三十九年法學博士の學位を授與せられて今日に迫んで居る。

幼少の頃より隨分苦學をした人であるから從つて世態人情にも比較的能く通じて居られる、實際の活用を重んずる商法の解釋を以て任ずる學者としては蓋し適任であらう、年齒少壯眞の書生的に世を處して居られる處は、氏が大なる所以にして最も前途を囑望すべき人である。

藥學博士　池口慶三君

內務省技師警視廳衛生試驗所長

衛生制度の完備せると然らざるとは、以て國の文野を卜するに足るもので、人の生命を醫術に俟つのは抑々の末である先以て衛生思想の發達と、衛生制度設備の完全を期し、而して病害を未前に防遏し之を避けしむるに努めたならば、人類に至大の幸福を助長せしむることを得るは今更爰に呶々する迄もない、然るに維新以來本邦の醫術は駸々として進み今や殆ど世界に對して遜色なきに至りしと雖も、一般國民の衛生思想と、衛生の制度は之に伴はざるの感あらしめたりしが近時漸く諸大家の輩出と共に大に面目を革むるに至りしは國家の爲に慶祝の至りである、而して多年其職に在る池口慶三氏の功勞亦沒すべからざるものがある。

氏は但馬村岡町の生れ、帝國大學に入つて藥學を專攻し、明治二十三年業を卒へ、其後長崎、千葉縣の各醫學專門學校の敎授に歷任し、同三十年內務省技師、警視廳衛生試驗所長として本邦衛生制度の發達に貢獻せること甚だ多く以て今日に迫んで居る、其間明治四十年伯林に開催せる萬國衛生會議員として之に參列し、歸朝後藥學博士の學位を授けられ、又特許局審查官をも兼ねて居らるゝ、其著有機化學、無機化學講本、日本藥局通解、飮食物鑑定法、裁判化學等は世已に定評あり、以て其蘊蓄の深きを窺ふことが出來る、人と爲り溫厚にして謙遜、藥學界の泰斗丹波博士に亞で大に前途を囑望せられて居る。

商務官　田原豐君

一六九

慨ながら未だ低位たるを脫する能はず、而して此海外貿易の發展に資すべき各重要地に於ける輸出入の趨勢を調查し、風

國家財政の根本義たる海外貿易は最近十年間に於て著しく進步發展を見るも、之を歐米列强の增加率に比して我邦は遺

俗習慣其他の狀態を精探すると共に、貿易業者を指導する職責を有するものは實に偶事の一分科なりき、然れども元來領事官は交際官として行政官として將た在留邦人の保護者として、傍ら貿易事務官的職務を有したりしも、斯くては其孰れにか缺陷を生じ、到底滿足なる效果を見るべからず、殊に領事は往々官に偏し實務的ならざる嫌あり、爰に於て本年之が專任に實務的才能を有する人材を選拔して商務官に任用し海外に派遣して、貿易に關する調査に從事せしむべき官制を發布したるは誠に機宜に適せる處置と云ふべし。

氏は商務官設置せらるゝや直に拔擢せられ勅任商務官として倫敦駐在を命せられたり、氏は海外の事情に精通し多年實務上の經驗と學識共に高く、氏に依りて我貿易業者は敏速精細なる調査資料を供せられ、機敏に商機を捕捉し得べく、必ずや斯界に貢獻する處大なるものあるを疑はず。

豐前炭鑛株式會社長　南艇三君

氏は城崎郡の人、明治二十八年法科大學を卒へ、直に三菱に入り、倫敦、香港、兩支店並に長崎造船所等に在りて敏腕の聞わあり、同四十一年上海支店長として益々其才能を認識せられ、後ち東京倉庫會社支配人神戸支店長たりしが、今回商務官に拔擢せらる、年卽三十有六、最も未來に富む壯年後に於ける活動と成功とは偉大なるものあるべく、本編中最も將來を囑望すべき人材たり。

但馬出身の中に於て最も狷介不屈の人物を索むれば南艇三君であらう、氏は幼にして孤となり家亦甚だ富まず、餘儀なく知る邊の磯を便つて各所に漂浪し、幾度か中折せんとして而も折れず、單に一偏の元氣を恃して成育し、爰に官吏ともなれば、新聞記者ともなり、將た實業家ともなつて、所謂世の苦楚辛酸は悉く嘗め盡した人であるから、從つて事理に明晰常識に富み、押しても突いてもいかぬと云ふ風の人である。

氏は幼少父母を喪ひ、止むなく親族の關係より京都市鄕山氏の食客となり、又紀伊の三浦某氏に寄寓して漸く成長するに迨び、明治五年初めて東京に往き、糊口の途を索めんと稅關官吏となり、地租改正局に入り、同十一年愛媛縣屬に任せられたが性傲頑なる氏は上官に理窟を竝べて遂に職を免せられ、後東京每日新聞社竝に進修舍に入り居ること四年、同十九年再び石川縣の收稅長に任せられ、兵庫、宮崎に歷任して後鑛山監督署長となり福岡縣に轉じたりしが、古川鑛業會社に聘せられ官を辭して會社に入り、足尾銅山を擔任し鑛毒事

東京精米會社長　若宮正音君

氏は城崎郡豐岡の正樂寺に生れたれども僧たるを欲せず、池田先生の門に入りて漢籍を修め、後ち小學校に敎鞭を執り或は和歌山縣に新聞記者となり、後ち東京に出でゝ遞信省に入り、後藤遞信大臣の知遇を得て其秘書官に任せられ、更に農商務省に轉じ農商局長に補せられたりしが、故あつて實業界に投じ各種の事業會社に關係して、現に東京精米會社竝に深川倉庫會社の社長たり。

吾人は未だ氏の人物に就て多くを知らず、唯世間氏を論ずる者の說を聞くに曰く、氏は僞善の人なり、甚だ仁義に乏しと評する者あり、蓋し氏の甥に兼平某と云ふ者あり、幼にして父母を喪ひ、身を寄すべき所なく、終に伊丹の大塚家に食客となりて現に此世の無常を嘆じつゝあり、然るに氏は今日の地位に在るに拘らず此甥を見ること路傍の石を見るが如く

件に付ては暴徒と鬪つて大に蟠勇を振つたることは世人の記憶せる處、四十二年會社を辭し其後閑散に餘生を送らんとせしも、折柄豐前炭鑛會社の紊亂となり氏の力に竢たざるべからずとなし、其後之が社長として刷新改革に任じつゝあり、今尙但馬門閥の氣風と共に官臭を脫せず、一見して如何にも傲慢不遜の樣ではあるが、併し追に苦勞人親しく對語するに及んで一種の溫た味が生じて來る、輪郭も亦巨い處がある。

殆ど顧みざるなりと、而して世人が氏に對する論評の如き、多くは此に歸因するに似たり、然れども此一事を以て氏の全豹を推斷せんとするが如きは少しく早計たるを免かれざるべし、余等は幸ひに衆評の當らざらんことを祈る。

鴻池銀行　山田確次君

銀行事務の如き計數的綿密な算盤玉を弄する仕事は年を經て來ると厭やになるか、近來何れの銀行會社を見ても凡て人物が新らしくなり、大抵ハイカラ男の頭をチックで綺麗に分けた、生へ下りを高く剃り上げた人が多く餘り年老いた人を見受けない樣である、所が鴻池銀行に行くと追に舊家の俤を存して而かも藥鑵頭の老人が卓を共にして並んで居るが一面鴻池銀行の貫名が添はれるやうに思はれる、則ち一は同家の元老蘆田翁にして、他の一人は山田確次君である、氏は蘆田翁よりは若いが頭は大分禿げて居るので餘程老けて見える。

氏は出石藩に生れ明治九年十八歲にして櫻井勉氏の食客となりて東京に赴き、同十年愛媛縣の地租改正に從事し、後ち內務省山林局に入り、更に大藏省に轉じ銀行局に勤務したが明治二十四年又會計檢査院に轉じて二十九年迄勤續した、然るに偶々京都起業銀行の創立に際し招聘に應じ專務取締役となつたのが抑々實業界に下つた初めである、後又故あつて三十四銀行に頭取小山健三氏あり、以て關西の金融界に推重せらるゝと共に、同行には主事一瀨粂吉氏在り、小山翁と相俟つて倍々同銀行の信用を重くする所以なり、氏は少壯にして俊才、而も銀行家として最も將來を嘱望せらるゝ一人者なり。

氏は舊出石藩の名家磯野家に生れ、幼にして豐岡藩の一瀨家を襲ぐ、長じて一橋高等商業に入り卒へて文部省の腦官となれり、氏が理財に長じ計數に秀で明晰なる才能は永く官界に在るを許さず、明治三十二年三十四銀行に入り檢査課長となり、庶務課長を兼ぬ、後ち天滿支店長となり難喰場支店を兼攝せしが、俊秀なる才能は幾何もなく擢んでられて本店副引課長となれり、然るに三十四銀行にては當時臺灣支店の業務發展して人材を要するの切なるものあり、爰に於て氏は臺灣總支配人臺北支店長として其任に就き、同地に留ること前後六年斯くて臺灣支店の業務愈々發展するに迫び、其手腕は認識せられて、昨年六月更に本店主事に榮轉せり。

兵庫縣人物史　一瀨粂吉君

十八年鴻池銀行に入り今日に迫んで最も精勤に業務の發展に努力して居られる。

編者が同行に氏を訪問すると、奥床しい垂簾の應接室に導かれ、流石に名家の銀行たることを偲ばしむると共に氏も又却々親切に愛想の好い人である、元來が士族氣質と多年官界にあつたのであるから、辭禮も正しく態度も上品で何處か侵し難い威望がある、餘り系統的學問はないが多年の經驗と着實は恰好の銀行家で、頭の禿げた所に一層貫名を認められる

三十四銀行主事　一瀨粂吉君

氏や年齒少壯にして春秋尙高く前途有爲の材たるは勿論、爲人溫良にして態度典雅、人に接して愛嬌あり、氣品高雅にして毫も偏幅を飾らず、其人格と手腕は共に異數にして、流石に實業界の典型小山翁の下に在りて翁が會心の士として俟つものある所以なり。

氏は多年臺灣に在勤して臺灣通の一人なり、其臺灣談中の趣味ある一二梗概を紹介すれば。

▲氏の臺灣談の一部

氏曰く臺灣の人口凡そ三百十餘萬人內三百餘萬人は支那民族にして六萬餘人は內地人なり、此の外生蕃十一二萬人內野蠻なるもの約三萬人あり、支那民族は一般に金錢を尊ぶ念慮深く、金の前には如何なる犧牲を拂ふも顧みざる風あり、概して儉約の弊ありて其十中八九は財產爭に係る、商人は儲殊の利に銳く勞働者は能く勞苦に堪ゆ同じく殖民地と云ふも彼の印度地方に比し文明の度遙に優れり、故を以て現下臺灣人に我商法を適用すること決して難しとせず合股と稱する會社の如きものあり、滙票と稱し手形の如きものあり、電信符號にはナンバーコードを用ゆるが如き、或は貨物保險と云ひ、其進步の度を察す

るに足るべし、又民法の如きも親族篇を除きては之を適用すること敢て差支になかるべし云々。

銀行は中央金融機關たる臺灣銀行を主とし三十四銀行支店、臺灣貯蓄銀行、彰化銀行、嘉義銀行、臺灣商工銀行あり其他日本銀行及び日本勸業銀行代理店あり、外國銀行としては香港上海銀行及びインターナショナル銀行代理店あり此外銀行に準ずる金融機關としては資本金拾萬圓以下を以て設立せる公司凡そ七八あり。

政府の歳計は國庫參千萬圓、地方稅六百萬圓にして、三十八年以來全く獨立せり、領臺後十年にして臺灣の財政が母國の繫累を脱して獨立したるは同島財政上の一大成效たり、母國は曩に關稅統一の名の下に臺灣より一部の稅金を組入れ、今や又砂糖消費稅を臺灣より奪はんとす、誰か其發達否轉變の急速なるに驚かざるものぞ、云々

要するに今日の臺灣は最良なる殖民政策の下に統治宜しきを得、萬般の施設其他交通、産業、商業等、日に月に駸々乎として進歩發達を爲し實に南洋に於ける一大寶庫たり、蓋し今日までの速度を以て推せば將來非常なる程度に達するの日あらんか、世の臺灣を知ると知らざる人とに論なし注意研究すること最も必要なるべし、云々

大阪朝報主幹　小田垣哲二郎君

氏は但馬養父郡の名門に出づ、夙に操觚界に入り後ち大阪新報に在りて重きを爲す、傍ら政治界に投じ政友會の爲に盡す處あり、而して氏は筆の人と云ふよりは寧ろ經營の才に長じ腕の人として知らる、大阪新報の一時萎靡振はず却て後進大阪時事新報の聲價に壓せられ、殆ど大阪新報の存在すら忘れられんとするに至り經營甚だ困難を極む、茲に於て氏は大に奮起して得意の經營的手腕を振ひ、苦辛慘憺たる裡に漸く聲名を維持し來りしが、後ち前の全權公使加藤恒忠氏が入つて新報社長となるや、氏と主義を異にして屢々衝突を繰返したりと云ふ。

四十三年新報は岩下清周一派の經營となるに迨び、氏は新に資本金拾萬圓を以て株式會社大阪朝報を發企し、之を主宰經營するに至れり、大阪に於ける新聞としては朝日、毎日の外に大阪時事新報あり、大阪新報、大阪日報あり此間に處して日刊新聞を經營する固より至難事たるは勿論、到底凡骨の企及し能はざる所なり、而かも氏が奮然之を敢てせるもの必ずや手腕と自信に俟つあるによるべく、大阪朝日、毎日は世既に定評あり、時事、新報各主義意見を異にす、大阪日報は經營者吉弘白眼一流の辣腕を以て最も俗受け能き新聞なり、大阪朝報は專ら意を茲に濺ぎ日報式軟派ものを刊行しつゝあるものゝ如く花柳社會に歡迎せらるゝと云ふ、是れ氏の最も苦心せる一機軸なり、氏は斯の如く經營的才能あり而も惡辣なる手段を弄せざれば信用あり德望あり、新進の紳士として大阪實業界にも相應推重せられつゝあり、努めて倦まずんば大阪朝報の聲價頓に昂進するものあらんか。

辯護士　齋藤隆夫君

氏は但馬出石郡中村の出、明治二十七年早稻田專門學校を卒へ翌二十八年東京市に於て辯護士を開業す、我國文運の進歩は所謂善良なる國家は法制の下に建設せらるゝものにして輓近法律思想の普及は益々法規の發布頻繁にして從て之が職にある法曹家は夙夜深淵なる學理の研究に汲々たらざる可らず、況して法規の運用を誤らんか大にしては國家社會の安寧秩序を紊り、小にしては個人の權利を蹂躙するに至り或は人權を破壞する等至大の關係を有す、氏は夙に爰に志し大成を期して明治三十四年米國エール大學に入り、三十八年業を卒へて歸朝せり、爾來東京に於ける少壯辯護士として聲名あり

氏は斯の如く法律學に造詣深く傍ら政治に趣味あり、政治學を研究して頗る得る處深しと云ふ、其著比較國會論は近來の快著として英、米、獨、佛、伊、瑞、日の七國會を比較研究して各得失を縱横論議し斯學研究者に一指針を與へたるものとして歡迎せらる、而して氏は國會に就て我國會現時の狀態を歎じて曰く『善良なる國會は完全なる法規の下に建設せらるゝものにして、國會を以て輿論の代表機關なりとするは政治上に於ける一のフヒクションたるに過ぎずして、決して正確なる定論にあらず、故に爲政家たる者は時勢の變遷に應じて國會法規を改良し健全なる國會を組織することを怠るべからず、然れども法は元來死物なり之を運用するの人を得ざれば遂に徒法徒令となり終るべし、我國に於て國會法規の改正を耳にするや久し、之を改正する素より不可なしと雖も同時に國會議員の智識及び道德を改良するを以て急務とすべし、國會議員にして智德なきは虛僞の議員なり、今や我國會は虛僞の國會にして官僚の爲に頤使せられ、政府の爲に飜弄せられ威信地に墜ちて其輕きこと羽毛の如し』と。然り國民は立憲政治の美名に醉ひ、國會議員てふ惡魔に欺かれて苛稅誅求に泣く吾人亦現時の國會狀態を呪ふものなり。

氏は性高潔にして識見該博、頭腦明晰にして議論的確、法曹家として將來を囑目せらるゝのみならず、政論家としての未來を有す、而も來るべき總選擧には大に出馬して理想的國會議員たらんとする抱負ありと、氏にして代議士の月桂冠を贏ち得んか寂寥たる但州の政界に一異彩を見るものと云べし。

大阪市南區長 紫安新九郎君

由來兵庫縣に於ける但馬は人材の淵藪にして其學界に於て將た實業界に於て逸才俊秀の材に乏じからざるも、多くは既に名を遂げ功成りたる先輩者にして、今や後進少壯の材眞に乏しからんとす、然るに嘗て操觚界に身を起し、大阪市役所に入り最も煩雜なる、南區長として令名あるもの紫安新九郎氏あり、又以て一異彩ならんか、氏は年齒少壯にして新進氣鋭頭腦の明晰と手腕の凡ならざるを以て、前途を嘱目せらる

氏は城崎郡の人、明治三十三年早稻田大學政治科の出身、後ち博文館に入り太陽に執筆し、轉じて鎭西日報主筆となり更に萬朝報記者となれり、此間筆陣堂々硬論を主張して重きを爲す、操觚者としても又天才を有したりと云ふべし、而も氏は自治體に造詣深く、其後大阪市役所に入り商工課長となり、商工業の中心地たる大阪市の爲め氏の手腕を發揮して盛埰する處多し、今や大阪市四區に於て比較的難治を以て稱せらるゝ南區長たり、大阪市政の難事たる既に世人の知る處、昨四十三年偶々公民會起り市政改革の一着手として市會議員

の改選に次で市長の更迭あり、而も今尙往々情實の糢綿するあり、自治體の本義を沒却せるものあるに拘らず、氏が此間に介在して一部に兎角の批評を免がれざるも克く其職に忠なるに至つては、全く其手腕と誠意に俟つ處あればなり。

美術家 白瀧幾之助君

一片零碎の刀筆を以て能く高潔の風尙を現はし、清冷なる冰心を紙片の裡に寫して一世の文明を代表し、絶代の彩光を放つものは夫唯美術の妙奥にある乎、我國古來美術家に富む夙に美術國の佳稱を宇內に博したるもの、蓋し民人氣風の與かる處なきに非ずと雖も、抑々亦先輩苦心の賜に由らずんばあらず、然るに方今に於ける我國の美術界は衰微頽廢の運に傾き、高潔雅致の天地は一變して名利の俗界となり、神聖の風趣、高尙の氣韵は殆ど今人に望むべからざるの觀あり、而も此間に介立して世界的美術の蘊奥を繹ね、挙世の才を負ひ

絶代の技能を振うて其妙、神を極めたるものは之を白瀧幾之助君となす。

氏は生野奥銀谷町に生る、幼にして繪畫を嗜み、後ち東京美術學校に入り油繪を專攻し、卓然として同儕の間に傑出す明治三十七年更に研究の爲に泰西に遊び、米、英、佛國に留ること前後七年、本年を以て歸朝せり、其濃艶なる筆致と高尙の氣韵は日英博覽會に出品して世界的の稱賛を博し、本邦に於ける少壯大家として大に將來を嘱望せらる。

辯護士 佐々木藤太郎君

兵庫縣には群雄を叱咤すると云ふやうな氣骨の陵々たる大人物はない、是れ或は地勢の然らしむる處亦止むを得ざる次第であるが、之と同時に常識に長けた才子風の理窟を並べる人物は甚だ多い、而して亦何れかと云へば頭腦は明晰な方である、故に辯護士には相當なる人物もあり成功者もある、東京の法曹界でも、關東の人物より關西出身の人が持囃さるゝ

所以は爰にある、氏の如きも開業以來日尚淺しと雖も少壯議論家として先輩大家の簇在せる東京市に於て用ゐられて居るのは何か長所があるのであらう。

氏は養父那大屋村の生れ、元は蠶業學校を出でゝ養蠶に從事して居つたが、理窟嗜きの處から養蠶では面白くないと、更に明治法律學校に學び、卒業後辯護士試驗に及第して、一昨年開業した、去れば過去を以て品評する譯に行かないが將來は一花咲かす時があるであらう。

大阪市會議員　前川彦十郎君

大阪の實業界に於て異彩あり、一時聲名噴々たりしものは前川彦十郎氏である。

氏は竹田町の寒封梁瀬屋事太田庄一郎氏の令弟、幼少の頃習田先生の門に入り漢學を修め、親族の關係を以て大阪前川家の養子となり、祖業を承けて眞摯なる經營の結果は大なる資產を增殖し、頓に頭角を顯すに至り、其後關西鐵道、伊豫鐵道を創立して之が取締役に擧げられ、市會議員として市政に參與せること前後十五年、一時大阪市に於ける實業界の重鎭として重きを爲しつゝありしが、近時病魔の爲に一切の公職を拋ち、今や悠々自適して閑日月を送りつゝあるものゝ如し。

氏の息眞平君は夙に大和民族の發展を圖らんと、夙然米國テキサス州に移住して大に開墾に從ひ前川村を建設して一大成功を謠はれつゝありと云ふ。

鐵工業　川崎直左衛門君

大阪に於ける縣下出身の人物にして鐵工業を以て名あるものを川崎直左衛門氏となす。

氏は但馬城崎郡豐岡在の舊家にして姓を三宅と稱し代々鎚鐵業を營み、慶長年間大佛の鎚造を爲せるものは實に氏の祖先となす、爾來連綿として斯業を經營し、維新の際には各藩の大砲製造を受負ひ、本邦の鐵工業としては最も香しき過去を有するもの、氏も亦遺業を繼承して少々之に從ひしが、世の進運と共に舊蹈を因襲して時代の風潮に遲るゝことを慨し明治八年奮然として川崎造船所に入り、大に文明の技術を研究し、同十二年大阪に移り、諸種の機械製作を營み、製材機械を發明し、爾來引續き熱心經營の結果は遂に現今大阪鐵工業界の雄者を以て稱せらるゝに至れり。

京都府農業技師　山崎粂藏君

但馬の命脈は蠶業にあり、而も本邦に於ては蠶糸國として最も古き歷史を有せるにも拘はらず、毫も改良進步の跡なく關東地方に遲るゝこと數等、未だ古來の舊蹈を脫せず、年々非常なる損害を蒙りつゝありしが、氏は夙に之が改良進步に資する處あらんとし、明治十九年西ヶ原養蠶試驗場の設立と共に同所に入り、卒業後縣蠶種檢查員として縣組合の蠶種檢查に從事せる事多年、後縣蠶種組合長に擧げられ、明治三十一年農商務省蠶種檢查法案の發布と共に檢查員主幹として之が施設に盡す處あり、後又縣農業技師となり、但馬蠶業に貢獻したること多く昨年京都府に轉じ現に農業技師として同府の農事改良に盡瘁しつゝありと云ふ。

石鹼製造の率先者　由利岩藏君

氏は豐岡町由利三左衛門氏の令弟にして、明治十五年九月大阪に寓り、將來石鹼製造の有利なることを看取し、同十六年一月春本某と共同して土佐堀に於て之が製造を創始したりしも、無經驗なる新事業は兎角意の如くならず、幸に苦辛研究の結果は製造漸く其緖に就きたりしにも拘らず、未だ需用に乏しく、製品增當して資本の回收に由なく、春本氏は遂に之を拋棄するに至れり、爰に於てか堅忍なる氏は同十九年自ら之を引受け個人經營となしたりしが、幸にも二十一二年頃より陸軍の奬勵によつて頓に需用を喚起し、爾來世の進步と共に一般の日用品となり、氏が經驗と誠實は斯界の率先者として顧客の信用を博し遂に今日の發展を見るに至れり。

▲其他の人物

以上紹介せる外但馬出身の人物にして、奈良地方裁判所檢事正吉江商行、東京大學敎授三宅驥一、海軍大佐船越揖四郎海軍技師和田垣保三、海軍大佐川瀨早治、京都疏水技師山田忠藏、森一、美術家和田三藏の諸名士ありと雖も、中には洋行中に係り其他の事故により未だ面識なきを以て爰に紹介することを得ず。

丹波出身之部

舊篠山藩主

青山忠精君

忠誠公英邁にして最も意を教育に致し、夙に近畿中國が尚武氣象の振はざるを慨し、自ら士官學校に入つて軍職に就くと共に、藩士石橋、本郷、箕原氏等を拔擢し資を支給して學に就かしめ、又其祖忠朝卿の時代に於て創劒せられたる、藩校振德堂を擴張して、明治十八年鳳鳴義塾となし、藩士に限らず一般子弟の入學を許し、中學程度の學科を授くると共に軍隊的の薫陶を施し健全なる人物の養成に努め、一面東都に遊學するものをして倚る處を得せしめ、嚴重なる指導監督を以て往々誘惑に陷るの弊害を避け以て大成せしめんが爲め、邸内に寄宿舍を設くる等、人材の養成に努力する處ありしが明治二十年不幸中道にして斃れ、先君忠允卿之を襲ぐ。

▲先君忠允公

忠允公又先代の遺志を體して深く育英のことに志し、鳳鳴義塾に資金年額を增加し、更に擴張奬勵の結果は公の主宰するに及んで名聲益々揚り、入學を請ふもの年一年に加はり、同校の門より有爲の材を出したること益々多く、累代の偉功は遂に　天聽に達し同二十五年先代忠誠公に位階を追陞せられ御沙汰書を賜り、同四十年五月東宮殿下御鴨御行啓に際し

▲同家の祖先

藤原鎌足の後胤、攝政關白師實の支裔、花山院忠經の男師繼の後なり、師繼より四世を經て右京權太夫師重に至る、師重は元中元年允良親王に扈して上州青山鄕に居り、故を以て姓を青山と稱す、男忠治應永年間松平家に仕へ信州波合に陣歿し、後三河に移り七世忠成元龜年間忠門の遺領を承けて家を繼ぎ、小田原の役に扈從して軍功あり一萬石を加增せらる忠成は德川秀忠の傅となり、江戸町奉行に擧げられ關西總奉行を兼ぬ、其子忠俊德川秀忠に仕へ家光の傅となり直諫を以て斥けらる、子宗俊召されて父の職を襲ぎ、信州小諸五萬石に封せられ、大阪城代の功に依り二萬石を加增せらる、其孫忠重延寶元年遠州濱松城を領し元祿十五年龜岡城に移る、其子忠朝寬延元年篠山城に移封され、夫より忠高、忠講を經て忠裕に至る、忠裕は幕府の閣老となり幕政に參與すること三十餘年其功によつて一萬石を加增せらる、忠良、忠敏を經て先々代忠誠公に至る。

▲先々代忠誠公

兵庫縣人物史　青山忠精君

ては特に御使を差遣せられ、特別の御思召を以て　御眞影御目錄を下賜せらる、爰に於てか一門の光榮之に過ぎずとなし自ら感奮して學業を一般に垂れて只管地方青年の提撕に勗むると共に、又一面舊領内の士民と舊誼を保持して歷史的關係を敦厚ならしめ、良材を養ひ、患難相扶くるの目的を以て懷舊會を組織し、或は鄉友會を設けて義塾出身者の親睦を圖り、會報を發刊して連絡を通ずるの機關となし、又舊邸宅を寄付して篠山町の公會堂に充て、旅團の新設に際しては巨萬の金員を揖て、地方の發展を圖る等、地方公共の爲めには努力至らざるなく、大學卒業の上は此等の青年を率ゐて力を國家に竭し、上は皇室の藩屏たる實に副ひ、列祖の遺業を發揚して大に爲すあらんと深く期する處ありしが、不幸病魔の侵す處となり、年齒纔に二十六、春秋遙に高く前途好望の身を以て明治四十三年八月二十七日終に逝去せらる、想へば悵然として洵に哀悼の至りに堪へざるなり、這は獨り青山家の奇禍なる而已ならず、實に篠山町の不幸にして、否篠山町の不幸たる而已ならず、亦以て縣下國家の一大損害と謂つべく古語に積善の家に餘慶ありと、嗚呼天は何の怨懲あつて單り青山家に惡くも餘快を下さんとするか、然れども命は天なり、公の世に處するや其間僅に二十年を出でずと雖も、其鴻業に至つては華胄界の模範として之を百世に傳ふに足るべく亦以て瞑すべきなり。

故青山忠允君

公夫人元子氏は、子爵相馬順胤氏の長女たり、四十一年十二月華燭の典を擧げられ、嫡子忠精君年纔に二歲にして家を繼ぐ。

同家々扶

箕原貞明君

大原晴雄君

青山家代々の幼主を補翼して、家政は勿論育才の大業を能く遂行せしめたるもの大野肅章、本鄉房太郎、石橋健藏、箕原、大原の諸氏となす、而も石橋本鄉氏は身軍職に在つて外に在り、大野氏已に歿し、就中一大功勞あるものを箕原貞明

▲公の畧歷

公名は忠允初名は惇旭、先代忠誠公の介弟忠惇君の嫡子たり、明治十八年十一月二日生る、同二十年七月忠誠公病篤きに際し、養はれて嗣となり入つて宗家を繼ぐ、初め學習院に學び、三十二年六月先君尙武奉公の遺志を憶し陸軍地方幼年學校に入りしも、近視眼を以て學習院に復し、中等及び高等學科を卒へ、四十年九月東京大學法科に入り、三十八年從五位に敘し、四十三年八月二十七日病革まるに及んで特旨正五位に敘せらる、身猶學籍にありて此恩命を拜するは世に異數の榮とする所なり、此日午前八時溘焉として薨ず、月の三十一日品川東海寺に葬る。

舊柏原藩主　子爵織田信親君

織田信長の次男信雄より出づ、信雄の三男高長を以て祖となし、高長より十一代山城守信民に至る、其間豊臣、德川氏の世となるに迨び政策上漸次減封せられて丹波柏原三萬石の藩主となる、氏は卽ち信民の後にして備中高梁の支代寄合山崎治正の長男なり。

▲氏の畧歷

氏は嘉永三年十二月を以て生る、幼名を英太郎又信成といふ、慶應元年先代信民の養子となり、同年十二月其封を襲ぐ德川氏の爲めに多年壓迫を受けたる柏原藩は維新の際、歸嚮を一にして勤王を表示せる、近畿中國の魁なりき、明治元年氏となす。

氏は明治九年先々代忠誠公に擬てられて東京に遊學し、同仁舍に入つて英漢學を修めつゝありしが、青山家々政整理上氏の力に俟つべきもの多く、同十年家扶を命せられ、大野家令と共に銳意整理改革に努め、大野氏歿後其衝に當りて、同家の樞軸となり、代々の幼主を補佐して拮据經營主家の爲めに犧牲となり、吐哺握髮の勤勞已に三十年、同家財政の基礎を固め、一小篠山藩主をして現に大名華族の富者を以て目せらるゝに至らしめ、一面育英事業を劃策經營せる功績は實に大なるものあり、溫順如玉將如漆、至誠忠實欣慕するに堪へたり、吁、氏に人爵勳章なしと雖も、天爵は自ら光彩を不朽に放つものあらん歟。

大原晴雄君は先君忠允卿の知遇を辱うし、寄宿舍尙志館の指導に任じつゝあるの人少壯有爲の材幹たり、東都に笈を負ふもの氏の力に負ふ處尠しとせず。

▲同家の祖先

織田信長の次男信雄より出づ、信雄の三男高長を以て祖となし、高長より十一代山城守信民に至る、其間豊臣、德川氏の世となるに迨び政策上漸次減封せられて丹波柏原三萬石の藩主となる、氏は卽ち信民の後にして備中高梁の支代寄合山崎治正の長男なり。

▲氏の畧歷

氏は嘉永三年十二月を以て生る、幼名を英太郎又信成といふ、慶應元年先代信民の養子となり、同年十二月其封を襲ぐ德川氏の爲めに多年壓迫を受けたる柏原藩は維新の際、歸嚮を一にして勤王を表示せる、近畿中國の魁なりき、明治元年

兵庫縣人物史　子爵織田信親君

子爵の狩獵談

曰く余は二十三年來主獵官を勤めて居るが、同僚の中に

も獵の事は全然素人の人も澤山ある、又近來獵の方迄が西洋風になつて、猪、兎、鳥抔を色々と工夫をして獵場へ集め天幕でも張つて置いて、酒でも呑みつゝ云はゝ娯樂的に勢せずして獵ると云ふ風に傾いて來た、余は壯年の頃より獵を好み柏原に居りし頃にも之をやつて居たが、余の如きは人跡至らざる如き荒山に蹈み入つて二日でも三日でも飯も喰はなければ茶も呑まずにやると云ふ風の荒獵が嗜きであるから、近來の如な遊戲的の獵は一向に興味がない、只今君が兵庫縣には小利口な人計りで一向に巨きな人間が居らぬと言ふが夫れは地勢の然らしむる處であらう、獵の方から言つても兵庫縣邊の山は嶮岨で低いが、東北へ行くと山も高くて、嶮岨にない、何處かに膚拗な處がある、故に雉子の如きも兵庫縣邊では少さいが、東北の方は大發に巨いのが居る、人間も或は之れと同樣であらうと思はれる、本年も又近かくの内に御獵が始まるから、巨きな猪でも討つてやらうと一日千秋で樂しんで居る云々。

世界的二大新聞の社主　上野理一君

兵庫縣下に天下の政權を掌握し若くは一世の大豪傑と謠はるゝ者莫し、然も國家有用の人材は各方面に散在し、卽ち之を本編中に收むる以て他の府縣に比較せんか啻に遜色なきのみならず、爰に又世界的事業家の一人として朝日新聞社主上野理一氏を世に紹介するを得るは吾人の最も快感に堪へざる所なり。

歐洲を席捲せるナポレオンは百萬の敵兵怖るゝに足らず唯怖るべきは一管の筆なりと云へり、あゝ那翁の如き曠古の英雄傑にして筆卽ち新聞の勢力をいかに怖れたるかは此一語を以て想像するを得べく、況んや今日に於ける新聞の勢力は到底那翁時代の比にあらざるをや、故に現今歐米の政治家は勿論、政黨政派の如き苟も團體的勢力を以て世に處するものに在つては、多くは機關的新聞を有し、互に論議辯護を勉むるに汲々乎たり、然るに我國の當路者は曾て新聞雜誌を蛇蝎視したること甚だしく、百方之が鎭壓策をとりたるにも拘らず、滔々たる大勢は到底防禦するに由なかりき、是れ實に二十餘年前の事に屬す、而して今や其狀況を異にし當路者の感想は一變すると共に新聞紙の職責も亦重且つ大となれり、然るに現今の新聞社中には主義もなく主張もなく、甚だしきは面否服從の者さへあるが如く幾百の新聞雜誌中社會國家の爲めに貢獻して能く其職責を全うするもの果して幾千を數ふべきや。

此間に於て天下の大新聞と目せられ、勢力信用の最も秀絕して高く聳ゆるものは朝日新聞なり、彼は常に國家を經とし社會を緯とし、筆陣堂々、報道正確、實に新聞界の覇王として天下を睥睨す、隨て其發刊部數に至つても遙に他を壓し、大阪朝日は二十三四萬部、而して同一經營に係る東京朝日は十六七萬部と稱せられ合して四十餘萬部、其勢力たるや實に一大強國の如し、世人は尙記憶するならん去る三十八年日露媾和談判に際し、媾和條件の我國に不利なるを鳴らし、如何に同紙が雄健なる筆戰を爲したるやを、國民は之が爲めに發憤し、當路者は其餘焰に恐れて策の出づる所を知らず、唯緊急勅令の利器を以て之を鎭壓せんと欲し其發行停止を命すること一再に止まらず、然も朝日の反抗愈々猛烈筆陣更に堂々として實に新聞創始以來の壯觀なりき、其後同社の社運は益益隆盛、越えて明治三十九年七月大戰後の狀勢を國民に知らしめんとて滿韓巡遊を主催し、又四十一年三月國民に歐米の文物農商工の實況を知らしめんとして世界一週を企圖し、後四十三年四月日英博覽會見物を兼ね第二回世界週遊を主催す而して自己の損害を顧みず以て社會の爲め國民の爲め新知識の啓發に努む、其第二回世界週遊會解散に際し同社々主上野氏の朗讀せる解散式辭を見れば以て其企ての全豹を窺知するに難からざるべし。

▲解散式辭

第二回世界一周會員諸君

諸君一路平安、坤輿觀光ノ壯圖ヲ了ヘテ、今ヤ此ノ地ニ歸還セラル、衷心ヨリ愉快ヲ以テ之ヲ迎ヘ、其深ニ之ヲ賀ス、旅程三萬里、日ヲ經ル一百餘、其ノ間諸君耳目ノ觸ル、所ハ、尋常遊觀ノ外、各國ノ政敎、學藝、產業、風俗等アラユル方面ニ於テ、懇敍ニ着實ニ研鑽ト參考ノ資料ヲ得テ、旅行爲メニ豐滿ナルヲ疑ハズ、一面足跡ノ到ル處ハ、彼我相知ルノ機會ヲ作リテ、國民交際ニ好印象ヲ留メシヤ必然ナリ。

第一回本會擧行ノ結果ハ、確ニ之ガ適例タリ、卽チ會員各々其得タル知見ヲ自己ノ職分自己ノ業務ニ應用シテ、資益莫大ナリキ、又延イテハ自己以外、有形ニ無形ニ、社會ヲ利セルモノ擧ゲテ數フベカラズ、況ヤ今回ハ目的ノ一要點トシテ、日英博覽會ノ觀覽ヲモ含メルヲヤ、其ノ得ル所ノ一層多大ナリシハ論ナク、諸君他日應用ノ洪博ナル、譬メトスベキナリ。

斯ノ如キモノアリ、初メヨリ汗漫無意味ノ遊ダルヲ免レ、吾ガ社ノ企畫亦徒爾ナラザルヲ得ン、吾ガ社ノ意志ハ實ニ此ニアリ。

今日約ニ由リ、此地ニ於テ本會ヲ解散スルニ方リ、卿カ其儀ヲ備ヘテ地方紳士諸君ノ眞摯ヲモ請ヒ、以テ會員諸君壯遊ノ終點ニ光ヲ添ヘ、併セテ諸君ノ健康ヲ祝ス。

蓋し此の如き大企圖は勢力信用の絕大なる朝日新聞にして始めて之を能くすべく、他の容易に企つべからざる所なり、而して此る大新聞社を所有し經營する者は抑々何人ぞ曰く、村山龍平氏、曰く、上野理一氏の兩人實にこれなり、村山氏

著者未だ面識なく又其人物も審かにせず爰には專ら上野氏に就て記述する處あらんとす。

而してかくの如き世界的二大新聞社主の一名たる上野氏が實に我縣下の出身なりと云ふに至りては之を天下に誇ると共に亦以て一大名譽なりと謂つべし矣。

或日氏の邸を訪へり、其家は人も知る如く當世の所謂高樓風ならず、大阪に於ける鴻池、平瀬等と同じく古風を帶ぶ、案内者に導かれ應接室に通れば、そこには海屋や皆川等の筆になる屏風を立てまはし、床に古書幅がかゝり、頗る奥床しく見ゆ、主人の上野氏は亦溫厚にして而も自然に具はる威嚴を有し轉た崇敬の念を覺えたり。

▲氏の談話

著者は縣下青年子弟の爲めに何か訓話をと請へるに應へて曰く。

突然のことなればまとまつて趣味のある話と云ふ譯にも行かぬが、一體青年は未來各方面の繼承者にして最も大切なる責任ある故に其青年が柔弱に流れんか面の當り無事太平の如くなるも、前途甚だ憂念なきを得ず、今や我國は三十七八年役の大戰勝の結果一躍して世界の一等國に仲間入を爲したりと云ひながら、其經濟的の實力に至つては未だ及ばざるもの太だ多し、蓋し是等の事當局者の責任にあるや勿論なれども、大なる望みは寧ろ青年者に期待せざるを得ず、然るに其青年者を見るに空中樓閣的の思想に馳せ篤實の氣風と忍耐力に乏しきやに見聞す、人はどうしても篤實心があつて事に當り、且熱心なる忍耐力を以て最も必要となす、先哲云へり忍耐は成功の鍵なりと、然りこの鍵を所持するにあらざれば成功の堂奥に入ることが出來ぬ、之れに反する者は寧に成功の望みなきのみならず或は祖先傳來の財産を失ひ、甚だしきは其家名をも辱しむるに至る、豈寒心せざるを得んや。

而して此の損害は單に個人的の損害たるにとゞまらず、實に國家の一大損害なりと謂ふべし、何となれば個人は國家の分子なること勿論なればなり、之れ大に青年者の奮發を望む所以なりと云々。

母堂兼子刀自

▲氏の經歷

氏は丹波篠山の人代々地方の名族たり、祖父を儀太夫と云ひ、性溫厚篤實、精勤力行大に蓄財せり、然も不矜、不驕、常に鞠躬如たり、去れど大事に臨んでは財を擲つて上下に盡すことを怠らず、衆爲めに其德に服せり氏の父保兵衛氏は其三男に當る、分家して同地木村忠兵衛氏の二女兼子を娶れり當年七十九歳の老齡にして今尚健全、晩年和歌を嗜まる、氏は其長男其次を善右衛門（幼名又吉）と云ふ。

氏は年二十三にして早く父を喪ひ、明治維新の革命に際して前後數年世の荒波に動搖され、一進一退遂に住家を引拂ふの已むなきに到れり、母を國元に殘し其弟又吉氏は大阪三越糸店豐田家の希望に應じて養子に遣はし而して氏は單身大阪に遊ぶ、偶々舊友長州の人大賀大眉氏丹波の人細見眞氏等の周旋に依り、大阪鎭臺司令長官三好君の一書生となる、之れより前き氏は年十六七の交落備後邊弗措翁の塾に入り漢學を修むること兩三年、然るに三好君は氏の才を稱すると共に其後の廢學を惜み督勵の傍ら大に修養を加へらる、氏に取りては君は實に父師の恩たり、後明治十二年郡制施行に際し、三好君の推薦を以て兵庫縣吏と爲り川邊郡役所に出仕す、其赴任にのぞみ切に懇諭せらる、而して職を奉ずる一年餘、氏は田舍生活の不愉快を感ずるに至り、時に二三友人の勸むるありて遂に大阪朝日新聞社の聘に應ずることを約し、後之を三好君に告ぐ、氏勃然として曰く先示に違ひ甚だ輕躁なり、然ども既に約成る宜しく成功を期すべしと、此一言は如何に氏の肺肝に深刻したるかは氏の常に語る所なり、斯くて氏が朝日に入社したるは實に明治十三年九月にてありき、當時同新聞の發行高一萬部の公稱なりしも、實數僅に五六千に過ぎず財政又頗る窮乏を告げ經營甚だ難、然も氏は三好君の一言を忘れず、益々大決心を固め奮闘刻苦甚だ努む、而して年月の經過と共に發行部數も亦漸次增加し、財政も亦一線の光明を認め得るに到れり、時恰も政黨勃興し民論囂々社會も亦漸く新聞の必要を感ずるに至れると共に政府は反つて之を鎭壓せんと力め、其筆や實に壯烈なるものありき、去れば新聞經營も頗る有趣味の事業となり、同社の社運も亦日に月に膨脹し從來の家屋は遂に狹隘を告げ更に現在の家屋地所を買入れ此處に移轉を爲せり、而して明治二十一年更に東京市に一新聞社を買入る、卽ち今の東京朝日新聞にして專ら國會開設の準備豫行たりしなり、時會々官報局長故高橋健三が、國會議事錄印刷の器械取調且買入の命を受け、歐洲へ派遣せらるゝに當り、朝日も亦同一器械買入使用方研究の爲に一社員を派遣して同行せしめたり、後之を東京朝日新聞社に据附くるや民間輪轉印刷機の嚆矢として爲めに東京大阪兩朝日新聞の聲價を增大したること實に目醒しきものありたりき、明治二十二年憲法發布式に此新器械と非常高價なる電信とを用ひて新聞號外を發行して大に世の喝采を博し、爾來世運の進歩と共に益々其發展を計り、竟に今日の大を成すに至る。

而して此三十餘年の間氏が如何に拮据奮勵せられたるかは殆ど想察するに餘りあると共に、其今日の盛運を見るに至れる所以のもの實に氏等奮闘の結果たらざるは莫し、殊に其新聞が一種獨特の品格と又信用とを併せ有する所以のもの全く其經營者の面影の反射たるを想へば、引いて氏の人格氣品の如何をも知るに難からざるべし焉。

▲氏の餘業

氏は常人の如く名利を貪らんとする野心家にあらざるのみならず、他より種々勸むるもの多きに拘らず常に之を排斥して顧みず先年日本勸業銀行創立に際し、大藏省より特に同行監査役を命せられ、一期間の後改選に際し大多數の投票を以て再選せられたるにも拘らず新聞業多忙の理由を以て斷然辭退せらる、而して今や社長會長校長の懇嘱に依り、日本赤十字社大阪支部商議員、日本武德會大阪支部評議員、早稻田大學賛助員を勤めらるゝ而已、元より是れ社會的公共の事業なるが故に外ならざるべし。

▲氏の嗜好

氏は世人の知る如く二大新聞經營の劇職にあるも常に美術的趣味に富み、新古書畫、煎茶器、其他貯藏頗る富贍、氏が近著光悦派蒐集に九鬼男爵は序して曰く「友人上野理一君

は夙に美術を愛賞し、其趣味甚だ深く、其鑑識甚だ高く、隨て多くの名品を藏す、今般其秘藏中より光悅、宗達及光琳の作品數十點を拔きて印刷に附し、之を同好に頒たんとし、序を余に需めらる、余深く其擧の美にして且裨益多きを喜び云云』と又內藤湖南博士も序文に曰く

我邦ノ美術ハ明治ノ世ニ在リテ幸不幸兩極ノ運命ニ際會シタリ、其ノ初年一代破壞ノ潮流ガ美術界ニ泛濫セシ時ハ千金ノ珍什モ故紙ト似テ同ジウシ無二ノ名器モ輙スク海外ニ運ビ去ラレ殆ド底止スル所ヲ知ラザル勢アリキ其ノ頹波ヲ障ヘテ之ヲ既倒ニ回シ今日美術ノ盛運ヲ致シタル者ハ上ニ在リテ博覽會展覽會ノ開設、美術工藝學校ノ設置、寶物ノ鑑査、國寶ノ指定、以テ之ガ奬勵ニ勉メタルニ待ツコトアリシヤ勿論ナルモ而モ政府ノ力ハ限リアリ下ニ在リテ資力アル篤好ノ人ガ蒐集保護以テ奬順ノ美ヲ濟セシ效、更ニ大ナル者アリシナリ

國寶ノ海外ニ漏出スルコト尾閭ノ盡キザルガ若クナリシ時ニ當リテハ有力者ノ蒐集ニヨリテ之ヲ防止スルハ卽チ既ニ保護ナリキ此程度ノ保護ニ於テ功アリシ人ハ或ハ乏シカラズ然レドモ更ニ鉅萬ノ資ヲ擲チテ美術ノ顯彰發達ヲ促シ作家ノ參考ニ供シ鑑賞ノ進歩ヲ助ケ而モ未ダ曾テ一己ノ利益ヲ顧念セザル者ニ至リテハ海內能ク幾人カアル。

余ハ此ノ如キ眞正ノ保護者トシテ我ガ親善ナル二先輩ヲ推スコトヲ憚ラザル者ナリ二先輩トハ誰ゾ其一ヲ村山香雪君トシ其一ヲ上野有竹君トス二君ハ固ヨリ資力アル人ナリ然レドモ單ニ其富ヲ以テスレバ二君ニ比スベキ者ソレ亦夥シ二君ニ推服スル所ハ其富ノ大部分ヲ擧ゲテ之ヲ美術品ノ蒐集ニ投ジタル篤好ニアリ二君ハ誠ニ篤好ナリ然レドモ單ニ其ノ蒐集ヲ以テスレバ二君ニ比スベキ者亦或ハ之アラン二君ニ推服スル所ハ其ノ十數年來一意美術ノ顯彰發達ニ努力シテ限リナキ費用ヲ負擔スルニ在リ二君ハ世ノ儲藏家ガ獨リ自ラ秘玩シテ之ヲ世人ニ示スコトヲ吝ムノ類ニアラズ外ニ在リテハ巴里大博覽會、內ニ在リテハ京都奈良ノ帝室博物館以下各處ノ展覽會等喜ンデ其ノ秘什ヲ出陳シテ以テ世人ノ觀覽ニ供セザルコトナク往々歐米人ノ我邦美術ヲ研究セント欲スル者、其門ヲ叩クヤ亦每ニ之ヲ迎ヘ其ノ篋ヲ傾ケテ之ニ滿足ヲ與ヘザルコトナシ是レ尙ホ道フニ足ラザルナリ我邦ニ在リテ最舊最精ノ美術雜誌「國華」ハ故高橋自恃先輩等ノ創立ニ係ル者ニシテ二十年間、其ノ精良ナル複製品ト超凡ナル鑑識評論トヲ以テ美術界ニ貢獻セル所ハ目アル者皆之ヲ賭ル之ヲ東洋無比ト稱スルモ過當ニアラズ其後風ヲ聞テ興ル者アリト雖モ未ダ其ノ首唱ノ功ト精到ノ技トヲ奪フニ足ル者アラズ孰レカ知ラン此雜誌ノ後援者トシテ始終其困難ナル會計ヲ支持シテ以テ今日ニ至レル者ハ乃チ亦カノ篤好ナル二君ナラントハ二君ガ明治美術ノ保護者タル功績ハ唯此ノ一事既ニ之ヲ表明シテ餘アリ。

近日上野君ハ其ノ藏品ノ觀覽ヲ求ムル者益々多ク特ニ外國人ノ若キハ屢々一覽ノ餘留メテ以テ賞鑑ノ資トスベキ寫眞ナキノ遺憾ヲ訴フル者アルヲ以テ其ノ藏品中ニ就キ所謂光悅光琳一派ニ屬スル繪畫ヲ擇ビテ精良ナル寫眞版ニ附シ勒シテ一册トナシ內外ノ同好ニ頒タントス是レ君ガ美術保護ノ事業ニ於テ緒餘ニ過ギズト雖モ其ノ世ノ爲ニシ人ノ爲ニスル親切益々其範圍ヲ擴メントスルハ眞ニ感佩スベシ君ガ藏弆ノ精粹ハ固ヨリ此ノ小册ノ盡ス所ニ非ズ其ノ動心駭魄スベキ珍奇ハ或ハ反テ此ノ外ニ在ル者アリ但ダ其漸ヲ遂テ秘篋ヲ啓キ以テ美術界ヲ裨益センコトハ須ラク之ヲ他日ノ大成ニ期スベシ余ハ因テ此ノ册子ノ發刊ニ臨ミテ平生君ニ就テ知ル所ヲ擧ゲテ以テ觀ル者ニ諗グルノミ。

嗣子精一君

氏は抹茶道にも精通し關西に於ける屈指の茶人として稱せらる、然れども流派に拘泥して枝葉を云爲するが如きことなく、唯大理に由り取捨宜しきを得たる實に當時の茶人なりと云ふ。

▲令嗣精一君

氏は其長男にして、明治四十年東京帝國大學獨逸法律科を卒業し、直に日本勸業銀行農工課に入りしが、後東京朝日編輯幹部員の希望により、同社營業部長として昨年入社し、會計、工場、販賣部、廣告部、庶務等の各課を統率せられつゝあり、著者は一日氏と同社に會して談偶々新聞經營のことに及び、大阪朝日が今日の大發展あるに拘らず、日本の帝都而も政治的中心地たる東京の各新聞紙が其發行紙數の比較的大阪新聞の發行部數に劣る所以を質しけるに『氏は聲に應じて曰く、夫れに付ては種々の原因あるならんも、要するに關西は至る所智識又は富の程度も平均して居る、大阪の程度を以て書く時は京都、神戶は元より岡山、廣島、九州に涉つても大差はない、然るに東京は市內丈けにても人智に非常なる懸隔があり、上流の高尙な人もあれば又昔風の江戶兒も居るのみならず、東京を標準とせば群馬、埼玉、千葉の方面から東へ行くと高尙に過ぎて讀者が減る、そこで此方面へ適するやうにすれば東京人が不足に思ふと云ふ風で、同一程度の讀者の範圍が狹く、加之、富の程度に於ても亦相違あり、故に何うしても大阪のやうには行かぬ』と成程氏が觀察の明敏なるに首肯せり、蓋し青年者流に似ない謹厚なる人物にして、父の威權を笠に着たり、又は新聞を楯にして威張り散すが如き人柄にはあらず寔に平民的にして毫も驕る所なく、而も仕事には忠實、勤務は嚴格、去れば一般の社員が常に敬服して措かざる所なりと、先年九鬼子爵の令妹梅子氏を迎へて室となし、既に一男を擧ぐ、敎育あり、識見あり、而して品行方正實に將來有望の人物たり。

▲令弟豐田善右衛門君

幼名又吉と云ひ先代豐田善右衛門氏は元同鄕人の緣故に由り請はれて養子となり名を善右衛門と改め、現に大阪市高麗橋四丁目豐田糸店合名會社長、又別に同一丁目に羅紗店をも開き何れも信用厚く、而して大阪商船株式會社取締役、大阪福島紡績株式會社取締役を勤め、大阪實業界に於て其人物財產共に堅實質素を以て稱せられ頗る好評あり。

兵庫縣人物史　上野理一君

大阪市會議員

田艇吉君

▲田氏の祖先

田氏は門閥家として著聞し夙に里人の崇敬を受く、其先は田村將軍に出で、後裔連綿たるもの三氏あり、仙臺の伊達侯爵竝に秋月子爵及氏となす、氏の祖先は世々田村の性を冒したりしが元龜天正の亂に敗れ、織田上野に仕ふるや織田氏を憚り性を田と改む。

上野の丹波柏原に封せらるゝに及び隨從して同地に住し、田忠助に至り故あつて歸農せしが之れより氏に迨んで十二代世々免祖帶刀を許され織田家の鄕士たり。

▲不徹庵開基貞閑禪尼

忠助の嗣季繁に一女二男あり、女史を捨子と云ふ幼にして聰惠、天資文雅に富み俳諧を能くす、六歳の冬霽降りを見て

霽の朝二の宇ノヽの下駄の跡（一說朝を日やに作る）

の一句を詠じて人を驚かしたりとは今尙人口に膾炙する處、捨女は西鶴未だ出でず芭蕉未だ生れざる寬永十六年に生る、女史の傳を錄するもの極めて多く、俳歌大系圖には女六俳仙の一と稱せられ、又瀨祭書屋俳話には元祿前後俳女の四傑に數へられ以て如何に俳名の四方に嘖々たりしものありしかを察するに足るべく、又江州坂本山王社の三十六歌仙中に捨女の畫像を畫き左の句あり。

なくにさへ笑はゞ如何に杜鵑

女史の嘗て柏原にありて俳名都鄙に喧しく或る貴顯（靈元天皇なりと云ふ）女史の爲めに

柏原にをしや捨て置く玉の露

と詠み下し賜ひしを或る人之れを聞きて

かゝる名の雲井にまかふ歌人を

かやはらの里に捨ておくはをし

と詠み贈りしに女史大に恐懼して

かやはらにあるかなきかの露の身を

捨つる捨てしと何おもひけん

粟の穗や身は數ならぬ女郎花

と詠じたりと云ふ現に田氏の墓所に此碑あり。

季繁二男ありしと云へども女史の敏才を愛し他に嫁せしむるを欲せず、季成を以て聟養子と爲す、季成又深く風雅に富み和歌俳諧を嗜む、北村季吟を家に留むること三年、又正由湖春等に就きて之を學ぶ。

女史才藻英發にして志操堅確學和漢に通ず、平生尙んで古賢の女を友とし以て其身を律す、父母に事ふるに孝、夫に見ゆるに貞淑至らざるなかりしが、不幸薄命にして芳紀纔に三十にして良人を喪ふ、働哭悲泣追慕の情禁し難く、終に哀悼の俳歌一册子をなす、今其一二を擧ぐれば

秋風の吹來るからに糸やなぎ心ほそくもちる夕かな

露の身の消ねぬも悲し諸共に枯れ行く萩そうらやまれける

花は世のためしに咲くや一さかり

まつたけは唯一秋を千とせかな

北村季吟季成の訃を聞き女史に哀悼の和歌を贈つて曰く

又來んと云ひし別れを逢ふ事のかきりの旅とおもひやはせし

▲女史佛門に歸す

女史五男あり皆幼、血涙何恬の悲となる、閑哀祚薄其患難を素め、夙夜孤を撫し儼然家道を持す、稍々長ずるに迨び遂に家政を委して自ら京都に出で、庵を三本木に結んで優游として歲月を送ること六年、其間專ら佛學を修め、歌道を學び、松堅に師事して俳諧の蘊奧を極めたりしが、龍門寺の盤珪國師に謁し其法話を聽いて深く感得する處あり、篤く之れに歸依して遂に播州網干に到り龍門寺の涯に一宇を創建して不徹庵と稱し以て終焉の域となす、貞閑と號して身を退き、世を逸し、內には禪理を秘して心を佛苑に染き、外に勝蹟を營て念を潔道に攝す、世、出世の法心に留めざるはなし故に名聲四方に傳はり尼女爭ふて道を索め集るもの常に數十名、貞閑の敎化せる比丘尼總じて三百餘名に達せりと云ふ、其尼女を敎養するに戒律を嚴にし、道行を純潔にす、故に衆尼深く其德に順へりと。

不徹庵は今尙儼存し庵主常に數尼を養ふて道風を守れり、編者は貞閑尼の事蹟を索めんが爲めに不徹庵を訪ふて女史の畫像を拜し嫁記を讀んで轉た追敬の念に堪へざるものありき、而して女史を偲ぶべき材料は總て田氏に收藏せらる其自筆の伊勢物語、竹取物語、自讃歌、自作俳句集、三十六歌仙、其他多くの書籍あり、何れも詞藻の美にして筆力鬯達、稀句繪章、之れを讀めば悉く法度の觀るべきあり、元祿十一年八月十日不徹庵に於て六十五歲を以て遷化せり遺體を龍門寺內に葬る。

總本山妙心寺は之れを哀悼して妙心準第一座不徹庵創建嶺雲貞閑尼和尙禪師の諡號を賜ふ。

▲三子何れも高僧となる

貞閑の長男新左衛門季厚は田周太郎氏の祖先にして次を季鶴と云ふ、之れ卽ち田艇吉氏の祖先なり、三男以下皆佛門に歸す、淸雲寺中興雲巖祖瑞和尙、龍門寺第二世（盤珪の法嗣）柯山祖元和尙、高野山寶城院主來應和尙之れなり、何れも貞閑の意志と感化によるものにして一家三高僧を出すに至りては其德乾坤に磅礴せりと謂つべし。

夫れ我邦延喜天曆の隆、淸紫赤染美を宮掖に擅にし、閨閤脂粉の流擒藻屬辭汗を下すと雖も、顧みれば其尙ぶ所專ら巧文麗辭人の耳目を艷にし以て譽を買ひ嬌を媒つにあり。

女史六歲にして已に句あり其文を見るに何れも詞藻の美にして上に親み、良人を慕ひ、忠孝の心筆端に顯る、閨門肅穆風度藹然、良人を哀ふて學益進み、德益邵、遺孤を敎飭して古烈丈夫の風あり、又深く桑門に入りて世出世の法神に留めざるは莫し深く道行を操して衆尼を導き世道を利益して萬衆を濟度せるに至りて功業彰々然として昭かに、國師上人と共に比肩すべく、世の人物を論ずるもの動もすれば婦女を輕視するの風あり、嘻。

▲當主艇吉君

貞閑より季鶴、季重、季忠、季長、季貞、季佳を經て季刪に至り、季刪二男三女あり、長を艇吉、次を男爵健次郎氏となす。

▲氏の經歷

氏は少にして小島省齋の門に入り、柏原藩黌に於て漢學を修めたりしが、父季刪の早世に逢ふて十八歲家督を踵ぐと同時に里正を襲ふ、同地に上村、下村の二村あり、上村は鶴卷領にして氏の居村下村は織田領たりしが、兩村の共有に屬する山林あり、偶々上村より之れが分離を主張し、其主張を容れて分離せんか下村に於て非常なる不利益あり、里正たる氏は村民を代表して甚だ斡旋する處あり、遂に訴訟となりしも田邊大參事に依つて下村の勝訴となり多年の紛擾を解決することを得たり、鄕人之れに依つて大に氏を德とせり。

明治四年廢藩置縣と共に豐岡縣の管轄となるや鄕長となり區長となり、間もなく同縣の屬官に擧げられ、福知山支廳に在勤して庶務、學務、聽訟斷獄等の事務に從事し、明治九年千葉縣に轉じ、學務又は警察等を掌理し、十年官を辭して歸鄕せしが、十二年縣制の發布と共に最多數を以て縣會議員に選ばれ、同年十月拔擢せられて氷上郡長に任せらる、爾來在職十餘年、其間敎育の普及、改良及勸業等の效績最も多く、就中多紀郡界にある峻坂、縣道鐘が坂隧道開鑿工事は其一なり、二十三年同郡長を辭し、二十四年衆議院議員補缺選擧に

當選し、名譽ある初期議會の開會に參加し、爾來間斷なく當選すること八回に迨べり以て其衆望の歸する如何に大なるものあるかを想見するに足るべく、此時に當り大阪の富豪住友家が氏を聘するに切なるものあり、蓋し同家にとりては氏の如き清廉にして衆望あり、經驗あり、才能ある品性圓熟の紳士は最も有用の材たればなり、茲に於て遂に懇請を容れて議員を辭して同家に入り、其間住友銀行副支配人、住友本店支配人、又は住友倉庫支配人として同家の爲めに貢獻したること亦多く、明治三十六年同家の元老連袂引退するに及び、氏も又共に同家を辭したりと雖も在職中の功勞によりて侍つに別家格を以てし今に優遇せらる。

▲阪鶴鐵道の創立と經營

明治二十二年石田貫之助、村野山人、近藤常三郎氏等共に發起人となり、土山舞鶴間鐵道布設を出願して石田氏と共に議會に於て激烈なる運動を試み通過して鐵道法案に編入せしが、同時に京都舞鶴間の鐵道布設出願あり、然るに陸軍省に於て紀淡海峽の防衛上舞鶴の連絡を保つには土山の如き迂廻線を執らんよりは寧ろ京鶴線の必要を主張せしかば爰に於て鐵道廳は陸軍省の反目となり、二十四年に至り遂に却下せらるゝや、氏は更に生瀨線を踏査し大阪側と提携して十三人の發起人を結び、阪鶴線を出願せしかば再び京鶴線の競爭ありしも鐵道同志會の調停となり、兩院を通過して二十七年布設認可を得たり、依て二十八年創立總會を開き南清氏を社長に推し、氏は之れが取締役として企畫經營の結果終に阪鶴線の開通を見るに至れり。

明治三十七年南氏の歿後社長に擧げられ、四十年八月國有に決するや專務清算人として諸般の交涉殘務を擔當して政府に對する補償要求に關し、九鐵の仙石氏と共に最も强硬なる一人なりしが交涉中仙石對仲小路次官の衝突となり、折衝甚だ困難なりしも終に澁澤男の仲裁により、結局政府の輸する處となり、一株に付二圓を增し殆ど額面の配當を爲すに至り同株主を利せしめたること多く其主張を貫徹するに至りしもの全く氏の信望と熱心の結果たらずんばあらず、同社在職中日清戰役事業に協贊せし廉を以て菊御紋付銀杯一組を賜ひ、日露戰役中鐵道事業上軍隊軍用品輸送に盡瘁せし功を以て勳五等に敘せられ瑞寶章を授與せらる。

▲氏の信望と人格

最近大阪市政腐敗の極に達し健全なる市民か郭清刷新を絶叫するや、要は決議機關の人物を選擇するにありとなし、本年市會議員の改選に際して其候補者に擧げらる、然れども氏は嘗て住友家に入るのとき一旦政治界を絶緣したるが故に之れを固辭したるに拘らず、衆望の歸する處遂に大多數を以て當選し今や市政に努力しつゝあり。

氏は流石に名門の流れを酌み積德の家に生れて大家に人となる、篤實溫厚清廉の士君子なり、其己れに薄くして公共に淳く、嘗て鄕友會を組織して後進の誘掖に勗めつゝあるが如き以て一班を窺ふに足るべし。

氏に三男あり、長は大藏書記官昌君にして次は小谷哲君三

小谷哲君

園田寬君

內閣拓殖局書記官

三男　園田寬君

氏は明治三十八年七月東京帝國大學法科大學に入り獨逸法を修め、四十二年七月卒業在學中特待生として成績最も良好秀才の擧れ高く。四十二年七月大藏省專賣局書記官に任せられ同年十一月文官高等試驗に合格して、四十三年六月內閣拓殖局屬に轉じ、更に同書記官に任せらる、氏は同家の親族故園田多祐承孫稔氏の病歿して、同家の斷絕により親族會の選定難辭同家の相續人として昨年九月卽ち多紀郡大山村の園田家に入り性を冒す。

を園田寬君となす。

大藏省書記官

長男　田昌君

田昌君

明治三十三年帝國大學政治學科に入り在學中特待生となり三十七年七月業を卒へ同月大學院に入り、同年十一月文官高等試驗に合格して、三十八年十二月煙草專賣局事務官に任せられ、三十九年以後漸次進陞して現に大藏書記官專任高等官五等三級俸を賜ひ大藏省主計局司計課長兼理財局に勤務せらる、嚴父に酷似して性溫良、青年に有勝なる街驕の風なく年齒少壯前途好望の紳士として大に刮目に値するものあらん。

南海鐵道株式會社員

次男　小谷哲君

氏は明治四十年京都帝國大學法科を卒業して同年大學院に入り、四十二年六月退院、同年京阪電鐵に入り、總務課文書課或は株式係り等を歷勤し、四十三年十二月南海鐵道株式會社に轉じて目下同社にあり、氏は幼少親族柏原町長小谷保太郎氏の養嗣子となり小谷性を冒す。

男爵田健治郎君

貴族院議員

日露の戰役は振古未曾有の大戰にして、其勝敗の岐るゝ處は、實に我國乾坤一擲の大勝負であつたが、幸に曠古の大捷を博し、世界の列強を驚倒せしめ、一躍一等國の班に列することを得るに至りしもの、之れを要するに、幾億の財を散じ幾萬の生靈を擲ち、少からざる犧牲を拂ひ國民一般の後援と陸海軍の功勞に依ることは、勿論であるが、而も遠く滿洲の野に、百萬の狃貅と物資を敏活に輸送して、毫も後顧の憂ひなく、軍隊をして遺憾なく活動することを得せしめたる、遞信省の一大功績は夙に世人の認識する處にして、當時の遞信次官男爵田健次郎氏の貢獻は、蓋し千軍萬馬の間に馳騁せる將軍の勳功と其偉績を爭ふに足るものあるを記憶せねばならぬ。

兵庫縣下は維新の際に於ける政權の落伍者たりしを以て、行政官として見るべき人なし、獨り男は行政官として他に圍繞せる勢力なく藩閥なく、自力奮鬪遂に今日に迨び、縣下人物中に於ても最も多くの未來を有するものあるは、卽ち男の英邁俊秀にして凡骨に非らざる所以を證明するに足るであらう。

男は幼少鄕里柏原に在りて兒島省齋、渡邊弗措の門に學び明治七年渡邊氏に隨ひ初めて東京に出で、後熊谷縣に出仕し八年判任官として愛知縣屬となり、翌九年裁判官として名古屋裁判所津支廳に出仕し、偶々暴動事件に際して二萬餘人の取調を爲したりと云ふ、明治十二年北垣國道氏の高知縣令たり、田邊輝實氏の同書記官たりし故を以て同縣に警察本署長となり、同十五年警部長に進み、翌十六年警視廳に轉じ、續いて神奈川警部長となり、二十一年埼玉縣に轉任、二十三年春遞信省に入つて書記官となり、二十六年通信局長に榮進し同二十九年ハンガリー國ヴダペストに開設の萬國電信會議に參列し、歐洲を視察歸朝するや時の遞信大臣野村靖子と意合はずして職を辭せり。

明治三十一年伊藤內閣成るや遞信次官となり、同內閣の瓦解と共に職を退き、同年關西鐵道社長に擧げられ、後三十三年冬星亨の遞信大臣たるや、男は再び選ばれて其次官となり同內閣の斃るゝや亦又連袂辭職し、同年政友會より推選せられて代議士となり、三十四年選擧法改正成りて大選擧區となるに及び再び候補者として單獨演說二十五箇所、遂に當選せりと云ふ、以て男が奮鬪主義の人たるを知るべし。

明治三十六年冬日露國交危機に迫り、將に干戈を交ゆべき形勢となるや、遞信省は男の力に俟たざるべからずとなし桂內閣は三度遞信次官として之れに任じた、男も又位置の輕重を論せず遞信省に入つて多年蘊蓄の抱負を經綸して大に國家に貢獻せんと期待する所ありしが、幸に曠古の大戰に際して機宜を愆らず、敏活なる行動を執つて遺憾なからしめたる功績は、其の卓越せる手腕と才能を發揮したるものと云ふべくされば其功績顯著なるを賞せられ男爵に叙し華族に列せられしが、戰後內閣の更迭と共に職を辭し、爰に官海生活の一段落となつた、そこで更に實業界に入り、明治三十九年九州炭鑛汽船會社を資本金五百萬圓を以て組織し、其社長として經營に當つて居られるが同社の事業たる崎戸島炭鑛は其層二十尺、全島之れ炭、三千噸の汽船を橫付にして搬出する便利ある優勝の鑛區なりと云ふ、偶々戰後事業界の勃興時代に際し或る有力者等が鬼怒川水電の計畫あるや、男は其創立委員長として遂に大會社を組織したが、同會社の目的を遂行せんには前途幾多の困難ある事を看破し、利光一派に委ねて關係を絕ちたるが如きは亦以て男の半面を窺知し得べきである。

▲男を訪ふ

現在の男は貴族院議員として生產調査會委員等比較的閑散脾肉を歎じて麻布本村町に豪宕なる邸宅を構へ、爰に蟠居して居られる、著者一日男を訪ふ、幽邃にして廣濶なる邸內は先づ著者の目を驚かしめ、新築の尨大なる西洋風の應接室より更に案內に連れて大廣間に通ると、床には曾我肅白の大幅を掲け、金屏風を立廻して桐の大火鉢を据ゑられ、其他豪快なる裝飾は、如何にも男が人となりの半面を表現せるものと云ふべく、而して男は永く警部長たりし人なるを以て定めて深酷奇察にして圭角の人であらうと想像して居つたが、案外溫和にしし而も快活、謂はゞ心易き親しみ易き人である、迫に覇氣滿々と漲り、淸濁併呑底の雅量を見受け、何處となく親分的の風貌がある。

▲男爵の談話

曰く「先日來俄の用事で柏原へ一寸行つた、大阪の兄から君の事は聞いて居る夫れは面白い兵庫縣は封建時代小藩の割據で區劃されて居た氣風が遺つて居るので、團結力に乏しいから何事も勢力がない、吾輩などは隨分苦勞をして種種な事を遣つた、警察も遣る、行政官も遣る、遞信事務もやれば、政黨へも道入つた、更に會社をも遣つたが、怎しても地方の勢力がないと遣り難い、それに縣下の人は皆人間が少さい、どうも氣骨に乏しいやうに思ふ。

全體今の文部省の敎育制度が氣に入らぬ、昔の私塾時代には現今の如く學期が限定されて居らぬ、同時に入塾した者でも、各自天稟の優劣に由つて二三年も經つと大變に成績の上に徑庭が付く、纔に十五六歲の年少者でも輪講などに座長となると云ふ風に、秀才はドシ〳〵上達する、愚鈍の奴は何年經つても同位置に居るといふ風であつたが現今の文部省制度はさうでない、賢愚秀劣何れも其學期が來なければ卒業は出來ぬ、謂はゞ試驗制度で局量の少さい正直一方で一生懸命に書籍を暗誦して試驗の爲めに勉強する奴が成績優等などゝ言つて、

卒業すれば政府に使ふにせよ主として其成績を標準として居る。

隨つて如何に天才でも試驗に不得手であれば例令氣慨があつても用ひられぬと云ふ風で、段々人物が少くなる計りで立派な俊才、殊に大人物は埋もれて出ないと云ふ弊害がある、吾輩は嘗て文部省の教育制度の改良を主張して小學校位は學期を制限しても宜いが、中學以上は學期なしに俊才は一年でも半年でも實力次第で卒業させるし、愚鈍な者は五年でも十年でも置くと云ふ風に遣れば天稟の才氣は益々發揮せしめて、有爲の人材は早く社會に立つことが出來る、されば國家的にも個人的にも利益である、確に斯くあるべく信じて居るのである、併し吾輩は青年の氣骨を尊ふもの、、人は氣慨がなければ不可ぬけれども猥りに衣肝に足る的の狂暴の人間を云ふのではない、世が進歩する程秩序が整ふて來るから人は規律的に眞面目に活動するものでなければ、到底社會に立つて行くことは出來ないと思ふ云々

貴族院議員

田邊輝實君

氏は柏原藩士、父與氏は藩の權大參事たり、氏は幼名を豺之助、才吉、又は源吾と云ひ、後輝實と改む、幼より父に從ひ江戸に至り、其後藩の用務を帶びて維新前江戸に往復すること實に二十四回に及べりと云ふ、維新の際各藩共に去就に迷ひつゝあるに際し、獨り柏原藩が近畿中國に於ける勤王派の急先鋒となり、當時西園寺侯が山陰鎭撫使として巡視せられたるに當り、柏原藩が其護衛の任を命せられたるが如きは全く、故小島省齋先生と共に、氏が夙に勤王を唱へて之を指導したるに因るべく、隨て近畿中國の各藩が之に倣ひ無事に平定したるが如きも、一は以て氏等の功勞に歸せずんばあらず。

氏は始め召されて彈正臺の役人となり、織田子爵の家令として維新の際藩政改革に鞅掌し、後熊本縣屬官に任せられ、夫れより愛知、鹿兒島及び內務省の屬官となり、內務權大書記官となり、高知縣書記官としては北垣知事を佐けて難局を解決し、尋いで高知縣知事に昇任し、宮崎縣知事に轉じ、間もなく休職となる、而して後農商務省山林局長、佐賀、三重縣知事を經て內務省土木局長に轉じ、再び宮崎縣知事に任せられ、明治二十八年遂に職を辭したるものにして、官海にあること實に三十餘年の長年月に涉り、各治績の見るべきもの頗る多し。

近時小田原に閑居して貴族院議員として且つ錦鷄間祇候を兼ね老いて益々壯なり、著者一日氏を小田原に訪ふ、邸は靑嶂突如として聳ゆる小田原城趾に接し、老松欝蒼として其周圍を繞らし、而して建造物は故伊藤公爵が父重藏翁のために夏山に建設せられたるもの、當時公が末代の偉勳たる憲法の草案を起されたりと云ふ頗る歷史付の建築物、先年爰に移して今は氏の所有となる、邸の廣袤數千坪、前面城趾に沿へる蟠松は獨り昔の俤を偲ばしむ、而して此樹木は御用邸の所有なるも、氏が之れを借り受け庭園の風致を添更に一入幽邃ならしむ、氏は之れに因みて賃松庵と號す、性頗る豪宕にして古今の偉人を友とし、十方會と題する不識庵の扁額は之れを得るに容易ならざりしと云ふ、而して最も曾國藩を慕ひ、詩文を友とし悠々自適晩年を送りつゝあるものゝ如し。

氏は極めて人に接するや懇切、夙に後進を誘掖し田健次郎男を始め氏の指導に據るもの多く、寔に氏の如きは當代稀に見る偉材なりと謂つべし矣。

帝國大學教授

文學博士　村上專精君

身を佛門に起して、中途宗教界の腐敗に慊焉たらず、還俗して專ら身を教育に委ね、以て一世を指導しつゝあるもの之を村上專精氏となす。

氏は氷上郡野山村の教覺寺に生れ、八歲にして成松の行雲寺に養はれ、幾もなく親族の野花村教念寺に移り居る事六年十六歲にして姬路西鹽町某寺に於て學を修め、二十歲にして更に越後の某家塾に學び、在學四年轉じて京都本願寺の高倉大學に入り、卒業後一旦三河國寶飯郡入覺寺の住職となりしが、明治十三年本願寺大學の教師となり、同二十年東京曹洞宗大學の招聘によりて其教授に轉じ、兼大谷教校長を囑託せられ、同二十三年には帝大文科教授に任せらる、而して三十四年宗教界の時事に憤慨し斷然大谷派と關係を絕ちて還俗せ

り、三十二年に文學博士の學位を授けられ、同三十八年我國に於ける女子教育の堕落を慨き、自ら小石川に東洋女學校を設立し現に之を經營しつゝあり、蓋し世に博士たる者多しと云へども多くは父兄の學資によつて大學に入り、卒業して文部省の留學生となり、歸來博士に推薦せらるゝを以て常例となし、而して博士の七八分は皆然らざるはなし、抑々斯くの如きは秩序的勉强を積むに於ては之を得るに左迄難事にあらざるべし、然るに氏の如きは全く之れと趣きを異にし、少にして父母を喪ひ世にも憐れなる孤兒となり、親族緣者に養はれ長じて又學資に乏しく、或る時は椀徒の嘉拾を受け、亦或る時は味噌摺り坊主となりて、有ゆる世の辛酸苦闘を嘗め盡し遂に大成して今日の地位を獲得せるもの、氏の如きは實に後進者の好龜鑑たりと云ふべし。

令息龍興君は三十三年文科大學を卒業して、今や第五高等學校の漢文學主任教授たり。

▲先代嘉兵衛翁の略歷

身布衣より起つて文武の最高位に立ち天下の樞機に參するものは是を政治家中の偉人と云ふ、然らば空拳善く商業の機勢を制し巨萬の富を集めて覇を財界に唱ふものは卽ち實業界に於ける人物である。

氏は氷上郡の人姓を上田と稱し家代々農を以て業とす、十一歳市めて京都に往き、嘗て古金銀賣買を以て營業とせる、近州淺井郡曾根村の人横田某竝に同郡野寺村の人中川某が組合商店に丁稚奉公を爲し、只管主命を重んじ剋苦勵精すること十年、然るに同店は時維新の變遷に遭遇して商機を惹り商運日に非にして遂に閉店の止むなきに至りしが、氏は竊に期待する處あつて同店舗を讓受け、自ら之が恢復を圖つて主家の爲めにせんと、屋號を近江屋と稱し、兩主人の村名を冠して姓を曾野と改め、惡戰苦闘、種々の波浪と闘つたが、維新の變遷と共に一般經濟界の潮流は世界的の關係となり、外國相場の變動は直に日本の經濟界に影響を及ぼし終に一敗地に塗みれ又々閉店の不幸を見るに至つた、其後京極四條に微かに露店を張つて香具師的に潰金銀の賣買を營んで漸く口に糊することゝ數年、而も性投機心に滿々たる氏は妻子の衣類を典して僅に三兩の資本を造り、之を以て弗相場を試み運よくも忽ち百兩の利益を獲た、爰に於て寺町四條下る處に再び店舗を開き、大阪に往來して潰金銀の賣買を營み、多年の經驗は再び前過を覆さず之が爲めに今日の基礎を築き、明治十七年初めて株券公債の仲買を開始し時世の進歩と共に順潮なる發達を來し、京都市に於ける斯界の元老として巨萬の富を贏ち一大成功者として謳はるゝに至つた。

蓋し方今世の青年徒らに浮華に流れ着實を厭ひ直に一攫千金を夢想するもの多く、從つて吾人は投機界の成功者を目して、青年の模範として吹稱せんとするものではない、然れ共人の通有性は投機心のあらざるはなく亦叨りに之を矯むるの愚なるを知る、而して氏の如きは近時成金黨と稱するものとは其選を異にし、天性の英才にして萬人の企て及ばざる才幹あり、加ふるに裸一貫を以て身を起し千辛萬難遂に今日に迫んだ人である、故に之に倣ふて及ばざるや遠しであるが亦一大成功者として大に吹稱すべきものである、而も悲しい哉二豎の冒す處となり四十四年五月忽焉として逝き今や則ち亡し矣。

故曾野嘉兵衛君

▲當主作太郎君

氏は氷上郡和田村に生る、先考嘉兵衛翁の愛甥にして十二歳養はれて嗣となり、幼少京都市塚本家に丁稚奉公を爲し、十六歳家に歸りて家業を補佐し、明治三十一年家督を承けて取引所仲買業を繼ぐ、氏は亦道に翁の鑑識に協ふて夙に家督を委ねられた程あつて夙に見るの英才時世を看るの明があり縞に謂らく『古來我國一部の思想は投機業を以て或る意味に於ける一攫萬金の賭博的事業として之れを排斥するの風がある、然れども之れ卽ち封建の思想にして現在の狀態を知らざるもの、抑々投機の業が生產的需用供給の指針となり、金融機關の調節となり、經濟界に於ける國家有用の機關たることは言を俟たぬ、而して其排斥せらるゝ所以の一は當業者の人格劣等にして唯自己の利益に而已汲々として社會に惡影響を與ふるの行爲あるを以てゝある、故に當業者は互に戒飭して信用を重んじ、危險を避け商工業者の指針となり、先輩者となつて社會に貢獻しなければならぬ』と斯る觀念を以て常に斯業に從ひつゝある氏は嘗て京都電鐵が社債を募集せんとするや、之れを引受け自己の信用を社會に訴へ斯業界の有用なる本務を發揮して理想の一端を實現せんものと、一般銀行者よりも利率を低くし、自ら一手に引受け、而して一般に提供

した處が僅に一週間を出でずして其額五倍に達し一般銀行業者をして唖然たらしめた、之れ即ち我國に於て會社債券の募集を仲買人に依つて取扱はれたる嚆矢にして慥に經濟界の一進歩とも稱すべく、斯る好結果を得たる所以のもの一は機會の良好なりしにもよつたであらうが、又氏が信用の如何に確實にして、其手腕の凡ならざるものあるを認むることが出來る。

陸軍教育總監本部長
陸軍少將 本郷房太郎君

縣下出身の先輩は後進を誘掖しない、隨つて後進も亦先輩を推戴しない、故に團結心もなければ地方の勢力もないとは吾人が常に憤慨する處、蓋し本書編纂の趣旨も亦一は茲にあるのである、然るに獨り篠山藩は累代の藩主に英君あつて夙に人材の養成に意を致されたることは已に青山家の下に概略之を紹介したる處にして、今や同地出身の士にして陸軍將校以上の地位に在るもの百名以上に及ぶと云ふ他日同地が陸軍に於ける勢力の甚大なるものあるや必せり、亦旺なりと云ふべく常に吾人が縣下の一大恩人として否全國に於ける大名華族の典型として之を推稱すると共に深く感謝する處、而して其今日に至れる藩主青山家の功勞にあるや勿論であるが、抑も又同家が不幸代々早世せらるゝものあるに拘らず、之を補佐して家政を維持すると共に、之を擁して育材の一大事業を經營しつゝある所以のもの一は同地出身先輩諸氏の功勞に歸せなければならぬ、而して其先輩として之が衝に當りつゝあるものは、同家の家令箕原貞明、鳳鳴義塾前の一瀾塾長並に少將石橋氏等にして、殊に氏の如きは少壯豐岡師範學校在學中同地の先輩猪子清、久保田清一氏等が後進の提撕に盡しつゝあるを見て大に覺る處あり、幸ひ青山家の唱導と相俟つて茲に意を致せりと云ふに至つては、其功勞を多とすると共に人と爲りの一斑を窺ふことが出來る。

氏は明治七年豐岡師範學校に入り、身を以て教育に任ずる覺悟であつたが、青山家先々代忠誠公が近畿中國に尚武氣象の振はざるを慨して軍人養成に志し、藩の子弟中より數名の俊才を拔擢して軍人たらんことを慫められ、爲めに師範學校を退學して明治十年士官學校に入學し同校を卒へて少尉に任せられ、名古屋に赴任して專ら測量の事に從ひしが激務の結果腦病に罹つて休職すること八箇年、同十八年士官學校教官生徒隊付を命せられ日清戰役當時は久邇宮梨本宮の教育主任たりしが故に出征せず二十八年少佐に進み、第四師團參謀となり、二十九年軍備擴張の爲めに軍務局に入りて戰後の擴張に任じ、三十三年中佐に進み再び士官學校戰術軍制課長として生徒隊付を兼ね、同三十五年步兵第四十二聯隊長として山口に轉じ、分捕事件後の刷新改革を圖り、日露戰役の際第二軍に入り出征、之が先陣となり南山、得利寺、大石橋、析木城、海城、遼陽等に轉戰して偉功を奏したるは人の知る處である、然るに尚戰役中陸軍省に於ける後方任務の材に乏しく拔かれて高級副官となり之れが劇職に任じ、俘虜情報局長官竝に人事局長を兼ね列國環視の間に俘虜の交換を完うしたる手腕は人の稱讃する處、亦人事局長としては戰後に於ける人事整理と恩賞を司り、四十二年軍事視察として佛、英、獨、墺露國を巡遊し、歸朝後教育總監部本部長に任せられ、現に教育軍政、步兵操典竝に典範等の改正を掌つて居られる。

頃者說を爲すものあり氏が今日の榮職に在る所以のものは才氣縱橫にして處世の才に敏く、夙に藩閥に歸化して彼等の迎合に努むるによるとなす、然れども這は誰ゆるの甚だしきもの、夫れ或は然らん、然れ共氏は當世一片自己の榮達と名利に汲々たる小才子の輩とは之を異にし、性溫厚にして襟度あり人を推輓するに藩閥に心を兼ねて依怙を挾むやうのことなきは、氏が日露戰役の人事局長として比較的恩賞に批難のなかりしことを以て證據立てゝ居る、而已ならず以上略叙せる經歷に依つても拔群の英才たることが解るであらう、素より氏は石本中將と同く三軍を叱咤して天下を席捲すると云ふやうな豪傑ではなく、寧ろ軍政的の智將ではあるが、其博覽強記と後進を指掖するに熱心なる處は亦人物の貴い處がある

歩兵第八旅團長
陸軍少將　石橋健藏君

氏は篠山藩士、幼にして頴悟俊才を以て鄉黨に推重せらる藩主青山忠誠公夙に尙武の志に厚く、而も世は漸く泰平に慣れ武を顧みるものなきを慨し、明治八年貢進生として、市の瀬、畑、大原、安藤、箕原等諸生を拔擢し資を給して陸軍士官學校に學ばしむ、氏は士官學校を卒へ後更に陸軍大學に入り累進して少將となり現に姬路師團の旅團長として、武名燿燿たり。

青山家は不幸代々早世せらるゝ雖も能く忠良なる藩士あり同家を補佐して家政を鞏固ならしむると共に、主として同家の經營に係る、鳳鳴義塾が陸軍將校志望者の養成所として聲聞あるのみならず、校規の嚴肅、風紀の素朴にして模範的中學の稱あり、然も之が指導に與つて力あるもの塾長園田定太郎氏を初め先輩として氏の如きあり、共に藩公の遺志を體して、後進の扶掖に盡瘁しつゝあるに因る。

兵庫縣出身の武人として中將石本、藤井の兩氏あり、少將本鄉氏あり、海軍少將藤井光五郎等何れも聲威隆々として衆望の標的たるに反し而も少將石橋氏の如き夙に陸軍大學を出で參謀として久しく中央本部に在り令名喧々たりしにも拘らず元來硬骨にして毫も權門に阿ねらず、比較的失意の地位にありと雖も、其才幹と學識とは同輩を壓するものあり、昨秋陸軍大交迭に際し大阪師團より姬路に轉じたるもの、吾人は姬路師團が縣下出身の將軍を迎へたるを歡ぶと共に人は位置の如何を以て論ずべきにあらず、氏は人爲り重厚にして毫も名利を趁はず、至誠一偏國家の干城を以て任ずるの人、蓋し小利口なる小才子に富む兵庫縣の地に氏の如き寬厚偉大の將軍を出したるを異とするに足るべく而して氏が今日に迨べる經歷は龍擧虎擲必ずや筆端風起り靈生するの偉觀もあらんと一日大阪師團に訪問せしも氏は默して語らず、爰に之を詳說する能はざるを慨む。

ドクトル　松本需一郎君

氏は氷上郡新鄉村に生る、其祖先は神東郡粟賀村の出、八代以前の淳庵氏が初めて丹波に移り代々醫を以て業とす。

氏は十一歳にして大阪市今橋の叔父松本俊平氏に養はる、幼にして醫を志し東京大學に入つて明治二十二年業を卒ゆ、夫より播州御影町に開業して居ること七年、同三十年大阪新町に秘尿專門の博愛病院を開設し、氏が學術に熱心なる膀胱機械の如きは大阪病院に先んじて之を購ひ、學術の應用と實際の手腕を兼ね、聲名嘖々として引續き同病院を經營せること十箇年、漸く幾何の資を積むに迨び、俛迄小成に安んぜる氏は更に斯學の蘊奧を究めんと志し奮然起つて海外留學の途に上りぬ、此時に當り氏の知友は氏の爲めに惘つて曰く、今や博愛病院漸く其緒に就きぬ、然るに一朝之を閉鎖して遊學せんとするは氏の熱心や嘉すべしと雖も、一面氏の不利益にあらずやと、而も氏は之を斥けて曰く、諸君の勸告は厚く之を謝するに足る、然れ共這は余輩一個の利害而已、余が多年敬慕せるコヲールマン氏今や當に老いんとす、今にして就いて學ばずんば他日悔ゆ共及ばず、道を究むるに豈利害を顧みるの遑あらんやと、決然として遂に航しぬ、直にライプチヒ大學に入り、嘗て敬慕せる大家コヲールマン氏に就いて秘尿科を專攻し居ること二學期、其蘊蓄を究めて爰にドクトルの學位を受け、後ミユンヘン、ヴキン大學に入り、ブダペストの國際醫學會に出席し、佛國パリー大學を視察して英國に至り露國を經て昨四十三年一月歸朝せり。

あゝ方今の青年何れも大學に入らんとするものを見るに、彼等の多くは學門の爲めにはあらずして單に肩書を利用して以て世に處し己が利益を圖らんとするもの一面世間の開業醫師を見れば彼等は人を治するの蘊蓄なく、責任なく、專ら醫政を巧にして人を迎へ以て自利を貪らんとするもの多きの時に當り、自己の利害を度外に置き、俛迄蘊蓄を究めて國家社會に貢獻せんとする氏の如きは眞に學術に忠なるもの、當今腐敗堕落の刀圭社界に稀に見るの人物たると共に亦青年者の好敎訓ならんか。

歸朝後更に高麗橋一丁目に於て秘尿專門を以て開業せり、氏が多年の經驗と熱心、加ふるに泰西の新智識を應用し、崇高なる人格は至誠以て斯界の爲めに貢獻せんとす、蓋し今後に於ける發展の偉大なるものあるを疑はず矣。

住友鑄鋼所副支配人　羽室庸之助君

氏は篠山藩士、大阪高等工業の出身、明治二十三年鳳鳴義塾に聘せられて理化學の教鞭を執り、同二十八年若松製鐵所の設立と共に同所技師に轉じたりしが、氏の非凡なる手腕は忽ち同所に認識さるゝと共に、同所が鋼鐵製造開始に付き之が技術研究の爲め特に獨逸に派遣せられ、有名なるクルップ會社に入り、專ら鋼鐵製造の方法技術を研鑽し、三十年歸朝するや、同製鐵所は財政の都合に依り鋼鐵製造の創設を中止することゝなり、されば氏が多年研究して蘊蓄淺からざる技術も遂に應用する處なく誠に遺憾の極みであつた。

斯くて氏は止むを得ず希望のある處を博士平賀義美氏に謀るや、博士は痛く氏が心情に同情すると共に技倆を認め、同志片岡直輝其他二三の出資に依り、大阪に於て日本鑄鋼所を設立し、氏は此の技術の一切を統轄することゝなつた、是卽ち本邦に於ける鋼鐵鑄造の嚆矢である。

然るに爾來經濟界の銷沈となり、到底小資本を以て鋼鐵製造の如き大事業は、經營の困難なる計りでなく姑息の遣方にては却々成功の望みなきを看取し、明治三十四年請ふて住友家の經營に移し、工場、機械、從業者一切を擧げて同家に提供した卽ち現今の住友鑄鋼所之れなり、隨つて氏も亦共に同家に入り、爾來副支配人として專ら製造の技術を擔當し、現に其事業の發展に努力しつゝあり。

氏は單に工業上の一技術家たるに止まらず、頗る事務の才に通じ亦人格の士である、性溫順にして重厚、名利の念に淡く、已れに最も薄くして僅に餘裕を生ずれば子弟の訓育に盡すを以て快となし、其家庭は依然鄕里篠山に止めて、獨身鑄鋼所に起臥し、部下と寢食を共にするが如き、其品性の高潔なる人格の高きを窺ふことを得べく、蓋し自利に汲々たる當世の工業界に於て稀に見るの人であらう。

飯田合名會社　金原與吉君

篠山藩主青山家は夙に尙武氣象の涵養に勗め、私塾鳳鳴義塾をして軍人の養成に充て義塾の出身の士が多くは武人となつて來る、殊に軍人なるものは當はゝ國家の門番である、怎うしても國家の根基は實業にあると云はざる可らず乃て同窓何れも武を以て身を起さんとするの時に當り夙に商業界に身を投じたる金原與吉氏の如きは寧ろ其志望の遠大なるを賞すべく亦義塾出身者中の一異彩である。

氏は氷上郡久下村大志野幸太郎氏の次男、幼少學を好み鳳鳴義塾の創設せらるゝと同時に之に入り卽ち郡外入學生の嚆矢なりき、後篠山藩主金原家に入つて其姓を冒し、卒業後更に京都神戸に笈を負ひ終に大阪商業學校に入り、卒業後鹿兒島商業學校の教諭に任ぜられ教鞭を執ること二年、後京都飯田新七氏の聘に應じ其市京支店詰めとして爾來十二年、專ら飯田家の爲めに獻身的に貢獻しつゝあるは以て多とするに足るべく、氏は赴任後先づ其基礎の鞏固を圖ると共に秩序を整ふることに腐心し、而して漸く其緖に就くや爰に初めて東京丸の內に其本部を置き、倫敦、巴里、紐育、漢堡、濠洲シドニーの各地に支店を設け、內外

に其設備を施し、而して事業を行ふは人材を俟つにありとなし、何れも帝大高商出身の高等教育を受けたる新進の人物を傭聘し、氏自ら之等の人々に實務を教へ、然る後各所に配置して各自奮闘の任に膺らしめ、又時々修養講話其他實際に關する著述を爲し、之れを飯田家の各店員に配布して共嚮ふ處を知らしむる等、最も文明的の指導に任じたるの結果各人何れも貿易場裡に彼等諸外國人と相對して遜色なく軍突整然旅順堂々內外各所の十五支店と相呼應して貿易界に於ける三井大倉組に對抗し、同社が發展活躍の偉大なるものあるは世人の畏敬する處にして亦氏の力に俟つ處多し。

氏や晉性淡泊丹波出身の實業界に於ける一異材たるを失はぬ。

（四十三年中歐米各地に巡察し實地施設を爲すと同時に各種の調査研究を重ねたること多く、視察の大に見るべきものあれ共爰に略す）

摂津紡績會社支配人
塚口賭次君

本邦紡績界の重鎮摂津紡績が隆々今日の發展を見るに到りしもの、素より經營者其人に乏しくないが、一は現支配人塚口氏の手腕に待つ處も又決して少くない、關西の紡績界に於て少壯敏腕家として、稀に見るの英才であらう。

氏は氷上郡沼貫村塚口國之助氏の次男にして、明治二十八年大阪高等商業學校の出身、一年志願兵として服役後住友銀行に入り、明治三十一年更に平野紡績會社に轉じ、入社間もなく米棉産地の狀況、綿絲の取調及歐米に於ける紡績業の狀態視察、綿絲販賣擴張を兼ねて歐米及清韓地方視察の途に上り、各地を巡遊すること三箇年、同三十三年秋歸朝せしが、此の如き拔擢は洵に異數として當時同輩の羨望せる處なりき

斯くて歸朝の翌三十四年支配人となり、三十五年摂紡との合併により更に兩社合併後の支配人として、三十六年更に原棉輸入狀況取調の爲め印度を視察し、斯界に於ける世界的智識を斎し、現に同社の事務を統轄して其發達に努力して居られる。

氏は性謹厚又一見才子肌の風彩あり、輪廓は少さいやうであるが、紡績界に於ける忠實なる事務家として將來を嘱望するに足る。

▲令弟積次郎君

令弟積次郎氏は大阪高等醫學校出身、世の青年醫家が多くは繁榮に憧れ、自己の利益に汲々として未だ充分の經驗なきにも拘らず、直に開業せんとするものあるに反し、獨り氏が最も高尚なる基礎醫學、解剖學の研究に身を委ね、斯界に貢獻せんとするは學界の爲めに多とするに足るべく、氏は曩に福岡醫科大學教諭となり、現に母校たる大阪高醫に教授として、學界に於ける麒麟として、今後大に聲名を馳するの時あるを疑はぬ。

内外棉株式會社支配人
横尾孝之亮君

内外棉花會社が一時の悲境より復活して今や本邦に於ける紡績原料の一大供給機關を以て任じ、堂島裏通りに壯大なる店舗を新築して一異彩を放ちつゝある所以のもの、全く支配人横尾孝之亮氏の手腕に負ふ處鮮からずと云ふも敢て過稱にはあらざるべく、而も同社の經營振りは最も質實なるが故に隨つて氏の存在も亦比較的社會に認識せられざるの觀ありと雖も入社以來既に二十餘年、倦まず撓まず孜々として今日に迨べる、其忍耐と誠實に至りては優に模範的の事務家と謂つべし。

氏は氷上郡和田村に生る、家代々農を以て業とし、同地の素封家として夙に里人の敬仰を受く『家兄敬造氏は幼にして聰慧郷儒植木環山の門に漢籍を修め、後東都に遊學し、少壯身を政治界に投じて大隈伯の改進黨を組織するや同黨に參加し、篠山の法貴發氏に拮抗して政治思想の皷吹に努め、同地方少壯政治家として大に嘱望する處あり、多年の宿志は遂に帝國議會の開設となり、將に代議士として其經綸を實現せんとするに當り惜しい哉不幸二豎の爲めに東都に客死し、今尚里人の愛慕して措かざる處なり矣。

氏は去る二十二年大阪商業學校を卒へ、翌二十三年内外棉花會社に入り累進して支配人となり以て今日に至る、其間二十年一日の如く孜々刻苦眞摯熱心なる經營の結果は遂に同社の今日あらしむるに至れり、而して同社の業務たるや各紡績會社に原料を供給するを以て目的と爲し、其附帶事業として三箇所の紡績工場を有す、由來相場變動の急激なる棉花の賣買は商機を捕捉するに最も敏捷を要すると共に、總て米國、印度等の遠き海外より之が供給を仰ぐものなるが故に、價格の變動需給の關係に至りては殊に精細なる調査研究の必要あり從つて世界的の智識を要する至難の業務たるに拘らず、氏が常に機宜を誤らず擔任經營其宜しきを得つゝあるを以て見れば、我國有數の棉花通として推重するに足るべし。

氏は人と爲り謹厚にして一見尊大なるが如きも、這は氏が性格の然らしむる處、親しく接するに及んで情味湧出し當世高襟風の會社員的脈味もなく、頭腦の明晰にして精力の旺盛なる慫くべきものあり、以て縣下後繼的人物として嘱望するに足るべし焉。

阪神電氣鐵道會社　技師長　三崎省三君

氏は氷上郡にして幼少頗る旅行を好み、十五六歳の交漂然家を出でゝ東京に抵り、芝の方を散歩して居ると兵庫縣士族福原直道と云ふ標札が目に着いた、夫れから主人の福原氏に面會を求め、辯護士の志望を陳べ法律を學ぶ爲めに食客たらんことを請ふた、處が直に福原氏は氏を諭して言はれるには方今時世の趨向は空理空論を以て世に起つべきでない、須らく工業家たるに如かずと、親切なる福原氏は其旨を氏が國許に通知すると共に自ら紹介して東洋英語學校に入れて呉れた夫れより又本郷の成立學舍に入り在學前後四年、其間大に工業に趣味を有して自ら空中飛行家たらんとし、僅に旅費を調へて明治十八年米國に航し、スタンフード、バアジユー大學に入り、別に學資が有ると云ふ有福な身分でもないから、傍ら勞働に從ひ漸く糊口を凌いで在學中電氣學に轉じ、之が研究に從事すること九年間、或は學理に或は實際に終に其蘊蓄を究む、明治二十七年に歸朝して、直に三吉電氣工場に入り折柄京都電鐵の起工と共に之に要する機械の製造を監督し、同電鐵の技術顧問となり、其後高知電鐵、伊勢電鐵の敷設に際し聘せられて其一切を擔當したりしが、恰も阪神電鐵の敷設に付氏の力に俟たざるべからずとなし、外山氏の請によつて同社に入り、本邦に於ける模範電鐵として氏が手腕を讃歌せられつゝあるは人の知る處、由來兵庫縣人は華奢にして優柔、空論拱手以て世に處せんとするもの多きに際し今や氏の如き工業界に一大手腕家を有するを悦ぶ。

▲其他出身の士

丹波出身の士にして、佐治少將、井上雅二、市瀬恭次郎氏其他軍職に在る將校に至つては殆ど百を以て數ふべく編者は未だ面識なきを以て爰に紹介することを得ず、他日續篇に譲る。

男爵　樞密顧問官　九鬼隆一君

（明治四十三年十二月稿）

▲男の略歴

男は三田藩士星崎貞幹氏の第二子嘉永五年の生れ、幼名を貞次郎と云ひ君命によつて綾部藩の家老九鬼隆周の養嗣となり、名を隆一と改む、幼少の交川本滴次郎、近藤東作氏其他に就いて西洋練兵竝に經學を修め、明治元年市めて十六歳藩の權少參事、兼藩校道學館の督學、竝に洋式練兵の中隊長に任せられ、藩政を補翼して居られたが折柄明治維新となり、天下の形勢頓に一變せるに際し、竊に將來の趨向を洞察して西洋の學事文明に接觸せざるべからずと爲し、福澤先生竝に米國人の「フルベッキ」氏の門にへつて英學を修め、明治四年二十歳初めて文部省に出仕し大學南校の生徒寮長を命せられ同年文部の奏任官に拔擢せられて大學東校の副校長事務專任を命せられ、當時同校生徒の間には種々の惡弊があつたそこで男は此積弊を矯革せんとして大に奮勵された事は人の能く知る處である然るに生徒中男よりも五六歳も年長者があつて少壯の副校長たる男に綽名を附して若年老衆と言つた程であつた。

▲壯快なる留學生退治三十萬圓の節約

當時各省とも草創亂離の際にて文部省の經費が年額僅に八十萬圓内外、其内三十萬圓は官費留學生二百六十名の經費であつた然るに此留學生が眞に國家の運命を擔ふて立つと云ふやうな者は甚だ尠く、又各自に各專門の學術を研究して國家の將來に貢獻するやうな見込のあるものは峯々として多くは

薄志弱行の徒なりき、然るに文部の經費中から約其半額を之が爲めに支出して居ると云ふことは一般の學政進展の上から傍觀すべき場合でないと言ふことを感じたる男は、直に臺閣の諸公に向つて官費留學生の大刷新を建議し、辯難攻撃せられた處が、參議の西鄕、江藤、大木氏等が之れを容れて大に刷新を斷行することゝなり、男は乃ち此任を帶びて歐米へ出張せられた、素より男と雖も留學生を派遣して新進の人物を作ると云ふことには反對ではない、寧ろ大に養成したいと云ふ考へを持つてゐられたが、併し現在の留學生を見ると何れも薩長土肥の子弟ばかりである、此れは卽ち彼等が維新の鴻業に由つて尙將來閥族を養成せんとするもので、詰り國費を私しするものであると云ふことが頗る憤慨に堪へないので、玉石混淆の留學生を淘汰すると共に之れを全國平等に派遣したいとの意見であつた、けれども表面此事を言ふと容れられない事が判つてあるから、其敢本主義は深く藏して知らしめなかつた所以である、夫れから歐洲に航して使命を發表せらるゝと、留學生は非常に激昂して九鬼の惡魔が來た一擊に倒してやるとか、飛檄遊說相同盟して大反抗を企て頗る危險なりしも、併し他迄泰然として居られると一日巴里で文部中博士入江文郎、當時司法省の九等出仕井上毅、外に官費留學生の中江篤介や、今村和郎等が打連れて留學生改革處分の辯駁に遣つて來た、そこで男は自若沈痛なる態度を以て懇切として居る胸中の持論を披瀝し、三時間程舌戰論爭して後徐ろに一片の意見書を出し之れを示された處が、四人共に輪覽して居つたが其裏面の理由、卽ち王政復古について生死の境に出

入した人々が、今日臺鼎の重任を負ふて大政を攬理せらるゝのは當然の事理で固より異論を挿むべき處ではない、然れ共國家百世の根基を定むべき文教の發達については自私偏頗あるを容さぬ、若し今日の如く臺閣諸公が其勢威に藉つて四藩の爲めに私し、他日時移りて全國の怨府となることあらば百弊之れより起つて、其極如何なる結果を來すやも測られない余は大に之を憂ふるものであると、留學生の族籍別を擧げたる表を示されると大に悟つたものと見えて、また其言の單らない中に中江が私は大に誤つて居つた、此度の改革に極力反對を企て反抗遊說の爲めに倫敦にも行き、伯林にも趨く、大に留學生間を煽動したが、今深意のある處を聽いて今迄の誤見を悟つた、其妄行の罪を償ふ爲めに今日官費留學生を辭しますと言つて、直情徑行の人であつたから直に鮫島小辨務使を訪ふて之れを辭した、亞いで今村も辭したさうである、そこで歐洲に居る留學生反抗の氣焰は大に減退したけれども、米國の方は容易に沈靜の模樣がなく、男を狙撃せんとするので纔に身を以て遁れられた位であつた、しかし大勢は既に定まり總て男の意見通りになつて歸朝せられ、其後新に俊秀の者を選拔して派遣せられたのが今日名を成して居る所の小村古市、鳩山、菊池、穗積、和田、安藤、向坂、齋藤、岡村等其他二十名程である、果して男の眼識遠はず何れも現今政界や學界の柱礎となつて居る人ばかりである。

▲其後の閲歷

此事は非常に當時の政府を感動し、木戸侯が文部卿とならんと共に深く男を信じ等輩に擢でたる登用をして文部大丞に任ぜられ、法制官並に太政官大書記官を兼ぬることゝなり明治十年に佛國大博覽會審査官及び教育理事官を拜命して同國に航し、歸途歐米各國の教育、美術並に殖産の實況を視察して歸朝し、同十三年二十九歳の時に文部の少輔に勅任せられ、元老院の議官を兼ぬ、當時同議官に陸奥宗光、中島信行氏があつて、何れも年壯氣鋭の俊才であつたが就中男が一番の年少であつた、又同時に內國博覽會の審査總長を命せられ功を以て銀盃金圓などを下賜せられ、而して男が一代に最も熱血を傾注せられた處は文部省である、在任中長官の更迭十二人に及びしも各長官を補翼し多年其職に在りしが故に朝野共に大丞卿少輔大臣などゝ綽名したさうである、男は又當時滔々たる歐化主義に反して嘗公の和魂漢才說に同じて、和魂洋才、和魂洋學說を主張して之に反對せられしが、而も朝野の歐化主義は猛然として全國を風靡し又如何共するに由なく殊に明治十六年歐化主義の權化たる森有禮氏が歸朝して文部大輔に任せらるゝに及び多年の城壘を卽渡して新に全權公使に轉じ寺島伯の後を襲ひ米國に駐劄せられた、而して米國駐劄中日米間の罪人引渡條約を完全なる對等條約に締結せられたるは我國の歐米列强と對等條約を締結した嚆矢として大に功勞あり、同二十一年に任期滿ちて重任を勅められしも夫人が重患の故を以て其職を陸奥氏に讓り、歸朝後宮內省の圖書頭に轉じ、第三回內國勸業博覽會審査總長を兼ね、從三位勳二等に敍せられ、更に樞密顧問官に親任せられ、特に男爵を授けられ從二位勳一等に陞り旭日大綬章を賜ひ以て今日に迄んで居る。

▲氏が美術上の貢獻と美術談

編者一日男を永田町の邸に訪ひ、美術談を披瀝せられんことを請へるに應じ、崇重なる體度を以て諄々と語つて曰く。

予が美術上の嗜好は先づ天性と云ふべく幼少より之れを好み、例へば十七歳の時福澤先生の內にて、先生が君は掛物を嗜くからと云ふて五岳の軸物を貰つたことがある、けれども之の方面に向つて最も鼓吹したのは明治五年に洋行して西洋の形勢を視察し大に感ずる處あつたからである、其後佛國の博覽會に出張しては日本の美術を世界に紹介し其眞價を知らしむると共に代價を昂上せしむることに勗め、內にあつては美術家に美術工藝に最も意を用ひて千有餘年の系流特色より當面の趨勢進歩の正路に就き、斷じて論議を公にして各美術家を導き其他一般の人々に警告して來た、在官中有形上の事蹟としては古社寺保存法、卽ち國寶保存、古建築物保存法を制定し、又東京、奈良、京都の三帝室博物館の設立、帝室技藝委員の設置、全國寶物取調等である、最も東京の博物館を創設したのは大久保公であるが、余はこれを擴大して倍以上となし又これを整頓したのである、奈良の方は時の內務大臣、奈良縣知事、社寺局長等が反對したが百難を排して之れを創設し、全國寶物取調委員長は今日迄引續き三十年其任にあるが、最初は卽々の困難で全國古社寺の取調に就いても之れを拒むこと の出來ないやうに、太政官、文部、內務、宮內省の附屬として大臣の三條公より嚴重なる委任狀を貰つて之れに臨み、二十五人の部下を伴うて殿冬酷暑の別なく全國の古刹佛刹を探尋して其傳來の沿革、彫刻、其他の什寶については毫も漏す所なく精査畢究して一々的確に案斷を下し、何れも保存の法を設けて之を喪失せないやうにしたのである、蓋し當時我國人の美術に對する觀念は實に幼稚にして、社寺の住職、宮司等の不埒なものは竊に之を賣放して金を儲けんとするものあり、又惡意ある譯ではないが不注意にして立派な建築も雨露に晒されて居ると云ふ有樣、此儘放任して置いたなれば傳來の國寶美術も或は外人の手に委し、或は煙滅に歸する憂ひがある、夫れを遺憾に思つて此保存法律を制定し、又自ら取調の衝に當つた譯であつた、一例を擧げると當時高野山に

墓誌銘都筆の二十五菩薩の三幅對があり、其箱を披た處が中から鼠が二匹飛出る箱の中は鼠糞で填まつて居ると云ふ有樣、之れは單に富野丈けではない當時は比々皆然りで、此事は當時奈良に於て演說して大に警告した事がある、而して此軸が當時なれば金の二十圓も遣れば悅んで賣つて呉れたであらうが、(最も取調委員は買入讓受は堅く禁じてあつた)然るに後八幡講社の所有に歸し余が博物館の總長を兼任して居る時代に賣りに來た、そこで一萬圓位なれば買つてもよいと思つたら八萬圓と云ふから買はなかつたが之を以て一斑の推測が出來るであらう、故に保存法律の制定は單に國寶保護のみならず之れを經濟上の點から觀ても隨分利益を與へたであらうと思ふ、一體美術と云ふものは文明の程度により人の腦力が發達すると共に正比例して價が昂上する、西洋に比すれば日本はまだ〳〵百分の一である、又日本に於ても德川時代に比すれば未だ價は廉いと思ふ、例へば小松宮殿下御所藏の九鬼文琳の茶入れの爲めに數百金を拋つを吝しまずと云ふことがある、卽ち當時の價格を語るもので恰も寛永時代であるから、其頃の數百金は現今に比すると非常なる大金である、此れを以て見れば日本の美術は前途大に昂上するであらうと思はれる。

余は素より日本固有の美術を愛すると共に前にも述べた通り國粹保存論者である故に嘗て公使として米國に赴任するに當り軸物を三百餘携帶して、常に公使館に於て宴會を開く時の如きは此軸物を掛けて裝飾に供へたが西洋の油繪などゝ異り、其度毎に掛代へ得らるゝが故に、西洋人は其目新しきに驚き非常に賞讚して、同地の新聞が日本公使館は世界のアセンス、否米國のアセンスなりと稱揚したことがある、又妻の如きも大抵日本服を用ひしめた、怎うしても日本婦人には西洋服は不似合である、元來西洋の婦人服は西洋人の體格に適して外形美を發揮する樣に努め、日本の婦人には同じく形體に適當なる日本服が造られてある譯であるから、從つて日本婦人に洋裝が適しないと云ふ結論は直ぐに下される、單に適不適問題のみならず日本の婦人服は、長い袖をひいた所や殊に帶は其生命で各形體の不恰好な處を補ふやうにしてある、西洋婦人服も單に適するばかりでなく、又益々形體美を發揮するやうに作つてあるのであるから、釣合はないものを用ふる時は從つて醜化することになる、又經濟の點から言つても、婦人の洋裝は相當に飾れば寶石丈けにも莫大なる金も要るが、日本服なれば珊瑚や鼈甲位を以て事が足る、而して日本婦人が洋裝をして居ると裝飾が偶物だらう抔と云はれて大に品位を失ふ而已ならず又到底西洋婦人に對抗は出來ない、然るに日本服なれば輕便で品位を保ち反つて賞讚を受ける、故に日本婦人は和裝に限るがこの和裝に改良が出來ないかと云ふと大に餘地がある前年巡羅皇帝殿間の博士政尾に嫁を嫁したが一切日本服にして色々工夫をこらし、ダンシンケ、なども出來得るやうに仕立て、やつた處が、同國皇室に於ても非常に賞讚せられたやうである、故に總て美術、工藝、服裝又は裝飾抔は心を用ひて成るべく國粹を發揮する樣に努むるがよいと思ふて居る。

夫れで總ての美術も又此服裝と同じく、なるべく國民の性質に適合するやうに發揮せしめなければならぬ、近來余の最も喜ばしいことは、彫刻に於いて木彫が大分現れて來たことである、本年京都の博覽會にも大分出て居る、こゝ數年前迄は彫刻と云へば直に石膏抔を用ひ、木彫は殆ど廢絶に歸して我國斯道の爲めに憂ふべき現象であつたから、余等は數年來口舌を費して警告した次第であつたが、其效驗か否かは兎も角本年より木彫が多く現れるやうになつたのは實に喜ばしい現象である、元來日本の彫刻が最上の點まで達した原因は、彼の木彫が日本國民の性質に適合せるに因る、日本國民の恬淡にして無邪氣に、輕快にして清潔に、高雅にして溫順なる性質は、金銀に石の彫刻の如く、雜澁なる硬質へ、コチ〳〵と氣永に耐へ忍んでやるやうなものに適合しない、却つて夫れが日本繪畫の毛筆を以て紙や絹の上に洒々落々と揮毫する如く、比較的簡易に運刀の力を發揮して木彫に成功した所以である、日本の木彫は世界に對して劣らざるのみならず、余が實地國寶を調査した所に依ると木彫は非常に優秀なる作品が多く、其傑作が日本と全世界と相匹敵する程である、そこで此日本國民の性質に適した木彫を捨て、仕舞へば、日本の彫刻は滅亡することは恰も毛筆筆を廢して仕舞へば日本の繪畫が滅亡すると同一である、毛筆筆と木彫、何れも日本國民の性質と自然に適合進歩して來た所以である、故に飽く迄奬勵せなければならぬ。

夫れから余は赤心血を濺いで美術發達の爲めに美術學校を設立した、從つて現今の美術學校の生徒養成法に就いても意見があつて多年論議して居るが、政府は世間を顧慮して用ひない、一體彼の佛敎でも法然が普通主義を唱へ親鸞が之れを承けて實行したので、念佛丈けは普及したけれども、其反り俗化して仕舞つた、其の佛敎を守るものは此主義の人にはないと同じく、美術の如きは一は天性に由るものであるから、天性美術家の素質あるものは努めて之れを養成して、其天性を補育すると共に、天性美術家の素質なきものは養成しないと云ふことにしたなれば經費を少くして立派な人間が出來るであらうと思はれる、百年間に數十人出れば夫れで日本の美術は發揮するので、俗物は百萬人出來ても何の利益もないと云ふ議論である、之れは單に美術學校而已ならず他の敎育も其通りで、近來猫逸でも學者の間に此議論を主唱するものが段々起つて來たやうである云々。

▲忠勇顯彰會の組織

國家根本の元氣たる忠勇節義を國民思想の上に涵養し、隆然として國家の基礎を磐石の上に築くを以て最も肝要の事なりとは男が當に唱導せられたる處にして、恰も國家空前の大戰たる日露戰役に關しては陸海軍人の忠勇及國民の熱烈なる後援は世界無比の壯觀であつた、爰に於てか之に關する各種の材料を編纂して萬世に傳へ以て後來國民敎育の活模範として、尙武氣象涵養に資せん爲め同志と共に忠勇顯彰會を起し總裁には山階宮殿下を推戴し、小村、兒玉、田中の三大臣、野津、東鄕、樺山、井上の四大將を初め、陸海軍將官及び岩崎、住友、三井、藤田等の諸富豪其他朝野知名諸氏の贊助を得て、百方劃策して忠勇列傳の編纂に着手せられしが、事上聞に達して畏多くも　兩陛下より思召を以て內帑金五千圓を下賜せられ、不幸總裁殿下が薨去あらせられたるにより、更に竹田宮殿下を頂き、副總裁を宮內大臣とし、男は推されて會頭となり、副會頭には伊地知、伊集院の兩中將とし、幹事には福島、土屋、橋本の各中將、其他實吉軍醫總監、辻新次男、井上角五郎、高橋新吉の外七氏にして、男は日夜感奮して多大なる勞を執つて居られる、而して男は數年前より結石病に罹り、醫師より頻りに靜養を勸められ、爲めに官途の劇職や其他の公職諸協會の會頭及總裁等は概ね辭職せられ、今は樞密顧問官と多年の宿志たる古社寺保存會々長と、帝室技藝委員選擇委員を勤めて居らるゝ而已であるが此顯彰會に就いては病痾を冒して最も熱心に盡策しつゝある。

抑々本會の趣旨は我國開闢以來の大戰と稱すべき、征韓、弘安、文祿、日淸、日露の五戰役は、何れも海外異域に關係したる非常の國難、而して國家の存亡にかゝる大戰役であるされば幾百十萬の勇將猛卒と國民の後援は悉く國家の急に赴いて、或は肝腦を地に塗り、或は所有の資力を竭盡した、殊に弘安の役の如きは前後三十九年の久しきに亘り國情最も慘憺壯烈を極めたるものあるに拘らず、史乘の不備は無慘にも僅に二十餘人の功績を傳へて居るに過ぎない、此れ洵に歷史上の大恨事にして文祿より日淸役に至りては漸次詳密となり日露戰役の如きは政府に於て戰史の編纂に着手しつゝあるも這は大體の戰史に止まり到底一將一卒の忠勇又は國民後援の義烈に及ぶことは出來ぬ、去れば漸次湮滅に歸することがあつては昭代の一大恨事である、蓋し將卒の忠勇、國民の義烈は國の一大元氣にして、此元氣の凜烈たる間は國難外患も恐るゝに足らない、從つてこの元氣の發揚は國民精神上に於ける極めて至重なるは勿論、今日は全國皆兵の制度であるから之が編纂の曉は、縱ひ僻阪の寒村にても必ず二三人は表彰されることゝなる、從つて其感化は後人に及び、元氣培養の基

礎となり、模範となり而して一は又之等忠臣義人の功を不朽に傳ふる所以であると、實に明治昭代の大事業たると共に、明治の文明を傷るべき一大紀念物として後世に矜るべく男が功勞勳績は千歲の後尙謳るゝであらう。

要するに氏が今日に至る迄公私の生涯に於ける閱歷の概略は以上の如く、門閥家に生れて門閥家を斃ぎ、幼にしては武士的精神の訓育に、加ふるに豪宕なる漢學の素養を受け、少壯已に藩政の補弼に任じ、世運の一變して維新の開國となるや夙に泰西の學を修め、拔擢せられて明治政府に入り、國家の根幹たる學政の局に當りて貢獻する所多く、身は薩長藩閥の中に投じながら、其眼中には薩長なく又藩閥なく、一意國家の重きに任じて鞠躬盡瘁せる其功績は、他人の容易に企て得べき所ではない、去れば官人俗吏の忌憚太甚しかりしも偶然にあらざると共に、又大丞卿少輔大臣として當時人口に膾炙せる如きは、氏の聲望實力が如何に儼として薩長官人をして一敵國の思ひを爲さしめたるかを想見すべく、出でゝ公使となるや國權を擴張して對等條約締結の嚆矢をなし、其高雅なる人格は又轉じて美術界に表現し、我國の美術が將に廢離絶滅に歸せんとするを救ひたるのみならず、之を奬勵復興せしめたる如き、一念國家を思ふの情より出でたるものに非らざるは莫く、本邦の美術は氏に依つて保存され、又中興されたと云ふも決して過言ではない、若し當時氏の如き具眼の士徹せば、或は東方の帝國今や乾燥無味なる一島國と化し去りしやも知るべからずである。

氏は又忠勇節義は國家の元氣にして元氣の培養は此等忠勇義烈の顯彰にありとなし、今や病躯を提げて邦家千載の計に勞を厭はず奔盡しつゝあるが如き、而して毫も功名を競はず富貴を貪らず、其數十年の經歷は一貫して皆深遠なる國家的事業の貢獻ならざるはなく、精勵努力身を以て國家に致せる勳勞は永く史上に馥郁として光彩を放つであらう、宜なり身は維新の元勳にもあらず、又藩閥政府に何等の因緣あるにあらずして、我兵庫縣下に於て最も早く築爵榮勳に叙せられたるも固より偶然ではない、蓋し氏が其今日ある所以のものは天資の非凡なるに由るべく、縱ひ門閥の家格によるとは云へ縱に十六歲にして藩政の重任に膺りしが如き、以て其天稟たるを知り得るであらう、殊に美術眼の如きは全くの天稟と稱すべく、而して又至誠事に當り一念國家的觀念を以て終始し一片の私心もなく、常に其主義信念に向つて精力を集注して奮勵勤勉を致せる賜である。

氏は元來謹嚴硬直の士で滿身道義に充ち事に當つては至誠を缺かず、時に果決邁往疾風迅雷の如く、又時には泰山の如く深淵の如くに靜まり、其凜乎たる生氣は秋霜烈日の如く、又猛虎憑河の慨があり、而るに人に接すれば諄々として說くこと道學先生の趣がある、而も同情に厚く義氣に富み高雅なる風丰、半面には又峻嚴冒すべからざる態度を有し人をして自然に威服仰敬せしむるものがある、其筆蹟は雄勁にして氏の氣格を顯し、其作詩は又詩趣高く輕逸にして豪宕三誦を禁ずべからざるものがある、されば其趣味と人格とは以て一世の範と爲すに足る。

▲男の家庭と模範的青年

夫人は不幸にして永く精神病に罹り、遂に先年卒去せられ男に三男一女がある、去れど斯る次第であつたから子女の敎育は何れも他人に託されたもので、長女光子嬢は、今回巡維國皇帝よりヒヤ爵を授けられたる、同國顧問博士政尾氏の夫人にして現に巡維國にありて已に愛孫三子を擧げられ、長男一造君は幼少高峯秀夫氏に、夫れより十一歲迄は伊庭想太郎氏の手によつて育てられたが、男の氣を享けられたものと見ゆて、天性頗る豪邁不羈嘗て伊庭氏の內に在るや、通學中同校の生徒がストライキを造つたことがある、其時一造君は之れに加はらなかつた爲めに他の生徒は之れを憤つて、或る夜のこと氏を池の中へホリ込んだ、其時伊庭氏は行衛が分らず大に心配して之れを男に通じ夜中探索して居ると、翌朝其池の端の竹叢の中にズブぬれになつて寢て居つたと云ふことで道の伊庭氏も其大膽豪邁なるには驚いたさうである、其後病氣の爲めに田舍を選び、鹿兒島の高橋新吉氏に託し同地で高等學校を卒業せられたが、高橋氏の中に在るとき自ら肥桶を舁いで畑へ行くと云ふ華族の子弟には思ひもよらぬ氣質であつた、そこで性來農業が嗜きであるからと農科大學へ入學されたが、農業は學問的の空論では駄目である、自ら鋤鍬を執らねばならぬと、其地を選ぶ爲めに全國を巡遊したが日本の農業が狹隘にして嫌き足らず、將來大志を展ぶるに餘地がないと感じて在學中途、明治三十九年に米國のテキサスに至り現今は多くの地所を買入れて自ら農業に從事して居られる、

そこで定めて異域にあつて獨身では不自由であらうからと、男は氏に結婚の事を申送り何れ喜んで承諾されるだらうと思つて候補者に交涉して居ると返事が來た、曰く兒は幼にして慈母を喪ひ敬愛なる父の手一つによつて鞠育せられたのであるから、如何なることも御命令に辭むことは致さぬ結婚の事熱き御志謹んで御受け仕る、唯兒をして時機を選ぶの自由を與へられよ、時機とは卽ち今後十五年間延期せられんことを乞ふと云ふのである、之れには父の男爵も大に閉口したと云ふて居られる、尙一つ氏が豪宕不羈の性質を表明すべき好話柄は、昨年京都の西村治兵衛氏が實業團隊として米國に至りテキサスに氏を訪れた處が不在中であつた、そこで西村氏は氏の近狀を聽いて父男爵に報告すべく且つテキサスに於ける種々の事情を尋ね、併せて異鄕の氏を慰せんが爲めに、一席の饗應致すべきにつき直に宿所ヒユストンまで來られたいと云ふ書面を殘して歸り、異域に知人を見る定めし喜んで來らるゝことゝ準備して居ると、豈計らんや一封の書面が來た、曰く父に對しては月一回は細大となく報告しあり、故に之れを煩すの必要なく、又自ら獨立事業を營み日夜汲々として他を顧みるの遑なく從つてテキサスに於ける新智識等を談するの身分にもあらず、又御芳志は謝するも余は未だ御馳走を口にするの時機にあらざれば之れを辭退すると云ふので、遂に西村氏も堅忍不拔の氣象に感心したと云ふて居る、當今の青年何れも薄志弱行浮華虛榮に流れ、徒に情慾の奴隸となり小成に安んずるの弊風あるの時に當つて、氏の如きは慥に模範的の青年として、殊に華族の子弟が往々父祖の遺勳に座食し

何等爲すなきもの多きに拘らず、適々氏の如き有爲果敢なる青年を見るのは洵に空谷に楚音を聽くの感がある、唯爰には其痛快なる性行の一斑を揭げて異域の地に將來の大發展さるるの日を俟つ所以である、次男三郎君も又餘り小事は好まない、幼少より英雄崇拜の質であるが、今は法科大學に在る、三男周藏君は之れに反して優雅にして學を嗜み、美術工藝を愛して文科大學を卒へ、曾て在學中同科の教授をして氏の文科に在るは文科大學の爲めに意を强うすると言はしめた位である、斯くて三子何れも天性卓絶して居るが、一は男が道に教育家丈に總て理想的の教育を授けられたのによるであらう洵に羨しき極みである。

貴族院議員　尼崎伊三郎君

▲先代伊三郎氏の略歷

先代伊三郎氏は川邊郡尼ヶ崎町に生る、赤手空拳を以て身を起し、初め尼ヶ崎町より青物を擔いて大阪に行商を爲しつつありしが、性堅忍不拔世の有らゆる悲風慘雨と鬪ひ、遂に大阪に出でゝ諸種の商業を營み專ら勤儉力行の結果は漸次に幾何の資本を作り、明治初年早くも將來の航運は汽船の力に俟たざるべからざることを看取し、同十二年初めて運輸丸と稱する小蒸汽船を借り受け、大阪、伊勢、熱田間の運輸業を營み、果して其有望なることを確むるに至り、嘗て氏の性行を信用せる某氏より資金を借り受け、明治十六年第二運輸丸第三運輸丸を建造せしを始めとし、同十七年第一運輸丸を造りて中國航路を開き、亦同年電信丸を購入して九州航路を開始し、二十一年第二電信丸、新運輸丸を建造して岡山、播州航路を開き、二十二年別に四艘の蒸汽船を建造して九州航路を延長し、二十七年日清戰役の起るや擧げて御用船に供給して軍隊の運輸を補けたるの功勞多く、二十八年崇敬丸、敬神丸を建造し、此外三十一年、同三十四年には新に五蒸汽船を建造せり。以上の經歷は以て如何に順潮に發展したるかを想像するに足るべく、終には大阪市に於ける海運長者として謠はるゝに至りたる而已ならず、我國に於ける運輸交通の便を與へたる功勞實に偉大なるものあり、之れ偏に氏が時世を達觀するの明ありしに因ると雖も、又一面細心にして周到なる經營の手腕に歸せざるべからず、氏の如きは實に縣下出身者中の一大成功者たる而已ならず、實に明治實業界に於ける立志編中の巨人たり、而も悲しい哉二豎の冒す處となり再び立つ能はず終に三十七年忽焉として逝き今や則ち亡し矣。

▲當主伊三郎君

氏は明治元年尼ヶ崎町に生れ先考の愛甥にして少壯より入つて店務を補佐しつゝありしが後養嗣子となり、三十七年先代の歿後家督を繼ぎ、今や大阪市に於ける異數の大資産家として、本店は貸金貸家業を營み又別に多くの田畑を有し、尼崎汽船部を富島町に設けて海運業を營む、明治三十七年日韓航路を開始するや特に韓國郵便物に限り無償を以て運搬を掌る等韓國の開發に資益したるの功勞多く、其功により元韓國皇帝より勳四等大極章を賜ひ、又嘗て大阪市政の革新を絶叫して市民會の組織せらるゝや市會議員に選ばれ、現に市政の刷新に努力しつゝあり、本年七月貴族院の總選擧に當り大多數を以て多額納稅議員の榮冠を受くるに至る、性溫厚素朴にして毫も衒驕の態度なく大阪市に於ける實業界の重鎭たり。

新宿將軍　前代議士　濱野茂君

（明治四十三年十二月稿）

浮雲の定めないよりも尙定めなきは、世に投機場裡に輸贏を爭ふ人の身の上である、昨日は百萬の富を擁した人も今日は赤裸條々の一漢子となる、事成ればプラチナの寢臺に豪富ロスチャイルドの夢暖く、不幸にして運惡るければ置霜寒き橋の上に曉の月を仰ぐも商人の常ぞかし、昨是今非一盛一衰榮枯開凋の速迅なる、洵に端倪すべからざるは相場師の一生を通じての運命である、故に昨是必ずしも喜ぶべからず、今非必ずしも悲しむべきでない、誅つも誅たるも武士の習ひ、取るも取らるゝも相場師の習ひである。

濱野茂君は身を西宮の一商佔に起し男の中の男として、投機場裡に駛驅すること已に四十年、東都蠣殼町に新宿將軍と謠はれたる商界の奇傑である、されば余は人を論ずるに當つて敢て位置を以て品するものでない、否學問名譽を以てするものでもない、況や財産殊に氏の如き輸贏場裡の人に向つては、尙更富の成敗を以て之を論ずるの不可なるを知る、如何に財産があつても學問名譽があつても、人情學を解せざるものは磨かざる玉の如し、然るに氏の如きは人情の餘波に洗ひ去られて以て今日に迨んで居る人である、氏の今日ある決し

て一朝一夕の僥倖ではなく、天稟の英才なるが上に時勢の援助もあり、且つ到底萬人の企て及ばざる艱難を經て今日に至つたものである、故に吾人は氏が相場師的の道程を以て人の模範として推稱するものではないが、抑々氏が苦辛の經歷と其相場師を離れたる人格は、慥に縣下の一偉人として尊敬に値する人であると思ふ。

▲濱野茂の正體

濱野茂君は嘗て田中平八、雨宮敬次郎と共に天下の三幅對として謳はれたる人である、必ずや狷介不屈の曲者で、大膽不敵、豪放暴慢な腕白漢であると想像して居つたが、然るに氏は面く暴虎憑河の蠻勇一偏の人物ではなく、内には敦き信仰を有し、最も正直にして俯仰天地に愧ぢず、一事一物苟もせない、大膽なる一面細心冦々たる人物である、成程體格は強壯、言語應接一見して傲慢不遜の樣で、加ふるに事業が乘るか反るかの相場師、殊に鐵管事件杯で擾いだものであるから世人が面く想像するのも無理ではないが、世に善人と云はるゝ人必ずしも善人ならずで、氏の如きは大に世人に誤解されて居る人であらう。

編者は濱野茂氏の正體を露さんものと一日氏を新宿の別墅に訪問した、此別邸は

明治二十五六年頃、氏が東都の投機界で新宿將軍と綽名をとり、旭日騰天の勢で、新宿方面に數十萬坪の地所を買占め全勢時代に建築せられたるもの面積三萬坪を有し、梅林あり櫻樹あり、奇巖奇石を幾萬となく排列し、松籟颯々楓葉今や紅を呈して居る、中に數百坪の濠がある、周圍には昔欽明天皇の創建に係る丹波國龜岡の國分寺に在りしと云ふ、巨勢金岡流の作たる、古代の石佛幾十體を併祀し、其傍には人跡を隔てゝ又數百坪の竹林がある、中に十數箇所の射鴨の獵場を作り、結構の壯大と數奇を凝らしてある事は到底形容に言葉がない。

氏は常に閑散なる此別墅に起臥して心算を廻らし、算なれば蠣殼町に輪贏を決するのであるが、恰も當日交友を招いて鴨獵の催しがあり、著者亦之れに陪する事を得た。

▲氏の經歷談

客已に散じて氏と相對し先づ以て氏が經歷談を促すや。

曰く余の經歷は紹介される程の事もなく、殊に我々の經歷を紹介されて偶々後進を惩らすことになるかも知れぬ、實は余の如きも一代相場師で果てる積りではなかりしが種々の境遇より今日に迫んで居る、故に地方青年の人が往々都會の成金黨の夢を見て出て來る人があるから、余は常に之を戒めて居るので幸にして其成金黨にした處が、決して原因なく成れるものではない、夫れは世人の想像も及ばぬ苦勞をした結果である、余の如きも隨分苦勞をしたもので概略を語るとき。

余は西宮の濱野町に生れ、家は祖先の七太夫と云ふ人が淡路に居つて、元は郡領であつたが一旦足利氏に屬し、後歸農して西宮に來り楠正行の爲めに邸内に一寺を建てゝ此處に住し、累代里正を勤めて居つた、父は七次郎と云ひ其三男で、余は幼少の時から頗る腕白者で父は之を憂ひ余を僧にすると一寺に追ひ遣られたが、坊主は厭で逃げ歸つた、夫れから僅の間同町の紅野と云ふ内に、丁稚奉公に行つたが何うも惡戲で仕方がない、處が十三歳の時に母が歿しられた其自ら起つ能はざるを知り、余を枕頭に呼び諄々と後來を戒められ飜然悔ひて居ると、折柄鹿兒島の人で肥後助右衛門と云ふ人に大阪に遇ふて、余に勸むるに學問を以てせられた、夫れから同氏を請じて句讀を受けて居ると氏は國に歸られる。

其後西南戰爭が起つて此人が參謀であると聞き、何分血氣の盛な少年時代であるから、此肥後氏に從ひ西郷の軍に投じたいと思ひ立つた、併し漫然行つては一兵卒に列しられる迄である、何とかして先方の將士に歡心を買め重き位置を與へて貰ひ大に手柄を擧げたいと、色々と考へた結果各酒造家を說いて多くの清酒を借り受け軍中に贈つたなれば、相當の位置を與へて呉れるであらうと酒を積んで西宮を出帆し、熊本に着して肥後氏に會し志を述べた處が、道に肥後氏は一度其壯志を賞し再び戒めて言はれるには『古來錦旗に敵して誅を免れたるものはない順は榮え逆は亡ぶ、此役已に名分を敗つて居るのであるから、余は爾を殺すに忍びぬ如かず志を飜して之より商業を營み國家の利益を圖られよ、我國文明の機運漸く熾ならんとし、而も國家の爲め且つ子の爲めに將來有望なるものは航海業を營むに若くはなし』と、縷々說示せられたものであるから初志を飜して携へた處の酒を賣却せしに、戰

濱野一郎君

爭中であるから意外にも巨利を博して歸國した、既に肥後氏の言を信じたる余は神戸の西洋人が持つて居る、蒸汽船を買ひに往つたが金が足らない、其處で其不足金を儲けやうと思つて、大阪で米相場を行つたのが、抑々相場に手を出した初めである。

▲大阪で失敗して東京に赴く

何でも不足の金を儲けて蒸汽船を買ひ入れ、大に航海業を營まんものと思ひ、一擧して米相場を張つた處が、當時紙幣の亂發で諸物價が暴騰し、米も六圓臺から十二圓になつた、初めは買ひ思惑であつたがツイ五代友厚氏の說を聞いて弱氣になつた、爲めに儲け處ではなく、忽ち七八萬圓の金を損して加之に二萬七千圓の借金が出來た、爰に於て東京に出て此失敗を恢復せんものと思つたが負債がある、竊に鄉里を去るのは前途に望みあるものゝする事ではない、或日各債主を會して一切の家什を提供して今や債を償はずして鄉を去るは志の許さゞる處なれ共、胸中期する處あり、之より初めての地に出て新なる思想を以て、一度大阪に死して再び東京に甦らんと期するのであると、三年間の延期を請ふた、すると債主も不止得之れに承諾を與へられ、愈々上京の途に就いた。

家を辭せるときは二十七圓金があつたが、東京へ着いた時は袋中僅に五十四錢殘つて居つた、何と言つても初めての土

地で誰一人知已もない、そこで氣の利いた車夫を喚んで、遠近は問はぬ暫時たゞ泊めて呉れる宿を探さんとする旨を告げ五十四錢の金と、金がなき以上は紙入も要はない、金金具附の紙入も共に與へて所々を尋ねて見たがたゞ泊めて呉れる宿はない、仕方がないから車夫が私の内に泊られよと、言つて茅場町迄來るど、眞鶴屋久右衛門と云へる看板の宿あり、尚一應其内へ這入つて見れば、年五十位の福相な主人が居つて此は眞の江戸ッ兒で頗る義俠に富み余が素志を陳べて百日丈けたゞ泊めて貰ひたしと云へば、之を承諾して呉れて卽ち同家に落ちついた、之が現今の谷崎久兵衛氏の家である。

▲奉公を八十三軒十二圓五十錢より相場に取り付く

暫く居候みた樣にして居つたが、東京の地理を知るため、且つ世間の狀態、人情騙引を研究する爲めには奉公を仕て見るのがよいと思ひ、芳町の鶴屋と云ふ桂庵に行つて奉公口を賴み、夫れから一軒の中に、三日宛と定めて、所々へ行つて見た、石崎の樽集めにもなれば風月堂の餡焚きにも往き、紙屋、味噌屋、酒屋、醬油屋、甚しきに至つては女郎屋、髪結床迄も行つた、約八十軒程、一日、二日、三日位行つて見た一番終りに銀座の時計商玉屋へ行つて、時計の才取りをさして貰ひ、夫れで初めて十二圓五十錢金が出來た、當時は二十錢位で相場が出來たから、其金で以て再び投機業に着き、幸ひ五十四圓の利益を得たるを初めとし夫れから毎に機宜に適して三年目には二萬圓餘りになつたが、さて國元には借償があつて遂々十三萬六千石附いた、已むを得ず濱澤商店の上原豐吉氏を依賴し表面同氏名義で十萬石程の米を買ひに越中へ行つて貰つた。

▲合戰中に廣島召集

恰も好し豐年で八圓二十錢位で何程でも買へるとの電信二日に三萬石買ひ付けた、此調子なれば皆渡してやると日夜劃策して居ると、余が代議士であつたから廣島へ召集せられた或官吏に私丈け御免蒙りたいと云ふと夫は不可ぬ、此召集は軍資金の決議であるから滿場一致で可決しなければ國家の威信に拘る、貴樣の事は私事、此は國家の大事であると言はれたので、如何にもさうぢや夫で心ならずも其大勝負の大心配を跡に殘して臨時議會に廣島へ往つた。

▲窮鳥だと言つて後藤伯に縋つた

所が廣島は二週間で閉會、早速歸京して米は漸く手に入つたが運んで來る船がない、當時郵船會社其他の船は皆御用船になつて居る、不止得三菱に賴んで外國貿船を三艘借りて貰つたが着船の期日が判らぬ、到底船が間に合はぬと云ふのを機貨まれ、又買上げられて十圓五錢迄行つた、敵方では何でも濱野が泣くに違ひはない、貰ひに來るに違ひないと云ふのが相場であつた、併し此方も新宿將軍ぢや生命がなくなつても貰ひに行かぬと思つて居るが、さて西洋から船が來る日が判らぬ、據なく當時農商務大臣の後藤伯を高輪の邸へ窮鳥だと言つて賴みに行つた、其時伯は差支があるが窮鳥と聞いては會はなければならぬと會見せられた、幸處で私は今斯う云ふ譯で困つて居る、怎うでも恁うでもあなたの婿さんの三菱の船を貸して貰はねばならぬ、彼の土佐丸を貸して貰つて滿船すれば七萬石は積める、其内に西洋の船が來れば十三四萬石の米は運んで來られる、然らざれば私はどうにも仕方がないと賴みしが、伯は夫は可哀想だ心配して見やうと、三菱へ電話をかけて下さつたが、土佐丸は貸してやらぬ事はないが門司で石炭を積んで明日出帆の事になつて居るとのこと。

▲面白いまるで西鄕隆盛が軍略を談ず樣な味がする

そこで私は卽座に宜しい其石炭を買ひましやう幾ら高くても買ひます私に賣つて下さい、門司で五十錢位の人足に一圓宛拂つて百人程の人足を乘せ、バイスケと云ふ籠を二三百買つて、門司から越中へ行く間に窓から此石炭を皆海へ捨てゝ仕舞ふ、さうして空船にして其船へ米を積んで來ると言ふと後藤さんが膝を叩いて「面白い、まるで西鄕隆盛が軍略を談すやうな味がする、實に相場師と云ふものは愉快なものぢやお前の「新宿將軍」と云ふ名稱は偶然ではない、宜しい後藤象次郎が引受けた」夫れでは私の生命も助かりました、あなたも貧乏だから是はマア賄賂に上げますと金二萬圓を出したら是は難有い、俺は貧乏ぢや金は要るけれども此話が面白いから、僅か金の二萬や三萬で此話を傷つけるのは惜しい故に俺は貰はぬ、定めてお前は此場合金が要るであらう俺があればマダ貸してやりたい位であるから決して之は受けぬと云はれある、之れを奇麗に返したいが少し金が足らぬ、又其中に無くしては申譯がない、そこで七十圓餘の公債を買ひ入れ若し十年の間に於て額面に達しなかつたら現金と引換へると言つて、之を以て前債を返却した、其後又段々都合よく行つて遂には世間が濱野を認めて呉れる樣になつたのである。

▲新宿地所の買占め

其後明治十八年に條例違反で余は免れたが、仲買人が罰せられたことがある、其時感ずる處あつて直に廢業をした、廢業は仕たが元來投機心に滿ちて居る男、無爲にしては居られぬ、何かと考へた上山の手の地所の買占めに着手した、坪十錢位から遂に三圓迄買つて結局五十萬六千坪買占めた、其時に百萬坪迄買ふ計畫であつたが、何分性來喧きの相場であるから、ちよいと手を出す人に賴まれては助けに出て又相場をする、其中に地價が昂騰して前に千坪百圓で買つたものが、三千圓にも騰り莫大なる利益を得た、爲めに世人よりは新宿將軍などゝ綽名せられ人より先に馬車にも乘る衆議院へも出た、取引所へ來ても余が賣れば必ず低る、買へば必ず騰ると云ふ勢ひであつた。

▲二十七年に國家的に引受けた

明治二十七年の十一月期を人に賴まれて八圓四十四錢を押へ呉れいと云ふ、余は望まなかつたが日清戰爭で政府にも米が騰つて困ると云ふから、一番國家的に押へて見やうと引受けた、其時持米が二萬石よりない、仲買一同が余の向ふを張

た、迫に伯は度胸のある實に立派な人であつた、其時伯の御蔭で土佐丸を廻して貰つて期日の三四日前に米を渡して此戰は半勝半負けで終りを告げた、唯余が終生痛恨に堪へないのは其後鐵管事件の爲め三年間未決に拘置せられ、出監の一週間前に大恩人の後藤伯が薨去せられたことである、其時余は出監するや直に家内中を伴ひ、公の墓前に抵りせめては一日の御介抱も致さなかつたのが殘念であると、男泣きに泣いて御詫をした事があります。

▲再び廢業鐵管事件の奇禍

此れで先づ大戰爭も片付いた、此度は愈々決心して其翌日廢業の廣告をした、すると雨敬が出て來て、感心だ故糸平は乃公が今に崇拜して居るが、然るにお前は糸平以上だ、此所まで成功して止めるのは實に豪い、併し止めた以上は其能力其資金を以て大に國家の事業に盡力せよ、幸ひ爰に乃公は鐵鐵會社の社長をして居るが忙しくて任に堪へぬ、此は國家的事業で既に東京市の鐵管も受負ふて居る、君は適任と思ふから一番社長になつて經營して貰ひたいと勸められ唯何の考へもなく此を引受け、其後病氣で三四箇月轉地療養して其間總て人任せにして居ると、恰も五月に引受けて十月の三十日に突然拘引せられた、けれども別に惡い事をした覺えがない、直に出られると思ふて居ると遂々三年間拘束の身となつた、夫れは其筈五十何人の被告人で其内消息の判らぬものもあり夫を調べねば終結しない、其揚句余は無罪で松室檢事が唯御氣の毒であつたと言つたが三年も拘留さして、御氣の毒であつたとは馬鹿氣た事だ、知らゝゝ如く此事件は鐵管の中へ混せ物をして不正鐵管を納めたと言ふのであつたが、鐵管を造るには、溶鐵器で鐵を煮るので、其中へ石や砂を容れても溶ろけて仕舞ふ、鉛を混せれば上へ浮く眞鍮を混せれば下へ沈む、金を混せれば損が行く、混せ物の出來る筈はない實に學術の進歩した今日から見れば馬鹿な談である。

▲其後の失敗

其れから相場を止めればよいが、何分入監以前には新宿將軍と綽名をとつて人にも神の如く云はれ自分も亦偉いものと思つて居つた、夫れに一朝牢へ打込まれ、出て來て入監中の新聞を見ると堪らぬ程惡口が書いてある、夫れも惡事をした覺えはなし、國家事業と思つて善心でやつた事が怎んな結果だから口惜しくて堪らぬ、幵處で相場なら習ひ覺えた事だから今一度大發展して自由自在に市場を動かし大儲けして大慈善事業でも起して止めやうと思つて掛つたが、豈計らんや最早悲運で何をやつても失敗に失敗で、瞬く間に昔の新宿將軍何處へやらで滅茶々々に曲り込んだ、斯うなると不運續きで此月こそ、今年こそと行けば行く程わるい、三年經てば直るだらう五年經てば直るだらう、七年目には十年目にはと思つて十五年逆境に居るが未だ行かぬ、夫れで今日でも恐圖々々して居る次第である、併し幸に地所の値騰りでマダ三萬坪餘りは持つて居るから、何うか怎うか人の厄介にならずに行けるだらうと思つて居る、何分今に生活費と交際費が月二千圓は要る此れでは行けぬと、昨年「貧乏に付貧家」と大きく書いて札を貼つた、夫れからは大分小遣ひに不自由をせぬ樣になつた、併し他日二三百萬儲けたら又「金持に付金貸」と云ふ札を貼つてやる積りで居る。

▲逆境の幸福初めて人道を悟る

人間は妙なもので順境の時には、唯放縱三昧で何にも解らないが、逆境に處すると色々な事を考へ出す、余も此迄は眞に俗世間に汲々として、物質的の金錢に目が街んで居つたが三年入牢して其間退屈なものであるから色々宗教上の書物抔も研究して見た、亦近來は逆境に居るのと大分年も老つたお蔭で、獨り痛に往事を顧みれば唯名利の爲めに蔽はれ、浮雲の如き財產の富計りに齷齪して、人生の最大目的を度外して居つた、例へば金を儲ける爲めには僞を言つたこともある、或は放浪耽溺、偶々善行と思つたことがあつても言はゞ世を街ふた似非善行、眞の善行美德は施して居ない、全く島影湖面に落る惡魔の戲事に過ぎなかつた、之を人道とか德義の鏡に照せば實に慚愧に堪へぬ、夫れで近來は大に懺悔して居るが、就いては余も少壯致富に志し、其間種々の苦勞もして世の苦楚辛酸を味ふと共に、兎に角數百萬の財產も作つて見た之よりは一番德を修めて眞の人間になつて此世を終らんと思ふのである、故に近來は別に苦勞をして金を作らうとも念はぬが、生きて居る間は活動は仕なければならぬ、幸にして金が出來れば子孫の爲めに遺して遊惰の因を作るやうな事はしない、悉く公共事業に投じて而もなるべく隱德を施したいと思つて居る。云々

兵庫縣人物史　濱野茂君

以上氏が說き去り說き來りたる處によつて、氏が經歷の概略と人と爲りの一班は之を解することが出來るであらう。

吁、氏は少壯身を起して以來奮鬪力戰、活潑英敏、膽は斗の如く智は神の如く、商略機謀到底端倪すべからざるものがある、氏が半生の經歷は刻苦忍耐遂には百戰百勝、最も至難事たる投機界の雄將として仰がるゝに至り、今や杏として亦昔日の觀なしと雖も、一朝心神超脫して人道の重きを覺り、將に屋漏に愧ぢざる德行の人たんとして居る、世人は往々氏を評して失敗の人となす、然れ共散ずる處は之れ單に浮雲の財富のみ、幸にして財を散じたるの結果は、百世不滅心神の大富を得たのである、人は順境に死して逆境に活くるとは眞に氏の如きを云ふべく、豈一大幸福と言はざるを得んや。

又人は其隱れたる處に於て犯せる罪を辯護し蔽はんとして不知不識潔白なことを口にするものである、然るに氏は怎る僞善はない、自ら其往事を追懷して罪の人となし、臆面もなく之を語ると共に、一例を擧れば嘗て氏が湖江に彷浪せる血氣の青年時代には隨分亂暴漢なりしが故に、不義の種を宿さしめて墮胎せしめたるものが五人ある、今や良心の苛責に堪へずして昨年日盛默仙師を請じて新宿正受院に五體の地藏尊を建立し自ら左の懺悔文を剔して居るのを見ても其一班を推すことが出來るであらう。

▲地藏尊供養懺悔文

茂壯年の頃血氣定まらず、非道に婬を行ひて、孝順の心に背き五人の婦女をして五兒を流產せしむ、今老境に迫んで、深く之を懲む、こゝに菩提會に投じ

て、懺悔滅罪し地藏願王の像を建立して亡兒の菩提を資助するものなり、南無阿彌陀佛

願主　濱野茂　五十九歳
日置默仙書

世に高尚なる學理を究め、立派なる教訓に接し、深遠なる宗教の信條を率じたるもの、猶ほ僞善表裏の多き世の中、果して氏の如き信念を有するもの未だ幾人あるであらうか。

氏の男一郎君は氏と性格を異にし資性溫良、昨年朝日新聞の世界一周に加はり現に法科大學に在り、愛甥源一君は店務を補佐し、溫順沈毅、一見投機界の人物にあらざるが如く、斯界の信用最も敦し、蓋し時世の進歩は秩序的にして緻密なる頭腦の人を要す、氏の如きは寧ろ最後の勝利者ならんか。

高等師範學校長
嘉納治五郎君

（明治四十三年十二月稿）

弘道館の創劍者として全國に三十萬の門下を有し、高等師範學校長として又嘉納塾の塾長として本邦の教育界に一異彩を放ち、近時文弱の弊は漸く青年者流を風靡し寒心すべきの時に當り、最も健全なる教育家として聲威嘖々たる嘉納治五郎君は、抑々如何なる人乎、濱尾、加藤男を初め、其他多くの教育家を有する兵庫縣は更に嘉納先生あり、以て縣下の天地に一段の光彩を加へたるを覺ゆ。

氏は武庫郡御影町に生れ、東京大學に入り政治理財學を專攻して、明治十四年都築馨六、坪井熊三氏等と共に同大學第二回の卒業生にして、直に學習院講師に任せられ、同十七年教授に進み、同十八年谷干城氏が院長の下に教授兼幹事となり、同十九年同院教頭に任せられ、校務の一切を統轄し、同二十二年海外に遊び、獨佛を主として其他各國の教育狀態を視察し、同二十四年歸朝同時に文部省の參事官に轉じ、熊本第五高等中學校長を兼ね、同二十六年參事官專任として本省に復し、同年又第一高等中學校長並に高等師範學校長を兼任し、複雜なる圖書檢定漏洩事件の跡始末を處理して參事官を辭し、其間文部省普通學務局長に任せられ、其後專任高等師

範學校長として引續き今日に臻つて居られる、氏は高等師範の教育方針に就て語つて曰く『高等師範教育と云ふことに就ては、種々の點に苦心して居る處であるが、而も世間は師範教育を殆ど度外視して居るの觀がある、然れども一般の初等教育と云ふものが誠に大切にして、初等教育は一般的教育と云へる意味の外に、少數の優れたる人物も又此階級を履んで出るのであるから、此意味に於ても極めて大切にして從つて此の普通教育に從事すべき人物を養成する師範教育の輕んずべからざることは明かである、故に此れに從事せんとする者は假令世人からは輕視せられても、己れは大切なる責任を以て大に國の爲めに盡すと云ふ觀念を養成すると共に、初等教育は如何にせば最も有效ならしむるを得るかとの研究に付き、能く之れを理解せしむることが各卒業生をして教育に從事せしむる上に於て、最も大切であると思ふが故に、專ら此精神の養成に努力して居る、然れども世には又反對の議論もあるから、如何に努力しても或る程度迄は其功を奏しつゝあるであらうと思つて居る』云々

講道館に於ける嘉納治五郎君

▲弘文館、嘉納塾、講道館の創設

氏は嘗て英語、政治、經濟、哲學等を教授するの目的を以て私立弘文館を創設する處ありしも、海外遊學と共に止むなく之れを廢し、現に引續き經營指導しつゝあるものは、即ち有名なる嘉納塾と講道館である。

▲嘉納塾

將に志を立てゝ笈を東都に負ふ幾多の青年を、單に學校教育而已に倚頼せんか、稍々もすれば誘惑に試みられ身を惹るもの甚だ多く、氏は之を憂ひて自ら資を揹てゝ私立嘉納塾を創設し、各志す處の學校に通學するものを寄に寄宿せしめ、傍ら日常の道德、修身、處世の講話を爲し、嚴重なる保護監督の下に健全なる人物の養成に、勗めつゝあること已に三十年、斯くして實地教育を行ひ、以て青年の訓育に任じつゝあるが如きは世の尋常教育家と大に趣きを異にする處のものがある、殊に氏が畢生の一大偉業として貢獻最も多く、世の稱贊して

措かざる處のものは、卽ち講道館の設立經營である。

▲講道館

氏は講道館設立の動機と、經營の主義方法とに就いて更に語つて曰く

國の憂患は前途を託すべき青年、殊に學生が寄修に流れ、惰弱に陷るより甚だしきはない、反之青年の體格が強壯なるに於ては、從つて精神も健全にして活動力に富み、國家の元氣を強うすると云ふことは、何人と雖も最も見易い道理であつて異論なき處である、然るに物質的文明に超くる共に部下の一般學生が柔弱に陷り、國家の前途を觀望して甚だ寒心に堪へざるものがある、全體敎育なるものは、單に學術耳を授けて以て未だ萬全と云ふことは出來ぬ、健全なる精神は健康なる肉體に宿るので、宜しく學問と共に體格を強壯にし、精神を活潑ならしめ、隨つて學校卒業の後充分活動に堪へ、如何なる困難にも打勝つことを得べき、勤勉努力主義の國民を養成しなければならぬ、其處で之れを練磨する方法としては、西洋の玉拋げ等もある、然れ共玉拋等は團體的の運動法にして、且又柔弱である、然るに我國には固有の武士的體育法卽ち武術がある柔道武術は而も勇氣があつて古來邦人獨特の技術である、斯る精華を閑却して西洋の運動法を模倣せんとするは愚の至りと云はなければならぬ、故に國粹を發揮すると共に、之れが練磨の機關として設けたものが卽ち講道館である。

講道館は我國古來經驗せる武術の各流派を問はず、其長所を採つて之れを授け、體格の養成を圖ると共に、一面日常、修養、道德等我國の武士道を說いて精神の修養にも亦怠らないやうにして居る、創立は明治六年、現今直接の門人は一萬二千人、間接の門人は三十萬もあるであらう、東京に本部を、各地に支部を置き、本部と京都、靜岡、江田島は直接入門を許し、其他は間接であるが世人も漸く其實績を認むるに至り、亦多少の貢獻はしたであらうと思はれる。

そこで今日迄二十八年間と云ふものは一は道の爲め、一は師恩に酬ゆる爲めと思ひ、道場を初め、其他自費を以て辛うじて經營して來たが、何分門人も增加する、本館の基礎も鞏固にて、敎育の普及を圖る爲めには、人を要し金を要するものであるから、社會公共の力を藉られば先分の成功を遂げぬと思ふが故に、今回發表した次第である」云々

蓋し各國共に國民遊戲と云へるものがある、例令ば英國のベースボール、米國のフートボールに於けるが如し、爰に於てか本邦の柔道は古來獨特の技術であつて、大和魂の精華である、國民遊戲としては此が右に出づるものはない、然るに維新以來歐米文物の輸入は、此る絕好の武術を措いて柔弱なる西洋遊戲を做はんとする、實に慨嘆に堪へざる處である、偶々氏が爰に着眼して多年斯道の爲めに盡瘁せらるゝと共に、氏の門下多くの健全なる子弟を輩出し、現に日露戰役の軍神廣瀨中佐の如きも氏の門弟子なりしと云ふに至つては、氏の薰陶の功多きに居るは勿論、其一大貢獻を多とするものである。

▲清國開發の大恩人

氏は又明治二十九年清國公使より、我國に來れる清國留學生の監督敎授を託せられ、弘文學院を創立せられしが、漸次留學生の增加するに從ひ、或る時故張之洞氏は公使李盛譯をして氏に質問して曰く『現今清國の狀態は各文明國に留學生を出して新敎育を起し、新人物を養成するを以て、最も急務となす、故に之れを貴下に託せんとす、然れ共各留學生をして日本語を習得せしめんには數年の時日を要す、若かず一日も早く清國に新敎育を開かんには、各留學生をして短時日の間に業を卒へ歸國せしむるの方法如何』と、氏は之に答へて曰く『正式なる學問を授けて人物を養成せんとせば將に十年の日月を要すべし、而も清國の國狀は之を許さず、日本が維新の際に於ける人材の養生に鑒みるに、宜しく留學生をして通譯によつて新學問を授け、簡易に之れを習得せしめんにはと』張之洞氏悅んで之を容れ、氏の意見を支那各州へ布達するや忽ち全清國に新學問の機運勃興して、江北、江蘇、浙江湖南、四川、山東を初め支那十八省より來るもの實に二千餘人に達し、就中雲南、四川より六十歲以上の老人が二人も渡來したと云ふ盛觀を呈し、爰に弘文學院の規模を擴張して本校を江戶川に置き、巢鴨、谷中其他に分校を設け、通譯を以て警察官、師範科、物理、化學、博物等の普通學科を授け、同四十一年迄に卒業歸國せるもの、三千餘名の多きに達し、現に各要途に立つて清國の開發に任じて居る、其後最早短期學生の必要もなく、四十一年に廢校せられしが、宜なり氏は清國指導の一大恩人として先年清國視察の途に上るや、朝野共に殊高の歡待を以て、大に其德に酬ひたりと云ふことである。

氏は又鄕里の青年の指導と誘掖に資せんが爲め、丹波、元良博士、津久井茂氏等と謀り、西攝の青年が東都に出るものの爲めに、寄宿舍の設立に腐心せらるゝ等、苟も敎育上のことゝしあれば、國の內外親疎を問はず、身を挺して努力至らざるなく、世の敎育家が麵包の爲めに其職を奉じつゝあるものとは、月鼈の相違である、氏は斯る各種の敎育任務を有するに加へて、普通高等敎育、博物館、敎科書檢定、國語調查會、敎育資格審查會、武德會、體育會、學生研究會其他の役員として何れも之に軼羣しつゝあるを以て、實に寸隙の時間も空費するを許さず、精力の絕倫驚くべきものあり、卽ち余が會見を請へるに際し數日の間、漸く午後十二時以後に於て會接せられたるが如き、以て其一斑を窺ふことを得べし。

今や國家益々多事にして新人物を要するに際し、氏の如き理想的敎育家のあるは、誠に國家の至寶と謂つべく、同時に吾兵庫縣下殊に惰弱淫靡なる武庫郡の地に、氏の如き大人物を出したるは亦以て奇と云ふべく、偶々病癖にあるの報を聞き痛嘆に堪へず、幸に全快の一日も早からんことを祈る。

東京帝國大學文科大學敎授　文學博士　元良勇次郎君

東京大學の文科を言ふもの、必ず元良博士を聯想せしむ、氏は最も高尙なる形而上の學に於て、坪井、中島博士と共に當代の權威たり、而も其健全なる學派として、所謂常識派に屬し、利用厚生的の見地に立脚せる、哲學界の重鎭たり。

兵庫縣人物史　文學博士元良勇次郎君

其著倫理學、心理學は、徒に泰西の直譯に陷らずして、我國の古今を通じて獨特の心理を描寫せる和歌詩文を引用して最も難解なる心理を最も容易に理解せしむ、亦常に講堂に立つや、臨機應變事々物々を援用して之を說き世間の有ゆる現象に對して之を應用せんとする處、恰も禪家の一休、白隱に於けるが如し。

氏は三田藩士、大阪浪華教會の牧師を以て著聞せる杉田潮氏の次弟にして、幼少元良家を繼ぎ、明治八年京都同志社に學び、聰慧にして夙に講師先輩の嘱目する處たりしが、遠大の抱負ある氏は、豁然米國に航し、ボストン大學に入りて專ら哲學を修め、更にホッキスン大學に轉じて、心理學を研究し、同校の、フエローに選拔せられ、特待の光榮を荷ひ、明治二十一年心理哲學科を卒業し、ドクトル、ヲブ、フイロッフキーの學位を受け、同年歸朝直に東京大學文學部講師に任せられ、辭いで文科大學教授となり、心理學講座を擔任し二十四年八月文學博士の學位を授けられ、高等師範學校教授を兼ね、引繼き今日に迫ぶ、謹厚篤實にして眞に俗界に超脫せる君子なり。

工學博士　細木松之助君

氏は有馬郡上山口村の人、細木喜兵衛氏の令弟なり、明治十二年神戸師範學校に入り、同十五年同校を出でゝ直に工部大學に入る、後帝國大學となるや工科大學に移り、同二十一年大學を卒業せり、當時尚官尊民卑の風習盛にして尚も青雲の志あるものは爭ふて法科若くは他の官海に入るに徑捷なる學科を選び、工科に入る者は言はゞ一種の物數奇の如くに冷評せられたりき、然るに氏が立國强富の要は工業にあることを思推し工科を選びたるもの、又一見識ありと云ふべし。

氏は大學在校中の約により、卒業後直に滋賀職工學校の聘に應じ、同校は其後工業學校となり、更に高等工業學校（現今の東京高等工業學校）となるに及び、在職十四年間育材の爲めに盡瘁する處あり、明治三十五年京都帝國大學工科大學に榮轉せらるゝや、直に歐洲留學を命ぜられ、獨逸伯林工科大學に入り、同三十八年歸朝、同年工學博士の學位を授與せらる。

氏が專攻の學科は應用化學にして就中窯業に就ては我國に於て氏の右に出づるものなく、其セメントの製造應用に就ても亦氏の技術に待つ處多く、されば大藏省臨時建築部囑託として、横濱、大阪、神戸築港の顧問として多年盡瘁する處あり、不幸頃者病氣の爲め敎授の如き劇職に堪へず、當分休職して靜養を加ふるの已むを得ざるに至れり、著者は我學界の爲め博士の全癒を一日も速からんことを切に祈る。

著者一日博士の寓する京都鴨川河畔土手町の木戸侯爵別邸に訪ふ、此の別邸こそ維新の元勳木戸孝允卿が當時　陛下に扈從して京都に來り俄然病床の人となりて薨去せられたる處にして、卿の臨終に畏れ多くも、主上親しく御臨幸あらせられ、二階の一室を以て御便殿に供したるもの、臣下の身として斯る空前の光榮を擔ひ、一家一門の欣躍恐惶措く能はざる大切に紀念すべき邸宅なり、博士は侯爵家より保管旁々貸與せられ、爰に住することゝ既に八年、恐惶餘香を拜し餘榮を蒙るとのことを聞き著者も亦感慨禁ずる能はず、侯の偉勳を追想し　陛下の元勳を偶せらるゝ大御心に思はず襟を正ふし感泣せり。

氏は資性謹直にして溫良、人を待つに恭儉眞に士君子の風あり、學者敎育家として最も適材たると共に、我國の學界は今後氏の力に俟つ處決して鮮少ならざるべし。

帝國大學敎授　藥學博士　丹波敬三君

維新以來泰西文物の輸入と共に本邦の文化は日に駸々として進み、月に燎々として展び、就中醫學上の進步は其最たるもの、然るに醫學と併行して發達すべかりき藥學の進步は之に伴はず、甚だ遲緩なるを感せしめたりしが、而も晩近頓に發展して必ずしも世界に對して遜色なきに至り大に人意を强うするに足るものあり、而して其今日に至れる藥學界の進步に最も與つて力ある丹波敬三氏の功勞や、永く沒却すべからざるものとす。

氏は神戸市元町に生れ丹波謙三氏の令弟にして寥々たる神戸の士人なり、當時人は經濟界に嚬蹙張目せるにも拘らず氏は夙に東都に學び、明治十一年帝國醫科大學藥學科を卒業して、直に大學備員となり、當時の藥學科は單に醫學の一部に過ぎざりしが、自ら之が獨立を主張し遂に當局の容るゝ處となり、創めて斯學の專門分科を設置せらるゝに至りしと云ふ亦以藥學界の發達には忘却すべからざる一大恩人也。

明治十四年助敎授に任せられ、二十年敎授に進み、是より前き氏が學術を認識して醫學博士の學位を授けんことを以てせしが、氏は藥學をして天下に重からしめんと欲し、藥學博士にあらざればと辭して之を受けず、遂に二十年藥學博士の學位を授けらる、之れ卽ち本邦に於ける藥學博士の嚆矢なり氏は明治十一年大學助手に任せられてより以來孜々として學界の爲めに貢獻せられたること已に三十年、努力奮勵以て今日に迫べり。

兵庫縣人物史　文學博士高楠順次郎君

氏は亦物質の原理原則を討究すべき化學書を我國に飜譯せられたるものなきを慨し、無機化學、有機化學の大著あり、其他藥物學、物理學等の著述尠からず、以て其蘊蓄の深きを知るべく亦學界の爲めに貢獻せる功勞最も偉大なりと謂つべし矣。

氏爲人素朴にして毫も邊幅を修めず、已に東京に在ること四十年、今尙純神戸語を以て對話せるが如きは稱氣愛すべく算盤球を生命とせる神戸の地に氏の如き學者的の學者を出したるは亦以て神戸の誇り也。

文學博士　高楠順次郎君

東京大學文科大學教授

赤松連城、大内青巒氏等と共に佛典研究の大家として將た言語學者として、其名海外に喧傳せる高楠順次郎氏は、廣島縣御調郡篝村澤井家に生る、後神戸の高楠氏に入つて其姓を冒す、幼少の頃三原町の鴻儒長谷川櫻南に就て經子の學を修め聰慧にして群童を拔き纔に十五歲を以て鄕閭の小學校に敎鞭を執り、十八歲にして郡の選拔に依り廣島師範學校の講習生となり、次いで京都に出で眞宗普通敎校に佛典竝に語學を學び、業を卒へて京都開明新報を編輯し、明治二十一年奮然起つて海外に留學し、英のオックスフォード大學に入り博言學の大家マクス、ミュラー博士に就き、梵語を主とし、印度文學、哲學、宗敎學等を修め、明治二十七年卒業して末松謙澄氏と共にドクトル、オフ、リテラチユーアの學位を受け、尋いで獨逸に遊びキール大學、伯林大學、ライプチヒ大學等に入り、ドクトル、ウヰロソフイー、マギステル、アルチウムの學位を授けられ、更に佛國に學び專ら言語學を修め、マスター、オブアーツの學位を受け、在留前後七年深く斯學の蘊蓄を究めて明治三十年歸朝せり、在英中漢譯觀無量壽經を譯述して東方聖書中に收め、次いで義淨三藏南海寄歸內法傳二卷を英譯し、牛津大學出版局は是れを刊行して氏の名聲大に昂る、歸朝後文科大學敎授に任せられて言語學の講座を擔任し同三十一年末松遞相の秘書官を兼ね、三十二年亦外國語學校長を兼ね巴里語竝に梵語學を擔任して引續き今日に至り、明治三十二年文學博士の學位を授けらる。

氏は亦單に活字引的の學者たるに止まらず、北淸事變の際西藏文一切經の宮中に入るや之を請ふて大學に保管せしめ、日露戰役の際蒙古文、一切經、滿洲文一切經を國有に歸せんことに努め　陛下より金一萬圓を賜ひて之を購ひて大學に保管し、嘗てマクスミュラー博士の歿するや、岩崎久彌男を說いて同博士の遺せし圖書全部を講ひ以て大學に寄付せしめ、又嘗て在英中我國英書に乏しきを慨し、英國の特志家を說き其十餘萬冊の書籍竝に維持金一萬五千圓と共に我國に寄贈せしめ日比谷圖書館に藏置せしむ、或は亦東洋學の中心が常に西洋に在るを慨し帝國東洋學會を組織し、一切經を根據として印度の文明を討究せんとし自ら梵語大辭書を編輯する等、我が學界に貢獻したること最も多く、其著佛領印度支那、一名佛國日南の新領土、巴里佛敎文學講本、竝に佛譯金七十論は本邦空前の大文字として已に著聞する處、頃者、國民と宗敎の著又將にならんとす、以て其蘊蓄の深きを知ると共に、氏の如きは洵に斯學のオーソリチーとして實に學界の重鎭たり

氏は亦學問以外に絕體の信仰を有す、故に名利を趁はず聞達を求めず、塵外に超然として光風霽月の慨あり、溫順玉の如く毫も邊幅を飾らず、人に接して親切溫情、眞に道學先生の風あり、以て曲學阿世名利に戀々たる學者輩は宜しく氏の前に愧死すべきなり矣。

令息榮君已に醫科大學を終へ前途有望を以て目せらる。

農商務省農務局長　下岡忠次君

官海に於ける新進の手腕家として名聲ある農務局長下岡忠次君は、明治三年川邊郡廣根村に生れ、同二十八年法科大學政治科を卒へ高等文官試驗に合格し、翌二十九年熊本縣參事官に任せられ、三十一年京都府に轉じ、次いで茨木縣書記官を經て法制局參事官に任せられ、日露戰役の際捕獲審檢所評定官を兼ね列國環視の間に其任務を全うし、其功により勳四等に陞叙せられ旭日小綬章を賜ひ、三十九年十一月秋田縣知事に榮轉し、四十一年十月農務局長となり以て今日に迨べり、而して其任に就くや只管農事の改良に意を灑ぎ、蠶種統一問題の如きは卽ち其一なり。

氏は少時藤澤南岳翁の門下に漢學を修めて秀才の聞ゑあり常に詩文を能くす、去れば單に當世の輕薄なる學士肌にはあらずして、一面輪廓の大なる美點あり、毫も衒驕の態度なく人に接して一片掬すべきの情味を有す、學殖の深遠なるは勿論、壇上に起つや辯舌流暢、筆を呵せば亦口以上に圓熟せるものあり、少壯行政官として後來を囑望せられつゝあるもの亦故なきにあらざる也。

兵庫縣人物史　下岡忠次君

大藏省技師 直木倫太郎君

兵庫縣下には偉人豪傑は居らぬが、併し各方面に相當な人物は澤山ある、けれども最早行く處迄は行つて了つた、云はば過去の人が多い、而して其後繼的人物として、嘱望する人は寔に寥々たる有様、僅か十指を折るに過ぎぬ、就中香氣馥郁たる花形役者は直木倫太郎君であらう。

氏は加東郡下東條村の崇封眞島顯藏の長男、父顯藏氏は維新の際より兵庫縣に出仕し、家族を携へて神戸に移つた、氏は幼にして聰慧禪門と稱せられ、偶々神戸の紳商直木政之助氏が其才を愛し、養ふて以て長女隆子に配す、工科大學に入り土木科を修め築港の學を專攻し、卒業直に東京市役所に入り土木課長を命せられ、折柄東京灣築港が企劃せられて之が設計を擔任し、同三十四年築港視察研究の爲めに欧米に派遣せられ留ること三年、其績著を辯して歸朝すると東京灣築港の沙汰止みとなり、氏が熱心研究の結果も、爰に之を應用することを能はざりしが、次いで横濱築港が起工せられて、大藏省に入り、臨時建築部技師として同築港を擔當し、今や當に工を竣へ、其成案の嶄新にして遜色なく、本邦築港工事中の模範として、識者の稱讃するに至つたのは、氏の功勞が大に與つて力あるや勿論である。

氏は本邦に於て築港專門の少壯技術家として、夙に嘱望せらるゝ而已ならず、頗る事務の才に長じ、寧ろ主動的の人であるとは一般の認識する處、去れば曩に千代田瓦斯株式會社の專務取締役として、同社の株主より氏を挽つこと甚だ切なるものがあり、氏も亦大に心を動かしたか、遂に乃父の直之助氏は之に同意を與へざりき、蓋し同社の如きは東京瓦斯に拮抗して起り、一時人氣に投じたる大會社ではあるが、前途の難局を考慮したからである、果して其後同社の紛擾を惹起するに及び、父の老實なる鑑識に敬服すると共に、今後の進止は偏に父の意見に從ふと言つて居る。

氏が才氣の煥發せる、怎うしても他動的の技術家而已に滿足して居ることは出來ぬ、そこで高等文官試驗を受けて、大に主動的に活動せんものと、近頃法律の研究中であるが、其

日本銀行株式局長 津久井茂君

兵庫縣の先輩多くは自己の榮達に汲々として、敢て地方の後進を顧みるものなしとは、當に吾人の說く處であるが、單り津久井茂君の如きは、縣下の人物として稀に見る愛鄉心に富み、且後進の指導に努めつゝある人である。

氏は尼ヶ崎町に生れ、明治二十六年法科大學法律科を卒へ直に司法官試補として姫路裁判所に赴任し、翌年神戸地方裁判所に轉じ、間もなく職を辭して辯護士となつて神戸に開業し、少壯議論家として吹稱せられたりしも或る人の薦めによりて、明治三十二年日本銀行に入り、文書課長となり、日露戰役中京都出張所詰に轉じ、三十九年株式局長として本店に復し爾來今日に至つて居る。

氏は縣下出身の士が何れも孤立して更に團結せざる而已ならず、互に疎隔するを慨き同鄉出身の士と共に西攝會と云へる地方的の機關を組織し春秋相會して喜戲談笑互に氣脈を通せんが爲め自ら幹事となつて多年周旋する處あり、進んでは地方の青年が笈を東都に負ふもの更に倚る處なく、前途有望の身を以往々方向を誤り、或は誘惑に陷るものあるを憂ひ、之等を指導監督して以て大成せしむべき寄宿舍の建設を慫慂し、治五郎、元良、丹波、高楠博士を初め、在鄉の小西、中馬其他の有力者に謀りしが幸ひ諸氏の援助によつて近く建設の運びに至れりと云ふ、吾人は西攝學生の爲めに氏の勞を多とすると共に亦余輩と主張を一にせるものあるを慶ぶ。

氏は溫厚篤實にして道學先生の風あり、爭ひを事とせる辯護士の如きは氏の性にあらず、之を去つて銀行界に入る、己を知るの明ありと謂つべく、今や日本銀行に於ける鏘々として目せらる。

能力の絶倫なる縣下の森博士とも稱すべきである。

氏は氣品高尚にして謠曲に趣味を有し、性怜悧敏捷才子風の一面には恬淡洒落の處もあり、人に接しては呵々大笑して克く談じ能く語る、書生風を以て世に處し、他迄大成を期して居られる處は、氏が人物の大なる所以である。

兵庫縣には神戸港と云へる東洋第一の貿易港を有して居るにも拘らず貿易事業に從事して居る人々は何れも單に神戸に籍を有せる准兵庫縣人計りであつて、縣下出生の人にして之に從事せる者は寔に寥々として論ずるに足らぬ、之れ卽ち縣下の人物が何れも雄大なる世界的の思想に乏しき缺點として吾人が常に遺憾とする處、而も爰に岡本良太郎氏のあるは又以て珍とするに足る。

氏は三田藩士、佐野新六氏の次男、幼少岡本良太郎氏の養子となり、其後を繼ぐ、少々慶應義塾に學び、修業後築地のラスベ商會に入り、同商會が神戸に支店を設くるや、神戸に移り、後亦本店に復し專ら輸入機械販賣の術に當り、同商會の爲めに奮闘しつゝあり。

年尚未だ少壯にして、覇氣に富み、一面氣骨稜々として勤勉努力主義を抱持し、現に同商會が本邦輸入商として發達し來れるもの氏の功業亦大なるものがある。

ラスベ商會

岡本良太郎君

▲其他の人物

播州出身の士にして、千葉地方裁判所判事下山英五郎、横濱稅關長嘉納德三郎、其他逸すべからざる人物ありと雖も、編者は未だ面識なく、亦其事歷を審にせず、以て缺篇に讓る。

世界の貝類學者
東洋の第一人
平瀨與一郎君

縣下の人材多士濟々として、實業界に、政治界に、軍人として、學者として逸才に乏しからず、而も世界的の人物を物色すれば纔に二三に過ぎず就中平瀨與一郎氏の如きは其最も優たるもの。

凡そ當今の學者と稱する輩、學を修めて業を終ゆるの後は糊に豐かならんことを專らにし、利を趁うて頗る急なり、利と交渉なき學に至つては之を捨てゝ顧みざること弊履の如し悉くの如きは學を修むるにあらずして糊を求め利に汲々たるものなり、不見識にして無定見なる市井の賈人にも劣るものあり、氏は糊を求めずして趣味に走れり、貝類の採集に從ふこと既に二十五年、財を散ずること數萬圓、以て世界の博物學界に貢獻した功勞眞に偉大なるものあり、宜なり人種を超越し、地域を脫離して億萬人に敬せられつゝあることを、氏を出したる兵庫縣は亦以て世界に誇るべく實に一大光榮と謂はざるべからず。

氏は淡路福良の人、家は同地方代々の素封として夙に里人の崇敬を受く、嘗て基督教を信仰し、明治二十年の春新島襄氏を慕ふて京都に移り居を蛤門外にトす。

▲初めて貝類採集の運命を自覺す

偶々新島氏の紹介に依りて博物學者グンス博士と會し談偶淡路の風物に及ぶや、博士は氏に囑するに貝類採集の事を以てし、且告ぐるに海濱に生れたるものゝ職分として、未だ發見せられざる貝殼を滄溟の底に採り、以て天下の學界に貢

獻するの興味あることを以てす、福良の濱に長じたる氏は此時一種の彈機を感じて、其生涯を貝殻の間に埋むべき運命を自覺したり、斯くて或日初めてゲンス博士と共に一日陸貝の採集に從事し、洛東黒谷の小倉某の別墅に遊び、朽敗せる老楓樹の下に數箇の煙管貝の生息せるを發見するや、採蒐の第一指は初めて爰に下されたり、是れ氏が貝殻生活に於ける第一印象なり、(煙管貝は其形狀日本の煙管の如くなるを以て名あり、種類二百餘種、歐米の陸野に於けるものは大抵右卷なるも、我國に於けるものは左卷にして、右卷は殆ど見當らず氏が二十餘年間蒐め得たる幾萬箇中僅々三箇の右卷を藏せる而已なりといふ、而して其分布は日本の本土に亘るも土地に依りて貝殻の斑紋に多少相異あり、美濃地方にては草庵の上に往々發見すと云ふ)。

明治二十三年頃、京都にギュリッキなる米國宣教師あり、傳道の傍ら陸貝の採集に從事し其獲たるもの亦尠からず、氏はゲンス博士及ギュリッキ宣教師ごに依りて愈々趣味の基礎を築くに貝殻を以てせり、ギュリッキ氏は現に布哇にありて陸貝の研究に餘念なきものなりと、趣味の向上に從ひ採蒐熱は漸次增進し來りて、京都の洛外より遂次滋賀縣に入り、更に美濃路に及ぼし高橋峻嶺より谿澤池沼に採探して珍種を獲ること尠からず、茲に於て「貝類採取案内なる一小冊子を編し、之を全國の町村役場等に送りて海陸貝類の採取と之に對する報酬とを告げ、以て弘く採取の手を國内に伸ばしたり、然れども未見の人の而も片々たる一冊子の案内書に依りて、貝殻を採取して京洛に送致する程忠實なる篤志者は尠く、爲めに何等得る處あらざりき。

▲奮然と採集に着手す

之を觀て氏は大に奮起し助手數名を聘し、採取の方法と研究の大意とを傳習せしめ、先づ試みに紀伊、伊勢、志摩等の海岸國に遣はして採取に從事せしめたり、其間實に三千六百餘日、十年を算す、而して全國に亘りて陸貝を採り得たるもの今や一千餘種、其數三十萬以上に出づべく、殊に特筆すべきは我國に於ける蝸牛の殆ど盡究せられたることにして、二百餘種の異族を見ると云ふに到つては、興味ある報告と云ふべく、凡そ貝類の蒐集は之を學術上の研究はさて措き、人の風雅心を滿足せしめ、愛翫用、裝飾用としても甚だ趣味多く效益あり、本邦に於ても古來貝類に就ての高尚なる遊戲、詩歌、教訓あり、我は愛翫用として或は本艸家の參考として之を蒐集したることありしも、維新以來殆ど絶無の姿となり居りしもの、篤學平瀬氏に依りて、之が普及を計られたるは單に家庭教育の一端としても、博物上、地理上の觀念を與へ、海事思想の皷吹、雄大の氣象を養ふ上に於て裨益する處少からざるなり。

▲貝類の採集二千餘種
前人未發のもの二百五十種

倘し夫れ海に棲息するものに至らんか其範圍の擴大にして深甚なる、之が採取は決して容易の業にあらずと雖も、氏は既に二千餘種を蒐め尚盛んに採取しつゝあり、殊に前人未見

の珍種は二百五十餘種に達し「ヒラセ」の名は其貝殻の名稱として世界の科學界に喧傳する所也、數年前福良の濱に於て發見したる長絲掛貝(原名スカラート、マグニヒカ)の如きは唯書物の裏に其存在を傳ふるのみにして何處の國に產したるか亦何れの年代に採り得たるものなるか毫も之を知るものあらざりしが、而も此世界貝學者の珍翫措く能はざるものは、實に氏の手に依りて初めて貝學者の案頭に飾られたり、加之ならず陸貝クロリチスの研究の如きは最も精細を究めたるものにして貝毛の形狀に依りて種類を區分せるが如き全く細菌學者と其觀察の方程を同うするものなり。

氏は曾に日本のみと云はず今や朝鮮は勿論、臺灣、清國の各地に助手を派遣して採取に從事せしめ、亦外國の貝學者と互に交換して六千餘種を得るに至れり、而して趣味の友人は獨の故モルレンドルフ、故ボットゲル、ハールマンロール、エールマン、英のサイクス、トムソン、サウエルビー、フルトン、米のビルスブリー、ウォーカー、ドール、グラートカップ、ヘンダーソン、リッチ等の大家にして、何れも當に書狀報告を交換し、平瀬氏の研究に聽き趣味に打たれつゝあり氏を國民とする日本に於ては貝拾ひの一翁として未だ深く顧みるもの尠しと雖も、足一度歐米の學術界に入らんか「ヒラセ」の名は夙に認識せられ、去る三十四年以來既に米國費府博物學會の會員として、同附屬陳列館には其肖像と小傳とさへ掲げられあり、田中正平博士を知らずしてカイゼルの下問に困じたる故春畝公の橡面摔は大抵の人の免れざる所なるべし。

▲科學的智識に乏しく
趣味劣等なる我國民

科學的智識に乏しく趣味の劣性なる我國民は、氏が曩に「貝類雜誌」を刊行して之に關する智識と趣味の普及を圖らんと努むるや、其售るる處僅に百五十部、而も外國に送致するもの五千部を超ゆたりと云ふ、然れども之が爲めに五千金の損失を來し、雜誌は目下休刊に屬するも今や「貝類圖說」の稿成らんとす、昨秋京都府圖書館に初めて貝類展覽會を開くや、二週間一萬五千の觀客を引きたるは聊か以て氏の苦心を慰するに足るべきか。

▲世界の珍種一萬餘種を藏す
介類館設立の急務

氏は平瀬介館を洛東岡崎の地を卜し近く建設の計畫中に屬す、介館設立は實に國家的事業として差支なく、世界に於ける唯一の珍種一萬餘種は狹隘なる一室に一小部分を陳列せらるゝのみにして、曾に全部の觀覽を爲し得せしめ難きのみならず、一朝出火又は他の天變地災に遭遇せんか、學術界の至寶は烏有に歸すべし、されば京都府知事大森鐘一氏、前京大總長木下廣次田中芳男氏を首め、其他の有力者は何れも氏の事業に同情して、斡旋せられつゝあるも、未だ建築するに至らず、斯る世界的の偉人を產出したる兵庫縣は而も事業途にして氏を苦むるが如きは實に縣下の恥辱と謂つべく、一妓妓に萬金を惜まざる富裕の社會は、東洋の一人者を助けて、萬

國未だ曾て影を印せざる介館の爲めに資する能はざるか、名和昆蟲と平瀬介館とは實に國家の至寶なり、而も平瀬介館は

我縣下より産出したることを特に讀者に記憶せられんことを希望に堪へざる也。

鐵道院業務調査課長
理學博士　田中正平君

凡そ天稟と云ひ、修養と云ふも、此天稟を發揮せしむべく最も偉大の關係を有するものは境遇であると云はねばならぬ縱へば戰國の英雄豪傑も、太平無事の日にあつては、蓋世の功を振ふことは出來ぬ、東鄕、乃木兩大將の如きも畢竟日露戰役に依つて初めて其偉を天下に示すことを得たるもので、若も日露戰役徵せば或は單に一武辨として終つたであらう、之と同じく米國前大統領のルーズベエルト氏が、世界の大偉人として持囃されつゝあるも、若し彼をして朝鮮に生れしめたなれば如何、彼を世界の大偉人たらしめたるものは米國の大天地に生れしめたからである、然らば現に日本人又は朝鮮人と雖も若も米國に生を享けしめたならば或はルーズベエルトの如き大偉人が出現したかも知れぬ、乃ち博士田中正平氏の如きは慥に其一例である。

故伊藤公が往年獨逸に至り、カイゼルに謁するや、「田中正平の消息如何」と訊かれて、公は其何人たるやを知らず、本答に苦み隨伴者都筑男の注意に依りて纔に奉答し得たりとは名高き話柄にして、氏は獨逸留學中一種の樂器を發明し其技術を喧傳せられて獨帝に謁し、氏が歸朝後淡路の留守宅に同國の上下より樂器の註文甚だ多く、家人は大に狼狽したと言ふことである、斯くの如く獨逸に在つては令名嘖々たる世界的の音樂博士も、今や我國に於ては氏の人物は之を容るゝの用途なく、鐵道院技師として其存在を漸く認められつゝあるに至つては、氏の爲めに日本の天地の小なるを歎息し、文明程度の未だ氏を容るゝに足らざるを遺憾とするものである。

氏は津名郡加集村に生る、幼少沼田存菴に就て漢籍を學び大阪に至りて英語學校に入り、明治十五年年纔に二十二歲を以て理科大學を卒へ、同十七年獨逸に留學し居ること十一年專ら理工科を研究し、同二十六年理學博士の學位を受け、歸朝後日本鐵道汽車課長となり、同四十年鐵道院に入り、現に業務調査課長の任にある、溫厚篤實、毫も名利を衒はず、俗

▲先考信之氏の畧歷
增田銀行行主　增田信一君

渉たる一孤島の放を以て人物に乏しきを云ふ勿れ、ナポレオンはマルシカ島に生れて歐洲を席捲せり、由來淡路出身の人物亦人材に乏しからず、就中故增田信之氏の如きは同島の代表的人物として縣下出身實業家中最も成功の躍如たるもの。

氏は淡路洲本在に生る、德島藩の足輕を勤めたりしが、幼にして聰慧徒らに水澤の一寒村に朽つるを好まず、十七歲の時廢藩と共に、身を實業界に委せんことを志し、謂へらく實業界に投せんとせば宜しく數理應用の力に賴らざるべからずとなし、數學の研究に志すこと一年、明晰なる頭腦は大に天才を發揮し、拔擢せられ阿波中學校の數學教師に聘せられたり然れども氏の志茲にあらざれば唯研學の方便として應じたるもの、幾何もなく明治五年神戶に出で、更に鐵道技師を志願して測量に從事し、天稟の英才と數理に精通せる頭腦は、有爲の技術者として目せられしも、之又明治十二年職を辭し初めて運輸業に從ひ、小蒸汽を購入し自ら船長となり近海航行を營めり、而も成績良好ならず、偶々大阪新報の創業に際し某氏の懇請に依りて庶務の總轄を託せられしも、畢竟氏の志にあらず、同十三年京都府より製靴工場の拂下げを受けて之を經營し、時に大阪製銅會社の創立せらるゝや、又之が支配人となり、其後意見の容れられざりしより、斷然之を退きしが、同十八年頃同會社の悲運は殆ど瀕死の狀態に陷り、收拾すべからざるに到る、氏は懇請に依り再び入社して大に改革に努め、同時に天保錢の鑄潰しを引受け、同地金の拂下げを

受くる等莫大なる利益を得たり、爲めに從來反古同樣なりし同社の株券は、額面二倍に昂騰するに至りたりと云ふ、亦以て氏の手腕に俟つ處尠からざりしを見るべし。

折柄日韓通商の日に進み、月に繁劇に趨き、取引上次第に複雜を來せしかば、氏は韓國通貨を改鑄して彼我の整一を計るべく、貨幣改造を同國政府に說き容れられて仁川に造幣局を新設せらるゝに到り、之に要する器具、機械、職工の傭入等一切を幹旋して、之を補け遂に貨幣改造の難事業を斷行することを得たるは全く氏の功勞に歸せざるべからず、されば同國政府は特に位階勳章を下賜して其功を表彰せりと云ふ。

氏は又貿易の安全を圖り、其發達を助長せんが爲めに、東洋海上保險組合を組織して各自共同の保險を爲すべく盡瘁せり、是卽ち大阪に於ける海上保險會社の濫觴也、翌年商法發布と共に資本金百二十五萬圓を以て大阪保險會社を組織し、自ら之が社長として經營せしが、當時保險會社の勃興は競爭劇甚にして、其困難甚だしかりしも氏が堅實なる經營は、遂に同業會社中有數の實績を擧ぐるに到れり。

故　增田信之君

氏は平生難に當りて苟も之を避けず、盤根錯節に處して銳利の才略を現し、機を察するに敏にして事を處するに明快、整然として序あり、綽々として餘裕を存し、先天的實際家の才能を有したりき、其多年奮鬪力戰、克く瀕死の事業を蘇生せしめ、延いて隣邦の施設に貢獻したると共に、自ら巨萬の資を積みたるが如き、如何に手腕の非凡なるものありしかを想見するに足るべし。

其後明治二十四年資本金五十萬圓を以て私立增田銀行を創設し、一介の寫措大は我邦實業界の先覺として嶄然頭角を現すに至りしが、由來才子短命、明治二十九年未だ五十歲に滿たず、溘焉として易簀せり、想ふに氏の生涯は數理を緯として才能を經とし、秩序整然、而も熱心事に從ひ艱難に堪へ、堅忍不拔にして毫も僥倖的にあらざりき、亦以て後進者の範と爲すに足らんか矣。

▲當主信一君

氏は先考の歿後家政を承け增田銀行主として質素と眞摯なる經營は、銀行界の堅實なるものとして夙に信用あり、業務發展の爲めにビルブローカーを經營し、大に將來の發達を圖らんとするもの、如く、今や世界進步の趨勢に鑑み、現に泰西の文物制度、商工業視察研究の爲め、歐米漫遊中に屬す、想ふに氏は觀察力の英敏なる必ずや齎し歸る處のもの多かるべく、今後に於ける氏の活動は蓋し偉大なるものあらんか。

爲人、溫淳高雅にして、品行は端正人に接するや寬大を旨とし、氏の行員時に傲慢なるものありと雖も、敢て之を咎めざるが如きは其度量の濶大なるを察すべく、大阪に於ける少壯實業家として錚々の聞こえあり、亦以て後來を嘱望するに足る。

前絹絲紡績會社長

森田茂吉君

氏は津名郡志筑町に生る、森田清八の次男たり祖母某頗る賢婦人にして先考清八氏を擁し大阪に出で、魚問屋を營み家道大に發展したりしが、清八氏は氏が纔か五六歲の交に夭折し、長男福次郎氏其後を繼ぐ、福次郎氏少壯家道を承けて、大阪に抵り同じく魚問屋を營みつゝありしが、偶々青年の血氣に逸りて堂島に輸贏を爭ひ、一敗地に塗れて忽ち祖先傳來の家產を蕩盡するに至る、爲めに祖母の訓戒甚だ切愛に於て黯然前非を悔ひ、故山に歸り幾くもなく郵便局長を命せられ引繼き其職に在ること二十年、佐用郡の河本參次氏と共に縣下郵便局長の先輩と稱せらる、其間氏の爲めに辛うじて學資を給したりとは同地方の美譚とする處なり。

氏は明治二十二年法科大學を卒業し、清浦子が當時警保局長たりしの故を以て警保局に勤務し、其後警視廳に轉じ、次で內務書記官となり臺灣課長を兼ね、三十六年に衛生局長となり、更に農商務省に入り商工局長に補せらる、四十一年南清より印度に航し、彼地方商工業の狀態を視察して齎す處甚だ多く、歸朝後印度貿易を奬勵皷吹し、爲に我國の貿易發達を助長したるの功績頗る大なるものあり、其後藤田四郎氏の推薦によつて實業界に入り、絹絲紡績會社の社長となり、兼ねて會社の狀態を調査するや、到底獨立經營の至難なるを覺り、浘大坊氏と謀つて福紡に合併せんとして敗れ、後鐘紡と合併の議を起つるや岡山派の反對となり、爲に物議を醸したりしも遂に之を斷行し、之と共に同社の關係を絕ち、今や赤坂臺町に蟠居し何事か劃策しつゝあるものゝ如し、余は嘗に氏が京都に在るの時岡崎町の邸に訪ふ、氏は亦多くを語らず、一見して傲慢不遜自ら豪宕を衒ふものゝ如きも、而も一面には稀に見るの苦勞人として一種の溫た味を有し、頭腦明晰にして事理に明く、縣下出身の人物中尙多くの未來を有する人たらん歟。

大阪株式取引所理事　田中太七郎君

氏は淡路出身の實業家として最も錚々たるもの、現に大阪株式取引所理事として異彩あり、近時工業界の發展に伴つて有價證券に對する放資者の激增するに從ひ、之が公定相場を以て市價の標準を定むべき機關たる株式取引所の如きは、最も愼重にして公平なる處置を取らざるべからず、彼の仲買人の專横に依りて往々市價に波瀾を來さんか曾に放資家が不時の損失を醸すのみならず、惹いて經濟界の秩序を紊し、遂には財界に混亂を招致することも其例に乏しからず、去れば取引所の理事たるものは能く財界の大勢に通曉し、常に經濟界の趨勢と有價證券市價の波動に留意し、調節宜しきを得て眞に公定相場として市價標準を誤りなからしむるの手腕を要す、是れ株式取引所に人材を要する所以也而して多年斯界に於ける蘊蓄と實際的手腕に於て聲名ある田中氏の如きは、寔に適材なりと謂つべし。

氏は明治十年初めて大阪に到り、堂島米穀取引所仲買人を開業せり、後明治二十年巨商藤田組の聘に應じて支配人となり、同二十四年藤田組を代表して大阪商船會社に入り副社長となれり、斯くて三十一年職を辭し須磨に卜居して閑散に自適すること數年、此間に於ける氏は時世の進運に遲れざらんとして只管讀書三昧に入り、常に事業界の趨勢を研究して怠らざりしと云ふ、以て氏の蘊蓄を知るを得べし、蛟龍池中の者に非らず、我が事業界は氏をして永く悠遊閑散に在るを許さず、三十六年九月大阪株式取引所理事に推擧せられて今日に至れり、株式取引所は前述の如き關係を有すると共に、一面取引所對仲買人との調和は最も理事者の苦心する處なり、氏は此間に處して能く圓滿自在に調和を計り、兩者相俟つて事業の發展を期するもの亦其衆望のある處を知るに足るべし

近時株式取引所は世の注意少からず、株式取引所改善案なるもの學者實際家の間に喧傳せらるゝや、氏は取引所論なる一著を公にして其意見を發表し、近來の好著として迎へらる。

報知新聞社長　三木善八君

兵庫縣には新聞經營を以て成功せる二人者あり、一は朝日新聞社長上野理一翁にして、一は報知新聞社長三木善八君となす。

氏は淡路の人、少壯政界に投じて西走東奔す、惟ふに淡路は絶海の孤島にして、舊幕時代に在つては志士の避難所たるの觀ありき、隨つて民權自由の思想熾なりしは自然の數と謂はざるべからず、氏も亦民權論者の先鋒となり、盛に天下の大勢を論議し、明治九年淡路新聞を起し、次いで神戸新聞を創刊して、大に政界に奔走する所ありしが、後福澤先生の說を聞いて大に悟る處あり、一切の政治運動を斷ち、十九年東京に出で報知新聞社に入り、具に苦心經營を重ね、遂に同社をして今日の大を成すに至らしめたり、蓋し帝都の新聞其數多く、之れが經營者は相競ふて、何れも廣告面に重きを置けるに反し、獨り氏は廣告よりも發賣紙數に重きを置き、發賣紙數にして多ければ、廣告は自然に得らるべしとの意見を抱持し、以て見事に新聞經營に成功せるが如きは、其識見の常凡ならざるを知るべし、而して今や東都新聞界の巨人を以て目さるゝに至る、又偉なりと云ふべし。

東京製本合資會社長　森一馬君

淡路島は京阪の都に近く、氣候も溫暖にして風景も佳い、隨つて古來時世に屑からざる不平不滿の士が、多くは爰を避難所となし自ら高尙なる智識が輸入せられ、且つ生活も比較的容易なるより一般に智識と文學は却々に向上して、維新の際の如きは官尊民卑の風一層盛なるものありき、然るに獨り牧增田信之、森一馬氏の如き、實業家を出したるは亦以て同地の一異彩ならんか。

氏は津名郡由良に生れ、幼少鹿島秀歷氏に隨ふて東京に出で、本鄕の共慣義塾に學び、出でゝ櫻南學舍に數學の教鞭を執り、明治十三年三月初めて大藏省に入り銀行局に勤務し、同二十一年迄勤續したが、官海生活は氏の素懷にあらず、故に飄然職を辭して實業界に入り、同年八月八王子銀行の顧問となり、同時に第七十八銀行東京支店支配人に就任し、次いで同行の相談役となり、二十七年一月同行の取締役に選ばれ二十八年冬鈴木藤三郎氏と共に日本製糖株式會社を組織して取締役に當選し、同二十九年日本製粉株式會社竝に日本石油精製株式會社を組織して何れも監査役に擧げられ、同三十年第八十九銀行專務取締役に就任し、又同年千住製紙株式會社取締役となり、三十二年東京商業會議所會員に當選し、同年東京製本合資會社を創立して社長となり、其後三十六年鈴木藤三郎と意見を異にし、日本精糖會社を辭するや、其功勞を賞して同會社より感謝狀竝に金三千圓を贈與せられ、又八十九銀行は株主總會の決議を以て、同行在職中の勤勞を慰せんが爲めに、感謝狀竝に金盃、金一千圓を贈つた。

以上は單に經歷の梗概にして氏が當年實業界の花方として如何に活躍したるかゝ解るであらう。

氏は性圓轉滑脫名利には恬淡比較的單調な質である、故に辛辣なる駈引を以て利益を壟斷せやうと云ふやうなことは屑としない、然るに日糖重役たりし頃、社長の鈴木藤三郎氏が議員買收の計畫を立つるに及び、惣くの如きは私益の爲めに

國家を喘着するものである、否國家を靠するものである、倶に事を執るに忍びないと言つて斷然同社の重役を辭したるが如きは、氏が人爲りの一班を窺ふことを得べく、其後日糖疑獄事件の起るに及び何れも氏の進退に感服したと云ふことである、其他の關係諸會社の各重役何れも氏の理想に反する行動を執らんとする者多く、爰に共同的事業たる諸會社を投頭して、今は氏が一家の事業たる製本會社の經營に任じて又他を顧みず、比較的閑散に身を處して居られるが、恭謙溫良、人に接すれば一見舊知の如く、而も輕擧粗暴と云ふ風ではなく圓滿瀟洒何となく人をして欽仰せしむる溫みがあり、道に當年東都の實業界に持て囃されたる俤を偲しむ蓋し屈理屈の多き淡路出身の人物としては、稀に見る圭角のない人である。

大阪アルカリー會社長　藤江章夫君

維新以來郡制の發布と共に縣下の人物にして郡長の職に在りしもの甚數甚だ多し、然れども時世の推移は、新進の人物が擡出するに迫ひ、任用令の拘束と自然淘汰の結果、今は已に世に忘れられて槽櫪の間に朽ちんとするもの比々皆然らざるはなし、然るに獨り藤江章夫氏が早く旣に實業界に入り、今尙社會に雄飛しつゝあるが如きは、また時勢を看るの明を有したりと謂つべし。

氏は三原郡廣田村に生る、家は代々醫を以て業とし、父來逸氏醫を以て阿波侯に仕へ、祿二百石を食む、氏は其長子たり、幼少洲本の文武館に漢籍を學び、少壯にして區長に選擧せらる（當時淡路は已に自治の制度にして區長の如きは選擧制を執れりと云ふ）二十五歳漸く適令に達するや縣會議員に擧げられ、田艇吉氏等と共に議員中の錚々と稱せらる、幾もなく拔擢せられて三原郡長に任せられ、明治十九年揖保郡に轉じたりしが、家政の都合によつて職を辭し、其後淡路紡績會社を創立して社長となり、二十九年鐘紡に合併すると共に自ら之を退き、同三十年大阪アルカリ會社の社長に擧げられ居を大阪に移し、以來肥料界の重鎭として劃策する處あり、其他諸種の事業に關係して大阪實業界に於ける有力者として介名の噴々たるものあり。

氏は性重厚、瀟洒にして人に接するや慇懃、頗る經子の學に通じ、從つて度量淵大、淡路出身者中輪廓の大なるもの。

氏は幼少淡路の儒家紹田存莊に就て漢籍を修め造詣頗る深し、後縣會議員となり縣政に盡す處多く、大に政界に躍飛を試みんとせしも、氏の高潔にして眞面目なる風格は到底陋習多き政界の人となるを潔しとせず、去つて實業界に入るべき序幕として神戸商業會議所書記となれり。

商業會議所は對外貿易關係の調査事項に寧日なきの有樣にて、氏が實業界に處するの研究題目は殆ど備らざるなく、日夜研鑽怠る處なかりしが偶々矢野氏の報知新聞に入るや氏も亦之に從ひて爰に操觚界の人となれり、漢籍に深き造詣を經とし、神戸商業會議所に於ける研究を緯として筆陣を張り、侃愕の論議は幾何もなく氏の名聲大に昂り、言論界に一異彩を放てり。

斯くて數年遂に實業界の人となりて郵船會社に入り、後ち同社支配人に擧けらる、本邦海運界に於ける郵船會社の地位は更めて云ふまでもなく、隨て同社に支配人たる氏の手腕を知るに足るべし。

氏は人と爲り溫厚にして篤實、氣品高尙にして詩文を能くす當代の實業家中牢に見る人物なりと云ふ。

代議士　廣岡宇一郎君

氏は東京辯護士界に聲名あり、現に政友會所屬の代議士たり、嘗て縣下に於いて數度代議士を爭ふも終に當選に至らざりしが、四十二年漸く補缺として當選せり、又以て氏が縣下に於ける信望の如何を知るに足るべし。

政友會は所謂多數黨なるの故を以て其在野に於けると、議會に於けるの勢力は到底國民黨の敵にあらず、由來政黨を蛇蝎の如く嫌忌せる藩閥政府も、桂公に依りて惰意投合の結果益々其勢力を恃みて專横を擅にす、蓋し道の桂公も議會に於ける政友會は意の如く操縱し難を見て故伊藤公の擘に倣ひしもの、されば苟も代議士たらんとせば必ず籍を政友會に措くの傾向あり、氏も亦四十五年の總選擧には出馬せんとするの意ありと云ふ當選せば幸なり。

氏は淡路出身者中の異材たり、春秋尙高し今後の波瀾多かるべく、吾人は切に努力を望む。

在鄉之部

縣外出生神戸在籍の人物

川崎造船所顧問　**川崎正藏翁**

同副社長　**川崎芳太郎君**

齊しく是れ成功者と云ふも、中に大小輕重の別あるは勿論であるが、而も其最も大なる成功者として現代實業界に謳歌せられつゝあるもの、之を神戸市に於いて川崎正藏翁のあることは、恐らく天下に知らぬ者はなからう、然り翁は偉大なる成功者である、而して其成功たるや獨り一身一家の利達に止まらずして、實に國運の進展上に貢獻したる國家的事業の一大成功者たるに於いて、世の尋常成功者と大に趣きの異るものがある。

抑々翁の出生は鹿兒島縣、其先は日向の名族であるが、後鹿兒島に移り、世々商を以て業とせられてあつた、翁の先考を利右衛門と稱し、翁は實に其長男にして天保八年七月を以て生れ、幼名を磯治と云ひ、後家事を繼承するに當り、其名を利右衛門と改め、後又正藏と稱す、夙に父君に代り、藩命を負ふて毎歳某藩に至り、其貸金利米を受取るを例として居られたが、其處分の宜しき所より後鹿兒島町役人に登用せられき、去れど翁は斯ることを以て滿足せず、又町役人の如きものは固より其眼中に措かず、男兒大事業を行はんとせば須らく先づ天下の形勢を察せざるべからずと爲し、或は畿陽に遊び、又山陰山陽の諸國を遊歴して四國に航し、轉じて大阪に入るや、薩藩乃ち翁を擧げて大阪倉屋敷の用達と爲しぬ、間もなく戊申の戰亂となり、幕兵の爲めに逮捕せられんとしたが、危き所を免れ、泉州堺に潛伏して戰亂の平定を待つてゐた、其内に世の中も平定したが、而も時代の趨勢は頓に一變して來た、翁は早くも此趨勢を觀取し、專ら力を商業に致すと共に、當時交通運輸の便開けざる場合に當り、彼我の有無を通じ、以て需給の道を拓くは、海運業の發達を圖るに若

ぐものなしと思惟し、先づ西洋形帆船數艘を購入し、本國の物産を大阪に輸入して大に利する所あり、後明治四年の廢藩置縣となり、薩藩卽ち大阪の倉屋敷を廢して國産會社を設くるや、翁は其監理人となつて盡瘁至らざるなく、同時に又益益船舶を購入して國産の輸出竝に海運の發達擴張に力むる所あつた、明治六年政府は琉球國を以て藩と改むるに際し、當時翁は最も琉球の事情に通ずるの故を以て大藏省より琉球國産取調を命ぜられ、鞅掌數月、尋いで琉球國定期航路開始の建議を爲したる如き、其眼識は確に時流を拔いて居つた事が判る、後帝國郵便汽船會社の副頭取となるに及び、汽船青龍丸の下渡しを請ひ、再び琉球に航して定期航路を開始したる如き、其識見の甚だ高きものありしと共に、飽迄も亦實行的の人物であつたことが推知するに難くはない、而して是れ實に琉球郵便航路の濫觴であつた、後明治十一年郵便會社を解散して其業務を三菱會社に移すと共に、翁は更に東京築地竝に兵庫東出町に西洋船舶製造所を創設して專心斯業の發展を圖りつゝありしが、明治十九年兵庫造船局の拂下けを受けて前記の二造船所を合併し、玆に川崎造船所を設立するに至つた次第である、蓋し同所の今日ある所以のもの實に翁が劃策經營の賜と謂はねばならぬ。

而して同造船所が今日一千萬圓の資本と、外に約一千萬圓の積立金とを有する大會社として本邦造船業の爲め、將又引いて我海運界の爲めに貢獻しつゝある功績に至つては、擧げて數ふべからざるものがある、殊に頃者軍艦平戸を建造したるが如きは、實に民營造船所に於ける軍艦建造の嚆矢として多大の稱讃を博したると共に、新に又二萬二千噸の裝甲戰艦の建造に着手せんとするが如き、以て同所の造船力と其造船術の進歩とに驚かざるを得ない、而して如何に我國運の進展に貢獻するの大なるかを思へば、そゞろに翁が事蹟の偉大なるに嘆稱を禁じ得ない次第である。

蓋し翁は時代に秀絶したる卓見家であると同時に又雄健なる奮鬪家である、是れ卽ち翁が偉大なる成功を遂げたる所以にして其名は以て明治の立志傳中に光彩を放ち、其事蹟は本邦造船史上に赫灼として傳はるであらう、ア、我實業界の偉傑川崎正藏翁は斯くの如くにして今や功成り名遂げて其事業は一切之を嗣子芳太郎氏に委し、自ら閑地に悠々として餘生を送つて居られるが、翁は由來慈善の性に富み、公共の觀念に厚く、或は學校病院其他公共事業に盡瘁して金銀木盃等を下賜せられたるもの甚だ多く、明治二十年には海防費一萬二千圓を獻納して特に從六位に叙し黃綬褒章を授けられき、二十三年帝國議會の開かるゝや、兵庫縣多額納稅者に推されて光榮ある初期の貴族院議員となり、三十年に至りて卽ち罷む現今は川崎造船所竝に川崎銀行の顧問と云ふ地位に居られるが、頗る美術品を愛翫し、又古書畫の趣味厚く、藏する所の古器物書畫の類甚だ多いと云ふことである。

▲嗣子芳太郎君

川崎芳太郎君の名近時關西實業界に喧傳せらる、言ふ迄もなく翁の嗣子にして曩に川崎造船所の株式組織に改むるや、松方幸次郎氏を引いて其社長となし、氏は卽ち副社長となり父君の後を承けて共に劃策經營に當りつつあり、人と爲り輕快洒脫又頗るハイカラ的の人物である、蓋し父君の如くに世の辛酸艱苦を嘗めざるより自然人情學に深からず、隨つて其擧措應接は時に人の嫌厭を招くこともあるものゝ如く、其使用人中にも時に不平の聲を發するものありと云ふ、去れど氏は年齒尙壯にして其春秋は遙に高い、隨つて氏が世に活動するのは多く今後に屬すると共に、其所謂人情學と稱する如きものは今後に於いて修得するを得べく、又氏が今日の地位に對して之に相應する品位を保たんとするは、卽ち紳士として當に爲すべきことで、或は時に部下の機嫌を損ふが如き蓋し已むを得ざる所であらう、吾人は氏の前途に對して多大の望みを囑するものである。

範多商會主

エドワード、ハズレト、ハンダー君

▲氏の畧歷

氏は西暦一千八百四十三年、大不列顛國愛蘭州ロンドンデーリー市に生る、幼にして大志あり、丁年に及ぶ頃日本の開國に依つて意を決し、慶應元年萬里の波濤を蹴つて單身横濱に來り、一商館に入つて其支配人となり貿易事務に從事しつつありしが、熟々日本の形勢を視察して神戸は日本の中央にして東洋の咽喉たることを看取し、恰も神戸開港の布令を發せらるゝに當り、神戸に於いて事業を經營せんことを企圖し現職を抛ちて二三同志と共に神戸に來る、幾何もなく英人キルビー氏が小野濱に於いて造船業を創始するに際し、氏は直に入つて其要職に鞅掌せしが、偶々肥後藩主より造船の註文を受け、舞鶴丸を新造して之れが指揮監督の任に當り初めて其技倆を發揮せり、是れ實に本邦に於ける汽船建造の嚆矢に

して本邦造船業の濫觴たり。

▲獨立して貿易事業に從ふ

後獨立の志を立てゝキルビー社を辭し、自ら一商館を居留地に設けて一般貿易事業を營み、漸次獨立經營の基礎を固むるに至れり。

▲大阪鐵工所の設立

氏は更に日本の地勢に鑒み、恰も英國と其軌を一にし、四面環海の島國たるを以て、將來日本の發達を圖るには內地に於いて造船事業を起すに若かず、殊に造船業の發展は施て一般の運輸交通に至大の便益を與ふべきを信じ、明治十二年大阪に於て鐵工所を創設し、造船其他諸機械の製作に從ひ、不屈不撓拮据經營すること多年、以て今日大阪鐵工所の大成を見るに至れるものなり。

▲日本精米所の設置

氏は又貿易事業に從事せるの傍ら、精しく日本の人口と米穀の產額を統計的に調査して、當時人口に比して米穀の餘剩夥しきを見て、之れを精米として外國に輸出せんには、以て日本の國益に資すべきは勿論、一面商業上の利潤あるを認め懇篤に日本商人を慫慂して該事業の計畫を謀りたりしも、何れも經驗なきの故を以て氏の勸誘に應せざりしかば、氏は斷然獨力を以て兵庫出在家町に一の精米所を設立し、機械を輸入して玄米を買入れ、之れを精製して海外に輸出し、實際に於いて其利潤あるを示し、進んで之れが擴張を圖らんとする折柄、不幸火災に罹りて一朝燒土に歸す、而も此一大頓挫に屈することなく、同志を糾合して更に精米會社の設立を發起して、明治二十年漸く之れを組織し、同二十一年に至りて始めて開業することを得たり、現今の日本精米會社卽ち是なり

該會社の設立に當りてや、日本人側投資者は何れも其利益を危み、容易に出資を諾せざるを以て、頗る株主を得るに苦みたりしが、氏は實地の經驗と確固たる信念により、其利益あることを認めたるを以て、自ら進んで一般株主に對して開業後二十箇年間純益の一割を配當することの保證を與へ、尙ほ氏が保證の下に資本金の幾分を外國銀行より借入るゝ等、大に之れが設立に盡瘁する處ありしが、果して開業後は一箇年一萬噸以上の輸出に達し、一割以上の配當を爲すに至り一般株主は何れも氏を德とせざるはなし、殊に其精米力は一晝夜二千石なるを以て全力を盡して精製する時は莫大なる多額に達し、其後日淸、北淸、日露の役等に軍用精米の急需に應することを得て國家に貢獻したる顯著なる事實は全く氏の功勞に歸せざるべからず。

氏は又別に四日市に於いて同上精米會社を起したることは已に世人の知る所なり。

▲關西煉瓦會社の設立

當て日本の進步今日の如くならざる時にあつては、海外より貨物を滿載して來航せる汽船は、其歸航に當り搭載貨物僅少なるが爲め、往々海濱の土砂を「バラスト」として積載するを常とせり、爰に於て氏謂らく是實に不經濟の甚だしきものと之れ一面日本輸入貨物の運賃に影響して高率を意味するもの不若之れを救濟するの一策として煉瓦を製造し、バラスの代用として、歸航汽船に搭載せしめんには一擧兩得ならんと關西煉瓦會社を起して本邦煉瓦の海外輸出を開始したるは實に氏の考案に成れるものなり。

▲大阪煙草會社の設立

更に大阪煙草會社を設立して盛に紙卷煙草の製造を爲し、又一時盛に日本煙草輸出の途を開拓せるが如き之亦氏の發起したるものなり。

▲韓國開拓事業の計畫

是れより先き氏は韓國開拓事業を計畫して、時の協辨交涉通商事務開拓使金玉均氏と約を結び、自ら同地に航し風土、人情、地理等の視察を遂げたりしが、時勢の頓挫は氏をして志を擅にすることを得せしめずして、止みたるは亦以て遺憾の極みなりき。

▲氏が日本に對する同情

抑々氏が神戸北野町に住宅を構へたる當時、生田神社以北一帶の地は、概ね田畑にして更に道路なく交通不便極りなかりしが、氏は市の發展上新道開鑿の必要なることを、時の縣知事に向つて數次其施設を慫慂し、漸く當局者をして內務省より五萬圓の補助金を得て、山手新道の開鑿を完成せしむるに至り、氏は大に滿足を表し、之れが敷地に要する潰し地は何れも當時相當の代價を以て買收せられたるも、氏に於いては道路は公共の用に供するものなるの所以を以て、其家族の所有地にして道路に充つべきものは一切無償にて之れを寄附したるが如きは氏が公共心の淳き一班を示すに足るべく、殊に條約改正の當時、橫濱に於ける外國居留民は決議を以て日本政府の意嚮に反對し、本國政府に打電せしことありしが、氏は之れを聞き大に憤慨して曰く、吾等外人が日本に在留し安心して商業に從ひ、今日の地位を贏ち得たる所以のものは皆是れ日本人の賜なりと云はざるべからず、何ぞ日本の利益に反對すべけんやと、奔走頗る勗め、遂に神戸居留民一同を說破して、條約改正に對する日本政府の條件を相當と認むる旨の議決を爲し、以て本國政府に架電して、條約の改正に多大なる貢獻をなしたる等、氏が日本人に對する同情の淳きを窺ふの例證にして、其他日本各地に於ける有識の商業家に對して、世界的の知識を與へ、指導奬勵したるのみならず、諸種の事業を實際に創設經營して、我國の實業界に貢獻したる功勞の頗る大なるものあるを感謝せずんばあらず矣。

氏や單身我國に航してより以來、奮鬪活躍諸種の事業を經營し、而も其事蹟を探究すれば、貿易、製造一として國家的事業ならざるはなく、我國の實業界を指導奬勵して國運の發達に貢獻したる功勞洵に偉大なると共に、自ら巨萬の富を蹴し今や嗣子龍太郎氏によつて盛に之を經營せられ、今後の發展那邊に及ぼすべきか實に端倪すべからざるものあり、吾人が氏を稱して世界的成功者と爲す所以也。

氏に三男あり、長は則ち嗣子範多龍太郎氏、次は範三郎と稱し、三はエット、クワード君にして目下グラスゴー大學在學中に屬す。

吳錦堂君

我國の清國に於けるや地理上、歷史上、殊に同文同種、脣齒輔車の關係を有し、夙に我國の文化が清國に負ふ處、寧ろ今日の歐米以上にありと謂つべく、從つて友邦の情誼を敦厚ならしむるに就ては、彼我當局者の最も努めつゝある處なりと雖も、單に政府者間の努力を俟たず、彼我國民は互に國民的親善を圖ることに最も切實ならざるべからず、此時に當り清國の有力者吳錦堂氏が本邦に歸化せられたることは、彼我の連鎖として吾人の大に歡迎する處なり、殊に神戸港の盛衰は清國貿易の消長如何にあり、爰に於てか氏が夙に日清貿易の爲めに貢獻せられたる功勞はまた神戸市民の最も感謝する處なり。

▲氏の經歷

鄕里清國浙江省寧波を出でゝ神戸に在ること二十有五年、遂に去る三十七年本邦に歸化せる吳錦堂氏が、對清貿易に盡瘁したるのみならず、又我國の實業界に奮鬪劃策怠りなく、遂に斯界の大立物として彼の麥氏と共に清國出身者の双璧を以て目せられ、麥氏歿後の氏は神阪在留清人の牛耳をとり、其威名嘖々たるものあり。

氏は明治十八年初めて長崎に渡來し徒々たる一行商を爲せしが、後幾許もなく大阪に出で一商店を開始したり、されど未だ氏の抱負を伸ぶるに到らず、更に同二十三年神戸に轉じて雜貨貿易を始め、大に我が國の雜貨を清國に輸出するに努めたり、後ち棉花、穀類の貿易を擴張し、或は燐寸の輸出を企つる等、日清貿易に奔命する所多く今日の隆昌を見るに至れるもの、斯くて機を見るに敏にして非凡の手腕を以て能く今日の巨富を致せり、由來清人は天賦商才に富み機略に長じ而も蓄財的手腕を以て稱せらるゝ雖、徒手空拳にして能く此の大成功を贏ち得たる氏の如きは稀なり。

氏は謹慤端正、常に公共事業に力を致し、日露戰爭に際しては日本に同情して率先歸化すると共に、清國人を糾合して在留清人の恤兵會を興し、軍人遺族の救護に努め、或は軍資に恤兵に金員を醵出し、又は赤十字社に巨額の義金を出てたる等、日本國家の爲めに盡瘁する處多く、宜なり其功勞顯著なるを以て叙勳の御沙汰あり、氏の如きは洵に我國の一大恩人と謂つべきなり。

青年者の好典型
濠洲貿易の開拓者
兼松房次郎翁

我國は古來瑞穗國と稱し農を以て立國の基礎となして居つた、然れ共維新の開國と共に今日に於いては地勢上より推論するも、商業國たるに適せりと云ふべく、否世界貿易の中心市場たるに適當して居るのである。

殊に亦我國は南洋に近く、一帆若し貿易風に乘せば汽力を藉らず棹櫂を要せずして、直に南洋の諸島に到り、濠洲大陸と往復することが出來る、是亦日本の特有、天の惠む所である、其他各國の利便は言ふに及ばず、天の我國に惠む處斯くの如く深くして且大なるものがある、然れ共地を用ゆるは人にあり、彼の英國は地形の便日本に及ばざること遠く、然るに其商業の盛、富力の大なる所以のものは其國人が皆勉強の結果である、故に日本國民たるもの若し何時迄も東瀛の仙人國を夢想して商業を振張し、外國貿易の大策を劃さずんば此世界最便の地も何かせん、天惠地福も亦何の用もなさぬであらう、就中兵庫縣は神戸港と云へる東洋貿易の互市場を有して居るにも拘らず、縣下の人物で貿易事業に從事して居る人は殆どないが、何ぞ斯くの如く貿易思想が發達しないであらうか。

縣下の人物何れも恁くの如きの時に當り、偶々兼松房次郎翁が、他府縣の出生ではあるが夙に縣下に籍を有して、自ら貿易の陣頭に立ち、神戸港の爲めに否な日本の爲めに極力盡瘁せられつゝあるは、吾人の最も感謝する處である。

惟ふに明治の實業界に於いて、財を作り名を擧げて居る人は決して鮮くはないが、未だ翁の如く赤手空拳を以て身を起

し、幾多の波瀾曲折と戰ひ、毫も安逸を貪らず小成に安んせず、一意國家的觀念を以て商界の風雲を叱咤し、遂には前人未開の濠洲貿易を開拓して、國を富まし、世を益したるの偉業は恐らく他人の企て及ばざる處にして、明治の商業史上特筆大書して永く忘るべからざる人である。

▲翁を訪問す

近時新聞雜誌を初め往々人を品し、人を紹介せんとするものを見るに、少しく產を成すか、或は頭角を擡げたる人を見れば、其產を爲し名を擧げたるの經路と手段を辨へず、亦其人格の奧底を究めずして、直に以て成功者又は典型的の人物となす、實に誤れるも甚しく、之を以て一人の成功者を紹介したるが爲めに、幾百千人の青年を過たしむるものあるは、吾人が夙に遺憾とする處、故に吾人は何人と雖も、未だ容易に成功者又は模範的の人物となすものにあらず、即ち本編數百人中僅二三に過ぎず、而も兼松翁の如きは、最も青年者に對する典型的の人物として、推奬するの當れるを思ひ、翁の謦咳に接せんとして、或日居留地の店舗に訪ふた、翁は本年六十八歳今尙儼長、追に少壯時代より今日に至る迄奮闘活躍精力絶倫の人たるを知るべく、最も熱烈なる態度を以て語るらく。

▲翁の談話

憖うも今日の如に青年が脆弱になつては困る、何さかして青年を誤らせぬ樣に仕たいものである、御談の如な編纂をして近い處に目標を與へるのもよいであらう、が抑々青年を導くべき今日の先輩と稱されて居る人々が、已に之の缺陥に捻へられて居る例令ば實業界の方面に在つても何れも自利の爲めに汲々さして毫も國家といふことが念頭にないやうである、多くの國債を負擔して居つて國家の前途に一大戒心を要する場合であるに拘らず、事業と云へば不生產的の事計りで、殖產興業と云ふものには一向目を附ける人がすくない、而して斯る傾向を見るに至つた原因は何であるかと云ふと、近くは北海炭礦も化物であつた或は日糖事件と云ひ、京都の製布、尼ケ崎の日本醬油と云ふ樣に、從來相當信用のあつた人が其衝に當つて、之れなれば別條はないと云ふので社會に信用のあつたものが、何れも失敗に歸して仕舞つた、であるから首と掛代の資金を供給するのに何れも資本家が不安の念を抱いて居る、随つて手近い處の不生產的の事計りに資本を投じる樣になるのである、一例を擧ぐれば我國のタオルである、此れが貿易の開始に就ては、余は嘗て當業者に製造の勸誘に努め、或は政府に意見書を出す等、却々骨を折つたものであるが、今や一千五百萬圓の輸出を見るやうになつた、然らば之れで滿足かと云へばさうではない、現今のものは何れも手製であるが、終局の勝利は機械であるから、少し多くの資本を投じて機械をも買入れ、大仕掛の製造をやれば前途は必ず三千萬圓位にするのは容易である、然るに斯くの如き方面には資本を投じる人はない、國の發展は貿易に依らなければならぬのは必然であるのに、交換すべき品物がなくては仕方がない、我々貿易業者は品物がありさへすれば之れを賣捌くのは任務であるから大に努める考へである、けれども品物を製造して呉れる人がないと云ふ有樣では遂に寒心に堪へぬ、されば我國の實業家殊に青年の人は大に此點を考慮しなければならぬ時代である、何をするにも人であるから、我々の後繼者たる青年諸氏が一層奮起して堅實なる人物たらんことを切に希望して置く、云々

▲翁の略歴

翁は名古屋在の布袋村に生れ、不幸幼にして孤となり、別に遺產とてもなく、不止得總に九歳の時伏見の親族を憑りて同地に來り、憐れ止むなく丁稚奉公をすることゝはなりぬ、夫より伏見の醬油屋に入りて味噌、醬油の小賣廻りを爲し、後又京都の乾物問屋に住み込んだが、縱へ貧苦に迫りても、

兩親だにあるならば、まだ懐ろに抱かれて寢る頑世なき稚子が、苛酷なる主人に追ひ使はれ、毎朝三時に起きて而も極寒の晨、刃の如な凍り水に、鰊二千本、棒鱈千五百本を洗ふのが日課であつた、而已ならず京都式のお粥と云へば名ばかり、芋の筋と米のソップの如な餌食を頂戴して、寒中の凍へと水分多き餌食の爲めに、寢小便を垂れたり、五日目に一度位湯に浴して凍傷が崩れ指から血が出たりしたこともありき又番頭には算盤で頭を叩かれたことも幾度か、噫、恁んな辛い目をするよりは一層雪隠で首を吊つて死なうかと思つたこともあつたさうで、今尙翁の忘れんとして忘れ得ざる處である、其後大阪の靭に薄き緣者を賴寄つて來て、又江戸堀の米問屋に奉公することゝなつた、恰も其奉公中に長崎奉行岡部駿河守の用人、大野新左衛門の給仕に出た處が、新左衛門は翁の穉なきを愛して、何とかして江戸に出て來い世話をして遣るから、と云はれた一言を確信して、其後幼な心にも色々と工面をして遂に江戸に往き、大野氏に會つて約束であるから世話をして貰ひたいと迫り、遂々門番の手傳や、若様の伴をすることゝなつた、其傍ら學問に志したが何分意の如くならぬ處から、又或人の周旋で四石二人扶持の株を買つて、足輕の下役となり、鐵砲や大砲の稽古をして居つたか、侍士では詰らない、何でも商賈人にならうと、又々大阪に舞ひ戻ることになれり、さて大阪に戻りて間もなく長州征伐の戰爭が起つたので、友人と共同して戰地に酒を積送り、初めて幾何の金儲けを仕た、そこで神戸に來て石炭のブローカーとなり新潟又は横濱に至りて燧紙の輸出を謀る等、天資非凡な質であるから、其頃は随分金も儲けたが、何分血氣旺な青年の時代で、誰でも常套は脱しられぬ、金は幾何でも儲かるものと思つて、ドシ／＼費消つて居ると、忽ち普佛戰爭が起つて、燧紙輸出の杜絶となり、爲めに之迄儲けて居つた利益は元の杢阿彌となつて仕舞つた、然るに翁は焦つても仕方がないと落着いて今後の商人たらんとせば貿易をやるのが國家的でもあり、又自己の爲めにも有利な事業であると思つて、此時初めて貿易家たらんことを決心したが夫れには英語が必要であるからと、徐ろに米人宣教師に就いて英學を修め、落魄の境涯二年に渉り、夫れより更に新生涯に入るべく大阪に往た處が、船中で元英語教師の伊藤彌二郎氏に邂逅して、當分奉公を爲すもよからんと薦められ、同氏の周旋で三井組の銀行部に這入つた、そこで翁は嘗て或る人から勤勞は何でも貸勘定でなければ不可ない、百圓に對しては二百圓働け、決して奉公人根性で惰けては不可ぬ、主人に對する椽の下の力持と云ふことは一番大切な事である、表面よりも主人の知らぬ裏面を働かねばならぬ、働くことも習慣であるから、それでなければ獨立したときに働けるものではない、と云はれたことを耳底に忘れたことはなかつたので、自ら忠實に勤むるのみならず、又常に他の丁稚にも之を教へて居たが、果して夫れが椽の下の力持ではなく、翁の忠實が西村支配人の鑑識に協ひ拔擢せられて或る係りの主任となつた、何分聰慧な質であるから時世を看るの明もある、又撥亂反省的の人であるから無爲にして化すことを好まぬ、何事も現狀に滿足するものでない、直に銀行の改革に手を付けた、去れは當時同行は他人の

金は預らざりしかば、翁は銀行と云ふものは官廳の金を預る計りが本務でない、一般の預金をして之れを一般へ融通してやるのが當然銀行の任務であると云ふことゝ、三井が長袖流で悠然とやつて居るのは不可ない、乃ち御役所風を廢して平民的にやらねばならぬと事ふことを、幹部に建議して自ら之れが刷新改革に極力執掌した、斯くする内翁の手腕も認められて、三井の信用益々重く、破格の扱ひを以て同家を代表して大阪米商會所の肝煎りに擧らる、然るに明治十五年翁は我國海運界が尚僅々百隻に足らざる汽船を、六十餘人の船主によつて所有せられ、海運の統一を缺き、競爭は激烈、自然に船價を虐使して海難は頻々に起る、爲めに將來海運發達の途にあらざることを說いて合同論を主張し、田中市兵衛、伊庭貞剛氏等の援助を得て種々の困難を排して、大阪商船會社を設立した、茲に於て之れが經營の衝に當ることゝなり、斷然三井を去つて、同社の爲めに奮闘劃策、熱心なる經營の結果は、幾もなく社運其緒に就くに至り、翁の非凡なる手腕は、關西の實業界に認識せられ、頓に頭角を顯すに至れり、爰に於て關西の實業界に持囃さるゝやうにも隨分夥な收入のある地位となつた、故に依然其儘にして居つたなれば、必ずや大阪の土井、田中氏等と同じく今日では空威張りも出來たであらう、又財産も必ず翁の今日より尚增殖して、而も平靜に、安樂に過されたであらうが、そこが翁の翁たる所以で、翁は元來事業は好むが金の慾しい人でない、奮闘は翁の生命で安樂を貪る人でない、又翁が活動するのは自己の名譽の爲めに、子孫の爲めに美田を買ふ目的でない、翁の頭には國家と

云ふ觀念がある、故に翁は更に謂へらく會社を起して船を造つても之れを利用する途を講じなければならぬ、之れは何うしても己れが素志たる貿易であると、之れから斷然商船會社を去つて濠洲貿易の開始を思ひ立つた、當時濠洲に對する日本人の智識は未だ眞暗であつた、そこで歐米の貿易は誰でも出來る、一番未開の貿易を拓いて國家に貢獻しなければならぬと、之即ち易を捨てゝ好んで難に就くと云ふ翁の特性である、いよ〳〵思ひ立つたが多くの友人は翁の爲めに、其冒險を思ひ止むべく色々と忠告したけれども、却を諾かない、明治二十三年一月遂に濠洲に出發したのである、爾來惡戰奮闘稍々其緒に就くや濠洲の恐慌となり、更に三十四年の内地大恐慌に遭遇して翁も其渦中に喘いた一人で、破產閉店の危急に瀕したること一再ならず、然れども其難關を踏破して終に今日あらしめたのであるが、此間の消息は今尚世人の耳新しい事實であるから、之れを省くことゝする、要するに翁は幼にして孤となり、諸所方々に流轉して百錬千鍛百倒百起一に正義熱心、而も奮闘活躍の人であることは、七十の老軀を提げて社員の制するのも諾かず今に毎日店舖に出頭して事務を執つて居ると云ふ元氣は、到底他人の勉んで得べからざる處である、而して翁が怎くも活動しつゝある所以のものは、故て世の瀕に倣ふて、自己の資產を作り、自己の名譽を衒はんが爲め、又は自己の安樂を求め、或は子孫の爲めにする譯ではなく、翁の頭には一に國家的觀念ある而已、故に往年其病患に罹るや、服部知事は翁の功勞を奏請して叙位の光榮に浴せしめんとしたが、翁は之を憚ばなかつたと云ふ事である、

鳴瀧幸恭君

▲氏の略歷

氏の祖先は　人皇六十七代三條院天皇の皇子、小一條院敦明親王より出づ、親王の四代を行讓と云ひ、初めて姓を鳴瀧と稱す、現代幸恭氏に迨んで四十代連綿として、而も嫡男の直系而已を以て襲がれたと云ふ、世にも稀なる家柄である、代々御室仁和寺宮に仕へ、氏は維新の際小松故大將の宮に屬して居つた。

氏は少壯御室漢學校の設立と共に、之れが助敎授に擧げられ、傍ら武術の訓練を受けて居られたが、慶應四年小松宮が

以て其人爲りの一斑を窺ふに足るべく。

翁は性溫厚篤實、心事公明、道に悲風慘雨を嘗め盡したる苦勞人、人に接するや親善を旨とし、亦頗る同情心に富む、蓋し翁の如きは權門に媚びず、弊家に陋はず、生涯を通じて自力奮闘、能く幾多の困厄窮苦に耐へ具に世路の艱難を經盡して其今日の成果を得たるもの、今や大業を成就して金聲玉耀の一大名譽を得、實業世界に雄視されつゝあるも、全く其間に於ける慘憺經營の實歷にあるを思へば、洵に後進子弟の好典型的人物たるに恥ぢぬ。

遠俗の後兵部卿となり本官を以て越後路の總督として出征せらるゝや、兵部卿附屬の、多田隊、高野隊、甲賀隊の鄕士之れに從ひ、氏は尾崎三郎男の兄故村上直達氏と共に、之れを率ゐて越羽の間に赴き、莊内の城主酒井左衛門尉の兵と、激戰三回、遂に之を降伏せしめて戰功あり、尋いで宮を奉じて江戸に入り、後京都に還りて專ら三隊の訓練に從事したりしが、之を軍務官に引繼ぐに方り氏を更めて分隊長として任用せんとの內旨ありしも、氏は之れを屑とせずして、辭して受けず、明治三年頃東京に在りしが、時に宮岡八幡の別當永代寺住職某の推薦に係る宮川なるもの小松宮の家老職となり、

檜を弄して奸譎言語に絶するものがあつた、そこで氏は大に憤慨して正義の士と謀り、之れを斥けて君側を清め、復故あつて京都に戻り、明治六年京都御所に於いて始めて博覽會の開設せらるゝや、舊知田中鵬隣氏が兵庫縣典事として入洛するに遇ひ、偶々同氏の勸誘に依り兵庫縣に來り、小學校教員の職にあり、明治七年兵庫縣警視課に這入つた、明治十四年刑法治罪法の施行準備と共に一時檢事補となり、再び縣官に復して、治罪概則なる一書を著し一般に頒布して、其適用を知らしめたる等、我國が司法制度草創の時に際して其貢獻少からざるものあり、宜なり當時京都の勸業、大阪の土木、兵庫の警察と稱せられ、其重きを爲して居つたが、內海忠勝氏の知事たるに及び、應務課長に進み、明治二十年神戸區長兼八部郡長に任ぜられ、同二十二年四月市制實施と共に、滿場一致を以て市長に擧げられ、同二十八年度再選同三十四年迄在職せられたること十二年、蓋し市制施行以來新開の神戸市として自治體の施設に至つては、道路の開鑿、學校の建設水道の敷設、港灣の浚渫修築等、其他創業多端百難蝟集の間に事を執り、世運の進歩に伴ひて克く機宜を誤たず、指導按排宜しきを得て、帝國の玄關たる神戸市の面目をして今日あるを得せしめたる、氏の功勞や永く沒却することは出來ぬ。

▲更に實業界に入る

而して市の事業が一段落を告ぐるや、高踏勇退して須磨に寓居し、悠々として閑日月を送らんとしたが、世間は氏をして永く閑地に入るを許さぬ、一體氏は神戸市の長老として、神戸に起る難問題は氏の玄關に持込まれる、氏も亦依賴によつては盡力もせられる、殊に氏の得意は兩者の間に立つて居中調停の勞を執ることで、如何にも人と爲りが圓滿で篤實、親切にして物靜な處は何人も此人に一任したなれば快く滿足に感じる、從つて神戸市の事業で氏の勞に俟つて解決せられたものは決して少くない、言はゞ神戸には缺くべからざる緩和劑である、乃で偶々神戸貿易倉庫會社が社長廣瀨滿正氏の關係せる貿易銀行に於いて、重役間に軋轢を來し、延いて同社の計畫せる高濱埋立問題に影響を及ぼし同社の運命に打擊を與ふるに至るや、人々擧つて之れを氏の力に俟たなければならぬとし、卽ち氏を推戴するに至つた、爰に於いて氏は貿易倉庫會社長として實業界の人となつた所以である、而して入社の際懇親なる知友より依賴されたるを信じ、內容の調査をも爲さゞりしに、計數上大に違算があり、前途持續の難きと竝に高濱埋立工事許可の至難なるを察し、燗眼早くも貿易倉庫會社の總てを擧げて、之れを東京倉庫會社に賣却した、其以前には十九圓拂込の株券僅に六圓迄暴落してあつたものが賣却の談成るに及び、忽ち聲價を恢復し、清算上十三圓餘の賠償を受くるに至つた、次いで又重役株主共に兩派ありて暗鬪激甚なる貿易銀行の頭取に推され、居中調停の曉、竟に之を北濱銀行へ賣却して、さしもの難物たる二大會社の落着を告げ、相互の圓滿を見るに至れるは、全く氏が人格の光りと非凡なる手腕とに由れるものである。

而して又明治三十六年縣農工銀行が失態を演ずるや、再び氏の力に俟たざるべからざることゝなり、乃ち其頭取に推されて、前來の不始末を整理し、缺損を補塡して收支を順應ならしむると共に、爾來益々好成績を擧げ、今や日本第一の農工銀行として、貸出金額は一千萬圓以上に達し、殊に其貸付狀態の如きは他迄農工銀行の本義に隨ひて、可成小農者を本位として其金融の壓迫を免れしめんことに努め、最も簡便なる方法を以て貸付けて居られるが、之に由つて兵庫縣の小農者が此恩惠に浴しつゝある事は夥しいものである。

次いで縣下の大問題たりし、神戸貯蓄銀行の破綻は一時縣下の有力者に依つて、漸く救濟せられたるも、其後の經營は世の最も難事とした所である、爰に於いて服部知事は之れが整理と共に後繼の任に當るものは、氏を措いて他に需むべからずとなし、强いて氏をして神戸銀行(整理後改名)の社長たらしめた次第である。蓋し以上の經歷によれば、近き將來に於いて必ず何等かの成算あることは疑はない、又其他に信託會社長も兼ね今や神戸實業界の大立物として聲望嘖々たるものがある。

要するに明治革命の事あるや、永く昌平に馴致したる公卿皆の人は、一朝遽に其職を解かれて、多くは處世の才に乏しく世の失敗者となつて居る者が多い、然るに氏は獨り之と趣きを異にし、官海に在つては非凡なる英才として迎へられ、一度實業界に投ずるや、常に難局に當つて經營按排を誤たず幾多瀕死の會社銀行を救濟して公私の爲めに貢獻せる所、擧げて數ふべからざるが如き、之を氏と出處を同うせる、同時代の士等が、孰も世の敗亡者となつて、活社會より非られたるにも拘らず、獨り氏が終始社會に活動して、益々世に重きを爲しつゝあるが如き、全く氏の人物が他と異れるものある結果と言はねばならぬ。

▲氏の人格

迫に名門に生育せられたる氏は、氣品高尙優雅にして風采態度の準繩なる、禮節自ら具り、又思慮周密にして寔も人をして嫌厭たらしむるやうな事はなく、其人に對するや篤實にして寬容、對者をして一種の溫味を感せしむるものがある、最も後進者を愛撫し親切と同情とを以て常に誘掖に努めて居られる、然も一面には冒すべからざる權威があり、親しむべくして狎るべからざる古武士の面影を備へて居られる所、當代稀に見る人物である。

代議士鹿島秀麿君

凡そ人物の輕重大小は其官位勳爵に由つて判つべからざるは勿論、又其國家社會に寄與せる功績に至つても單に表面の形象のみを以て之を推斷するは誤れるの甚だしきものにして殊に今日の在野政治家に就て一層此感を深ふする所以である彼等には世に誇るべき勳爵位階もなければ、又其生活を飾るに足る富財產もない、否有りし財產迄も擲つて主義主張の爲めに惡戰苦鬪を續けつゝあるものである、故に政府官人の如く其胸間には燦爛たる光りもなければ俗人を威すべき官爵位階もなく、又世の實業家の如くに財富を以て人に羨望せらるると云ふこともない、隨つて彼等が憲政擁護の爲めに將又國家社會の爲めに挺身盡瘁しつゝある功勞の偉大なるものあるに拘らず、世間は之を認むるもの至つて少く、而して其人物迄も輕視すると云ふ傾向がある、吾人は之を思ふ毎に社會人智の低きを悲しむと共に、又彼等の爲めに一掬の涙を禁ずる事が出來ぬ、蓋し多年逆境に處して苦節を全うし、主義主張の爲めに飽迄勇猛敢鬪して民權の伸暢を圖り、憲政の發達に盡瘁すると云ふことは、到底常凡者の企て及ぶ所ではなく、非常なる人物にして始めて之を能くすべきである、所が世には卓越せる才能をも有せず、凡才常智の士が却つて何等の奇なく坦々として進み、唯自己の名利榮達に汲々として權威に阿附し、遂に顯榮の地位を獲得して俗世間を眩惑するもの多きに反し、在野の政治家なるものは、其人物力量の遙に超越して居るにも拘らず常に逆境不遇に甘んじて一身一家の名利を顧みるに遑のないと云ふことは一層の尊敬と同情とを拂ふべきものであらう。

而して我縣下の代議士鹿島秀麿氏の如きも亦此逆境と不遇とに甘んじて一意主義の爲めに奮鬪し、憲政發達の爲めに盡瘁し來つた人物である、而して氏の崇高なる人格と學識竝に其至誠德行手腕と且つ氏の時代を以て、殊に其生地德島の藩緣を利用して若しも政府の役人となつて居たなれば、同藩の芳川顯正や松岡康毅の如き伴食大臣以上の地位は疾くに贏ち得たであらう、然るに此は始めより自己の榮利榮達を顧みず民權の擴張、憲政の擁護に任じ、逆境に處して終始を一貫し能く苦節を守り專心一意國家民人の爲めに一身を捧げ、奮鬪力戰して毫も倦怠の色なく、益々努力奮勵しつゝあるに至つては、吾人は氏が多年の功勞を多とすると共に、氏の爲めに一掬同情の念に堪へざるものである。

▲氏の略歷

氏の父は大村純道と云ひ淡路洲本の人。世々德島藩の醫師たりしが、故あつて近江國水口藩に聘せられて此處に移り氏は其在住中の出生で純道氏の二男である、其二歲の時一家を擧げて再び洲本町に復歸しぬ、而して氏は文久三年同藩の侍醫鹿島氏を嗣すに至つた、幼にして聰慧、年纔に十三の時藩の小目付役に擧げられ、尋いで同藩總政局檢事に任ぜられ、在任中明治三年德島藩稻田事件の爲めに禁錮せられて其職を免せらるゝに至りぬ（稻田事件は德島の家老稻田氏幼主を侮蔑して分藩を唱へ爲めに氏の兄純安外九名首謀して之を斬る後朝廷其罪を論じて純安以下九名は死罪に處せらる、純安時に年二十三歲本編別に載せて審なり）後氏は藩主蜂須賀侯に近侍して東京に至り、藩費を以て藤野海南の門に皇漢學を修め後ち東京永田町に私立櫻南學舍を開設して居りしが、同十一年淡路中學校長に任ぜられ、次いで十二年淡路汽船會社を創設し又淡路共立舍を神戸に設け傍ら神戸新報を發刊して力を民智の開發に致し、神戸商議社會頭、神戸商業學校長補充兼英語學校支那學校の監理を囑託せられた、尙商事慣習取調會頭、縣教育副會頭を兼ね、此間定期雜誌を刊行し定期演舌會を開設して人文啓發に盡しつゝありしが、明治十四年大隈伯等の立憲改進黨組織の擧あるや、箕浦勝人氏と共に關西の同志を糾合して之に參劃し翌年同黨の組織全く成るに及び、神戸新報を以て其政論を公にし、同年兵庫縣改進黨支部を組織して之れが幹事となりぬ、此抑々氏が政界に身を處したる第一步である、同十七年縣會議員に擧げられて副議長となり、二十三年帝國議會の開設と共に衆議院議員に推され、其後每時當選して引續き今日に迨んで居る、其他播但鐵道を創設して社長となり、鐵道車輛製造會社、淡路製絲株式會社竝に神戸電鐵等の重役に擧げられ、又は神戸市水道布設事業に關し或は神戸市會議員として市政の刷新に干與せる等、各種の方面より斡旋紳掌したる事功は枚擧に遑はない。

要するに氏は現時本邦に於ける政黨政治家の先輩として、確固たる主義と主張を以て多年民黨の中堅となり、常に中央の政界に立つて國政に參劃すると共に、亦地方政界の主腦者として縣市兩政の振興に力を致し、殊に現下在野政黨たる國民黨の勢力をして縣下に扶植し同黨の最も優勢なる地盤たるに至らしめたる如きは、實に氏が公明純潔なる人格を以て切實熱心に指導したる結果と謂はねばならぬ。

氏は溫厚の性、高雅の質、鳴峽と號して詩文を能くす、而して多年の逆境は終に名高き貧乏人となつて居るが、若も氏が野心家であつたならば疾くに節を枉げて一身の榮利を圖つたかも知れぬ、けれどもそこは人格高く其人物はより以上に巨いから、自我を沒却して名利に趁るやうなことはしない、現に民黨を標榜せる國民黨の首領中に於いて、改進黨の組織以來苦節を全うして終始一貫せるものは、犬養、肥塚氏等と共に氏の外僅に數氏を數ふるに過ざぬ、以て政治家の本領たる主義節操の人たることを知り得べく、同時に意志堅確にして又人格の崇高なることも想察し得るであらう、而して氏が多年の功績は永く憲政史上に光彩を放つべきものである。

神戸電氣鐵道會社長
村野山人君

▲村野山人とは何ぞ

『村野山人』とは何ぞ其名の珍にして奇なるよ、實に氏は其名の示す如く其人物も亦頗る珍にして又甚だ奇、其行ひも時に人の意表に出で風俗をして瞠倪し得べからざらしむ、然り氏は啻に其名前、人物、行ひの珍奇なるのみならず、其風丰態度且つは其談話振りに至る迄雅趣を帶び總て珍快ならざるは莫し、實に珍の純にして奇の粹なるものと云ふべき歟、然れども其珍と云ひ、奇と稱するは風俗者流の見て稱する所のもの、氏自身に在つては固より何等の奇なく、何等の珍なく其意思性情の最も自然的發露に外ならざるなり、卽ち氏の思想は高く現代に超絶して常人と相去る遠く、發して言行となるや、世に珍奇視せらるゝ所以たらずんばあらず、是れ卽ち氏の人物の卓拔秀絶たるものあるに因らずして何ぞ、試みに氏の言ふ所を聞かんか、氏曾て世嗣の計を爲さゞるに就て語つて曰く『凡そ世嗣の有無は敢て顧慮するを要せず、今余に世嗣なく又再び之が計を爲さんとせず、唯人間は死する迄活動して人生の本分を盡せば卽ち足る、人は老ゆると雖も自己の衣食は己れの働きに依つて之を爲さゞるべからず、死して若し餘財あれば、之を公共に寄附すべきのみ』と其言既に奇なり、而して身には巨萬の富を擁しながら老軀尙鞭鑠として壯者を凌ぎ、以て盛に活動しつゝ其財の益々大なるに拘らず之を讓らんとする世嗣を設けず、而も平然虛心、何等の憂色なし、是れ到底凡俗者にして企て得べき所に非らず、ア、又天下の珍物ならずや、しかも其品性や甚だ高く、典雅風流の間に其行ひや毫も亂れず、而して飽迄も奮鬪主義精力主義を以て盛に勇躍すると共に其意氣や益々壯、若しそれ一度口を開かんか、天下又憚るものなく、高談、放論縱橫口を衝いて縯出し、上唇一列の義齒は其口烙に包まれて陷落せんとするをも知らず、頗る快活的豪放的の談論家なると共に、其人物も又豪快洒脫にして又最も自信力に强く、當代珍しき快人物たり。

▲氏の略歷

氏は嘉永元年を以て膽城城下に生る、少にして氣骨稜々、才識又群を拔けり、往年森岡昌純の本縣知事たるや、氏は卽ち當時の書記官として才腕を揮ひ、其勢力は以て知事を凌視するの概ありたりき、後山陽鐵道會社の始めて設立せられ、其第一期工事に當つて、本邦未だ鐵道經營に經驗を有するものなく、頗る人材の乏しきに苦みたりき、偶々氏は其才能を認められ、遂に副社長に推擧せられて專ら創業的の經營に當り、能く之に成功して名聲大に揚りぬ、後三井三菱を中心となし、九州資本家に依つて成立せる豐州鐵道會社長となり、後同社の筑豐鐵道と合併するや、辭して阪神の實業界に悠遊し、各種の事業會社に關係して企業界の發達を圖り、又縣下選出の代議士として中央政界に現はれたること二回、曩に又神戸電鐵の設立を計畫し推されて其社長となり、再び鐵道事業の經營に從事するに至れり、蓋し鐵道事業は殆ど氏の一生を終始せる事業にして、氏の自ら誇りとする所、去れば氏を社長とせる神戸電鐵の社運や益々隆盛なるものあらん、ア、得易からざる傑物なる哉。

維新革命の事あるや永く泰平に馴致せられた各藩の武士は一朝遽に其職を失ひ、自營力貧の道も知らず五里霧中に彷徨して、偶々商業に從事すれば所謂士族の商賣で產を敗り家を傾け、甚極殆ど轗軻落魄に陷つて居るもの計りであるが、獨り戎馬倥傯の世に處しては劍を握り、天下泰平の時に當りては牙籌を執つて成敗の商衢に入り、而も現今我國の重要輸出品たる燐寸製造の率先者として、其今日あるに至らしめ家を富まし國を益したる瀧川辨三氏の如きは、能く國步の趨勢に從ひ緩急の大勢に應じ其才能の卓拔なる、實に我國の士族中稀に見る人物と謂つべきである。

燐寸製造の率先者
瀧川辨三君

氏は長府藩士瀧川清氏の次男にして嘉永四年の生れ、乃木大將とは同郷の友で、奥羽戰爭の時家兄六郎氏は官軍の大隊長として之に從ひ、勇戰奮鬪終に陣歿して大に功勞のあつた人であるが、氏も亦之に參加して危く一命を免れた人である氏は幼い時から頗る平民主義の人で、武士と云ふものを甚だ嫌つて居た、幼少父兄と共に步行すると百姓が道に土下座をする、之が何うも嫌ひであるから、なるべく父兄と共に步行しなかつたと云ふことである、其後戰ひ終ると共に大阪の開成學校に入りて泰西の學に志し、次いで慶應義塾に學び、折柄電信學校の設立と共に同校に入り、卒業後直に電信技師として仕官して居つたが、元來平民主義を有せる氏のことゝて、官吏生活は面白くない、加之漸次世が進んで來るのを覩て何うしても國家の基礎は實業にある、殊に開國進取の國是は貿易に寄らなければ不可ぬと云ふことを感じて、爰に志を轉じ、神戸に來り貿易の見習として或る外國商館に這入つた、而して貿易の狀態を研究すると當時は輸入而已であつた、そこで又復た考へたのには、如何に貿易を行らうと思つても、第一彼と交換すべき商品がなければならぬ、輸入而已で輸出品がなければ外國人に利益を收收せらるゝ而已ではなく、國家の前途が寒心に堪へぬと、夫れから種々に考究の結果、當時神戸に於いて僅に二三の人に依つて營まれつゝあつた燐寸製造業を一見し、其原料の我國に豐富なると、而して工賃の低廉にして且つ日用品である、而も比較的少資本で以て創業の出來るものである處から、將來大に有望の事業となし、井上淸七外二三の人と謀つて僅の資本を以て、湊町四丁目に淸燧社と云ふ燐寸製造業を起したのが、抑々氏が燐寸製造業に關係した始めにしてこれ實に明治十三年六月のことである、處が其後一二年經營して居ると、何を云つても新事業であつて却却豫想通りには行かぬ、日一日と悲境に陷り、組合員の人々は組合の解散說を唱へて止まない、然れども素より確信の厚き氏は、前途に必ず光明の映じて來ると云ふことを信じて、終に組合員の拋業するものを引受け、之を自己單獨の經營と爲したが、既に莫大なる損失を蒙つた後であるから、個人の事業としては誠に困難なる而已ならず、當時他に積徹社と云へる燐寸製造所があつて、氏を招聘せんとした、そこで寧ろ困難なる事業をば斷念して其聘に應せんかと迄思つた位であつたが、折角引受けた事業を今更廢絕するにも忍びず、依然として經營して居ると、幸にも或る人が氏の熱心と至誠に感激して、資本金三千圓を貸與して呉れた、此れが卽ち當時氏を窮境より救濟して呉れた許りでなく、亦今日を致した原因である、從つて氏は此人の大恩は子孫に傳へて忘却することは出來ぬと言つて居られる、其後明治十七年頃より漸く曙光を認むるに至り、且つ當時同業者の何れも價の廉きを競ふて頻りに粗製濫造をやつたものであるが、抱負の遠大と且つ國

瀧川辨三君

家的觀念とを以て斯業の經營を始めたる氏は、他の頗に倣はず、努めて良品を製造することを以て主義として居られた、正直は成功の秘訣と云へることがあるが、氏の誠實は忽ち顧客の認識する處となり、聲價頓に昂り、爾來駸々として今日の域に達し、今や斯界の成功者として諸はるゝに至りし而已ならず、一面國家的生產を助長して、國富の增進に貢獻したる功績は實に多大なるものである。

▲氏が公人的活動

氏は以上の如く燐寸製造業の泰斗として、斯業をして遂に今日の發達を見るに至らしめたる而已ならず、一面社會公人として將た本邦實業界の爲めに貢獻せること甚だ多く、明治二十四年神戸商業會議所議員に擧げられ、二十六年區會議員に、二十八年市會議員となり、三十四年市參事會員、三十五年商業會議所理事に、其後更に商業會議所會頭に擧げられ、殊に本年神戸貿易生產品共進會協贊會長として、多大なる成功を收めしめたるは、神戸市民の齊く感謝措かざる處にして其他日本商業銀行、神戸瓦斯會社、帝國水產、兵庫倉庫會社信託會社等の取締役、神戸電鐵の監查役として、神戸實業界の樞機を握り、何れも今日の發展あらしむる等、其功績に至つては、實に神戸實業界の永く紀念して忘却すべからざる所である。

▲氏の光榮

氏が燐寸製造に對する熱誠は、遂に天聽に達し、三十五年二月勳六等瑞寶章を賜り、三十六年神戸港に於いて大觀艦式を擧行せらるゝや、特に氏の工場に侍從差遣の光榮に浴することを得たるが如き、蓋し一商店としては比類稀なる名譽を擔へるものと云ふべきである。

▲氏の人格

氏は性溫厚篤實、氣品高尙にして毫も名利に奔らず、其幾多銀行會社等に重役たる所以のもの、全く當世の成金熱と異り、世の推奬止むを得さるに出でたるもの、而も國家公共とし云へば毫も勞を厭はずして盡瘁せらるゝが如き、現今稀に見る高潔の士にして、神戸市に於ける代表的の實業家と謂つべきである。

蓋し世の實業家と稱するもの、多くは自己の名利に汲々として、廣く國家社會を思ふもの少く、近くは大阪方面に於ける企業の狀態を見るに、彼等は國富の增殖は生產事業にある所以を閑却して、或は筵面に公園を作り、或は寶塚に溫泉を設け、又は市內に劇場を設くる等、吾人素より之れを不可なりと云ふにはあらざれども、而も戰後二十億の國債を有する國家として、此る比較的不生產的事業に資を投じて、國民を遊惰安逸に導くが如き企業界の風潮に至つては、未だ之を首肯することは出來ぬ、然るに氏の如きは之れと異り、我國の生產業を發達せしめ以て國富を增進せんと期するもの、眞に國家的の實業家たるに恥ぢぬ、是れ一は其人格理想の崇高なるより來るものにして洵に尊崇すべき人物である。

▲嗣子英一君

氏は卽ち辨三氏の長男、幼少東京に出で嘉納塾に入つて中學に學ぶ、資性優雅高尚常に音樂を嗜みたりしかば、己れに適する方面に志すを以て成功の一要素たることを自覺し、ソコで音樂學校に入つて同校を卒業したりしも、家政上の止むを得ざるより卒後業同家の事業たる燐寸製造事業の業務を擔任しつゝあるが、遂に氣品は高尚で品行も短正亦事務の才もある、決して親の威光や財產を笠に着て驕るやうな人でもない、蓋し浮華衒耀なる神戶の靑年には稀に見る好紳士、將來大に飛躍の機が必到するであらう。

神戶商業會議所會頭

川西清兵衛君

世の人を論ぜんとするもの、往々創業の人物に偏して守成の人を輕視せんとするの風がある、素より艱難刻苦自ら其荊棘を拓き、盤根錯節を排除して新に其業を創むると云ふことは最も至難の事に違ひはない、然れども渠等の境遇は單に現狀維持を許さず、進取敢爲の止むなき原動力を以て居る、故に進めば取ると云ふ原則もあれば、亦艱難汝を玉にすると云ふ諺もあるのである、然るに守成の一方に至りては既に相當の地位に進み、如何に非凡なる才能があつても夫れ以前の行程は到底經驗することは出來ぬ、言はゞ前者の原動力に對する惰力であつて、最早退歩の境遇に瀕して居る譯である、殊に前者は目的を達すれば非常なる喝采を博し若し失敗に終るとも敢て己に損する處なく、世人も亦之を非難するものもないが、然るに後者にあつては進むも格別世の賞讃に値へずと雖も、一朝退かんか非難攻撃忽ち來る而已ならず、祖業を顧みず家名を思ひ萬一の蹉跌を慮れば、時に或は意のある處を敢行する能はざる場合もある、故に古人も創業難きか、守成難きか、判斷が出來ないと云い、山崎闇齋の如きは貧賤の家に生れたるものは何よりの幸福であると言つて居るのも、要するに此間の消息を說いたものであらう、然るに世人が往々守成の人を輕んずる風あると共に近く神戶市に於いても創業的の傑松、瀧川氏等の聲名隆々たるに比し、川西清兵衛氏の如きは單に仕合な人であるとの一言の下に品し去るものもあれば甚に或る新聞紙は氏を以て「棚から牡丹餠の落ちたやうな成功者である」と品評して居るが如きは、未だ此間の眞理を解せないものゝ言と謂つべきであらう。

抑々氏は慶應元年を以て大阪に生れ、少々の頃兵庫の石炭問屋と倉庫の貸付を以て業とし、相當の資產ある川西家の養子となつた人である、故に進取的氣象に乏しい、所謂棚から牡丹餠の落つるを待つて居ると云ふ惰弱なる當世の人情から見れば、座して幾許の產を承けたのであるから、或は幸福な人と言ふべきであらうが、而も氏の如きは赤手空拳能く大業を成就するに足る才能を有し、縱へ川西家の遺產なしとするも、必ずや今日あるの人である、然らば氏が川西家の養子となつたのは寧ろ不幸なる人と言ふべく、されば氏の今日ある悉く川西家の遺產と幸運の賜に嫁せんとするが如きは甚だ氏を侮辱するものと謂つべきである。

氏は性淵達明敏、能く成るを守りて聲價を失はず、其祖業を成就したると共に、更に積極的方針を以て、世運の趨向を看取し、事業界の大勢に着眼して、劃策怠る處なく、常に實業界の先導となり、日本商業銀行、日本毛織會社、東亞セメント、神戶電燈、神戶電鐵、兵庫電鐵等の各事業會社を組織して何れも社長重役に擧げられ指導經營機宜に適し、就中氏が最も心血を傾注せるものは日本毛織會社にして、往年同會社の設立せらるゝや、本邦に於ける新事業にして、豐富なる原料を有し科學工業の最も進歩せる歐米の工業家と競爭し、加ふるに販路の開拓をしなければならぬと云ふ最も至難の業務にして一時同社の將來を危惧するに至りしも、而も氏が一度奮衝に當るや刻苦經營、只管機會の來るを俟ちつゝありしが、恰も日露戰役に遭遇し、頓に需用を喚起して同社の一大發展を劃したる而已ならず、一朝軍需品の供給を滿したる國家的功績の實に偉大なるものがあつた、其後社運益々隆盛に赴き、今や本邦毛織業の泰斗として仰がるゝに至りしもの、全く氏の信望と手腕の凡常ならざるに因るや勿論である、其他の諸會社に至つては爰に一々呶々するまでもなく氏の手腕は已に世人の認識する處であらう。

要するに氏は風雲に際會して一攫萬金の奇利を博したる僥倖兒でもなく、又權者に阿付し官僚と結託して利を貪つたる肝商の輩と異り、業を起すや一家の資產を增すに在るも、廣く及びて國家的ならんことに努め、國利に反し社會を毒するものは如何に有利の事業たりと雖も、敢て之に關係することはない、今や富巨萬を重ね聲望隆々たるもの、蓋し氏が多年國家的活動の報償なりと謂つべきである。

▲女婿儀作君

氏は大和國吉野郡の人にして、大阪商業學校の出身なり、明治三十一年瀧川氏の女婿となり、今や良燧合資會社長として、會社の業務を擔任して居られる、氏が擔任するに及び、同社の事業が頓に發展して我邦燐寸界に表然卓立するに至れるを見れば、其手腕を推知するを得べく、年齒少壯にして人と爲り洒脫、新進の實業家として將來大に嘱望すべき人である。

氏は又斯る愴忙の間に在つて一面公共に盡瘁することも敦く、現に神戸市參事會員として市政に參劃し、神戸商業會議所會頭として神戸實業界を代表し、能く其任務を全うしつゝあるが如きは氏の力に負ふ處尠しとせず。

▲氏の人格

氏は當世風成金黨の如く毫も華奢衒燿を事とする人ではないが、而も其行動や文明的にして川崎町に一大肆店を設けて家政を統轄し、關係の諸會社何れも廣厦濶屋、秩序整然、而して壽永の昔平家の盛を競ひし須磨の浦には山に依り壑に臨み、松櫪に隱蔽して蕭然俗を絕するの地を選み、翬飛輪奐の別墅を築き、常に此處に閑臥して、時あれば茶を點じ謠曲を謳つて居られる處抔は、如何にも文明的のやり方にして氏が人と爲りの一斑を窺はしむるものがある、氏人に接するや淡快洒脫鰥寡孤獨を分たず、之を以て對者何れも氏の高風を慕はざるはない、年齒漸く加はり德望隆々神戸實業界の代表的人物として氏の將來に俟つ處多し。

神戸又新日報社長　渡邊尙君

近時新聞雜誌の刊行せらるゝもの其數百千も啻ならず、而も多くは權者に阿付し、富豪の意に迎合し、或は一部の機關となり、一貫の主張なく主義なきの時に當り、獨り一地方新聞の神戸又新日報が、不偏不黨邦家社會を本位とし、筆陣常に堂々として、最も筆の權威と效益とを併有して、遺憾なく之を發揮すると共に、常に眼を海外に注ぎて神戸港の發達に重きを置き、直接の關係ある淸國方面に莫大なる費用を投じて、我國の新聞中最も迅速に且つ最も多方面に精密なる調査通信を爲しつゝあるが如きは、我國の貿易發達に貢獻せる處甚だ多く、而して亦識見の高きことは京阪の大新聞を以て任じつゝあるものをして常に顏色なからしむ、蓋し人に品位あり、品格あるが如く、新聞にも又品位品格あり、此品位品格あつて始めて其議論に權威を含み、其記事に勢力を有する所以なり、而して新聞に品位品格の有無は實に經營者の人格如何に由るべく、現に又新日報が識見高く記事に勢力を有する所以のもの、要するに經營者たる渡邊尙氏の人格が、移つて以て同新聞紙上に品位を放つ所以ならんか、前に縣下の人物として大阪朝日新聞社長上野理一、報知新聞社長三木善八の兩氏を紹介したる吾人は今や復た又新日報社長渡邊尙氏を有するを懌ぶ。

氏は安政二年江戸姫路藩邸に生る、父を豐藏と云ひ氏は其長子なり、幼にして穎悟、加ふるに其母堂俊嚴にして氏の敎養頗る努む、明治四年一家を擧げて姫路に移り、藩儒松平棣山に就て漢籍を學び、八年東都に出でゝ成立學舍に英學を修め傍ら經濟の學を研習し、十一年川崎正藏氏の築地に西洋形造船所を開くや、技師長某に就て造船術を學ぶ、一面新聞雜誌に筆を執り十四年航海雜誌を發刊し又商船必須を著はす、同十九年川崎造船所の神戸に移さるゝや共に來りて之を管し同二十四年神戸又新日報社主となり、竝に海事協會を設立して海事雜誌を創刊したりしが後ち帝國海事協會に引繼ぎ、專ら又新日報に力を致せり、當時氏は川崎造船所と又新日報を兼務し、其勤勉努力到底常人の企て能はざるものあり、同年神戸商業會議所の設立せらるゝに當り之が特別議員に擧げられ、二十八年神戸市會議員となり次いで議長に推選せらる、翌二十九年日本海上保險會社を創立し、專務取締役社長となり、或は神戸區會議長となり、三十七年神戸市參事會員に擧げらるゝ等、終始公人的の活動に努めつゝありしが近時專ら神戸又新の發展に全力を濺げるものゝ如し。

氏資性邁俊、識見該博にして溫良、風格高雅にして操觚界稀に見るの眞摯なり、而も事に處するに周密精到神戸又新日報の幾度か逆境に在りしも、能く今日の聲望を得たるもの全く氏が辛苦經營の效果なりと謂つべし。

神戸海上火災保險會社長　岡崎藤吉君

氏は佐賀の藩士、少々より鄕里を出でゝ東都に遊び、後兵庫縣に出仕中、高知藩士飾磨縣權參事岡崎眞鶴氏の養子となつた、初め兵庫縣に出仕するや月俸僅に八圓であつたが、幾何もなく十二圓となり、次いで二十圓迄昇つた、されば奏任官位に漕き付けるのも、餘り遠き未來ではないと大に樂んで居つた處が、突然官吏任用令が發布になつて、爲めに昇進の途も非常なる困難となつた、乃で英敏なる氏は己の前途に就て大に悲觀すると共に、行末官吏生活の容易ならざるを看取し、寧ろ實業界に入らんことを志し、縣下の特有物產灘の酒造に從事するこそよからめと、初めて釀造家たらんことを思ひ立つたが肝腎の資本がない、又經驗もない、よつて當時の武庫郡長某の周旋を以て魚崎村の村長となり、其間傍ら酒造

の研究を爲し、果して其有利なることを解するに及び、初めて二千圓の資本を作り、同地の或る酒造家に託して委託經營を爲し、折柄武庫、川邊地方の人々によつて、銀行其他一二の會社が設立せられ、氏も之れが創立に與り、恁くして氏が信用も認識せらるゝと共に資本の融通を得ることゝなり、夫れより獨立して釀造を營みつゝあるに際し皆て創立せる二三の會社が悲運に陷り、從つて氏も亦損害を受け、莫大なる負債を受くることゝなつた、されば何とか回復の途もがなと、爰に航運業の有利なるを覺り僅に六千圓の金を懷中して清國に至り、或汽船一艘を購入して居ると、幸にも日清戰爭が起り、偶然にも莫大なる利益を得た、之によつて舊債を償却すると共に、今日の基礎を作り、氏が非凡なる才能は船主仲間の大立物となり、廣海仁三郎、右近權右衞門氏等と謀り日本海上保險會社を組織し、初め廣海氏を社長となし、其他の人人によつて經營せられしも種々の紛糾錯雜を惹起し爲めに會社の基礎危からんとするや、氏は推されて社長となり、大に刷

新改革を斷行し幾もなく大なる發展を劃して鞏固なる基礎を作り、積立金百三十萬圓を得るに至つて同社を辭し、其後岡崎滊船會社を組織して專ら之が經營に努力せんとせしが、當時保險界の壓制を憤り、各船主によつて氏を中堅となし保險會社設立の議起り、遂に神戸海上保險會社の設立となつた爰に於いて氏は當然經營の衝に當ることゝなり創立以來社長として大に會社の發展に盡瘁しつゝある所以である、而して會社の設立後日尙淺く、殊に大阪大火の一大打擊ありしも、今や創痍全く癒ね、將に一大發展の機運に向ひつゝある所以のもの、全く氏が多年の經驗と信望の敷き結果によるや勿論である。

氏は亦營て日本船主の統一を圖らんが爲めに日本船主同盟會を組織して引繼き會頭に擧げられ、乃父の後を繼ぎて三十八銀行の取締役となり、或は燃皮會社、其他の經營に任じて阪神間に於ける實業界の鏘々と稱せらる。

人爲り謹厚にして志操堅確、毫も權謀術數を用ひず、其今日あるや、全く時世を看取するの卓見と至誠勤勉の結果である。

杉山利介君

新開の神戸市は全國に於いて最も生存競爭の激烈なる都會として、優勝劣敗の原則は遺憾なく表現せられ、隨つて活き馬の眼球でも引き拔くと云ふ人物計りであるが、爰に溫厚圓滿の長者杉山利介翁のあるは市內人物中の一異彩である。

氏は尾張成松町に生れ、代々成松絞りを以て業とせる山口公藏氏の三男である、明治九年故あつて杉山氏の養子となり杉山氏は神戸の開港と共に貸席業を營み、時代の趨向は神戸港の發展に伴ひ、數萬の產資を累ねた人である、そこで氏も亦先代の攻後遺業と共に相續せられたのであるから、依然として之を經營して居つたならば、最も安樂に且大なる利益もあつたであらうが、性高雅なる氏は之を營むことを好まず、直に廢業すると同時に、尾州の實家が元名產成松絞りを業として居られたので、隨つて相當の經驗もあり、且つ神戸の呉服店が當時何れも大阪商人の手中にあるを憤慨して、元町六丁目に呉服店を創め、爾來眞摯熱心なる經營の結果は、漸次業務の發展を來して、遂に今日に迨んだ次第である。

氏は以上の如く、波瀾の重疊たる神戸市の人物としては比較的變遷の經歷を有せず、神戸の資產家又は紳士の中で未だ氏の如く平靜坦々として頭角を擡げたる人は鮮ない、若し行ひは性格を證するものなれば、以て氏の人と爲りを窺ふことを得べく、性溫順にして名利には恬淡、別に無理な算段して迄も財を作らんとする風はなく、亦人中で威張ることを望むやうな人ではないが、而も公共に敎く身を挺して社會公衆の爲めに盡瘁される、從つて衆望繫り、明治十八年には有志と共に神戸商業會議所を組織して議員に擧げられ、其後選擧制度となるに及び、爾來引續き議員に選擧せられ、推されて常議員となり、副會頭となり、會頭の更迭は頻繁であるが氏が副會頭たること既に久しく、每に會頭に推薦せらるゝこと切なるものありしも、自ら其任にあらずとなし之を固辭したりと云ふ、又神戸區有財產の管理を委託せられ、神戸瓦斯會社の設立を發起して專務取締役社長となり、或は米穀取引所、神戸倶樂部、神榮會社の監査役に選ばるゝ等、神戸實業界の重鎭として多大なる信用を有して居られる、蓋し今や人智漸く進歩して亦職業の貴賤を問はず、其職業によつて人を計らんとする陋習は稍々脫したやうであるが、當時封建思想の因襲は貸席業抔を營める人は隨分擯斥した時代にあつて、氏が獨り斯る衆望を受けたる所以のものは、必ずや人格の凡ならざりしを推知することが出來る。

氏は又佛敎の信仰を以て一生を一貫した人である、從つて慈悲忍辱を專らとし、後進を扶掖する念慮も淳く、現に學界の異材高楠文學博士を初め工學士岡本櫻氏の如きは、氏に負ふ處甚だ多いと云ふことである。

神戸商業會議所副會頭
日加銀行頭取
田村新吉君

金を砂に陶すれば砂盡きて金露はれ、玉を石に攻げば石盡きて玉出づると同じく、由來成功の人物を見るに何れも常に多くの困難窮苦に耐へ、具に世路の險難を經盡して、努力奮勵の久しきを積みたるの結果にあらざるはない、孟子の所謂天の將に大任を斯人に降さんとするや、必ず先づ其心志を苦しめ其體膚を餓やし、其身行を空乏にし其所爲を拂亂すとは實に田村新吉氏の謂であらう、氏は幼にして父を喪ひ、他人に流寓して漸く人と爲り、慧眼早くも志を立てゝ外國貿易に從ひ、米國に買ひて支那に賣り、彼此の物貨集散總て自家の手腕を以てし今や其利する處は巨萬と算せられ、身を潤し國を富まし、殊に加奈太貿易開拓者として、民族的發展と彼我國交の親善に資益したる功勞甚だ多く、實に國家的商人として已に大任を成就し、金聲玉燿の名譽を得て實業社界に雄視しつゝあるも、而も其間に於ける氏が慘憺經營の實歷は、以て後進者の模範と爲すに足るべく、今其梗概を摘記すれば。

▲幼にして外國貿易に志す

氏は大阪肥後邸付の士族太平氏の長男文久三年生る、不幸幼少の交父を喪ひ、慶藩と共に神戸に來つて元町の茶商、北井治右衛門氏方に丁稚奉公をすることゝはなつた、けれども氏は當時商人となる志望はなく、折々壯士芝居抔を見て義俠ある辯護士が、法の爲めに利害を顧みず盡力して公平なる裁判を得せしむるを、如何にも心地よき事に思ひ、何でも辯護士になりたいと志したが如何せん、丁稚奉公の身分にては、到底不可能の事である、然らば爰に自ら生涯を通じて從事すべき事業は抑々何であらうかと熟ら思ひ廻らしたが、人と生れて一代の事業を擇ばんには、須らく時代の要求するもので而も國家的にして且つ自己の獨立と調和するもの、加ふるに自己の能力に適當するものでなければならぬ、斯る觀念を以て私に將來の目的を考慮しつゝある折柄、主人の命を受けて

製茶賣込の爲めに毎に商館に出入し、其狀態を目擊して居ると、彼等歐米人が稍々もすれば日本人を侮辱するの風がある又商館番頭が彼我言語の通せざるを奇貨とし、不當の利益を貪るもの多く、從つて我商人の不利益而已ならず、國家的商權の屈辱之より甚しきはないと、子供心ではあるが大に憤慨した、そこで更に以らく、貿易業は時代の要求せるもので、且つ國家的事業である、而して自己の能力より云ふも又强ち不可能の事にあらず、と爰に心機一轉して將來貿易家たらんことに決心したのである、愈く決心したる上は最も必要なるものは語學である、夫より語學を學ばんとしたが、當時未だ學校もない、縱し在つても丁稚の身分で之に通ふことは能きぬ、不止得ウキルソン、リーダー一冊と辭書を求め、晝は茶笊を擔いで御用如何と顧客廻りをする間も、冬の夜寒の衾に入つても須臾も身を離さず、獨學したことが五年、成長して上役となるに及び、ヒユス氏の義塾に夜學に通ひ、又英學計りで漢學を修めなければ辭書の字も解らぬ處から、傍ら漢學又は簿記抔も修めて却々苦學をしたが、天性怜悧な質であるから七八年の間に何れも一通りは習得して、豫て志望して居る貿易商に必要準備は整ふた、されば外國の事情が實地に研究したいとの希望は當然起つて來る、其處で何とかして洋行したいとの希望を、或日主人に相談をすると、主人は商人ではあるが漢籍の素養もあり、又自らも夙に直接貿易を希望して居る人であるから、氏の志望を容れて其旨を森村組の永井義一氏に質して呉れると、永井氏は案外にも之を制して曰く其希望や嘉し、然れ共彼我其事情を異にし我に嘱望せるものは、彼地に至れば悉く空想に終るを常とす、故に資本もなく經驗もなき者が偖る輕擧は宜しく斷念するがよいとの事であつた、されば主人よりも戒められ快々として日を送つて居ると、幸ひにも偶然或外國通の人が當時一事業を企畫中で氏に盡力して呉れよとのことであつたから、快く同人の爲めに勞を執つた處が幸ひに成功して此人より幾何の報酬を受けた、此時氏の悦びは譬ふるにものなく、直に此を以て旅費となし洋行せんと思ひ立つた、處が省みれば家に慈母が在る、生みの父には幼い時に訣れ世に所謂親一人子一人で殊には氏が成長を期待して一家を成すの速かならんことを日夜祈つて居られる、然るに今や大恩ある母を殘して遠く異域の人となることは如何にも忍び難い、去り乍ら之を語つた處が許さるべくもない、然らば之を告げずして出發せんか其悲や如何に、殊に六十三歳の高齡今訣れたならば或は二たび相見ゆるの期なけん、嗚、人として不孝程罪の大なるものはない、往けば不孝の子となり、止まれば多年の志望を水泡に歸せなければならぬ、彼を思ひ、此を思ひ大に躊躇したが、更に思ふ樣、余は田村家の相續人である、家名を興すは余が責任である、一時不孝の兒たらんも、幸に業爲つて家名を興せば他日の大孝となるであらうと愈々最後の決心を固め、夫より大阪に至り母に會して心私に暇請をなし、遂に翌日便船に乘じて米國さして出發をした。

▲愈々洋行の途に上る

而も潔く志を立てゝ僅の旅費を携へ、單に一片の元氣を呵

して瓢然と出發したが、母國を距るに及び道に無量の感慨が起つて煩悶に堪へず、漸く米國のビクトリヤ港に上陸したりしも別に資本ある譯でもなく、又憑る人とてもない、辛ふじて佛、獨、日の商品を取扱ふケブル商會の被傭人とはなり、居所定まつて母に慰安の書面を贈つた、定めて非常なる立服と思つて居ると、意外なる返書が來た曰く母は汝が一日も早く志を立てゝ前途の成功を遂げんことを祈るものなり、今や殊勝にも志を立てゝ萬里の行を壯にす、敢て抑止するが如きものにあらず、寧ろ母の喜び之に過ぎたるはなし、母は汝が爲めに如何なる犧牲を拂ふも決して憾みとするものにはあらず、請ふ志操を堅實に遠き外國に在りても、主人を大切にして前途の成功を期せよとの事であつた、氏は此返書に接して實に意外の感に打たれ、一層志を誓ふと共に大に安堵したと云ふことである。

其後ケブル商會に在つて、日夜忠實に勤務して居ると、其主人も大に信用をして呉れて、或時同主人が一事業を起す計劃を立て、夫が硫黄を用ゆる性質の事業であつたから、偶々氏に向つて日本に於ける產出高如何を訊ねられ、一々其質問に答へた處が、早速氏は硫黄買入の爲めに日本に派遣せられ、其使命を帶びて歸朝して居ると、意外にも電報を以て同店は破綻したから今後自由の行動を執れとの事であつた、大に愕いて再び渡航したが不止得、爰に於いて他人の頼み少きことを感じ、如何にもして獨立せんものと

母堂幸子刀自

志した、併し獨立するには立脚地を擇ばなければならぬ、之より米國太平洋岸の各地を視察し、恰も横斷鐵道の貫通當時なりしを以て、加奈陀にてはバンクーバこそ將來發達の土地ならめと、愈々バンクーバに根據を定むることに決定した。

▲初めて獨立商業を營む

當時同國駐在領事の陣定雄氏が故あつて辭職せられ、氏と共同を以て、陣、田村商會なる一小店舗を設け、初めて日本雜貨を取寄せ之を販賣した處が、同地人には物珍しく爲めに賑はんとするもの門前市を爲し非常なる歡迎にて、意外なる利益を得た、最先きよしと歡喜勇躍して夫より同街の最中心地をトし、復た一大店舗を張つて盛に經營せんとして居ると勢ひ競爭者が起つたが惡戰奮鬪することニ箇年、而も漸く同地の勝利者となることを得た、そこで彼等は一種の高壓手段を以て家主に迫り至る處で借家明渡の請求を受けて迫害されるものであるから、大決心を以て將來最も發達の見込ある、グランベル街の土地を買入れ、石筋煉瓦造りの店舗を建築して非迫害に對抗した。

又或日フレザー河を溯ると兩岸に夥多しき生魚の死體があるのを見た、之はクヲラと稱し日本の所謂ブナ鮭であるが、彼地の人は之を食しない、空しく遺棄してあるのは廢物の利用であると思つて、夫より我國に輸入を企てたが鹽加減の爲めに一二回失敗に歸し、其後英國のリバープル鹽を試みた處が結果がよい、そこで一擧に利を得んものと或汽船を借り入れて雜積みとなし、殆ど前來の蓄積せる資本の大部を投じて輸入した處が、不幸にしてコマックスに於いて暗礁に乘り上げ全部トタルロッスに歸して仕舞つた、此失敗によつて一時殆ど無一物となり大に困難をしたが、尚元氣を呵して引續き之が輸入を企て其後は相當の利益を得た、然るに日露戰役後樺太が我國の領有となり、同地產出品の爲めに打擊を受け、更にニシンの鹽漬を輸入して清韓地方へ販賣すると共に、木材小麥粉等を輸入して引續き今日に迫んで居る。

▲國家的貢獻と日加銀行の設立

尚氏が最も國家的に貢獻せられたる一二を擧ぐれば、三十六年の大阪博覽會に際し加奈陀政府を說いて大に協賛を與へしめ、彼我貿易の進捗を圖り、日露戰役には糧秣廠の用達を努め敏活なる行動は終に賞勳局より賜賞せられたること、尚特筆すべきは曩に米國の排日熱が加奈陀に瀰蔓するや、日本人は彼地に金を儲けて本國に送り置き、相當なる資產を得るや直に歸國する者にして、畢竟米國永遠の國民に非らざるを主張し、彼地の銀行、郵便局等にて送金の證跡を調査して唯一の理由となして居つた、されば之が理由を抹殺するには日本人の銀行を設け、日本人の手によつて送金取扱ひを爲すに如かずとなし、四十年に株式會社日加銀行を設けて自ら社長となり、最も堅實に經營せると共に彼地移住民に貯蓄心の涵養を皷吹し又勉めて便宜を與へて居らるゝ事等は氏の國家的の功勞として沒することは出來ぬ。

要するに氏が經歷の概略は以上の如く、慧眼早くも海外貿易に志を注ぎ、少壯身を起してより以來、終始一貫勇往邁進種々の波瀾曲折と闘ひ、遂に今日に至れるもの、素より天稟の非凡なるが上に時勢の援助も亦與つて力ありしや勿論であるが、而も事に當つては熱心、而して忠實奮勉の結果に外ならぬ、氏は性頗る大膽一面最も細心にして、其志を立てゝより以來喫煙を禁ずること二十年、酒を禁ずること又三十年、以て最後の成功を期ひたるが如きは、如何に志操の堅確なるものあるを覩ふに足るべく、寛厚磊落溫乎たる其容、靱乎たる其儀、志氣高遠にして言行壯大、萬丈の光焰將に砌礎として乾坤を覆はんとするものがある、今夫れ氏が容儀に接し、氏の言行を觀て、而して半生の間に鉅富を致したるの事蹟を思へば、誰か肅然として欽仰崇敬の意を生せざるものあらんや、殊に氏が搏噬譎詐の商界に立ち、國家的觀念を以て超然商業の大義を執持し、其業を勵み、其利を計り、遂に能く今日あるを致したるの經歷は、滔々たる商界亦宰に見るの人物であらう。

▲氏の現在

氏は神戸市榮町に其本店を置き、晩香坡、東京、横濱に各營業所を設け、盛に海外貿易に從事しつゝある傍ら、日本製米株式會社社長として、之を經營せる而已ならず、曩には米國商業會議所の招待に應じ、日本實業團の一行に加はつて彼我の親善に勗め、嘗て官選を以て神戸商業會議所特別議員たり

しが、本年の改選に際して補缺選擧の候補者に擧げられ大多數を以て當選し、重ねて副會頭に推されたる等、今や神戸の實業界に於ける代表的人物として氏の力に俟つ處蓋し尠しとせず。

▲氏の家庭

抑々氏が今日の成功あらしめたる母堂幸子刀自は、本年八十六歳の高齢に達し今尚健全偏に氏の大成を怡ふものゝ如く夫人捨子氏は舊主北井儀兵衛氏の親族にして神戸女學院、北陸女學校の出身、夙に貞淑の擧高く一男三女を擧げ、明石郡西垂水村に守命閣と名くる壯大なる別墅を構へ一家團欒、洵に幸福なる生活を送りつゝある。

臺灣製腦會社長　小松楠彌君

臺灣が日本の領土に歸してより以來僅に十餘年、而も政治施設の完備せると共に、獨立會計を以て母國の繫累を脫したるは本島財政上の一大成功にして、母國は曩に關稅統一の名の下に臺灣より一部の稅金を組入れ、今や又砂糖消費稅を奪はんとするの形勢となれり、誰か其發達の速なるに驚かざるを得んや、以て同島殖民政策の成功は列國の稱讃する處、然して其今日を致したる所以のもの、一は當局者の施設宜しきを得たるによると雖も、又以て實際の事業家が同島產業の發達に貢獻せる功勞によるものと謂つべく、而して其最も顯著なるものを小松楠彌君となす。

氏は土佐高知市に生る、少壯實業に志し、明治十一年銀行條例の發布と共に、有力者と謀つて第八十銀行を創設し、入つて之が經營の衝に當り、次いで丸龜市に百二十七銀行を創立し、轉じて同行會計主任として之が創業の施設に努めつゝありしが、明治十四年頃氏の友人中澤助治と云へる人が腦油再製の方法を發明するや（腦油製造法は其後大野利吉なる者の發明せし如く世に說を爲すものあれども全く中澤氏の發明を模倣せるものなりと云ふ）令兄小松直吉氏と共に合資組織を以て、之が製造を開始し、氏は專ら之が經營を擔任し、原料の製產地たる九州に至り、日向延岡に根據を置き、同事業を經營したりしが、販賣上の不便を感じて、明治二十年製造所を神戸に移し、橫濱平沼新田に分工場を設けて盛に製造しつゝある折柄、臺灣が我國の領土となるに及びて同地に航し樟腦製造の方法を視察するや、同地は其方法を異にし、腦油製造を爲すものなきを惜み、廢物利用の腦油製造方法を講じて更に自ら製造所を設け、之に依つて莫大なる利益を收め、其後專賣制度の實施と共に之を廢止し、同三十五年臺灣製腦合名會社を組織して之が社長に擧げられ、氏が多年の經驗と熱心、加ふるに眞摯なる劃策經營の結果は、頓に同社の發展を來し、氏も亦偉大なる成功を見るに至れり。

氏は又單に製腦事業に止まらず、更に百五十萬圓の資本金を以て臺灣建物會社を組織して之が社長となり、同島に建築の改良を圖り、其他北邙製糖會社、臺灣銀行、新竹製糖、臺灣貯蓄銀行等を各創立し何れも社長重役に擧げられ、今や臺灣に於ける最も成功の顯著にして、且つ同島實業家中の頭領として大に躍動しつゝあると共に、同島の實業界を指導誘掖したる功勞は永く臺灣產業史上に特筆して之を沒却すべからざるものなりとす。

氏人と爲り溫厚篤實、年齒漸く加はり、態度禮節の悠揚として、毫も衒騖の風なく、當世の實業家中稀に見るの人物ならんか、矣。

合名會社鈴木商店支配人　金子直吉君

往年日糖會社の疑獄事件起るや、神戸市鈴木商店の名は社會に喧傳せらるゝと共に、同店支配人金子直吉氏の聲名を傳へられき、而して當時或者は曰く、日糖會社が鈴木商店の經營に係る大里精糖所を買收したるは、全く暗愚にして狡猾なる重役が鈴木商店の爲めに乘せられたりと、或は曰く日糖の破綻に際して、其債權に對する折衝の過酷に失するものなりと、其後又原料糖の有害物混淆輸入問題等に就て、世論は氏に對して兎角の風評を爲し、或一部に於いては大に氏の人格を疑ふものあるき、余輩未だ之を審にせずと雖も、氏は寔に深酷苛察なる辣腕家に違ひはなく、從つて氏の一擧手一投足必ずや人の儀表と爲すに足らぬ人であると思つて居つた、然るに一面氏が主家の爲めに最も忠實なるに至つては、恰も傭者と被傭者の關係が眞に水臭き一種の契約的に陷りつゝある輕薄なる當世の社會に在つて、又稀に見るの模範的人物として、吾人は縣下に於いて辰馬家に於ける、辰槃之助氏と共に双璧として大に推奬する所以である、抑々鈴木商店先代岩次郎氏が雄圖半にして死去するや、後には敢て家事を顧みざる幼主あり、同家の輕重存亡は殆ど氏の掌中にあつたのである、

若も世評に上るが如き、鵐的人物ならんには、或は如何なる行動に出でたりしやも知る可らず、然るに氏は先代の遺圖と遺業を繼承し、幼主を擁して一大事業を完成し、同家の基礎を不易の位置に向上せしめ、以て其嗣を大成した人である、然らば氏が眼中鈴木商店以外に何物をも認めない、辛辣苛酷なる手腕は卽ち同家の爲めには金玉である、されば世人が氏の辛辣なる手腕を見て直に其人物を評し去らんとするが如きは、未だ其全豹を窺つた言ではない。

貿易商　湯淺竹之助君

氏は土佐高知市の人、明治二十年頃より鈴木商店に入り、先代岩次郎氏の知遇に感じて、獻身的同家の盡めに盡瘁して、居ると云ふことである、想ふに氏が當世稀に見る氣骨の穀々として非凡の才能を有せるは勿論であるが、抑々亦歿後の今日に於いて尙氏をして三代相恩の如くに感せしめたる、先代岩次郎氏は慥に頭梁の器であつたことを推知すると共に、其一代にして巨富を累ねたのも偶然ではない。

氏は明治三年二月紀州湯淺に生る、父は治右衛門と稱し其次男である、同家の祖先は湯淺町の傍ら高城山の城主湯淺權守宗重と云ひ、羽柴秀吉の爲めに滅ぼされ歸農してより以來氏に迄んで十九代、父治右衛門翁に至り、小間物及反物の卸賣を營み、紀州一圓の小賣人を相手に手廣く營業をして居られたが、氏の兄治兵衛氏は家業を外に放埒三昧、家道大に荊棘を生じ、遂に生計に苦むまでの境遇に陷つた、當時氏は纔に十四歳であつたが、一家の悲境を傍觀するに忍びず、父に乞ひて小間物の行商を爲し、辛くも家計を補つたと云ふことである、斯くて日を迄つて居つたが、色々と考へて見ると所詮田舍に居つては充分の活動も出來ぬ、惣うして小間物を賣つて居つた處で何時運が向いて來ることか判らぬ、到底家名を輓回すべき見込もない、乃で竊に意を決して家鄉を後に横濱指して出て行つたのが十六歳の年であつた、横濱に着いた氏は、或る手蔓で同市榮町の豪商增田增藏氏方へ丁稚奉公に住込んだ、當時の增田商店は日本砂糖商の本家本元とも云ふべく、元來機敏なる氏は其間熱心に商賣の事から、應接さては顧客に對する懸引一切を研鑽して、立振舞ひも敏めな處から人を見るに明のある主人增藏氏は、早くも氏が將來に望みを屬して店員に拔擢した、惣くて天性英敏なる氏は營業狀態を會得すると共に海外貿易の秘訣を呑み込み、隨所に手腕を發揮して、主人の信用と嘱望は益々加はる、從つて重用せられ商賣の樞機に參すると云ふ風になつた、茲に於いて氏は最早獨立すべき成案もあり、殊に家名輓回の重大なる責任がある、故に何時迄も增田家の爲めに盡す譯には行かぬ、乃で事情を訴へて主家を辭し、初めて神戸に來たのが明治三十一年の夏であつた、神戸に來るや豫て懇意なる居留地ドッドウエル商館の番頭となり、幾何もなく同館を辭し、始めて有田屋商店の名義を以て、既に經驗ある砂糖及びメリケン粉の輸入業を開始したのである、夫れより總て輸出入の雜品貿易を併せ營み、或は兵庫東尻池に砂糖再精所を、南逆瀬川に湯淺精糖所を設くる等、此間舊主人の增田氏竝にドッドウエル商會等の後援の與つて力ありしや勿論であるが、而も氏が眞摯熱心劃策經營の結果は、終に明治三十四年に至り湯淺商會を獨立して、直接輸出入業を營むことゝなつた、而して氏は久しく店員として世の悲風慘雨を嘗め盡したる苦勞人であるから從つて人を活用するに頗る妙を得て居る、殊に三十六年英人某を採用して米國に遣しては、小麥竝に小麥粉を輸入し、或は米利堅粉の頽勢を察知しては、急轉販路を滿韓地方に需めて打撃を免れたる等、其敏活なる行動は世人が讃嘆して措かざる處である。

神戸信託株式會社專務取締役　小磯吉人君

凡そ動產と不動產とを問はず賣買讓渡受授交換の必要より其供給者と需用者の間に介在して之れを取扱ふ機關を總稱して一斑の商業と謂ふべく、而して其商業にも種類あり階級あり、曰く小賣、卸賣、仲買等であるが、而も之等の目的とせざる處まで勇往邁進多々益々辨ずると云ふ才能を有して居る氏は、更に內外店員を印度、比律賓さては獨、佛、伊、英、米、の都市より近くは支那方面へ派出し、棉花、肥料、機械材料等の取引先を定め、廟算整ひ其後此等商品の輸出事業を營みつゝあるのであるが、今や神戸に本店を、東京、大阪、下關大連に支店を置き、臺灣、門司、上海等に各出張所を設け、本邦に於ける貿易商界の錚々として、巨大なる富と信用を有して居られるが、而も氏は年齒漸く四十二歳、其實業界に投じてより僅々十餘年を出でず、誰か其發展の速なるに驚かざるものぞ、春秋尙高く今後の成功那邊に迄及すべきや、實に逆睹すべからざるものがある。

氏の經歷竝に人格に就ては尙大に記載すべきこと多いらんも、余輩未だ親しく面識なきを以て、爰に委細を紹介する不能を遺憾とせず。

る重なるものは動產物であつて、不動產の山に川土地家屋等に至つては、之れを專門とせる仲買も又卸賣商も殆ど稀である、そこで此賣買受授者の間に介在して斡旋するものを名付けて才取となす、輓近世運變遷の潮流が急なるに及んで才取營業も益々繁榮を加へ、最も世の必要缺くべからざる機關となつた、然るに往々彼等の無責任なる訪問の手段を事とするものがあつて到底信賴するに足らぬ、殊に神戸市の如き發達の急激にして盛衰の頻繁なるの地は、之れを仲介する確實なる機關を切望するものあるを看取し、創設せられたるものが信託會社である、而して同會社の營業は單に仲介を確實にすると云ふ計りではなく、進んでは諸會社の整理竝に資金の運用、個人としては遺產の監理、或は財產の所有者が、孤兒寡婦未成年者、又は其住所を一定し難き人等の爲めに家政の監理、土地建物の價格鑑定等にして、詰り先年發布せられたる信託法案に準據して居る會社である、從つて責任の重きこと、信用が確實でなければ到底經營の能きぬ會社であるが、而も現社長の鳴瀧幸恭氏や專務取締役の小磯吉人氏の如きは最適任者であらう。

氏は京都府下淀の藩士、幼少鄕里の明親館に文武を兼修し普通學を欧學舍に學び、後內務省衛生試驗所に入り、明治十二年兵庫縣御用係衛生主任として、縣下に於ける衛生思想の皷吹と共に其施設に盡瘁したる氏の功勞は永く沒すべからざるものがある、又同時に縣立病院藥局長、神戸醫學校、同藥學校等の敎諭に任ぜられ、後再び東京に赴き大日本製藥會社技師となり、同

大阪支店の主任として大阪に來り、間もなく同會社の取締役に擧げられ、又小磯商會を設けて藥品の營業を爲したりしが其頃神戸の富豪故小寺泰次郎氏と交深く、氏の長女を迎へて室となすや神戸に移り、故泰次郎氏の歿後同家の家政を補翼し、今尙父執として當主謙吉氏の最も信賴敬重する處である

氏は資性謹厚にして質朴、內心には敦厚なる信仰を以て一種の權威を蹴し、名利の念に淡く、頗る陶磁器に趣味を有して其鑑識の高きと所藏の富贍なるに至つては已に著聞して居る、又勤勉奮闘を以て主義となし家人に至るも暫時も怠慢を許さぬ、例へば氏の夫人は富豪小寺家の出、而も今尙裁縫補綴は勿論、衣類の如きは一切自ら手織つて之れを用ひて居られると云ふことである、之れ一は故泰次郎翁の薫陶によるのであらうが、又良人の意を憚せられて居るのであらう、世に往々其日の生活に汲々として、而も遊惰安逸を貪り、時流を趁はんとする當世の高襟夫人は宜しく學ぶべきである。

神戸在住の人物

舊三田藩主　子爵　九鬼隆輝君

▲同家の祖先

九鬼嘉隆を祖とし嘉隆は大職冠鎌足の後胤熊野の別當湛增の遺裔にして其先は南紀九鬼鄕の人なり、故に九鬼を以て姓となす、嘉隆五世の祖次郎隆良法名珍村、初めて九鬼の鄕より志州波切村に來りて茲に住し、寨を構へて之れを守り近里を押領せり、珍村の子珍山、其子大和、其子山城、其子宮內相續いで波切片田を領す、宮內二子あり、嫡を宮內と云ひ、次を右馬允嘉隆と云ふ、宮內早世其子珍五助幼にして孤となる、故に之れを嘉隆に託す、嘉隆皆己に據り珍五助を扶育す時に志州に英雄と稱する數士あり、嘉隆其一にして各皆に據つて己を守り、攻守同盟を約す、嘉隆獨り天資英猛、才力絕倫、特に船戰の術に長じ、夙に自立の志あり、超然として同

盟を蔑如す、爰に於いて數士之れを憤り、連衡して急に波切の寨を攻む、嘉隆敗れて勢州安濃津に走り、後瀧川一益に倚つて信長に仕ふ、永錄十二年信長嘉隆を將として勢志二州を誅つて之れを敗る、戰功によつて其掠取せる所の地を賜ふ、嘉隆田城を築いて守り、橘治郎の女を娶る、治郎嗣子なし鳥羽の采地を嘉隆に領せしむ、是に於て嘉隆鳥羽城に移り從五位下大隅守に任ぜらる、後織田氏の變あり、是より秀吉に奉仕し、征韓の役巨艦の艦を造り水軍を率ゐて朝鮮に至り太だ戰功あり、此の故に三萬五千石を領して鳥羽城を築く、嘉隆二子あり嫡を長門と云ひ、次を五郎七と云ふ、長門守隆重襲封して家康に仕へ、關ヶ原の役に軍功あり、此時嘉隆豊臣氏の知遇に感じて、次子五郎七と共に志を大阪に通じ石田三成に黨して鳥羽城に據る、然るに守隆德川氏の命を奉じて之れを

攻む、嘉隆遂に敗れ、獨に城を出でゝ朝熊山中より答志村に至り和貝の洞仙庵に自殺す、左右を顧みて曰く守隆あり先祀絶ゆるのみと、吾唯一死豐臣氏に酬ゆるのみと、德川氏守隆の殊功を賞して伊勢五郡を加賜せんとするや、守隆之れを辭し以て父の罪を贖はんと請ふ、其誠哀を容れて嘉隆を特赦す、然れども事既に及ばず、守隆深く悼み追福の爲めに一寺を創建して之れを弔ふ、現存せる玉龍山常安寺即ち之れなり。

嗚呼嘉隆武勇ありて其家を興し、一死以て豐臣氏の恩顧を泉下に報ひ、而も世子をして德川氏に忠勤を勵ましめ、永く其家を盛にす、又終始を全うせるものと謂つべきなり。

守隆二子あり、隆尙隆季之れなり、歿後嫡庶の事を論じて公裁を仰ぎ、邑を割いて隆尙に播州三田三萬五千石を、隆季に丹波綾部二萬石を賜ふて封を移す、嘉隆より十五世先君隆義公に迨ぶ。

▲先君隆義公

公は綾部の藩主九鬼隆都の三男にして幼名を啓之助後隆義と改む、少壯人つて同家を襲ぐ、英邁にして卓識あり、維新屢藩の際各藩何れも其去就に迷ひつゝあるに際し、公は夙に時世の推移を看取し、徒らに空理徒食の非なるを慮り、昔日の態度を一變し自ら實業を唱へ一時一藩を率ゐて歸農せんと奏請せるが如き、又夙に泰西の文物を究めんが爲めに、躬ら慶應義塾に福澤先生を訪ひたるが如き、當時未だ鎖港の夢暖なるの時に當り、獨り泰西の文物に着眼したる、公の卓見と藩主の身分を以て自ら臣下を訪問したるが如きは人の以て美

譚とする處又頗る果斷に富み、一切の舊式を廢して人材を登庸し、白洲泰藏を拔擢して一切を統轄せしめ小寺泰次郎を拔いて理材の事に當らしめ、以て藩政の改革を斷行し、進んでは商會を設け實業を經營し公の聰明に加へて此等有爲の士が補弼畫策其宜しきを得て、神戸開港となるや其發達の及ぶ處を豫測して土地の買入れを爲す等、舊錄僅に三萬五千石其實二萬石にも滿たざりし一小藩が今や各藩主中の富者を以て聞はるゝに至りしもの全く公の卓見と畫策其宜しきを得たるに歸せずんばあらず。

公三男三女あり、長は令嗣隆輝君にして、次隆憲君現に明石郡大久保村に於いて果樹栽培を營み、季秀若君京都下加茂に於いて家禽を業とし、長女好子氏は松方幸次郎氏に、二女慥子氏は寺島伯爵に三女梅子氏は上野精一氏に嫁せらる。

▲當主隆輝君

子は幼少夙應義塾明治學院に學び、明治二十年米國に留學し、ボストン大學に入り留ること七年、先代の薨去によりて明治二十五年歸朝して家督を襲ぐ。

子は聰明にして學識あり大名華族中の錚々として夙に令聞あり、謹厚にして名利の念なく、嘗て同族中より貴族院の候補として推薦せんこと切なるものありしも、少壯其材にあらずとなし、頑として應せず、又子が實業界に入らんことを煽動するものありと云へども敢て之れを容れず、蓋し方今大名華族の子弟が徒に祖先の遺勳に座食して、安逸遊惰に流るゝもの多く、天下無用の遊民を以て目せらるゝの時に當り、恰も

氏が何等爲すなく、身は須磨の高樓に閑臥して、單に遊獵を而已事とせるを以て、世間往々氏をして此等の輩と同一視して種々の非難を爲すもの多し、然れ共氏は他の華族輩と異り豐富なる資産を擁し、殊に泰西の新敎育を受けたるの人加ふるに明敏の才あり、好んで安逸を貪らんとするものにあらず慨むらくは身體の羸弱なる靜養の止むなきに因ると云ふ、之れ畢竟氏が舊封内の休戚を念ふの冷淡にして、且つ舊藩士と比較的交情の疎音なるより、彼等が爲めにせんとするものゝ脣より漏れたるものならんか、吾人は氏が健在を祈つて社會に雄飛せらるゝの日を俟つ。

▲同家の補弼

同家は家令鈴木潔君並に河村馬太郎氏によつて補佐せらる卽ち鈴木潔氏は本編之を別敘せり、而して河村氏は代々九鬼家の重臣にして、祖父太左衛門氏は維新の際先君を補佐して大に貢獻せる處あり、氏は曾て有馬郡役所の屬吏として永く郡治に鞅掌する處ありしが、明治二十九年藩主の命により同家の家扶となり、爾來鞠躬として盡瘁しつゝあり、溫良恭儉の人、氏の息一馬君曩に法科大學を卒へ現に京都地方裁判所に判事たり。

神戸市の長老
神田兵右衛門翁

晩近文質的文明の進歩と共に世道頽廢人心萎靡し、世人多くは名利に汲々として敢て又道義を顧みるものなき時に當り殊に人心の最も浮薄なる兵庫縣下に於いて偶々德行高き君子人神田兵右衛門翁を紹介することを得るは著者の最も欣悦とする處である。

翁は播州印南郡大鹽村の素封梅谷庄左衛門氏の三男にして幼名を楯助と云ひ天保十二年を以て生れ、安政三年十六歳にして神田家に養子となりぬ、神田氏は同地の名門今に迨んで十二代、代々兵右衛門を襲名して兵庫出在家町に住し材木商を營む、四代以前の兵右衛門氏に至り家道頓に勃興して一切の商業を廢して家憩を作り、以て爾後同家に嫡領たるものは必ず、事業の經營を禁じて消極的の維持に努むべきことを定

め、代々德川氏直轄の名主役を勤め隱然同地の主領であつた（他の天領地は大庄屋と稱して世襲なりしも、兵庫は選擧制度にして、普通一家に一箇の選擧權を有し、大年老二十五町年老は五、借家人は無資格の選擧法なりき）

▲翁の略歷

翁は慶應元年家督を繼ぎ、同二年年寄役となり、三年苗字帶刀を許され、兵庫に於ける年寄上席となりぬ、之れが抑々翁が名譽職に擧げられたるの始めにして其後今日に至る迄四十七年間引續き諸種の名譽職に當り神戸市政の爲めに盡されて居る、同年兵庫開港の事あり、幕府が兵庫開港社なるものを設き、翁は其取締役に擧げられ、十人扶持を賜ひ大阪神戸運上所在勤を命せられたが、此兵庫開港こそ卽ち神戸貿易の開始である、明治元年會計官御用係を命せられ奥羽戰爭の御用金調達を申付られ、維新の際姫路藩が佐幕に與みして大義を惡るや、翁の實家梅谷氏は姫路藩の國老高須隼人氏と親交ありしの故を以て、兵庫に駐在せる薩藩の岩下佐治右衛門氏に縋り歸順の意を致さしめんとし、恰も岩下氏の知遇ある翁を介して一藩歸順の誠意を傳へしめた、爰に於て岩下氏百方斡旋の結果歸順の事となり、之れと共に軍用金十五萬兩を納れて其濟らざるを表する事となりぬ、されど當時斯る巨金を調へるに方法なく、藩は之れが爲めに苦しみ復翁を煩はさんとして迎へられ、翁は怨を飛ばして姫路に赴くや姫路城は已に岡山藩の據る處となつて入ることが出來ぬ、そこで城外本多意氣揚氏の別墅で藩の重臣と議し、其後同藩士の翁の郎に

來往するもの多く恰も藩の御用邸の如く、遂に松尾七兵衛、兒島又右衛門、北風莊右衛門氏等と共に調金の事に奔走せられ、辛うじて一藩事なきを得たのは翁の盡力に俟つ處多く、姫路藩廳は其功を賞して十五人扶持竝に手代山口菜に五人扶持を賜ひ、且つ每年酒造米三千俵を貸付するの恩典を與へられた。

其後北風氏と共に上請して町兵隊を組織し、青年敎育の急務を感じて明親館と云へる學校を創立し、更に明治政府より苗字帶刀を許され、租稅徵收の爲め商法會所の設けらるゝや元締役、竝に縣出納方、通商司頭取等を仰付られたが、幾もなく新政府の施設漸く其緖に就き、官民の事業が畫然として定るに及び、翁は素より仕官に望みなきを以て之れを辭された。

其後公職の一班を擧ぐれば、明治四年兵庫縣より兵庫南組名主、學校幹事長、竝に洋學校設置勸學を命せられ、學校建設及維持の方法敎師の應聘等に至る迄總て之れを擔當し、亦兵庫區長を命せられ、或は米商會所、七十三國立銀行、神戸商法會議所等を創立して各頭取に擧げられ、而して當時翁が最も心血を濺ぎたるものは兵庫新川の開鑿工事にして、始め兵庫港の發展策として翁の主唱により北風正造、小西新右衛門、島田組等と協力して業を起したりしも、中途島田組の破產と共に出資の途頓に塞塞して、工事に挫折を來し、市民は嗔々と苦情を持込む、隨つて其儘放任する譯には行かぬ、爰に於て翁は斷乎として私財巨萬を拋つて之れを補ひ、之によつて漸く落成したのが卽ち現今の新川である、爲めに素と排

作地であつた同地が發賑の街衢となり今日の發展を來して居るもの全く翁の賜と謂はねばならぬ、其後縣制の發布と共に縣會議員に擧げられ常置委員となり、二十二年市會議長となり、市長候補者に擧げらるゝこと前後三回、或は區市會議員區會議長、市水道常設委員長、築港期成同盟會長等に擧げられ、維新前より今日迄、前後五十年の間神戸市に於ける有ゆる公事は一として翁の雙肩に掛らざるなく、現に市參事會員として今尙翁を煩はして居る次第である。

▲翁の頭には唯公共ある耳

翁は又單に名譽職として表面の職責上神戸市の爲めに盡す計りではなく、何でも神戸市の發展を圖らんとせば有力なる資本家を迎へて之れが力に俟たねばならぬとなし、自ら三菱三井等を勸誘し、他人なれば其間コンミッションとでも云ふ處であるが、翁は而も自費を以て之れを款待優遇したものである、總て斯る風で翁は自ら神戸市の主人公を以て任じ、人も又神戸の長老として萬事翁に倚つたものである、故に單に社會公人として而已でなく、人の哀を乞ふものあれば好んで之れに同情を寄せられ、翁の爲めに成功して居る人は殆ど數へ盡す事は出來ぬ。

翁が一生の經歷は全く公共に身を委ねたもので、何と言つても素封の梅谷家に生れて、名門の神田家に入となつたのであるから、翁の頭には固より理財の觀念抔はない、唯翁の頭に存するものは世の爲め人の爲めに盡すと云ふ事だけである假に翁が官吏として明治政府に仕へて居られたなれば、疾く

に華族に列せられて居る人である、又日進月歩の神戸市に居つて、翁の門地と才能と、且つ時世を利用して貨殖に志したなれば、必ず鉅萬の富を獲得したであらう、然るに高潔なる翁は毫も名利を思はず、生涯を通じて公共に致したる而已ならず巨萬の私財迄を公共に拋つて顧みないと云ふに至つては實に何とも言へぬ崇高なる人格である。

▲眞に頌德の資格ある人

古語に超宗越格鳥道の而も蹤なきが如し、其事を得るや靈龜の尾を曳くが若し、と言つてあるが、而も當今國家公共或は慈善抔と言つても、何れも勳爵の爲め、又は利の爲めにするもの計りで、恰も龜の尾を曳いたやうに蹤が殘つて穢いが翁の事蹟は毫も名利が念頭にないのであるから其清らかなことは鳥道の蹤なきが若くである、宜なり故伊藤公の如きは讃嘆措かず、眞に爾汝の交を續けて居られたが、曩に明治十七年、故有栖川宮熾仁親王殿下は翁の德風を嘉賞して親しく同家に台臨あらせられ、翁の雅號松雲に因みて『嚴上松松上雲以脫人軌焉』。の御親筆を賜ひ、明治三十二年賞勳局は藍綬褒賞竝に特に木杯を下賜せられ、四十二年從六位に叙せられた又神戸市民の翁を見ること恰も慈父の如く、四十三年服部知事を初め市の有力者は翁の壽筵を開き、兵庫の有志者は翁が懿德源緒の漂沒せんことを恐れて、四十四年紀元節を卜して一の頌德碑を建設した、由來藍綬褒章は濫授褒章となり、又頌德碑、紀念碑、或は銅像抔も流行するが、多くは阿諛的のものが甚だ多い、然るに翁の如きは眞に頌德さるべき資格の

ある人として大に光輝を放つて居る。

▲翁の人格

翁は道に溫厚なること玉の如く、心事の公明なること恰も光風霽月の如し、出でゝは公共に力を致し、入つては茶を點じ香を焚き、最も高尚なる趣味を有せられ、孤々こ謠曲を謠つて居られる處は實に其品性の崇高なること只々嘆稱するの外はない。

翁は又後進を愛すること赤子の如く、何人を問はず喜んで會接して其後來を訓戒せられる處は實に欣慕に堪へぬ所がある、又翁が社交の多方面なる一例として往年須磨寺の發展策に就いて協議を受け、同所は神戸市民の散策に便なるより翁の知人而已一人一株に限り櫻の寄附を勸誘せられたが、忽ちに千株に達したさうで、現に彌生の春に神戸市民が樂む須磨寺の爛熳たる櫻花は卽ち翁の賜である、翁の一首あり。

植櫻記

見渡せば詠むれば見ればと詠じけん須磨の秋は言はずもがな、入相の鐘にちり行く春の花の寂しみもこの寺になかるべからずと。嫁りある人々より櫻樹一本をこひ來りし程に人も花も其數千にみちぬ、かくて後此花の下に永き日を送り打興せんも、此其寄せられし人々の心の花の賜ならんかし

花千母登むかし稚木のさくら哉

夫人は御影町の嘉納氏より入り、本年芽出度金婚式を擧げられたが、翁が社會に立ち公職に携はつて以來、又殆んど五十年の長きに達して居る、而して尚鍥々として居られるが、蓋し翁の如く毫も一身一家の利を願みず、長年月の間終始一貫して公共の事に盡瘁せられた人は他に未だ曾て聞かざる所にして明治の美譚として永く後世に紀念すべき人物である。

衆議院議員　小寺謙吉君

（明治四十四年二月稿）

▲彼とは誰ぞや

我日本の文明は明治の昭代に至つて急速の進歩を爲したことは呶々する迄もないが、其大半は神戸港を通じて輸入したものである、故に兵庫縣は本邦文明の咽喉にして、又或意味に於いては現代文明の中樞とも云へるであらう、隨つて縣下各方面に幾多の人材を輩出しては居るが、併し此衆き人材の中より獨り政治家の出でざるは吾人の甚だ遺憾に堪へざる所である、否政治家と稱する者は甚だ多いが、名實相伴ふ所の眞の政治家が居らぬ、勿論之は獨り兵庫縣のみではなく、現代の日本國中に於いて眞の政治家らしき人物は甚だ尠い。

抑々政治家に尊ぶ所のものは、內に高遠なる政治上の理想を有し外は之が實行に努むると共に、主義主張に由つて終始し而して其志操の堅確不拔なる所にある、斯くて始めて眞の政治家と稱することを得べし、蓋し政治家に主義主張なきは恰も船に羅針盤なきが如く、其進退運爲に一定の方針なく、何等の用を爲さぬのみならず、寧ろ國家社會に害毒を流すものと謂はねばならぬ、政界の腐敗、國政の廢亂は凡て此種の政治家が世に多い結果である、而も猶政治家と稱して國政を按排し、民衆を指導せんとするに至つては、危險之より甚だしい事はない、然るに我國現今の政治家と稱するものが、滔滔として皆此有樣である、去れば憲政實施して以來既に二十有餘年、所謂官僚と稱するものが今日猶全盛を極めて、政治上に對する國民的勢力が微々として更に振はず、政界は腐敗に腐敗を重ねて互に利を射るに汲々たるが如き少しも怪しむに足らぬ。

此時に當りて高遠なる理想を抱き健確牢固なる主義主張に由つて進退し、一意憲政の爲めに身を挺して盡瘁至らざる莫く、人は政界に處して射利に汲々たるもの多きに反し、彼は主義主張の爲めに私財を抛ち、國家社會の爲めに劃策して勇猛進す、實に之れ政治家の典型にして、吾人が稱して眞の政治家と謂ふのは彼が如き人物を指して言ふのである、彼とは誰ぞや、之れ則ち縣下選出の現代議士小寺謙吉君である。

併し彼が政治家としての過去の生命は未だ永くはないが、而も此短き歲月の間に於て其政治家としての技倆は世に認識せられ、理想高く、主義主張は健實確固として早くも中央政界に重きを成すに至れるもの、則ち彼が人物の非凡にして遠く儕輩を拔いて居るからである、吾人は今縣下に眞の政治家が乏しいと言つたが、彼の如き新進政治家の輩出に由つて前言を事實の上に打消すことの出來るのは、單に我が兵庫縣の爲めに之を欣ぶのみではなく、實に政治界の爲め、又國家社會の爲めに意を強うするに足るべきである。

殊に渠は政治家として天下國家に志を伸ぶる一面に於いて又自治團體の一員として地方の爲めに畫策盡瘁を怠らざるが如きは錦上更に花を添ゆるもの、蓋し歐米文明國の政治家を觀るに、非力を國家に致すと同時に、又地方自治體の爲めにも深く意を用ひ、自ら衝に當つて之れが發達進步に努むるものが甚だ多い、之れは洵に政治家の美風で、又實に立憲國民の本分を全うする所以である、然るに我國の狀態を見るに少しく中央政界に頭角を擡げ、又世間から政治家を以て目さる

るに至れば更に地方の事を顧みる者がない、勿論境遇の如何に依つては已むを得ない次第であるが、併し多くは虚名に馳せて地方の事に關係するを以て屑とせない弊風がある、是れ抑々立憲國民の本義を解せぬ結果で、又國家の健全なる發達を來すべき其根柢は地方自治體の改善進歩に在る所以を覺らぬからである、若し歐米の大統領や大臣などが一朝野に下れば地方自治團の一員として、或は市長となり、又は村長となつて眞面目に市村政の爲めに盡しつゝあるに較べたならば、彼我政治家の心事に大徑庭あることが判るであらう、然るに彼は天下國家の大局に身を捧げて其名聲亦隆々たるものありながら、又進んで地方自治の發達を圖り、或は市政の刷新を絶叫し、現に市會議員に列して之れを躬行しつゝあるが如き眞に政治家の使命を全うするもので、吾人は世に所謂百人の政治家よりも一人の彼が如き人物を望むものである。

▲氏が半世の閲歴

氏は春秋尚遙に高く隨つて眞の活動は今後に在る、故に今日に於いて氏が政治家及び實業家としての全部を品評する譯には行かぬ、去れば氏が將來幾何の發展を爲し又如何に其人物を研き上ぐるやは、則ち彼が短き過去に於いて現したる其手腕、技倆、人物と、其閲歴並に修養準備等に由つて大體を窺ふの外はない。

氏は明治十年の生れであるから、今茲恰度三十五歳である十八歳の時に神戸商業學校を卒業するや、笈を負ふて東都に出で、專ら外國語並に高等普通學を研修した、蓋し是れ他日政治、經濟、法律學等の蘊奥を究めんとするの準備であつた、果せる哉、遠大なる抱負を懐ける氏は、同三十年の四月即ち二十一歳の時に翩然として海外に渡航し、歐米の學界に足を踏み入れ、即ち先づ政治、經濟、法律の研究を目的として、エール大學に入り研修二箇年、更にコロンビヤ大學に轉じて、三十三年同大學を卒業したが、猶止りて研究を繼續し、傍らキャソリック大學の高等法學部に入學し、學長、ロビンソン博士に就いて法理學を專攻し、翌年論文を提出して高等法學部の全科試驗に及第し、コロンビヤ大學より法學博士の稱號を授けられた。

茲に於いて三十四年の七月一度歸朝せしも足を留むること二箇月にして、同年九月再び北米に航し、ジョンスホプキンス大學院に入つて學界に名聲嘖々たる教授ウキロービー博士に就き政治學を專攻し、翌年更に其蘊奥を究めんが爲め、獨逸に渡り、ハヒデルベルグ大學の法學部に入學し、世界に有名なる碩儒エリネック博士に就いて政治、公法の學を研究し居ること三學期にして三十六年の十月、更に墺太利の首府、ヴキンナ大學の法政學部に入つて國家學及び政治學を專攻し復瑞西ジエネバ大學に入學して公法學の講義を聽いて居つたが、身は軍籍に在りしを以て、日露の戰役起るに及び、三十七年十月に歸朝するに至つた。

氏は曩に日清戰爭の酣なるに當り、一年志願兵となり戰後騎兵少尉に任ぜられてある、そこで這度は遼東守備軍司令部附となりて清國に航し、間もなく騎兵中尉に任ぜられて遼東兵站部副官となり、或は總督府附となり、主として外國從軍武官の取扱ひ、及び公法に關する事務に鞅掌した、解隊後人は歸航を急ぎ一刻も早く故山に歸らんとするに拘らず、氏は尚も滿洲に止まりて實業上の調査を爲し、更に清國各地を視察巡遊して歸來直に鉅大の資本を滿洲の地に放下して事業の經營に着手した、即ち營口及び牛家屯に於いて廣漠たる土地を買收し、工場、倉庫等を建設し現に令弟壯吉氏を以て之れに當らしめ、資本金百萬圓を以て盛に大豆粕製造を營めるが如き、氏が國家的觀念の對外事業として表現したもので、又以て觀察の敏鋭と經綸の才能とを推知するを得べく、到底尋常人の企て及ぶ所ではない。

而して氏は戰後更に歐洲に渡航し、再び瑞西國ジエネバに至りて、政治、公法學の研究を積み、四十年六月に瑞西を發し歐洲の各地を歴巡して歸朝し、翌四十一年選ばれて衆議院議員となつた、以て氏が如何に學殖深く、識見の高きかを推察し得るであらう。

蓋し氏は一面には富豪である而も天下の大富豪である、而して世の富豪と云ふものは、孰も學問修養抔に志す者はなく多くは富んで益々貨殖の途に汲々し、殆ど他を顧みる者なきに反し、獨り彼は富よりも修養を重んじ、以て國家有用の材となり、却つて富を散じ、産を割いて社會公共の爲めに捐し農には乃父の出生地たる、有馬郡の各小學校へ七萬餘圓を寄附し、近くは五十萬金を抛つて三田町に私立中學校の設立中にあるが如き、其人物性行は世の富豪者流と選を異にし天下稀に見る處である。

斯くの如く彼が半世の過去を顧みるに、其大部分は學問修養の爲めに費し、世に立ち社會に處するに至つたのは實に近年のことである、而も此短き間に於いて隆々として其名聲を發揚するに至れるもの、其富と修養、學殖の深きに由るといひながら、又其天稟の雋才と人物の大なる所以であると謂はねばならぬ。

▲彼の人物性行

彼の博學多才なることは前に言つた如くで、其學は和、漢、洋に亘り、其志想抱負は實に遠大なるものであるが、併し彼は世に處して年月未だ長からず、其人物に就いては毀譽の材料に甚だ乏しいやうである、從つて世人は彼を目するに單に世の富豪として算稱して居つた、而も今や彼の人物が大なる小寺家の富以上に傑出してあることは稍々認識せられたやうである、而して余輩が忌憚なく彼の缺點を摘出すれば、年少氣鋭活氣滿々たる彼は往々人と圭角を生じ、且つ自信力に強き結果として時には人の言を容れぬやうなこともある、亦自ら高遠なる理想を以て俗世間を律せんとするより清濁併呑的の雅量に缺け、乾兒の作れぬ慨みがある、將に將たる器に於いて疑はしき點がある、併し俗世間の事は爾く直情徑行に許り行くものではない、是れ彼の爲めに反省を促さんとする所である。

若しそれ彼の長所に至りては世の富豪の如く富の擁護に汲汲たらず飽く迄之を活用することである、其財を散ずるに當りてや消極的の同情には乏しき處あるも積極的公共事業には萬金を抛つて毫も吝しむ處なく、亦彼は富の奴隷となつて安

逸遊惰を貪らず、頗る向上心に富み活動を以て自己の生命となし、毫も一身一家を顧みず、身を挺して國家社會の爲めに活動しつゝあるが如き、又世の學者の如くに其博學を衒ふこともせず、其富を以て毫も誇りとせない、故に其態度は學者の風でもなく、亦富豪の如でもなく、總てが平民的で人と隔壁を設かず、磊落洒脱の半面には頗る謹嚴にして且つ奮鬪性に富み、身を持すること厚く、而して品性あり、人格の高きこと他に多く例を見ざる所である。

一體今日の富豪は權門と親しみ、或は官僚と結んで、自ら得意と爲す而已ならず、之を以て私利を圖らんとする者が多い、然るに彼は官僚の門を潜らず、却つて堂々旗幟を飜して官僚政治の打破に努め、國民軍の勇將となつて陣頭に奮戰し一念國利公益を思ふて私利を圖らんとせざるが如き、以て彼が人と爲りの一般を窺ひ得るであらう、而して彼は常に國力の培養を以て今日の急務となし、其方策は利を海外に擧げ、富を世界に求むると云ふ持論であると共に、躬ら之を實行して夙に滿洲の野に大規模の計畫を以て事業を起しつゝあるが如き、其理想、識見、手腕の凡ならざるを知るべく、亦讀書は彼が唯一の趣味で、其書齋は、英獨佛等の洋書や和漢の書籍を以て充され、幾十疊の大廣間は殆ど寸餘の空虛もないやうに展列されてあるが其書籍の價格は大凡數萬圓に達し我國の學者中彼の如き藏書家は甚だ少い、嗚呼、內に在つては讀書の人、出づれば則ち奮鬪の士、洵に理想的の人物である、而して年齒少壯、洋々たる泰海の如き前途は、將に是れ彼が活動の大天地である。

▲氏が政治上の識見（明治四十四年二月某日）

氏徐に語つて曰く

▲社會には凡て二箇の勢力がある

社會には凡て二箇の勢力があるが、それは卽ち積極的と消極的との二種で、云ひ換ゆれば又保守的と進歩的との二種である。そして社會進化の理法と云ふものは此二箇の勢力が互角の勢力として存在し、相對峙し、相競爭するによつて自然に其勢力が牽制調和せられ、茲に初めて健全なる發達を遂ぐると云ふことに歸するのである。思ふに社會には此二勢力が必ず存在して居られねばならぬので、一方の勢力が他の勢力より著しく勝つて相遠して居る場合には其社會は發達するよりも寧ろ堕落に陷り易くなるのである。我國現時の狀態を見るに、果して此二箇の相反せる勢力が、政治界にあれ、經濟界にあれ、思想界にあれ其他凡ゆる方面にも存在して居つて、互に相競爭し進歩して居るかと云ふに事の實際は嗚呼社會進化の理法に背いて居るのは勿論一時の變態ではあらうけれども、之れは決して喜ぶべき現象ではない。

▲先づ第一に政治界に就いて見るに

先づ第一に政治界に就いて見るに、茲には保守進歩の二大勢力が相競爭して行かねばならぬのに、彼の官僚黨と云ふ一大私黨が存在して居つて、之れに對抗するものは至極微々たる政黨である。勿論政黨として政友會及び國民黨なるものがあるけれども、政友會は政黨と私黨との中間に居る間色黨で、誠に曖昧のものである。されば我國の政治は立憲政治の假面を被つた一種の私黨政治が行はれて居るものと云はなければならぬ。抑々立憲政治の妙用と云ふものは獨專政治ではなくて競爭政治にあるのである。彼の英國の如きは、保守、自由の二大政黨が國民環視の中に相對峙して。人民多數の同情を得、他面には元首及び議會の信任を得て居る政黨が、直に內閣を組織して國政を處理することになつて居る、故に此主義政綱に於いて相反せる二大政黨は始終交番言論によりて經濟的に相競爭するので、自然に自由保守兩黨の政策は緩和せられて、其政治は要之今日の官僚黨と云ふものは今日我國政治上に於ける唯一無二の獨占的大勢力であるから、之れには他に對抗するものも競爭するものもない。從つて政治も人間も重に腐敗の極に達して、私利橫暴を擅にし、無責任を極めて居るが全體政治と云ふものは利慾の爭ひではない。正義名譽の爭ひである。故に立憲政治の實を擧げんとするのには一面には主義政綱を有する健全なる政黨を組織し、黨規を振肅して其行動を公明正大にし、又其責任を明にし、他面には無責任なる官僚黨と戰ひ、或は之れを打破するか、或は之れを凡ゆる方面から刺激して主義政綱ある政黨に轉化せしめ、社會の勢力を縱斷して二大勢力とし、各一方に大政黨を樹立し、此二大政黨を互に相對抗せしめ、相競爭せしめ、茲に政黨を基礎とする責任內閣を樹立して、國民の希望に添ひ、萬機公論に決すべしと云ふ御詔勅の御主旨に添ひ奉ることに勉めるのであつて、又斯くしなければ實際の理想的政治家が在るとは云はれない。

▲又經濟界の狀況を見るに

又經濟界の狀況を見るのに矢張り其勢力が一方に偏して居ると云はなければならん、現今は新奇の資本家が全勢を窃めて居る時代であるけれども、之れ等の中に勤儉力行を以て今日の大資本家となつたものは甚だ少數で、多くは官僚と結託して其保護を受けた爲めで、元來官僚の援護により大資本家となるが如きは之れ我が官僚政治の副產物とも云ふべきもので、資本家たるものは特殊の保護を離れて互に獨立し、平等の位置に立つて相競爭し行くやうに自ら勉めなければならぬ。又資本家と勞働者、地主と小作人との關係は今や產業革命の初期に入つて居るから自然背の主從のやうな濃い關係は少しもない。近年に至つて勞働は自由なり、契約なりと云ふ一種の思想が到る處に蔓延してそれまでのやうに經濟思想が單純で、情誼の厚かつた時代とは異つて、資本主の勞働者を見、地主の小作人を見ること恰も之れを一種の機械の如く、機械の運轉するより之れに勞銀を拂ふと云ふやうな有樣になつて居る。之れ等は又產業革命の爲めに起る處の自然の勢であるけれども、元來社會は資本主の有にもあらず、又地主の有にもあらず、要するに社會は人類總體の有で一部のもの、獨占すべきものではない。所謂社會の本性は共同生存の團體たるに在つて、この團體の健全なる發達をなさんとするには其分子たる資本主、勞働者地主と小作人とをし

は健全に平和に進歩するのである。然るに我國に於いては官僚黨と稱する主義政見を有せざる御都合主義の一大私黨があつて、之れが政治界の勢力を壟斷して居るのであるから、政黨は其勢力が微々として振はず、蓋息の狀態に居るのである。されば我國の政治は名は立憲政體で、或意味の輿論政治が行はれなければならないのであるが、其實際を見ると責任內閣と云ふ所謂政黨を基礎とした內閣は實現して居ない。從つて政治に志のある者も最近二十年の我立憲政治の歷史に鑑み、政黨員となつて十年苦節を守つて政黨の內閣を設立するの困難を敢てするよりも、寧ろ官僚黨の爪牙となり、屬僚となり、以て漸次官等の進級する方を其成功に於いても迅速で、且過りがないと云ふ有樣で此方面に向ふものが多く、政治界の亡狀亂雜の有樣は蓋し今日より甚しきはないと云つてもよからう。最も之れが原因に就いては種々あるが普通の見る處では地方到る處官僚政治の弊害により疲弊に疲弊を重ね、其上政治思想の幼稚なことは殆ど前世紀の治下にあつた臣民の如き有樣で地方自治の實が擧つて居ないことは實に痛嘆の至りで、之れ卽ち責任內閣制度の擧らざるの致す處であると思はれる。また官僚政治が今なほ全盛を極めつゝある原因は日淸、北淸、日露の戰役等より將に亡びんとした武斷派の勢力に活路を與へ、終に彼等を今日の如く跋扈せしむるに至つたものであらう。併しながら戰爭や事變は國家非常のことで軍人は此時に當つて平和を回復するの道具に外ならないのである。故に純粹の政治家が軍人を指揮命令するのは當然のことであるけれども、この非常の場合に當つて奇功を奏したものを秩序の回復せる平時に至るも尙ほ凡ゆる權力を依託するのは國民に取つて非常な苦痛の壓迫と云はなければならん。由來官僚は屬僚に相違なきも今日の屬僚政治は軍人軍屬の人々の政治で決して立憲政治と相對立して存在し得べき政治ではない。畢竟するに官僚黨又は武斷派の勢力は過去の餘力に外ならないのであるから、國民一般が立憲政治の眞意義を解し、其天職を盡すに於いては健全なる主義政綱を有する政黨は自然に政治界に優勝の地位を占むるに至り、主義政綱なき官僚黨や武斷派の勢力は其下に屈するに至るであらう。斯くの如くして其勢力の相伯仲せる二大政黨が其主義政綱により政治界に公明正大の途を採り旗幟鮮かに堂々として陣頭に進むに至つたならば立憲政治の眞意義を發揮し、國民的政治の妙用を實現するの日に到達することを得るであらうと思ふ。

て均一の發展をなさしめ、相互の利害を相調和し、相條制して其幸福と利益とを共通にし、初めて健全なる進歩を經濟界に實現し得るのだと思ふ。

然るに現今の我經濟界は一部資本家の壟斷する處となり、多數のものをして經濟の關係日に惡しく、人心が稍々もすれば其歸向を誤らんとするの兆あるは誠に不祥の現象にして、我經濟界の利害をなるべく調和して一般的にし、健全なる發達を遂げしむるのは現今斯界の急務であると思はれる。

▲又之を思想界に見るも

又之れを思想界に見るも同じく二箇の相反したる勢力の相對抗し、相競爭するに依つて始めて眞の健全なる進歩を見ることが出來るのである。現時の自然主義の如き、或は道德主義の如きは皆二大思想の衝突を示して居るものである元來社會は道德的でなくてはならず、又其進路は常に平和的で、秩序的でなくてはならぬ。彼の不健全な思想でも之れを取締るに相當の文明的武器を以てせなければ却つて害あつて益のないものとなつてしまふ。思想界の原則も矢張り生存競爭、優勝劣敗、適者生存の理法に依つて進まざるべからざるもので、彼の一部の人々の危險なりと目する社會主義の如きも、又無政府主義の如きも、勿論其議論は時として亂暴で、哲理上の根據も甚だ薄弱であり、現時の社會制度とは相容れざるものであることは荀くも常識のあるものは首肯する處である。然るに斯くの如き言論が思想界に現はるゝに當りては、之れは單純の思想上の疑問として人間社會に交通して居るにも係らず、其理論全般を語るものも危險人物と目して、之れを拘束する如きに至りては却つて思想界に危險思想を醸すものと云はなければならぬ。普通の見る處を以てすれば斯くの如き現時の社會制度を根底より破壞せんとする暴論は政治學者の立場よりしては國家存在の正當なる理論よりして十二分に論駁の餘地があると共に、又之れを正當の論據を缺ける理論として我健全なる思想界より排斥することは敢て困難のことではないと思ふ。思想界のことは理論に理論を以てするので始めて正當な健全な發達を遂げることを得べく、單に舊式の探偵政治を以て壓迫するが如きは唯局部的の姑息療治で、却つて殘つた處のバチルスが益々蔓延するの患がある。

元來思想界のことは政治經濟と重大の關係を有つて居るのであるから、新思想の起るに當つて其政治經濟上の背面の理由を明にせず、唯文書に表はれた言論を以て直に危險なりと云ふのは探偵政治家の解釋で、荀くも思慮ある政治家のなすべき處ではない。

我日本は島國であり、世界的の潮流も幾多の海峽難關を經由して種々の思想が流入して來るから、之れを全然防壓する方法はない。寧ろ之れは自由に放任して置く方がよいのである。そして其不健全な思想が外形的行爲に表はれて其行動が國家の安寧秩序を害するやうになつたならば、之れは國家の法律によつて所罰するがよい。併し單に思想として往來しつゝある間は之れを直に排斥することなく、凡ゆる方面から研究して、其結果其思想に正當な合理的の根據がなく、又現時の社會制度と一致するものでないとしたならば先づ初めは言論によつて排斥し、辨駁すべきである。然るに言論の代りに直にサーベルを以て威壓しやうとするのはサーベルを以て凡ゆる學者の本分を侵害する滑稽極まる文盲の小兒の處置ではあるまいか。

彼の英國の如きは立憲君主政體の國であるが其議會には民主主義の議員も、社會主義の議員も居るのであるけれども誰も之れ等の議員の思想上に立ち入つてまで干涉するものはない。又他の方面には數十百萬の慈善團體があつて凡ゆる社會上の改良を行ふ處の政策が行はれて居るから社會主義とか、無政府主義とかの理論も之れは思想界の現象として或程度の人間社會には起り得べきことと認識して居る位である、けれども實際上に用ひて價値のある正當の理論として歡迎するものはなく結局何等の危險も起つて來ない。然るに我國では危險思想を豫防するに必要な之が理論的研究も學者になさしめず、又思想を豫防する凡ゆる社會政策も貴族や資本家や特志家にもなさしめず、徒らに其皮相の見を以て微弱なる理論に對して恐怖心を起し、探偵政治を逞して之れを壓迫せんとするが如きは策を得たるものと云ふことは出來ぬ。

▲法律を重く見て道德を輕く見る

又最後に一言して置きたいことは現今の社會には一般に法律を重く見て道德を輕く見ると云ふ傾きが殖ゑて來るし、又一部の官僚は口に實踐躬行を稱へながら自己を除外視して無責任の位置に置き、國民多數をのみ道德上責任の位置に据ゑて之れにのみ實踐躬行を強いんとするのであるが、斯くの如きは我國家の上から社會に益々健全なる發達を遂げしむる所以ではなく頗る寒心に堪ない

矛盾と云はねばならぬ。元來法律は社會の最下流の人間道德を標準として、之れを幾許か向上せしめん爲めの立場から制定せられて居るものであるから、之れのみで社會の平和秩序が維持せられ健全なる發達を遂げしめ得ると期待することは出來ぬ。何れにしても高遠な理想を根據として居る標準の高い道德を基礎として社會の秩序を保ち、發達進歩を期待するやうにして、墮落せしめぬ樣に注意して行かなければならぬ。ヘーゲルが「國家の目的は道德の完成にあり」と絶叫したのは大に眞理があることゝ思はれる。

要之社會は二箇の勢力が凡ゆる方面に必要で、この二勢力の相對峙し、相競爭するやうになれば、其腐敗分子は淘汰せられ、不健全な思想は排斥せられるので、所謂生存競爭、優勝劣敗、適者生存の理法は此社會の進歩の上に最も必要のことである。之れでなければ社會は健全なる發達を遂げることは出來ないと思ふ。世の經世家は其邊に多大の注意を拂ふて貰ひたいと希望するのである。

▲先考泰次郎翁の略歴

小寺家の富は、先考泰次郎翁に由つて今日の大を成すに至れり、翁は三田藩士天保七年を以て生る、安政二年三田藩の鄕方役となり勤役六年、更に代官役申付られ勤續十年、明治元年尼ヶ崎三田藩士豐島郡賊徒隨從旗下取締役として出張を命ぜられ、明治三年藩政改革に際し三田藩小屬に任ぜられ、世は廢藩となるや、明治五年神戸に出でて、舊藩主の設立に係る、志摩三商會の社員となり後數年、同會を辭して獨立貸金其他の商業を營む、稍々財本の長ずるに及んでは、神戸市の發展を豫測し地所を買占めたりしが、果して先見違はず市の發達と共に神戸市中樞の市街宅地となり、徹頭徹尾地所主義に由つて遂に今日の一大成功を爲すに至りし、頗る卓見の人なりき。

故小寺泰次郎翁

抑々維新當時藩主隆義公英邁にして非常の秋に當りては非凡の材にあらざれば以て事を斷ずるに足らずとなし、破格を以て白洲泰藏氏を初め、竝に翁を拔擢して其難局に當らしむ

當時翁が舊藩の爲めに畫策盡瘁したる事蹟は、玆に詳述する能はざれども、就中最も翁の功勞の著大なるものは同藩の財政改革なりとす、維新の際藩債は山の如く、封土は奉還して一藩爲めに路頭に徨ふの有樣となり、到底尋常の手段を以て支ふべきにあらず、されば翁が財政改革の任に當るや、大英斷を以て、先づ藩有の山林を賣却し、藩士各自の武器一切を他藩へ賣却せしむる等其他極端なる方法を以て、藩士の方向を定め、藩債を償還せり、(舊藩中當時藩債を悉く償還したるは全國の異數たり)、而して幾何の資本を剰餘し、神戸港が將來發達の地たるを看破し、藩主を擁して神戸に來り、志摩三商會を設けて、貸金或は藥店を創むる等諸種の商業を營み傍ら地所の買占めに着手せり、現今九鬼家所有の地所多くは當時翁の手によつて買入れたるものに係り、舊祿僅に三萬五千石其實二萬二千石の一小藩主たる九鬼家が、今や舊藩主中の富者を以て目せらるゝに至りしもの全く翁等が畫策經營の結果にして、同家の爲めには、其功勞や沒すべからざるものあり。

▲翁の公共的活動

翁は少壯身を挺して藩政改革に鞅掌し、主家隆昌の基を築き、退いては自ら致富の途を講じ、以て今日の大を致したると共に一面公共心に富み、殊に神戸市の發達に鋭意畫策する處あり、明治十三年始めて縣會議員に選ばれ、縣會常置委員並に副議長及び區部會議長に推擧せらる、其他區會議員、區會議長、地方衛生會、聯合町會、神戸市會議員、同市會議長神戸商業學校商議員、水道委員、神戸區有財産保管人等に擧げられ、明治三十五年神戸區會議員の職を退くに至るまで前後二十餘年間常に公職に在り、今其事蹟の重なるもの二三を擧ぐれば。

(一)道路　に就いては明治五年十二月本市に移住以來常に注意を怠らず、就中其幅員擴張に關しては熱心之を唱導し、或は當路有司に意見を開申し、或は其關係地主を勸誘し協力奔走少しとせず、彼の本市第一の街路たる榮町通の開修の如き、明治初年の大工事たる加納町の開通の如き、山手新道開鑿の如き。皆與つて力あり、又曾て市會議長たりし當時偶々傳馬川下土橋より築島橋に至る道路開修の議あり、最初の設計に依れば幅員五間半に過ぎざりしが氏は之を七間半に改むべしとの說を唱へ百方斡旋する所ありたるも。議容易に諾らず、而して反對論者中流言を放つものあり、曰く彼が道路幅員擴張を唱ふるは其線路に沿へる自己の所有地に利せんとするに在りと、氏之を聞くや巨額の損失を顧みず、其島上町の所有地を原價を以て之を元所有主に賣戻し、以て反對者に口實なからしめたり、此の如くにして漸く折衷說の起るありて六間半に決定したり。

又曾合新道開鑿の計畫あるや之が委員となり、道數の爲めに自己の所有地を割くこと千六百餘坪に及べり、蓋し今日該事業の繼續せらるゝや氏の力に依るもの少からずと云ふ、尙ほ現今交通の要衝に當れる三宮町一丁目より四丁目に至る間、多くは氏の所有地にして私費を以て之を開鑿せるものたり、其他の事事に至りては逐一之を枚擧するに遑あらず。

(二)救恤　に意を注ぐこと亦甚だ深く學校の增設、校舍の新築等往々其畫策に出づるものあり、之が爲めに私財を寄附したるもの前後四千圓に達せり。

(三)衛生　明治十五年以後數年間地方衛生委員として盡力する所ありしのみならず、大日本衛生會地方幹事として同會の爲め斡旋すること少からず、其神戸支會創立に關しては大に與つて力ありと云ふ。

(四)救恤金　各地天災の場合に於いては長くも　皇室御下賜金の二百分の一を標準として之を寄附せり、又大に日本赤十字社の事業を翼贊せり。

(五)區有財産の管理　今や巨萬の財産を有する神戸區も、最初は金七千圓を以て買收したる諏訪山其他の山林と、海岸通に於ける若干の地所とを有するに過ぎざりしが、一度氏の管理に歸するや、或は林野を開拓し、或は溜池を埋立て、之を有利に貸付け其收得を以て更に地所の買入をなし、一方に於ては此の如く所有地を增加し、他の一面に於いては本市の發達に伴ひ地價益々騰貴して遂に今日の富を致せり、彼の神戸尋常小學校及山手尋常小學校の敷地の如きも、氏が苦心經營の結果區有財産より生じたる收益を以て之を買入たるものにして、而も之を買收するや其所有主が舊藩主たる九鬼子爵たりしを以て特に請て時價不相當の廉價を以て譲り受くることを得たり、蓋し現今本市六區中、教育の設備比較的最も完全にして、而も區民の負擔他に比して最も輕きもの氏が區有財産保管の方法宜しきを得たるに職由せずんばあらず。」

▲獻納及寄附金

翁が在世中各種の公共事業に對し金員物品を獻納寄附せしもの枚擧に遑あらず、就中重なるものを數ふれば、海防費金獻納一萬圓、軍資金獻納十萬圓を初め、三田小學校、神戸小學校、神戸幼稚園、雲中小學校、有馬高等小學校、湊川尋常小學校、神戸尋常小學校、兵庫、雲中尋常高等小學校、神戸中學、神戸商業學校、處應義塾、英和女學校、教育大會、衛生會、衛生文庫、避病院、大阪水害、岐阜、奈良、德島、岡山、兵庫、滋賀縣の各水害、嚴手縣海嘯、宮城、青森の海嘯等の各罹災者救護費、山手新道、有馬郡里道修築費、神戸區

廳舍、神苑會、皇典講究所、神戸基督教、在鄉軍人會、神戸商法會議所等なり。

又其遺言に由る寄附金を擧ぐれば　金一千圓神戸慈善團體二千圓神戸市奉公會、神戸中學校、同高等女學校、同學習院同商業學校へ各五千圓づゝ、一萬五千圓神戸市各小學校、一萬圓三田町尋常小學校、一萬圓處應義塾、一萬二千六百圓神戸高等商業學校、一萬圓忠勇顯彰會、一萬六千五百圓京都帝國大學、一萬六千五百圓東京帝國大學、五萬圓舊三田藩領各小學校及有馬農林學校等にして、如何に其公共心に敦きものありしかを想像するに足るべく、宜なり明治二十年十二月從六位に叙し黄綬章を下賜せられ、同二十九年六月、日本赤十字有功社員に列し有功章を下附せられ、同三十六年七月勲五等に叙し瑞寶章を授けらる。

▲翁の性行

翁人と爲り謹嚴硬直、居常質素を貴び、世の多くの資産家の如く酒に酖り、妓に戯むる〻等のこと絶えてなく、家庭頗る圓滿、就中常人と異る處のものは、日常の事細大となく躬ら之を處理し、毫も家人を煩はさゞるにありき、常に育英事業に最も意を用ひ、隨つて子女の教育は高尙嚴格に薫陶せり當主謙吉氏を初め何れも有爲の材幹を出したる所以のもの、要するに翁が訓育其宜しきを得たるの結果たらずんばあらず以て人と爲りの一斑を推すべきなり焉。

▲始めて見たる範多君

範多君と云へば直にハンター氏を聯想するのみならず、多年英國に遊學して英國仕揚げの紳士であるから、世間の人は皆氏を以て總て西洋主義の人であらうと想像して居る、著者の想像した範多君も亦之に漏れず、定めて西洋式のハイカラ

的紳士であらう、隨つて深江に於ける氏の別莊の如きは何れ西洋風の構造で、加ふるに其起居動作竝に生活の狀態等に至る迄都て西洋式と思つて居つた、所が一日氏を訪問して見ると前の想像とは全然相違して、其別邸の如きも氏の地位に比較すれば誠に質素なる和洋折衷の構造、疊に座薄團と云ふ和風で少しも西洋地味た所のないのは如何にも奥床しく感じたそれから話は段々進んで大阪鐵工所のことに及ぶと。

いや怎うも此頃のやうに稅金を徵られては堪らない、營業稅、所得稅、地方稅と二重にも三重にも取られる、現に鐵工所だけでも一日に稅金が百圓以上に要るが、一體政府の稅金徵收方が下手である、同じ金額を取るに二度も三度も手數をかける隨分無用の失費が要るであらうと思はれる、それから無暗に率を上げるから各種の事業家が不止得陰蔽して脫稅を圖ると云ふやうになるであらう、何分重稅を取られる其上に稅金の爲めに種々の不便が伴ふて、例へば船を修繕しても直に來て檢査をして呉れゝばよいが、お役人は却々來ない爲めに莫大なる損害を來すことは毎々ある、此は西洋のやうに何か私設機關を設けてそれに一任したら怎んな不便はあるまいと思ふ、最も私設では弊害があると云ふが併し弊害の起る日には何れにしても同じである。

他の事業會社に關係しないかと云ふのですか、それは繁忙でもあり、且つ近來の會社は一向に安心が出來ぬ、隨分世間で信用されて居つた會社が弊害破綻が續發して居る、之は各事業會社の内容が解らぬから起るので、隨つて余が日本の事業會社に向つて注意したいのは監査役のことである、一體我國の監査役と云ふのは會社の重役となつて居るがために會社を調べた處が、失禮だが經驗もなし却々詳細に解るものでない、西洋には別に監査人と云ふ營業者があつて、其監査人を傭ふて監査せしむるやうになつて居る、故に專門家丈けに缺陷は直に指摘する、余の商店でも倫敦支店の如きは英國の監査人を傭ふて監査せしめて居るが、其支店長は余の未だ面識もない男であるけれども、此監査人から時々報告して來るから誠に安心なものである、是非日本の諸會社も怎う云ふ機關を作つて時々監査せしめて居れば種々の失態等は之を防遏するを得るであらう、全體會社抔の仕事は從業者が惡意でやるのは無論の事、時には善意でも誤りのあることがある、故に此等の事は皆此監査人に監査せしめるを以て最も安全のものと謂はねばならぬ云々。

▲氏の經歷

氏父は英國臣民エドワード、ハズレット、ハンダー氏にして、（ハンダー氏の閲歷は本編既に別敘せり）母は大阪の紳商何某氏の女なり、氏は明治四年神戸市北野町の邸に生れ、同十九年神戸商業學校を卒業し、夫より獨逸に留學して或る嚴格なる私塾に入りて普通學を修め、次で英國グラスゴー大學に入りて土木工料を專攻し、明治二十五年業を卒へ歸朝後一年志願兵となり、二十七八年役には豫備員として第四師團に入り、平和克復後は合名會社笵多商會主として、又大阪鐵工所主として我國の實業界に重きを爲し、而して其笵多商會は本店を神戸に、支店を大阪、東京、及び英京倫敦に置き、紐

育に其代理店を設けて重に輸入業を營みつゝあり。

▲氏の人物

兵庫縣下に最も誇るべきものは比較的大資產家の多いことである、而して今多くは相續時代となつて居るが、其相續人何れも新進有爲の人物に富んで居ることである、例へば伊藤長次郎、小寺謙吉、川崎芳太郎氏等を初め殊に氏の如き人物のあるは縣下の實業界に一層の光輝を添ゆるものとして吾人の快感に堪へざる處である。

誰が何と言つても縣下に此位人格の高い人は鮮い、加ふるに世界的の智識を有し、世界的の事業を營み、殊に鉅大なる財富を有して居るにも拘らず、世の富豪家の如く地位や財產を笠に着て威張ると云ふこともなく、至極平民主義の人物にて其起居動作の割合に質素なる、加ふるに自己の使用人職工等に對しても誠遜且つ同情懇切を以てするから、川崎造船所抔のやうに不平を云ふものは一人もない、一體我國富豪の癖として口には平民主義抔を唱へても、其内心には絶えず乃公金持であると云ふ頭があつて兎角横柄の處がある、されど氏に於ては寔も斯る嫌ひなく加ふるに淡快洒脫、此位附合ひよい人は恐らくない、洵に得易からざる好紳士、想ふに年齒少壯の氏は今後の發展果して那邊に迄及ぼすべきか測り知るべからざるものがある。

▲大阪鐵工所

父ハンター氏夙に日本の地勢に鑒み、恰も英國と其軌を一にし四面の海國たるを以て、將來日本の發達を圖るには、内地に於いて造船事業を起すに若かず、殊に造船業の發達は應て一般の運輸交通に至大の便益を與ふべきを信じ、明治十四年初めて資本金三百萬圓を以て大阪に鐵工所を創設し、船舶諸機械等の建造製作に從ひ、不屈不撓拮据經營すること多年以て同所の發展と共に本邦の文運に裨益したる事最も多く、又實に我國に於ける造船業の先驅である、而して今は益々其業務を擴張して大阪安治川を本工場と爲し、同櫻島造船場、天保山分工場及び西區木屋町に木船工場其他川邊郡尼崎町には尼ヶ崎鑄管工場の建設中にて、又臺灣には基隆分工場あり、之等工場の總面積は七萬坪に達し、其職工數約六千餘人、現在の營業科目を擧ぐれば

艦艇及軍器、汽船、淺渠機、淺渠船、捕鯨汽船、淺吃水汽船、打瀨網汽船の建造及修理、橋梁、家屋用鐵骨の製造竝に水道及瓦斯用鐵管の鑄造

を以て主なるものと爲し、而も三菱、川崎造船所の如く政府の恩惠を受けず、全然獨力自立にして實に本邦に於ける鐵工業界の偉觀である。

日本燐寸株式會社長 神戸市參事會員 直木政之介君

▲眞正の實業家

世に少しく產を成すものあれば其手段を擇ばず目的を問はず一概に實業家又は成功者と謂ふ、然れども其意義や廣汎にして容易に之を首肯することは出來ぬ、何となれば第一に種類と程度の問題を生じ、仔細に之を觀察すれば、世間を眩惑して居る富者にして尚眞の成功者を以て目すべからざる者もあるからである、試みに一例を擧ぐれば現今我國の富豪又は成功者と稱する者の中にも、維新の變革に乘じて地所を買占め時世の進歩によつて地價の暴騰となり、恐らく自分と雖も豫期せざりし好結果を得たる大地主や、又は投機場裡に一攫萬金の巨利を贏ち得たる相場師もある、渠等は言はゞ富籤を引き當てたる幸運兒であるから、強ち裸一貫で資產を作つたからとて社會は別に尊敬するには足らぬ、縱し又豫期してやつたことにもせよ渠等の道程は後進の模範となすことは出來ぬ、其他龍鱗に攀ぢ鳳翼に附き政府庇護の下に事業を營み官僚と結託して不當の利得を貪つたる者や、或は自利一偏眼中社會なく公共もなく弱者を苛めた高利貸とか、甚しきに至りては國難を機貨として私利を謀斷した火事場泥坊の御用商人等が多く、擧げ來れば卑劣醜汚の痕跡を止めて居らぬ者は殆ど稀である、吾人は前者の卓見に敬服すると共に亦後者が手段の巧妙なるには實に感心するが、併し彼等は自ら實業場裡に奮鬪力爭して贏ち得たる富ではなく、隨つて國家の生產には毫も關與しては居らぬ、吾人の所謂眞正の實業家でも亦成功者でもない、故に此等の人に成功者の榮冠を戴かすには及ばない、然るに滔々たる世間此種の人物が跳梁跋扈してゐる有樣は實に一奇觀で、亦此等の人を間々不釣合に稱讃するのは、巧言令色か將た羨望の情の餘りか、然らずんば一の反語と思つて可い。

世の成功者又は實業家と稱するもの多くは斯くの如きの時に當り偶然にもあらず僥倖でもなく、將た貪狼的でもなく、而も雲散り風收り天地晴朗にして陽光中空に赫々たる天下泰平の時代に處し、全く自己の才能と智識によつて獨立奮闘の結果鉅萬の富を作り、一面國家的事業の經營者として昂然實業界に翔翔しつゝある直木政之介氏の如きは、則ち眞正の實業家で亦眞正の成功者として優に後進の模範たるに耻ぢぬ人であらう。

▲氏が燐寸製造の動機と發展

抑々氏は嘉永四年正月兵庫出在家町に生れ、同地の名門神田家の一族にして氏に遡んで八代、家は世々米穀賣買を以て業とし、氏も復此遺業を營みつゝありしが『私に謂らく國の發展興隆を圖らんとせば宜しく對外貿易を振作しなければならぬ、而して我が神戸港には外國商館が甍を駢べて偏に之を期待して居るが而も我國狀は彼等によつて交換すべき適當なる貨物に乏しく、偶々適當の物なきにあらずとするも、之れに從事せる生產業者の多くは事理に迂く、唯眼前の利益に面巳拘泥して將來を慮るものは寔に寥々たる有樣である、悉くの如くにして到底國力の增進も神戸港の發達も亦心細い次第と謂はねばならぬ、若かず之れに從事するのは神戸商人の責任である、我は今より貿易品の製造に從ひ、神戸の港を利用して國家地方の利益を圖ると共に、自ら天使となつて發奮しなければならぬ』と、折柄或る二三の人が神戸に於いて燐寸製造を營めるを見て、此ぞ恰好の事業にして將來の有望なることを察知し、堅く決心する處あり、爰に當時の貧民窟たりし楠町六丁目に工場を設けたのが卽ち氏が今日あるの始めであつて實に明治二十年の事なりき、之れ一面には貧民に職業を與ふるの社會的見地より出でたるもの、勉迄も國家的の思想であつた、斯る觀念を以て燐寸製造に從事せる氏は、其後往往經濟界の恐慌等種々の難關に遭遇して、時に或は危機に瀕した事もあつたが其間不屈不撓細心考慮眞摯熱心なる經營の結果は業務駸々として日に進み月に好況を呈し、海外に於ける聲價は益々昂り從つて販路の擴大するに及び、個人事業の姑息なる經營は、到底顧客の需用に應ずること能はざる而已ならず、亦不利益なるを感じて、明治四十年に三井物產會社と提携し、本多義知、森安太郎氏等と合同して資本金一百萬圓の日本燐寸製造會社を組織した、乃で從來の事業を會社に引繼ぎ自ら之が社長となり、常務取締役には本多一太郎氏を擧げ、五島醇八氏を支配人に、令息三郎氏を工務部長となし其他重役監視の下に旅籠堂々軍容整然更に其規模を擴張して生產力を增加し、今や縣下各地に十三箇所、大阪府下に六箇所の製造工場と、尙二箇所の印刷工場を設け、竝に縣下に二箇所北海道に四箇所の軸木工場を有し、日々從業者六千人以上を算し、各工場共瓦斯發動機電氣動力を用ひ、最新式の機械を据付け、亦最も可燃性に富める北海道の白楊樹を原料となし、偏に製品の優良と價の低廉に意を注ぎつゝあるの結果は、四十二年中販賣高十五萬五千函、價格二百六十六萬圓に達し、全國輸出高の四分一以上を占むるに至つた。

▲同社の特色

以上の如く嶄新なる機械を用ひて原料を精選し價格の低廉を專らとせる上に、尙同社の特色として他に誇るべきものは配劑法の改良である、一體本邦の燐寸は調藥法の不完全なるより、輸出の際赤道直下を通過するに當り往々發火の危險があると言つて排斥を受けて居つたものであるが、されば熱心なる氏は何とか之を改良したいと思つて多年苦心研究の結果獨逸のアーロッセル氏が嘗て瑞典の燐寸製造業者に授けた配劑法を參酌し、之に本邦特種の或る藥品を混和して試みられた處が、成績最も良好で如何に熱帶を通過しても少しも發火抔の憂ひもなく、彼の獨逸、瑞典、那威等の製品に比して毫も遜色を見ないと云ふことで、要するに同社の製品が海外に需用を喚起したのも一は此配劑法の特色によるべく、氏が此發明は獨り同社の利益なる而已ならず實に本邦燐寸界の貢獻として斯界の賞揚する處である。

想ふに同社は我國に於ける燐寸界の一大王者として、斯界に畏敬せらるゝと共に發展活躍の一大光明は今や方に地球上を掩映し、其赫々たる陽光は天に冲して果して那邊に及ぼすべきか豫め忖度することは出來ぬ。

▲氏の光榮

氏が多年苦辛慘憺斯界の爲めに奮鬪し來りたる功績は、遂に上聞に達し、明治三十六年神戸鳥頭に於いて大觀艦式擧行の際、畏多くも實業奬勵の御思召を以て特に北條侍從を親しく氏の工場に差遣せられ、優渥なる勅を傳へらるゝと共に二重安全旭櫻印燐寸御買上げの命を受け、同時に益々奮勵して前途の大成を期すべき旨を申達せられた、此實に空前の榮譽にして獨り氏の光榮耳ではなく亦斯業界の爲め否工業界の爲めに大に面目を施したものと謂ふべきである、尙此他第五回內國勸業博覽會に於いて名譽銀牌を受け、越ねて三十八年には聖路易萬國博覽會竝に四十三年の日英大博覽會には各名譽大賞牌を授與せられ、其他內外各共進會博覽會等に於いて賞擧せられたことは爰に枚擧に遑はない。

▲氏が公人的の活動

氏は以上の如く、一大事業を經營して吾國の工業界否國益の伸張に貢獻しられたる功績の偉大なるものがあると共に、日夕繁激の身を以て一面公共に盡瘁せられた事も又多く今其梗略を摘記すれば。

明治二年に兵庫隊砲術調鍊に拔群とあつて、苗字帶刀を差許され、英國皇太子殿下御來港の際侍迎神妙の旨によつて特に賞與を受け、又報國義會設立に盡力して久邇宮殿下より賞典を賜り、明治十五年に神戸市湊河東町會議員に擧げられ、同十六年勸業世話係を命せられ、同十七年には神戸市聯合會當選委員に擧げられ、同十八年湊東部共有地總代十九年には地押調査委員總代となり、區會議員に當選し、同年九月上橘通四丁目外三十一箇町戸長に任せられ、二十一年縣會議員に當選して常置委員に擧げられ、同年教育、衛生、勸業の發達に資する爲め率先して三交協會を創立し、推されて會頭となり、二十二年市會議員に、二十四年商業會議所會員及理事に當選し、同年大阪兵庫燐寸製造同業組合常置委員に擧げられ二十四年水道布設調査委員を囑託せられ、二十六年區會議長に、二十六年市參事會員に選ばれ、神戸地方裁判所破產管財人、縣立神戸商業學校商議員を、二十八年第四回勸業博覽會評議員を各囑託せられ、神戸市勸業常設委員となり、三十三年大阪神戸燐寸同業組合長となり、三十四年神戸製產品評會審查委員長、三十六年第五回博覽會審查委員を囑託せられ、商業會議所副會頭に擧げられ、四十年同業組合長に再選せらる、現に神戸市參事會員、早稻田大學賛助員、六十五銀行取締役として、各種の公共公人として氏を煩はさゝるものは殆ごない。

▲氏の義捐

氏は又身を公共に勞すると共に、公共慈善の爲めには貲を捐てたること非常に多く今其一班を擧ぐれば

相生橋小學校建築費、湊川尋常小學校、同尋常高等小學校へ紫縮緬の慢幕を寄附し、三十七年日本赤十字社へ金一千圓を寄附して有功章を受領し、四十一年神戸湊東區小學校へ金一千百二十五圓を寄附して賞勳局より銀杯を賜り、四十三年早稻田大學へ金一千圓を寄附し、本年は恰も氏が還曆に相當せしを以て、祝賀を表する爲めに、獨立幼稚園を設立して金一萬圓を寄附したるが如き、其他軍資の獻納、國庫債券の應募、或は孤寡孤獨を愍れみ、苟も公共慈善とあれば、毫も吝しむ所なく、殊に敎育に力を致し、積極的に之を竭されて居る處は如何にも氏の人と爲りを察知することが出來る、蓋し自利に汲々たる當世の實業家中寧に見るの美擧である。

▲氏の趣味と人格

氏は幼より學を好み常に繁激の間に讀書の趣味を解し亦謠曲は氏が最も嗜む所、曩には養老會を組織し、同好者常に相會して既往を談じ、或亦繪畫を能くし、常に硯池を樂み殆ど入神の觀がある、其人格は紙背に徹し誰か牙籌を事とせる商業家の筆になれるものと思惟せんや、以て氏が人格の崇高なる反面を窺ふに足るべく、性寬厚にして洒脫、氣品崇高にして、風采は高雅、人に接しては毫も障壁を設かず、心易い中に自然の權威を藏し、不言の中に崇敬の感を寓し亦對者をして其溫た味を感せしむると共に、退いて欣慕の念に堪へざらしむるものがある。

▲氏の家庭

氏が精力の旺盛なる各種の方面に顯れ、家庭に於いては大の子福者にして、四男六女あり、長女隆子は卽ち工學士直木倫太郎氏夫人にして、次女千代子は川崎造船所高德純敎氏に三女協子は谷口茂雄氏に、四女陸子は養父郡の林田貞藏氏に五女信子は三井物產神戸支店の鵜飼辰次郎氏に嫁し、長男は卽ち三郎君にして、次男楠三君は柴田姓を冒し三井物產京城支店にあり、三男憲一君目下早稻田大學に在り、四男榮君、六女靜江子も又在學中にして巻頭掲げたる寫眞は本年恰も氏が還曆に相當せるを以て悉く一堂に撮影せられたるものである、而して氏が最も心を安んずるに足るべく、世人を羨望せしめて居るものは嗣子三郎氏の英發加ふるに多くの子女何れ

も忠實聰慧、一人も落伍者のないことである、常に氏を訪はんか、氏が多くの子女に擁せられ、諧聲諷々他愛もなく打興じて居られるのを見るであらう、殊に氏が一大事業の發達よりも亦德望の汎きよりも、更に大なる幸福として世に誇るに足るべき富は、齡還暦の氏に今尚母堂の在す事である、類齡八十餘歳鑠鑠として、既に二十餘人の曾孫を擧げられ常に膝下に嬉戯するのを眺めて居られるが、何うでも玄孫の顔を見るまでは生き永らへると言つて居られる、何と世にも芽出度き次第ではないか、吾人は前に家庭に於ける松尾男爵を最も幸福な人と言つたが氏は更により以上の幸福な人であると思ふ。

之を要するに世間には、單に祖先の遺産を死守して、富豪だと威張つて居るものもあれば、甚しきは之れを蕩盡するのも鮮くない、然るに氏の如きは前に述べたるが如く最も尊敬すべき一大事業を成就し、國産を增殖して國家の利源を開發し、以て國力を伸張し、一面細民の生活を補けて勞働の神聖を自覺せしめたる等之を道德上より云ふも其功勞の大なると共に、傍ら身を國家公私の事に委ね、自ら獲る處は亦公共に散じて吝しむ處なく、加ふるに多くの子女を敎養して、尚鉅萬の財を剩し更に侵々として旭日騰天の勢ひを示して居られる處は、到底常人の企て及ばざる才幹あるを覗ふに足るべく、吾人が模範的實家業にして且つ眞正の成功者と稱するもの敢て過稱ではあるまい。

▲嗣子三郎君

氏は神戸商業學校を卒業して、父業を補佐し同社の工業部長として日夜奮闘して居られる、性淡快にして一見舊知の如く奇拳縱横克く談じ克く語る、而も內心には偉大なる抱負と權威を藏し、當今の弊風たる氣障なハイカラ的の處は少しもなく、人に接しては飽く迄誠意を以てし、富豪の子弟に有勝の衒氣もなければ驕氣もない、而も父母に奉ずること最も淳く、品行の端正なることは已に定評がある、而して氏は優雅なる父君の氣を享けられたるものか、頗る趣味に長じ、諸山は大の天狗にして近頃亦繪畫を學び寸閑筆硯を事として居られるが、特に多くの弟妹を戒め且つ惰眠を密にし、氣風を高尚に導く爲めには毎月家庭と題する冊子を編輯し、各地に散在せる兄弟姉妹互に寄稿して情誼交換の機關として居られる抔は、實に高尚にして奥床しい處が窺はれる。然して業務に熱心なる世界的工業家を以て自任し、最近世界の大勢は帝國產業の革新を促すことの益々急なるに鑑み、昨年二月常務取締役本田一太郎氏と共に、泰西に於ける燐寸製造の狀態を視察し、併せて清國に於ける販路の擴張を圖らんが爲めに、悠然起つて歐洲に航し清國を經て歸朝せられたが、其間苟も燐寸に關するものに至つては細大漏らさず精査研究して毫も遺す所なく、此行蓋し氏を益したる事甚だ多く熱誠感するの外はない、されば年齒少壯の氏が過去の經歷の一端を以て茲に品隲することは出來ぬと共に、吾人はつとめて贅辭を避け、願くは前途洋々倦まず驕らず安んぜず、後來の天地に向つて驀進せられんことを囑望する所以である。

▲氏の海外視察談

氏が燐寸製造上海外視察談は大に當業者の參考に資すべきものあり、今其梗概を摘記すれば

余が今回旅行せしは獨、佛、墺、伊等の諸國なりしが、歐洲に於ける燐寸製造機械の進歩は益々改良して殆ど完全に近きまでに進歩し、其製品が人工の製品と更に異ることなく形狀、體裁、眞に整然たるものあり、然れども現在に於いては之の機械を各國の燐寸工業に應用して果して經濟上利益なるや否やは疑問にして、彼は工賃不廉なる而已ならず工場敷地及建築物等に莫大の費用を要するが故に機械を利用して工賃を省くこと能切なれども、我國は工賃廉く敷地料建築費等も又廉なるが故に、機械の高價なる金利等の點に於いて我國に應用するの必要ありや否やは大に考究を要すべき問題ならんか。

原料の供給地　燐寸を製造せる各國は自楊樹に對する殖林に意らず、殊に瑞典の如き自國は勿論たる自楊樹林を有せるにも拘らず、多くは露國の供給に仰ぎ露國は恰も歐洲燐寸の軸木供給所たるの感あり、何れも其使用せる原料は外箱內箱共に白楊樹の純白なるもの而已にして、人工と異り機械工業は原料を費す事贅澤なるものあるも、而も殖林の熾なる恐らく近き將來に於いては原料の缺乏する等の憂ひはあらざるべく、去れば我國の如きも一度伐採したる上は其儘放任する等の事なく漸次輪伐の制を以て殖林を講ずる事は國家として適切の急務ならんか。

需給の關係　現今の統計に依れば世界に於ける燐寸產出國としては日本が第一位にして、歐洲各國共大規模の燐寸工場ありと云へども、多くは自國の需要を滿すに止り、唯瑞典と白耳義のみ內國の需用に超過して國外に輸出しつゝあり現今の狀勢にては歐洲燐寸はカルカッタ以西を占領し、日本燐寸はカルカッタ以東に勢力を有しつゝあるも、歐洲各國は燐寸業に對し、政府の保護政策を講じつゝありて國內に消費せらるゝものは消費稅を課する爲め小箱一個一錢以上佛國の如きは三錢以上となるも、國外輸出に對しては充分の保護奬勵を講じつゝあり、加ふるに漸次精功なる機械が完成せられ政府の保護と相俟つて雄飛するあらば、カルカッタ以東に侵入して由々しき大敵なりと云はざるべからず。

販路　殊に我國の唯一販路たる清國燐寸の現況　は近頃清國及印度內地に漸次燐寸工場の設立せられ其原料は多く現在日本に供給を仰ぎつゝあれども、山東省地方には自楊樹林あり現に伐採して香港に輸送せられつゝあり、近くは鐵道の開通と共に各工場に輸送せらるべく、日本が歐洲に比して工賃の廉きを誇り居るも清國は日本に比して更に一層の低廉なるより現在に於いては製造上不慣にして粗品を出すに過ぎざれども、漸次發達進歩するに至れば歐洲保護政策と兩々相對して日本燐寸の販路を侵畧せらるゝの遠き將來にあらざるを想へば、水邦重要物產たる斯業の上に寒心に堪へざるものあり、要するに政府が相當の保護を講じて輸出軸木に重稅を課し、或は製品の輸出に對しては戻稅を附加する等の保護を與ふると共に、當業者も又充分の覺悟を以て、或はシンヂケートを組織して資本を增大し、金利の低廉、機械の應用を圖る等最も急務ならんか、殊に本年の如きは二十年來の不況に在るもの、如し、これ我國の供給過多にして清國市場に製品の停滯せるもの多く、隨つて放げ賣を爲して價格の暴落を來し、延いて仕入直を叩くに至れるもの、如く、斯る打擊を蒙らざる樣需給の關係上新設工場の設立を許さゞる等も必要ならん、要は當業者が年々各地に視察して世界の大勢に通じ而して大に覺醒せられんことを期す。

岸本銀行々主
岸本豐太郎君

▲模範的銀行家

商業に資金を要するは恰も機器に膏油を要するが如く、機器は膏油を待つて初めて圓轉滑脫の妙を全うすべく、商業も亦資金を得て初めて興隆振作の實を擧ぐべきである、是故に若し機器に膏油を缺いだならば樞軸相軋つて轉せざる計りでなく、終には頽廢して再び用ゆることは能きないやうになるであらう、之と同じく商業に資金を缺く時は商勢萎靡して振はない而已ならず、終には衰頽して起つこと能はざるに至るは最も見易き道理である、是を以て國家商工業の機關として常に資金融通の途を開き、有無相通ずるの利便を與へ、緩急相救ふの方法として、卽ち銀行の設けられたる所以である、故に銀行の本義たるや世の餘りある資本又は零細の貯蓄を集めて、一面資金に乏しき事業家に之を提供し、而して國家の生産を助長發達せしむべく、其中間に介在し兩者の信用を保持して之が集散の衝に當り、以て資金流通疏開を圖るべき任務を有し、隨つて之が經營の衝に當るものは自ら國家的事業を以て任じなければならぬ、然るに世には之の銀行の本義を沒却して零細の預金は其頗に堪へずとなし、且つ商工業の機關でもなく、單に各自の資本を醵出して之が利足を收收するに止まり、言はゞ名を銀行に藉つて私利を圖らんとするものが多い、然るに岸本豐太郎氏の經營せる岸本銀行の如きは、創立以來常に之の本義に基き、市内の六箇所に支店出張所を設けて、其費用と煩累を厭はず、專ら預金の取扱ひを以て其信條となし、一は細民に勤儉貯蓄を奬勵すると共に、一面專ら商工業の金融機關を以て任じ、其本義を解して其業務に軼掌し恪勤勵精二十年一日の如く、一に金融機關の振起發達を以て自家畢生の任務となすに至つては、其功勞は銀行の效益と共に實に偉大なるものがある。

▲氏の略歷

氏は萬延元年兵庫に生れ、父は岸本甚助と云ひ卽ち其次男である、家は代々醬油を醸し傍ら米穀仲買を以て業とし、氏は不幸にして幼少父を喪ひ母の手一つによつて育てらる、母貞彰刀自頗る婦德高く、襁褓の裡より早く已に敎訓を垂れ、而して氏に大任を下さんとするや先づ心身を錬磨せしむるにありとなし、氏が十三歲の交、大阪の素封豐田宇左衛門氏方に丁稚奉公に託され、最も嚴格なる豐田家の家庭に馴養せらるゝこと二年、氏が今に至つて努力精勵の素質は全く當時丁稚奉公の賜であると言つて居られる、十七歲慈母が補翼の下に家を分ち、爾來金錢貸付の業を營み、勤儉貨殖遂次家道は發展して、明治二十五年初めて資本金三萬圓を以て兵庫貯蓄銀行を起したりしが、既に世に認識せられたる氏が信用は忽ち多くの預金を吸收するに至り、二十七年更に資本金十萬圓を以て卽ち現今の岸本銀行を創立し、氏が多年の經驗と加ふるに誠實と懇切なる經營の結果は遂に今日の大を爲すに至つた、今や預金總額は五百萬圓以上に達し、個人銀行として比較的小資本を以て多くの預金を有するもの、橫濱の左右田銀行と共に我國東西の雙璧として亦銀行界の白眉である。

氏は又單に一箇の銀行家たる而已ではなく、明治二十一年神戸湊西區會議員に選ばれたるを初めとし、或は市會議員、市參事會員、縣會議員に當選して市政、縣政に參劃したること多年、又商業會議所議員、進んで會頭に擧げられ、其他湊川改修株式會社、兵庫倉庫、神戸瓦斯、竝に神榮會社等の各社長又は重役として、神戸市に於ける實業界の代表的人物として德望隆々たるものがある、由來貸金を以て家を起し身を立てたるものは、多くは世の嫉妬非難を受くるを常とせるに拘らず、獨り氏が聲名の赫々たるものあるは、又以て氏が人と爲りの一斑を窺ふに足るであらう。

▲貴族院議員としての氏

本年七月貴族院議員の改選に際し滿點を以て氏の當選に歸し、光榮ある金持の月桂冠は氏の頭上に墮ちた、吁、世に萬德を犧牲として漸く產を成すものもあれば、亦名の爲めに產を敗るものもある、是を以て古來名實兩全は人の最も難しとする處、然るに氏が以上の經歷に徵すれば財に偏せず名に趁らず、兩々相對峙して雙璧共に掌握せるに至つては、實に氏の如きは單に兵庫縣下の成功者たるに止まらず、亦以て明治立志編中の巨人である。

蓋し我國が憲法によつて議會の創設以來、貴族院は單に形式上の議院である、殊に大名華族と長者議員は最も無能の代名詞として目せられ、抑々斯る議員を上院に列せしめたる旨趣を沒却すると迄非難せられたることもありき、併し之も過去の事實として今や華士貴紳も新進有爲の才幹ある人物が多く議席に連なり、多額納稅議員も亦一般に向上して頓に政治的勢力を有し、恰も貴族院に於ける一敵國の觀あるに至りしは、曾に貴族院に於ける而已ならず、愈る富豪者の團體が勢力の增進は國家の進運を導く上に於いて洵に慥ばしき現象にして、殊に縣下選出の議員としては前に伊藤長次郎氏の如き新進の人物を出し、今や亦氏の如き成功者を出したるは爲めに一段の光彩を加へたるやに覺ゆ、素より吾人は氏に向つて高遠なる理想を望むるものにあらず、侃々諤々の議論を壇上

に絶叫せんことを求むるものではない、而も圓轉滑脫、多年の經驗あり思慮あり、加ふるに卓拔なる常識は能く事物を透察し得るの人である、去れば氏の如きは縣下の代表的人物として敢て恥ぢざると共に貴族院に於ける多額納稅議員として氏の如き成功者は眞に異數の人物と謂つべきであらう。

神戸米穀取引所理事長　小曾根喜一郎君

由來富豪は多く世の毀譽褒貶を免れぬものであるが、就中兵庫縣下で最も非難の聲の高い人は、奥藤研藏氏と、小曾根喜一郎氏であらう、併し奥藤研藏氏が今日の大を爲したる所以のものは全く支配人太平の手腕であつて、氏は單に其名義人に過ぎぬ、從つて世の苦楚辛酸を嘗めず自ら同情がない、乃で所謂守錢奴として世の惡評を受くる所以であるが、小曾根氏は之と異り、全く自己の手腕を以て父祖の遺業を旺にし聲譽を内外に擅にして、祖靈を地下に踴躍せしめて居る、自力奮鬪の成功者である、殊に幾多の事業會社を經營主宰して國家の生産を助長し、神戸市に於ける實業界の覇王たる而已ならず、氏が心血を傾注せる湊川改修工事の如きは、神戸市の發達に貢獻せる實に偉大なる功績がある、而して氏は亦守錢奴でもない、能く集め能く散じる人で、現に本年の濟生會義金の如きは世の齊しく歎稱して居る處である、然るに往々世に非難せらるゝ所以のもの要するに、一は弱者の嫉妬にもよるべく、又神戸の如き一代分限に富む平民主義の土地で比較的氏が貴族的に失して、例令ば人が訪問しても紹介がなければ會はないとか、其態度禮節の餘りに謹嚴なるものあると尚一は氏が自我を固執するの頑強なるより自ら世人の調和を缺くに由るであらう、されど氏の位置としては貴族的に世に處せんとするも固より當然にして、自我を固執する意志の鞏固なる處は、嬲て氏が今日の成功を見たる所以ならんか、然らば氏に對する世の非難は何等根據なき誣言であらう。

氏は謹厚篤實、悠膺なる風采は一見恬淡なる富豪の如く感せしむと雖而も世に處するや飽迄平民主義にして商人的態度を以て勤儉質實を專らとし利を見ること最敏當代罕に見るの實業家である。

氏は嘉永四年を以て兵庫に生れ、幼少小曾根氏の養嗣子となつたが、先代喜一郎氏始め樽屋を業とし、只管儉儉力行の結果は多くの資產を造り、晩年に至り貸家、貸金を業として居つた、然るに明治十八年先代の歿後家督を襲ぐや英敏なる氏は縱に世の趨向を看取し、單に先人の舊規に則り消極的方針を以て僅に其遺財を死守し鄙吝なる蓄財主義を執ることの不可なるを慮り、當時因循なる兵庫市民の惰眠を警醒し利用厚生の途を開き、殖產興業の大策を行はんものと、爰に先代の遺風を放拋して、嘗て放出したり貸金を漸次に回收し貸家を賣却して一部を地所に代へ、又其大部を新事業に放資せり、是れ卽ち氏が今日の大を爲したる所以である、性勇斷果決、一度決すれば飽く迄初一念を貫徹せざれば止まず、爾來愈々積極的抱負を以て社會の進步に伴ひ、勃興せる新事業に加はり、曩に藤田傳三郎氏が一度失敗に終りし湊川改修事業を企劃し、大倉喜八郎氏と提携して明治二十九年頃湊川改修會社を組織し、進で自ら其衝に當り、指揮經營の結果は終に一大工事を竣工するに至つた、抑々同工事の完成は神戸市民が每に水害の慘狀を極めつゝありし災害を排除したる而已ならず、今や殷賑繁榮の街衢となり、不夜城裏を現出して國富を增進し、市の發達を助成したるの莫大なる功勞は、全く氏の力に負ふ處大なりと謂ふべく、亦氏が生涯の紀念事業として神戸市民の齊しく感謝する處である。

其他日本羽二重、帝國水產、阪神電鐵、日本毛織物、神戸海上保險の各事業會社の重役として、米穀取引所理事長として、氏の力に俟つ處多く洵に神戸實業界の重鎭たるに耻ぢぬ位のものである。

森本慶明翁

貝原益軒曰く富に三あり曰く財產の富、曰く壽の富、曰く心の富、之なり、假令黃金は山程あつた處で早く死んでは何にもならぬ、縱し亦財產あり壽があつても我利々々盲者で足ることを知らない貧しい心では卽ち貧乏人も同じである、故に此三者を具備するものでなければ眞の長者と謂ふことは出來ぬ、吁、世に眞の長者が幾人ある、近く兵庫縣にも隨分金持は居るが、而も眞の長者を物色すれば森本慶明翁總に一人は出來ぬ、何とかして都會へ出て大きな商賈人になりたいも

▲翁の少々

抑々翁は天保十年を以て播西郡龍野町に生る、家は代々漆塗師屋を營みたりしが、幼にして聰慧なる翁は子供心にも所詮草深い龍野町で塗師屋の職人をやつて居つた處で到底出世は出來ぬ、何とかして都會へ出て大きな商賈人になりたいも

のであると思つて居る、折柄神戸が開港となつて將來大に望みある土地であると云ふことを聞き、幾か十五歳の時、漂然神戸を指して出て來たが、さて何の用意も目的もなく、已むを得ず熊内通瀧本某の水車場に雇はれ、半季に一兩一分の給金で飯焚となつた、而も勞働の思ふた以上に激しく普通の體では兎ても堪へ得ぬ處である、されど翁は近き未來に來るべき運命の開拓を目的に粉骨從事したので、六箇月の後には下役となつて給金も增加された。

斯くて只管業務に精出したる翁は、主人に見込まれ半季毎に地位は向上し、給金も昇り、入場以來五年二十歳の時には曰廻り役となり米の檢査をすることゝなつた、乍併翁が神戸に踏み出した目的は斯る勞働者となるのでない、半宵孤座竊に身の行末を思ふて、朝から晩まで頭の先から白くなつて米の中に埋もつて居ることの如何にも腑甲斐なきを歎じつゝ、時々商用にて神戸兵庫の市中へ出る毎に商賈の模樣を見、又商人となるには讀書、算術の必要があるといふので、古本を求めては頻りに獨學を遣つた、翁の熱心勤勉は一通りの習得をしたが、さて斯うなると愈々雄心鬱勃として現在の生活が厭になつた、そこで若かず天下の旗下たる江戸表へ出でゝ一番奮闘せんものと、茲に心機一轉して江戸行に決心した。

▲江戸に赴く

聽て前途の運命を開拓すべく江戸行きに志した、併し何處の誰を憑ると云ふ譯でもなく唯血氣に逸つて出發した處が幸ひにも途中道連れになつた者から、伏見の備後屋幸次郎と云ふ親分は隨分義俠心があると聞いたので、差當り伏見に着いて備後屋を訪ね來意を告ぐると早速引受けて呉れ、當時恰も幸次郎が曰杵侯の御供廻りの役目を仰付かつたので、其人足となつて江戸に行くことゝなつたのが卽ち萬延元年三月であつた。

元來大名が參勤に江戸に赴く供廻りは江戸へ着くと其役目が濟むのである、故に翁も江戸に着くや否やお拂箱となり、一寸途方に暮れたが同じ供廻りの內に江戸の人が居つて當分其處で厄介となり、四五日は市中を毎日歩いて居つたが、遂に桂庵の手で釜屋と云ふ芝商へ奉公人となり後又芝口の中屋敷龍野藩邸に、八木某と云ふ人が知合であつたから此人に賴んで藩の仲間部屋に住込み、漸く糊口に窮することは免れたが、素より武家奉公は翁の理想でもなく、殊に墮落極る仲間部屋の生活は謹厚なる翁の耐へ得る處でない、故に一刻も居るのは嫌であるが併し一步踏み出すと忽ち糊口に窮するものであるから不止得快々として日を送つて居た、然るに或る日以前お供をした曰杵侯が近々歸國に付お供の入用となり、矢張り商賈人になるのは神戸の方がよからめと、早速お供に志願して再び神戸へ舞ひ戻つた。

▲再び神戸に歸る

神戸に戻りて再び熊内の瀧本水車場へ奉公をしたのが翁が二十三歳の時である、江戸で種々苦勞をして來た丈けに萬事に如才もなく直に濱廻りの役となり、殊に釀造季節になると播州方面へ出掛けて米買入れの任に當ることゝなつた。

斯くの如くして翁は業務に熱中し、從つて商賈は繁昌する主人の信用と店の信用は倍々擴大されつゝある內、神戸大手町に瀧本氏の懇意なる柴屋六兵衛と云ふ味淋、燒酎の釀造家があつて、別に富裕と云ふにあらねど、千兩位の運轉資本は持つて居つた、處が此柴屋には子供がない、愈々養子をすることに決して、或る日瀧本の主人へ相談した處が、瀧本は幸ひ翁の實着を見込んで推薦した、翁も快諾して爰に柴屋の養子となりぬ、而して當分相變らず瀧本の水車場へ通ふて居つたが、時世の推移は外國の交通頻繁となるに從ひ神戸は日增に發展する、何時までも水車場に居るべきにあらねば、養家に戻り、小野濱の釀造場で傍念なく家業に努めて居ると養父六兵衛氏が逝去となり、當時跡目を相續して、從來の釀造業と共に兩替商を始めたが、着々成功して以前に優る繁榮を來し、而も勤勉倦まざる翁の熱心に一擧手一投足の勞は必ず利益を生み出し、大に家運の發達を來して相當の資產も出來たが而して日々に進步せる神戸市は、昨日迄寂しかりし苫合村の一角も今日は人家周密の街衢となると云ふ有樣、其處で翁は弗々地所の買占めに着手して、機會ある毎に土地を買入れたが果して豫想以上に地價の暴騰となり遂に今日の大を爲すに至つたのである。

▲俗界を超脫す

森本六兵衛君

以上の如く商業上に努力奮勵したる一面佛敎に歸依し金剛堅固の信仰を有して一生を一貫せる翁は去る四十年家業を令嗣六兵衛氏に讓り、小野柄通りに光德寺と稱する一宇を建立し、一切の事物を放擲して俗界を脫し

思ひつゝ月日を夢に過しけり
　花咲く今日が七十年の春

と云へる一首を詠じて新生涯に入り、今や朝な夕なに念佛三昧に餘生を送つて居られる。

蓋し世の一代分限と稱するもの、多くは貪婪飽くことを知らずして恰も獵者が獸を逐ふて山の險なるを知らず、漁者が魚を捕へ淵の深きを知らざるが如く、利を貪るに急にして人倫道德の如何を顧みるものは稀である、されば翁の如きは幼にして志を立て悲風慘膽種々の曲折を迎つて遂に今日の鉅富を致したりと雖も、一度び人生の大事に想到せば、之を人に委ねて顧みる處なく、世を逆觀して桑門に歸し、光風霽月自ら善根を修すると共に一切の衆生を濟度せんとするに至つては、其心事の高潔なるに慙かざるを得ない、加ふるに翁は齡古稀に達して尙儼長、子もあれば孫もある、實に翁の如きは一面幸福の人とも謂つべく亦眞の長者と云ふべきである。

▲當主六兵衛君

氏は慶明翁の長男にして、嘗て慶應義塾に學び、後歐洲に

留學して經濟の學を修め、歸朝後森本合名會社を組織して之が社長となり一切の家政を統轄すると共に、光村印刷會社を買收して之を經營し、傍ら神戸區會議員等に擧げられ、家道の發展に努力して居られる、新進氣鋭の人物として大に嘱望せられて居るが、併し世の辛酸を嘗めざるより未だ人情學に通せず、義俠と同情に缺けて往々世の所謂傾城買ひの精味噌と云ふ風の事もあると云ふ、されど少壯なる氏は夢ろ世の活動は今後に在る、隨つて年處漸く加はるに及び人情學も習得し、既得の學問と相俟つて圓滿なる人物となるであらう、吾人は縣下に於ける少壯の資產家として氏の將來を大に嘱望すると共に品性の修養に努められんことを祈つて置く。

神戸土着の富豪　生島五郎兵衛君

神戸開港以來未だ五十年を出でず、現に殷賑繁榮の街衢も當時は寂寞たる一村落に過ぎざりき、從つて四十萬の市民中神戸土着の家柄に至りては眞に寥々たるものあり、殊に現在市の富豪を以て稱せらるゝもの、多くは各地より雲集せる一代分限なるに拘らず、獨り生島家が神戸土着の名門として、頓に革新せる生存競爭の渦中に投じ、能く舊態を維持したる而已ならず、世と共に家道益々繁榮して依然悠揚なる舊家の面目躍如たるに至りては、萬緑叢中紅一點の觀ありと謂つべし。

抑々同家は遠く數百年以前より菟原郡神戸村の土豪にして代々五郎兵衛を襲名し、酒を醸し海運を營み、兵庫の北風氏と共に京阪各地に喧稱せられたる豪商なりき、然るに神戸の開港と共に世態の一變するに隨ひ、叨りに他の瀕に倣ふて家名を失墜せんことを慮れ、堅實なる先代五郎兵衛氏は、元町の釀造場を取拂ふて市街宅地に提供し、斷然一切の商業を廢して爰に從來の所有せる土地家屋の經營と、貸金を以て確實に遺產を保護することゝは爲せり、然るに市の發達に伴ひ地價の暴騰となり、漸次膨脹して遂に今日の大を爲すに至れり

氏は有馬郡の素封上西氏に生れ、明治二十年生島家に入つて養嗣子となる、性謹嚴にして偏に先考の遺訓を格守して悖らず、嘗て當世的名利の誘惑を排除し、聿かず飛ばず、而も家道は自然に發達して、神戸市に於ける最も堅實なる富豪として夙に世間に仰望せらる、貸地、貸家、貸金業を營むと雖も、總て恩惠的にして他の富豪と大に其趣を異にせるものあり、世に往々同家の消極的家政を非難するものありと雖も、義務ある養嗣の身分を以て、數百年來の名門を承け、嚴格なる遺訓の下に終始せんとせば、世人の想像せるが如き叨りに無責任なる行動を許さず、而も聲望隆々、毫も驕奢逸樂に流れず、其宗を辱めず、能く父祖の靈をして地下に踴躍せしむるに至つては、寧ろ困難なる守成の大業を完ふせるものとして之を大に吹奬せずんばあらず、氏人と爲り質實恭儉、富貴を衒ひ、名門を誇り、虚名を趁はんとするが如き念慮なく、華奢衒燿なる神戸市の富豪中稀に見るの人物たり。（尚同家の家系と事蹟は神戸市の歷史を語るものとして却々に趣味ある問題ならんも、氏は口を噤んで之を語るを好まず、爰に詳記する能はざるを遺憾となす）。

衆議院議員　神戸市會議長　坪田十郎君

卒然として見れば容貌魁偉、威風堂々、恰も戰國的將士の如く、少しく語を交ゆれば又言外に其溫かき心情を認め得べく、若し夫れ深く親まんか、義俠に敦く同情の念に富み率直なる好個の紳士たることを知る、是を之れ我が坪田十郎君となす、而して氏は又最も意思の雄健にして奮鬪的の人物なり卽ち其雄健不拔の意志と奮鬪的の性格とは遂に今日の地位を贏ち得たる所以たらずんばあらず。

抑々氏は姫路市八代の產、其祖先は天台宗の僧侶たりしが或一派を開宗せんとして、幕府の忌諱に觸れ同地を追放せらる、其子三人あり長は同地に止まり、（次は揖西郡伊津村に移る、卽ち坪田淺五郎氏の祖たり）、爾來連綿として氏に迨びたりしも家道大に衰へ、困苦窮乏の中に人と成り、貧家より身を起して始め高砂警察署の一巡査たりき、然れ共其志は頗る遠大にして眼中固より巡査なく、常に高所を指して其希望を標致し、竊に時機の到來を待てり、斯くて過すべきにあらねば遂に發奮して上京し、當時五大法律學校中に在つて嶄然一頭地を拔き、朝野に喧稱せられつゝありし明治法律學校（現時の明治大學）に入り、苦艱禁雪、明治二十五年政治、法律兩科を併せ卒業するに至れり、之れ豈常凡者流の企て及ぶ處ならんや、後明治二十七年先代伊藤長次郎氏に聘せられて同家の商業本部取締役を命せられ、大阪、加古川兩支店專任となり、同家の神戸市街宅地の增大するに及び、二十九年更に神戸地所部差配人となれり。

▲氏が公共的活動

當時伊藤家の地所にして神戸山手通りの山岳、田畑、或は荒蕪磽确の地尠からず、而も一度市の發達を想察せば中樞の位置を占むべき處多く、之を開拓して道路を新設するは卽ち一は伊藤家の利益たると共に、又一面市の發達を助成する所以たらざるは莫し、氏は之を思ひ二十九年葺合區新生田川以西鐵道以北、布引町、生田町、琴緒町新道開鑿の件を發起し三十三年には葺合區新生田川以東、鐵道以南、三十四年には葺合區新生田川以東鐵道以北、及び東尻池第一工區等の各新道開鑿を主唱し、自ら伊藤家を說いて之に巨額の費金を投せしめ、各道路開鑿副委員長に擧げられ、何れも指導監督の宜しきを得て、竣工の後神戸市より感謝狀を受くるに至れり、之れ氏が實に神戸市に於ける公人的生涯に入れるの第一歩にして、之より其才と銳氣は胸中常に鬱勃として押へ難く、遂に發して其抱負を實現すべく一般公共事業に盡瘁するに至りぬ、卽ち三十四年四月初めて市會議員、市勸業常設委員に選ばれ、三十五年九月縣會議員に當選し、縣參事會員に擧げられ、更に地方森林會議員を命ぜらる、三十九年市會議長に選擧せられ、築港期成同盟會委員を囑託せらる、四十年一月改選の結果再び市會議長となり、同年政府より神戸築港委員被仰付、同年九月市會の決議を以て築港事業起工感謝狀を受く、四十年神戸市選出衆議院議員に當選し、四十一年三度市會議長となり、四十三年四度市會議長に推選せらる。

▲氏が終始を一貫せる神戸市の發展策

氏が公人としての經歷は概略以上の如く、就中其重なる事蹟を列擧すれば。

（一）氏は都市の發達は交通の便を圖るに若くはなしとなし、殊に神戸市の如く土地狹隘にして人口の增殖日に年に激增するの地にありては、交通の便利を進むるを以て市の發展上に於ける唯一の良策にして、亦發展に伴ふ交通の便利を圖るは地方公共に對する市民の義務なりとなし、終始一貫此主義を抱持せるもの、如く、初め以上新道の開鑿を主張し、斡旋盡力したるの結果は不毛の地を拓きて各區に道路を開通し、以て市の兩端に向つて人口の增殖を圖ると共に神戸市の膨張發達を助け、而して一面には地價をして騰貴せしめ以て市富を增進し、殊に當時葺合部落の如きは多くは細民の居住地にして街衢の見るべきものなかりしに、今や商賈櫛比して大廈高樓其間に錯綜し、殷盛繁榮駸々として停止する處なきの狀態に至りしもの、實に之れ新道開拓の賜にして氏が熱心盡瘁の功勞や長く沒すべからざるものあり。

（二）夫れ神戸の地たるや本邦に於ける對外貿易の中樞市場として他の遠く及ばざる所なり、曾に我が對外的の中央市場たる而已ならず、亦東洋に於ける列國の中心的貿易港にして實に世界的の大市場たり、加ふるに海運界の進歩は年々大艦巨船の建造となり、勢ひ昔日の港灣を以て放任すべきにあらず、茲に於いてか氏は市會議長として築港期成同盟會を組織し、同志を率ゐて熱心唱導政府を促し、遂に政府をして神戸築港の起工をなさしむるに至る、之亦氏が與つて大に力ある處たらずんばあらず。

（三）日露戰役後新事業の物興となり、電鐵事業熱は各地至る處に起り、神戸市の如き地形に於いては素より市街を貫通して兩端を擴張せざるべからず、然るに互に派を爲して出願するに至り認可を遲延して圓滑を缺くの虞あり、氏は之を遏遏となし、各派に交涉して折衷讓歩せしめ協和調停して遂に漸く神戸電鐵の組織を見るに至れり。

蓋し氏が持論たる市の發展策として交通機關の設備は、始め市内開拓の道路に起り、世界的交通の機關として築港となり、今や復市内貫通の電氣鐵道布設を見るに至り頓に市の發展を劃したるもの、素より神戸市の如きは國家の要港地として當局の施設に負ふ處大なりと雖も、又氏等有力家同志の主唱盡瘁の功績は實に偉大なるものあるを認めずんばあらず。

▲葺合港灣の埋立と其他の事業

葺合海岸に船舶輻輳し往々風波の難あり、纔に山本繁藏氏等茲に避難所を設けんとして計畫せしも屢々蹉跌して其志を果さず、然るに縱令神戸築港の計畫成るとも雖も、葺合港灣の改築をなすにあらずんば、政府事業の海陸連絡工事を完成する能はず、故に政府も之が施設の必要を認めりと雖も、財政の關係は未だ之が施設を許さず、市も亦之を行ふこと難く終に之を民業に移さんとするや、氏は有力者を說き資本金一百萬圓を以て葺合港灣改築會社を組織し、爾來專務取締役として經營の結果遂に昨年五月を以て事業の完成を見るに至り、港灣の改築と共に三萬餘坪の土地を埋立て滄海變じて街となり、大にしては國家の富源を拓き、一面市の發達を助長すると共に、同會社も亦資本に對する約三倍の利益を受くることを得たり。

▲氏が實業思想

想ふに貨財は民生の大本にして天下一日も缺くべからず、彼の富國と云ひ、强兵と云ひ、將た國力の伸張と云ふも其源泉常に貨財に發す、語に云はずや實業は一國の膏油なりと、然り政治機關の運轉、文物制度の興隆は皆此膏油を得て始めて滑然とし軋らず貨財洵に以て貴むべしとなす、然らば彼の政治に奔走し論壇に馳騁して天下の大計を論ずるもの、豈貨財の途を講ぜずして可ならんや、然るに方今の政治家中之を意とするもの甚だ稀なり、氏は卽ち然らず、夙に政治の根基は實業に在ることを感得して、常に政治に奔走し且つ幾多の公職を帶ぶるにも拘らず、躬行實踐諸種の事業を經營し、貨殖の途に勗めて拮据經營怠る處なく、神戸市に於ける實業家として亦鑠々の聞わあり。

▲氏が政治的活動は神戸市を以て本位なりとす

氏は神戸市の公人として絕えず政界に奔走劃策す、而して氏が標榜する政治上の黨籍は政友會にありて神戸市の頭染たり、然るに近時政友會の橫暴甚だしく爲めに民心に副はざるもの多く、延いて市民中には之を以て氏個人を攻擊せんとするものありと雖も、政友會なるが故に氏個人を攻擊するの酷なるは論を俟たず、蓋し氏が政友會に黨籍を有する所以のも

のは、敢て政友會の主義綱領に拘泥するにあらず、亦政友會の横暴を謳歌するにもあらず、抑々氏が政友會に黨籍を置くに至つては必ずや他に其理由なくんばあらず、されば神戸市の如きは他の府縣と異り各種の事業にして國家の施設に俟つべきもの多きが故に、神戸市民として市の發展劃策の爲めには、宜しく多數黨の政友會を利用するの得策なるに過ぎざればなり、固より氏は自ら天下の政治家を以て任ずるものにあらず、寧ろ神戸市本位の人物にして期する所は地方の改良發達を圖らんとする、所謂地方有志家の本分を全うせんとするに在り、故に氏は唯政友會に在つて多數黨を利用し、之を以て神戸市の發展に資せんとする神戸市の志士を以て任ずるものに外ならざるなり。

昨年市會職員半數改選に際し、大阪市等に於ける市政の腐敗を引用して、從來の神戸市會議員を攻撃するものありたるき勿論大阪、堺等の市政は政友會議員の跋扈によりて腐敗を招きたるは事實なりと雖も、神戸市政の狀態は從來の事績に徴するも比較的良好にして、從來の市會議員も亦一に市の發達進榮と、市事業の進歩とを圖るに汲々たるものありしを多とせずんばあらず、此れ實に氏の如き公共心に富める人物の存在に負ふ處少しとせず、其他市の發達に伴ふ水道擴張問題、市廳舍の建築等多年神戸市の爲めに軫慮したる功績の偉大なるものあると共に、將來氏の指導盡瘁に俟つ處多かるべく、其責任の重且大、氏も亦榮譽なりと謂つべし。

▲氏の人物

氏や多年市公人として國家公共の事に盡瘁したる半面に於いては、躬行實踐貨殖の途に意りなく今や優に一家の富者を以て其頭角を顯すに至れり、世間或は氏を批評するもの動もすれば曰く、氏が今日の富は素と富豪伊藤家の差配人たりし時、巧みに之を利用したるの結果ならんと、之れ蓋し氏が成功の意外に迅速なるが爲めに邪推回をらすもの氏の人物を知らざるものゝ言たり、氏の性格は決して金錢に拘泥して非事を働かんとするが如き小人物にあらざるは勿論、又伊藤家の財産たる重に不動産にして概して一定不動的のものなるが故に、其間に於いて使用人の利用すべき餘地なく、加之、伊藤氏の英敏なる使用人に些の瞞着さるゝが如き人物ならず、而して氏の富は主として伊藤家の關係斷絶後に作りたるものなるに於いてをや、況んや現今尚伊藤氏の信任最も厚く、氏を別家格として優遇せられ、氏も亦同家に對する恩義は須臾も忘却せざるものゝ如し、兩者の關係斯くの如きものあるを以て見れば世の誣言たるや論を俟たず。

氏が此頃新築せる邸宅の結構壯大世人の一驚を喫せしむるものあり、聞の高さ四十八尺二階造りにして廣濶なる室内恰も殿堂の如く、其裝飾品として併置せるもの一として氏の氣質を表明せざるはなく、就中高嶠氏の歷史畫、應擧の虎、蕊翁の筆たる屏風と、四字額は其大を以て天下に誇るもの、庭園を見れば亭々たる數丈の松柏を栽植して、高さ一丈八尺の石燈籠と、方九尺の手洗鉢を初め、何れも六甲山より運び來れる重さ三千貫以上七八千貫の本花崗石を幾十となく羅列し殊に目醒しきものは方丈餘の靴脱ぎ石にして、來賓を迎ふるに百足以上の履物を能く一石の上に陳列するに足るべく、氏が軀幹長大なるが故に鴨居の高きこと通常より四寸とは飽く迄氏の人と爲りを發揮して遺憾なし、氏は亦頗る趣味に長じ居室の南天床柱は薩摩より金に飽かして取寄せたるもの、廻り二尺以上に及び、有名なる金閣寺の床柱よりも尚珍とすべく其他書畫骨董の富贍にして而も何れも雄壯豪放の物多きが如し、蓋し之れ皆氏が豪宕なる氣風より發露して自ら致す所たらずんばあらず、然れ共氏は徒らに大言壯語を以て快とする、所謂東洋式の豪傑肌にはあらず、其言動悉く秩序ある責任を重んじ、隨つて人の非難を受くること少く、隱然同志の間に推重せらるゝ所以たるなり。

要するに氏は異常の成功者たると共に、奮鬪的の人物なり曾に自己一家の爲めのみならず、常に公共の爲めに奮鬪し、民衆の爲めに活動し、或は市政の爲めに、又は國家の選良として絶えず盡瘁しつゝあり、而して氏は亦元來同情心に敦く任俠の氣に富む、若し哀を乞ふものあれば理非を問はずして之を助けざるなく、又常に弱者を扶けて自ら快心の事となす蓋し之れ世間氏を以て神戸市の親分と綽名する所以にして其勢力の牢固として拔くべからざるものある所以たらずんばあらず、實に氏は親分的の人物にして吝ち臭き小才子に富む兵庫縣下に異彩ある人物たり、固より氏は理想家にもあらず、亦高慢なる學理を說く人にもあらず、飽く迄も實行的の人物にして、筋道を吟味せんよりは先づ行はんとするもの、而して手腕あり才識あり、膽は斗の如く、加ふるに春秋尚遙に前途は洋々として春海を望むが如し、想ふに氏が前半生の經歷は以上の如く吾人は刮目して今後更に偉大なる發展を期するもの也。

氏の夫人夙に貞淑を以て名あり、氏が粗放にして一切の家事擧げて夫人に委し、毫も顧みることなしと雖も、能く内政を治めて良人に後顧の憂ひなからしめ、以て其大業を助成するものゝ如く、常に筆硯に親しみ、才色艶麗擧措閑雅稀に見るの賢夫人たり。矣

後藤勝造君

故佐々克堂曾て余輩に語つて曰く、凡そ大丈夫の世に處せんとするや、政治家にあれ、將た實業家にあれ、必ずや獻身的の乾兒を有するにあらずんば到底大事を爲すに足らず、而して其願使に甘んずる者五人を有するに於いては稍々事を行ふに足れり、而も方今の人物にして此乾兒を有するもの果して幾人かある、甚だしきに至りては家人の尚其命に應せざるものあるにあらずや、此を思へば玄洋社長の頭山滿氏の如き將た故星亭氏の如きは實に大人物なりと謂つべしと、然り之と感を同うするもの獨り克堂氏而已ならんや、想ふに兵庫縣に人物と稱するもの甚だ多し、而も克堂の所謂家人の命に應

せざる人物にして、到底乾兒を抱擁するの雅量なき、言はゞ猿智惠を弄する小才子耳、誰か其願使に甘んずるものぞ、之れ畢竟乾兒なきにあらずして之を容るゝの親分なき而已、然るに偶々爰に親分的の雅量を有する後藤勝造翁を得たるは群雞の一鶴として吾人の大に快哉を禁ずる能はざる所以也。

抑々翁は嘉永元年四月を以て信州壇科郡新田村の農家に生れ、明治維新の際横濱に至りて蠶種の輸出を謀り一時大に利する處ありしが、偶々普佛戰爭の起るに及んで種紙輸出の杜絶となり、爲めに莫大なる損害を蒙り、一敗地に塗れて遂に神戸に來り、當時の御用商人肥前の人松尾松之助氏に寄寓す之れ實に明治八年なりき、後松尾家の殞るゝに及び、自ら獨立して海岸通りに船舶の廻漕竝に旅館を營む、卽ち現今の後藤旅館之なり、其後西南戰爭又佐賀の亂起るや、人は利得に汲々たるに反し、義氣と俠氣に充溢せる翁は自ら損耗を顧みざる而已ならず、身を挺して國家の爲めに貢獻したる功勞甚だ多きものあり、爾來家業の旺盛と共に各種の商業を營み翁が大手腕は漸次に發揮せられ、先年みかどホテルの建設と共に、宮島、臺灣鐵道ホテル等を獨力經營して今日の大を爲すに至れり、而して明治三十年多額納稅者として斯波與七郎氏と候補を爭ひ遂に失敗に歸するや、其後一切の公職に就くを屑とせざるものゝ如し。

性豪放にして膽は斗の如く、智は神の如く、人を容るゝこと大海の如し、頗る義氣と同情に富み、總て他人の爲めに謀つて自ら快となす、若し翁の手腕を以て始めより私利を圖るに努めたりしならんには、今や莫大なる資產を造りたるや必せり、而も翁は恬淡にして自利の念なく、自ら名利の外に超然として天空快濶以て世に處せんとするものゝ如し。今や一切の家政は嗣子鐵治郎氏に託し東京三十軒堀に居をトし悠々として閑日月を送りつゝあり。

（尙翁の事蹟を審に紹介せんか、必ずや龍躍り虎嘯くの概あらんも、余輩未だ面識なく只た嗣子鐵太郎君に就いて聞き得たる梗概を略記せる而已、詳細は之を他日に讓らん）

▲嗣子鐵太郎君

氏は鳥取藩士成瀨家の出にして、明治十一年後藤家の養子となり、爾來家政を補佐し、今は卽ち一切の營業を統轄しつつあり、迫に翁の訓育を承け、氣品雄壯にして當世の高襟紳士と其選を異にし、自ら古武士的の人格を標致して、又世俗に跼蹐たらず當今稀に見る人物たり。

（後藤氏は他方出生なるも原稿の都合により此處に紹介す）

前市會議長

横田孝史君

明治の昭代に至つて我が日本の物質的文明の多くは神戸港を經て輸入せられたり、故に神戸は本邦文明の淵源にしてまた我帝國の玄關たり、隨つて之を代表すべき地方的政治家寧ろ公人として適當の人物を要すべきも、曾て市政に參與するもの概ね舊思想の土着人にして、多少新智識を有するものは所謂實業家を以て自ら居り。敢て公共の事に與らず、卽ち神戸市の水道事業が東京大阪に後れたるは兎も角、長崎函館の水道が既に竣功せるに當り、依然井水に安んじたるが如きは以て其當時の狀勢を推知するに足るべし、斯時に當り奮然身を挺して市政に干與し自ら急先鋒と爲つて熱心盡瘁、事遂げざれば止まざるの概を以て、當局の施設を助け、近時東京、大阪其他の自治體に腐敗の惡聲ありと雖も幸ひ神戸市が比較的健全なる發達を見るに至れるもの實に氏の力に負ふ處大なるを認めずんばあらず。

▲氏が經歷

兵庫縣人物史　横田孝史君

氏は加西郡横田村故國治郎氏の次男たり、卽ち其氏と地名の同一なるもの以て名門舊家たることを知るに足るべし、氏幼にして伯父可慶翁に國文を學び、大野乙山翁に漢籍を修め又姫路の某學塾に遊び、亞いで姫路師範學校を出でたるは尙青年にして敎鞭を執ること僅に一兩年、大阪の有爲義塾に入り其幹事となり又緒方醫塾に轉じたるも醫學は自己の性格に適せざるを覺り、藥學を修めて同醫院の藥局長と爲り、明治十八年神戸に藥局を開業す、是れ京阪以西に於ける藥劑師藥局の嚆矢たり氏以爲く尙醫藥分業時代に至らざれば藥局の業甚だ至難に屬す、而して賣藥は其需用の範圍極めて廣きも當業者は概ね藥學の素養に乏しく、是れ實に衛生上の一大缺點なりとす、若かず賣藥を以て業とせんにはと、乃ち自ら滋養鐵飴、和胸散等を製造發賣し、東京の岸田吟香等と相謀り賣藥改良策を講じ、且つ時の內務大臣に向つて賣藥規則の改正を建議し、又「藥業雜誌」を發刊し獨力經營九箇年の久しきに及び、或は「日本藥局方」の始めて官報に發布を見るや、直に

數千部を印刷せしめ原費を以て同業に頒ち、自著「藥輔心得」を遠近に贈與せる等、斯業の發達に貢獻すること尠からず、宜なり日本藥學會は特別會員として氏を待遇し、先輩下山丹波兩博士は其發明に係る消化滋養劑ヂゲストーゼの專賣權を氏に贈與せり。

▲公人的動作

（一）市郡經濟分離問題　是れ卽ち氏が公人として推奬せられたる初陣たり、從來神戸市は彼の特別市制の三府に亞いで橫濱、名古屋、廣島と共に四大市として市郡分離經濟なりしも當時府縣制實施せらるゝや共通經濟と爲り、卽ち多數郡部議員の壓迫によりて市に不利益なる割賦を負擔すべき嫌あるを以て、從來の制度に復せんとの一問題起るに當り、苟も事法律の改廢に係り一二地方の利害に由つて其目的を遂行せんこと不可能なりとして反對を稱ふるもの多く、市の當局者は頗る去就に迷へり、乃ち氏は大に其不當を鳴らし實行論を主張し、新聞紙上に分離經濟の必要を絶叫し、市當局者の意氣地なきを罵倒するや、忽ち氏の人物は市民に認識さるゝと共に罵倒せられて氏に懷焉たらざる市政關係者は、氏の鉾鉦を避くべく、又反對者は氏の大言を捉へて到底實行難なることを告白せしめんとて、敬遠的に反對側より推されて市會議員に擧げらる、爰に於いて氏は卽ち輿論喚起の主唱者として其意見を貫徹せんが爲めに、中央政府と帝國議會に對し府縣制一部改正を請求せんことを市會に提議し、贊否紛々議終に決せられ、氏は乃ち上京委員に擧げらる、自ら信ずる氏は責を負ふて運動に着手し、直に橫濱名古屋廣島の三市に檄を飛ばし其歩調を一にせん事を求めたるも、本問題に就いては神戸市の如く痛痒を感せず、唯名古屋廣島の二市のみ お附合に委員を上京せしめたり、爰に於いて氏は各委員の先達となりて當局に肉薄し、貴衆兩議員間を歷訪し、滯京二箇月終に全く其目的を達して該法律條項の改正を見るに至り、曩の反對派をして顏色なからしめ、市民の信望大に加はり頓に頭角を顯すに到れり。

（二）水道事業の成立　曾て神戸市に於いて水道敷設の計畫あるや、古來無償の井水に安んじたるものをして俄に有料の水道水に移らしめんとするは、實に市民の爲め生活上の一大革命にして多大の經費を投じて斯る事業を企つるは市民多數の奇怪と爲す所、當時百萬圓の豫算は市の當局者に於いても其財政狀態に鑑み大に躊躇する所あり、亦市民中或は尙早延期の理由を以て反對を稱ふるもの尠からず、此に於いて氏は「水道問題に就いて杞憂論者に一言す」と題せる痛切なる意見書を發表し、且つ新聞紙上に或は公開演說を以て大に實行論を皷吹し、漸く明治二十六年に至り市會に於いて議漸く決定せられ、東京大阪の先例に依り凡そ十分の三の國庫補助金を獲得すべき見込なりしも、當時政府の意向は帝國議會成立後未だ一地方の事業に對し容易に補助の例を設くべからずと爲し、其目的を達せん事頗る困難なる形勢なりき、此時に當り氏は其委員に擧げられ、勇躍直に東上し、豫て知遇を得たる長與衛生局長、及後藤內務技師（新平）に謀り、先づ其同意を得て井上內務大臣に面陳し、又貴衆兩議院の各主領株に贊成を求め、百方奔走の結果終に能く其目的を達し、卽ち三十萬圓の補助を得たり、今日より是れを見れば敢て多額なりと云ふべからざるも、當時の歲計豫算は僅に八千萬圓にして現今の八分の一に過ぎず、且つ每に官民の衝突點となりて屢々議會の解散に遇ひたる時代に於いて此新例を開きたるまた容易の事にあらざるべし。

（三）大阪築港反對意見　日淸戰役後の財界發展時期に於いて大阪築港案の帝國議會に現はるゝや、大阪が地方的觀念に驅られ近距離なる神戸の良港灣を顧みず、其天保山沖の水中に二千萬圓の巨費を投せんとするの愚策を論じ「大阪築港神戸修港較查意見書」なるものを發表し、大に院議を動かさんと試みたるも、終に比較多數に因つて漸く大阪築港案の通過を見たり、然れ共該事業の全然失敗に歸したるは卽ち氏の先見に背かず、爾來神戸港の修築に關して大に苦心する所ありしと云ふ。

（四）縣廳舍の改築　現今神戸市に於いて嶄然たる唯一の大建築物は實に兵庫縣廳なり、氏は帝國の玄關たる神戸港に於いて見る影もなき舊廳舍は大に體面に拘るものとなし、曾て又新日報發刊當時に改築論を發表したる事あり、後漸く周布知事に依つて改築設計成りたるも、縣會の容るゝ所と爲らず次いで大森知事に及び氏が苦心は同輩の反對を排して終に成立を遂げしめたり、此間の消息を解するもの當時官民の關係者のみなりと云ふ、氏が又每に市廳舍の修繕に反對せるが如きも、其實改築を促す心算に出づるに因れりと。

▲活動的得意舞臺

氏が神戸商業會議所議員たる明治十九年の有志組織時代に始まり、二十三年同條例發布の下に公選せられ、爾來引續き當選して今日に至り現在議員中の最古參たり、每に委員又は委員長に推され盡瘁する處あり、由來會議所の性質として地方問題に係るもの尠し故に却つて市民に知られざるも、氏は其代表者として全國聯合會に出席する事殆ど專任の觀あり、勢力自ら備はり凡そ重要問題にして氏の意見に依りて決せらるゝもの尠からずと云ふ、曾て日露戰後に於ける稅制、及財政整理問題の如き、尙未だ其目的を達するに至らざるも當時奮闘大に努め、四十一年春日本橋倶樂部に開催せる民黨代議士と聯合會代表者の大會に於ける氏が「民力休養論」の如き、卽ち聯合會を代表せる穩健なる一大演說として、當時都下の各新聞紙に傳へられ、今年四月併合後の朝鮮視察を兼ね、京城に開催せる同聯合會に於いても當所の提案は容易に通過せしめ、實行委託を受けたる下ノ關釜山間の連絡船問題に就いては、直に長谷川管理局長に交涉して速かに其目的を達せり事小なるが如きも爾後日鮮間の交通運輸上多大の利便を得べし、又朝鮮米穀移出入稅の撤廢、朝鮮勸業博覽會の計畫等適切の案件に就いては東京大阪其他の代表者と相謀り、滿場の同意を得て當局に建議し、或は世の批難の種となれる彼の會社例に就いては適切穩健なる意見を以て總督府に注意せるが如き、又視察の狀況と感想に就いては詳かに之が報告を爲せり、先年或當局大臣は聯合會に於ける氏の鋭鉾を忌み、竊に某地方官をして壓迫手段に據り其出席を停めしめんと試みたる事ありと云ふ、氏曾て人に語りて云く彼の市縣會の如く窮

窟なる地方問題に逢着する事なく、隨つて他に顧慮するを須ひず、聯合會は余が聊か得意の舞臺なりと、或者は云く氏の理想的得意舞臺は寧ろ他に在つて存すべし改選期は明年に迫れり氏の意氣は兎も角神戸市民たるもの近頃の行懸りを棄てて日比谷原頭の舞臺に上らしむるの念なきや。

▲其他の略歷

氏が商業會議所に於ける經歷は前項の如し、二十五年市會議員に選ばれ、翌年議長代理と爲り、次いで議長に推され、二十六年破產法の實施せらるゝと同時に當局大臣より其管財人を命ぜらる、二十七年縣會議員に當選し、副議長並に縣參事會員、地方衛生會議員、森林會議員等に擧げらる、若し重ねて同議員に當選せんか自然議長たるの順序なりき、三十七年再び市會議員に擧げられ、後議長に推さる、又防疫評議員及神戸築港設備委員に選ばる、現に同委員の職に在り。

▲氏が人格と將來

世間或は氏の今日に至る公生涯を謳歌せるに拘らず、近頃其行動を難じ、其人格を疑ふものあらき、幷は昨年故櫻井代議士の補缺選擧に際し、國民派の氏は却つて政友派と共に松方氏を推薦したるに因れり、或は云く國民派が先輩たる氏を措いて後進野添氏を推したるを最も不快と爲せるに由ると、甚だしきに至りては松方氏の權力に媚びたるものなりと、然れ共氏を知れる者の言に據れば、當時既に國民黨の成立に次いで兵庫縣支部の組織せられ市内また多數の同志を有しながら、黨員外の太田氏を以て候補に擬したるにより、氏は曩に實業派の推選せる櫻井氏の補缺として實業家の松方氏を推すに同意したり、太田氏の斷念は卽ち松方氏の立候補後にして結局野添氏之に代りたるも全く氏が一諾の後にあり、且つ野添氏敢て不可なしとするも、神戸市の現狀に鑑み其十年計畫の築港事業は前途尙遼遠にして、水道事業の擴張計畫あり、隨つて國庫の支辨に求むべきものまた尠からず、蓋し氏が松方氏を贊成せる以爲は偶々國民派が當初候補推薦の順序を誤りたるによるべく、又市の公益上人物本位に出でたるものなるべし、想ふに神戸市の政治舞臺は鹿島氏已に老い、小寺氏は其根據を郡部に有するの時に當り、氏と拮抗して蝸牛角上の爭ひをなすものは太田保太郎の一派にして、當春商業會議所役員選擧に際し極力氏に反對せるが如きは其一例なり、故に若し太田氏が小寺派に倚らんとせば、坪田派が氏を助けんとするの傾向あり、故に氏が松方氏を推薦したる所以のもの敢て政友會に投じたるにはあらずして、國民派の候補者たる太田氏に反目したるによるべく、之の一事を以て氏を政治上の變節者として其人格を非難するが如きは少しく早計に失するものならん乎、然れ共余を以て見れば、兩者共に其狹量なるを憐れまずんばあらず、殊に氏の如きは多年神戸市の公人として幾多の方面に努力奮勵至らざるなく、其貢獻せる處甚だ多く、加ふるに天下知名の士に交り、政治家として才幹亦凡ならざるものあるに拘らず、先輩として鹿島氏を憚ること厚きに過ぎ、坪田氏に後れ、野添氏に先んぜられたるは氏の爲めに同情に堪へざると共に、市公人として何等負ふ處なきを信ず、氏の將來は實に多望なりと謂ふべし。

後輩者の太田如きが言動を意に介するに至つては、其規局の小量なる亦氏の爲めに惜む處なり。余輩此稿を終らんとするに當り偶々氏が商業會議所の役員を辭し、又聯合會の得意舞臺を退かんとすと傳ふ、或は他日の發展を期せんとするに非らざるなきか、要するに氏の前途は一道の光明を認めつゝあると共に大に自重せずんばあらず。

以上彼し去り彼し來りたるが如く、氏は多年神戸市の公人として盡瘁すると共に、曾て湊川改修會社を組織して評議員となり、兵庫電氣鐵道の相談役、神戸電鐵の協議員、並に神戸瓦斯會社の取締役として、何れも其創立施設に奔盡して實業界に重きを爲せり。

氏に三男二女あり、長男千秋君東京帝大工科大學にあり、次男哲郎君本年帝國大學に入り、三男博君京都商業にあり、長女信子海軍々醫小監前田三郎氏に嫁し、次女は家兄忠郎氏の後を繼ぎ、芳次郎氏を配す、多くの子女何れも聰惠大に前途を嘱望せらる。

釀造業　菅野安次郎君

縣下の釀造界に於ける有數の成功者として、今や多額納稅者として其聲望あるものは菅野安次郎氏である、由來兵庫縣は本邦の釀造地にして、伊丹、灘五鄕、江が島に於ける酒造高は曾に本邦に於ける雷要の大半を供給するのみではなく、洽く海外へ輸出して、縣下に於ける燐寸と相俟つて特產物の雙璧である、從つて是等釀造家中には其資力と釀造高に於いて錚々たる人物に乏しくないが、而も開業以來僅々三十餘年にして能く今日の成功を遂げ得たるものは、獨り菅野安次郎氏を推さなければならぬ。

氏は安政三年を以て飾磨郡青山村に生れ、九歲にして菅野家の養嗣子となつた、抑々氏が釀造に志し、初めて岩屋に釀造場を設けたのは近く明治十年のことなりき、而も業務に熱心なる氏は、常に躬ら釀造に從ひ、時に或は檢溫器を以て醱酵の模樣を研究し、或は米質の硬軟、好惡、水質の淡鹹、之に因る醱濕の過不及等或は原料米を各地に徵し、原料試驗水を各方面に求めて比較實驗を加ふる等其他職工の習慣矯正、さては誘掖扶導の爲めに經驗者を傭入れて技術を傳習せしめ若しくば倉庫の建築法、釀造用器械の改善等、苟も釀造上の事に至りはて不絕周到なる用意を以て研鑽怠りなく多年苦辛研究の結果は、遠く他の企て及ばざる逸品を出し、されば其商標(菅公)の名聲は今や四海に汎く、販路頓に擴大して遂に今日の盛大を見るに至つた。

蓋し明治の文明は學術の進步と共に各種の工業大に面目を一新するに至れりと雖も、獨り釀造業に在りては依然として舊套を脫せず、其進步の遲緩なるものあるに拘らず、各地釀造家の多くは之が研究に腐心するものなく、殊に灘御影の如